大胡西北部遺跡群

横沢新屋敷遺跡

「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　—第2集—

はじめに

「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」の実施に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集『横沢新屋敷遺跡』をお届けいたします。

平成2年度の試掘・確認調査から開始された大胡西北部遺跡群の発掘調査も平成8年度の事業をもって、現場での発掘調査を終了しました。これまでの調査において発見された遺跡は14遺跡、そのうち本調査を実施した遺跡は12遺跡におよびます。大胡町においてこれまでにない大規模なものとなりました本事業によって、新たに発見・知見された成果には多くのものがあります。

今回報告する横沢新屋敷遺跡では、縄文時代前期初頭から前半にかけての土器の様相を知る上で全国的にもみても良好な資料の提示があります。

また、北陸系の土器として周知されている新崎式土器の出土もありました。当時において広範囲にわたる人々の交渉があったことが判る好資料といえましょう。

毎日のように、全国各地で遺跡の発掘に関する新たな発見のニュースが新聞紙上をはじめ多くのメディアで報道されています。それらの中には、興味本意に扱われるあまり遺跡の本来のあり方・見方を見失いがちなものもあります。

大胡町においてあらたに知見されたこれらのことがらが歴史認識の正しい理解につながることを願ってやみません。

本報告書が町民をはじめ多くの方々に活用されますことを祈念するとともに、末筆となりましたが調査にご協力いただきました多くの方々、調査にあたられたみなさまに、深く感謝の意を表し、はじめの言葉といたします。

平成9年3月

勢多郡大胡町教育委員会
教育長　剱　持　平三郎

例　言

1．本書は、「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」の実施に伴い事前に発掘調査された大胡町大字横沢字新屋敷に所在する横沢新屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

なお、事業名称は、当初「県営ほ場整備事業大胡西北部地区」として開始され、平成7年度から事業内容の変更に伴い「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に改称された。

2．遺跡の名称は、大字名小字名を併記し横沢新屋敷遺跡と呼称した。

3．発掘調査は、大胡町教育委員会が直営で実施したものである。

4．「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う発掘調査は平成2年度の次年度工事実施予定地区における試掘確認調査から開始された。今回報告する横沢新屋敷遺跡は、平成5年度に発掘調査を実施した。

5．平成2年度から平成4年度における試掘確認調査の概要については第1集序編第Ⅲ章で、平成5年度から平成8年度における試掘確認調査の概要は本書序編第Ⅰ章で概説した。

6．調査組織及び本書の作成組織は、次のとおりである。

事務局

教　育　長	剱持平三郎
社会教育課長	井上　敬雄（平成7年5月退任）
	山口　　豊（平成7年6月着任）
課 長 補 佐	角間　　宏（平成6年5月退任）
	真藤　　孝（平成6年6月着任）
	天沼　和男（平成7年4月着任）

文化財担当

主　　査	山下　歳信
主　　任	藤坂　和延
主　　事	小沼　安美（事務担当）

7．本書の作成にあたっては、編集・執筆を藤坂が中心となってあたった。また、以下のものが作成に参加した。（五十音順）

五十嵐文江　　鈴木久美子　　北爪　珠美　　田村志づ江　　山下　雅江

8．石器石材の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社　五十嵐俊雄氏による。

9．石器実測の一部は、技研測量設計株式会社に、土器実測の一部は、有限会社前橋文化財研究所による。

10．発掘調査によって出土した遺物は、大胡町教育委員会文化財事務所に付設する収蔵棟で管理・収蔵されている。

11．発掘調査の実施および本書を作成するについて、下記の機関・諸氏に御指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

群馬県教育委員会文化財保護課　群馬県埋蔵文化財調査事業団　群馬県埋蔵文化財調査センター　株式会社測研　技研測量設計株式会社　須賀工業株式会社　有限会社前橋文化財研究所　パリノ・サーヴェイ株式会社　勢多郡社教部会文化財分会の諸氏　渋谷昌彦　谷藤保彦　寺崎祐助　萩谷

千明

12. 発掘調査作業員及び整理作業員は次のとおりである。(五十音順、敬称略)

阿久沢福造	五十嵐文江	石井　よね	井野ちう子	井上美代子	大沢あさ江
大原きみ子	大野　京子	岡田　誉富	奥野　富子	小沢チヅエ	落合　高男
小保方富次郎	北爪　珠美	木村かね子	喜楽　トヨ	佐野勝二郎	下山　　敏
菅田　ツル	鈴木久美子	須藤か津ゑ	関　トシ子	関口みよ子	関谷　清治
故高橋充子	滝本　房子	田村志づ江	角田正次郎	勅使河原幸枝	登坂うた子
中沢しず子	中村新太郎	長岡　徳治	主代　仲治	萩原　秀子	林　　みき
福島　逸司	藤川　敏枝	松倉　菊枝	松倉　りつ	村山　ふで	山下　雅江
山田　茂雄	横沢　恵子				
横沢　和代	和田マツエ				

凡　例

1. 本書報告の遺構番号については、発掘調査時のものを使用した。
2. 本書挿図の縮尺は次のとおりである

全体図　1：800　住居址・竪穴遺構　1：60　炉址　1：30　土坑・集石遺構　1：60

古墳平面図　1：180　古墳断面図　1：120　主体部平・断面図　1：80

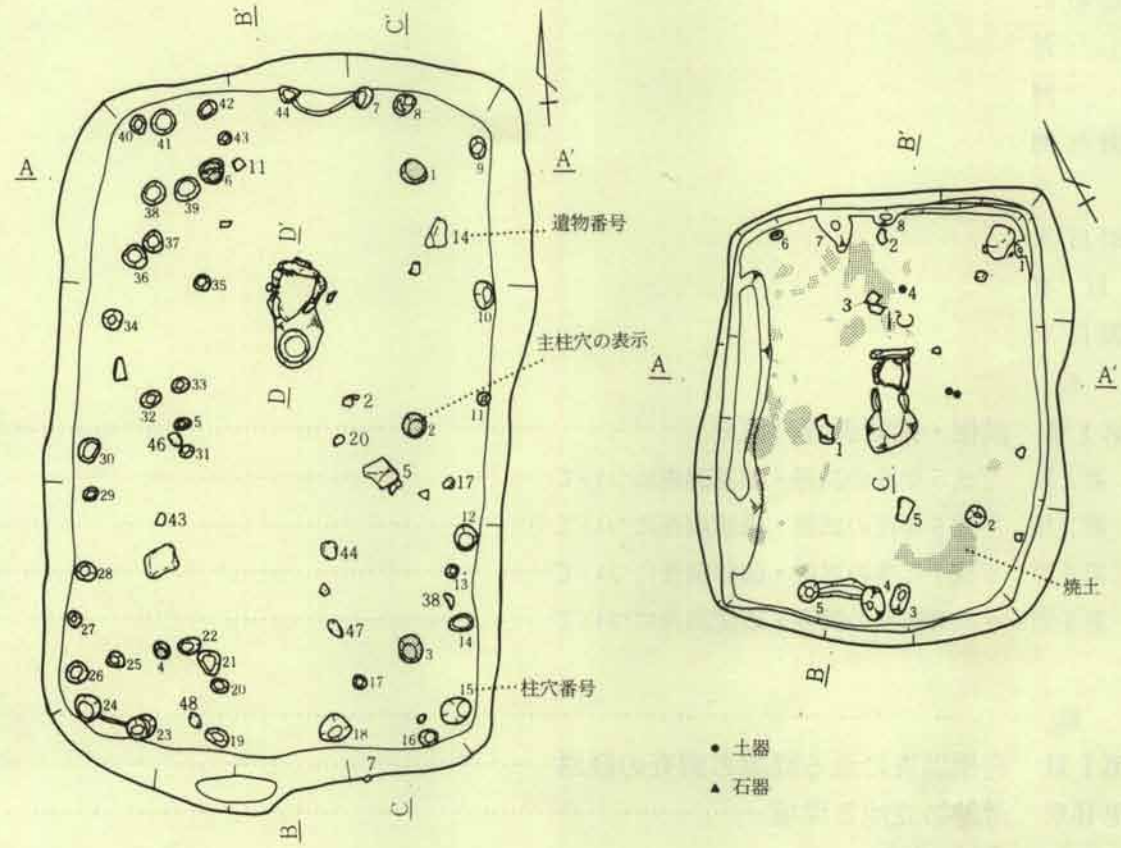
土器　1：2,1：3,1：4(大型土器)，1：5(展開図の一部)　石器　1：1(旧石器の細石核)，2：3(石鏃・石錐・石匙の一部)，1：2(石匙)，1:3 (石斧・磨石・凹石・スクレーパー)，1：4(板碑)，1：6(石皿・多孔石・五輪塔)

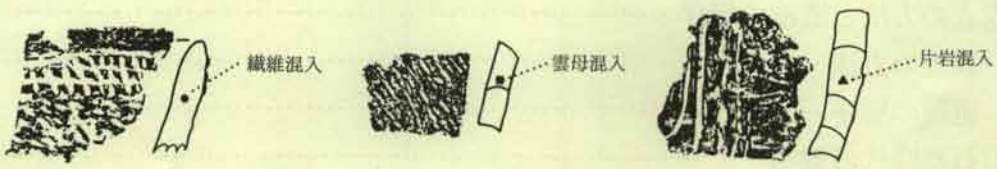
3. 遺構図中に記した断面基準線は標高である。
4. 遺構図中に示したN方位は、座標北である。
5. 遺物分布図中の遺物に付した番号は実測図番号・遺物観察表番号と一致する。
6. 土器については本文中で説明した。石器については下記の記載内容により遺物観察表としてまとめた。

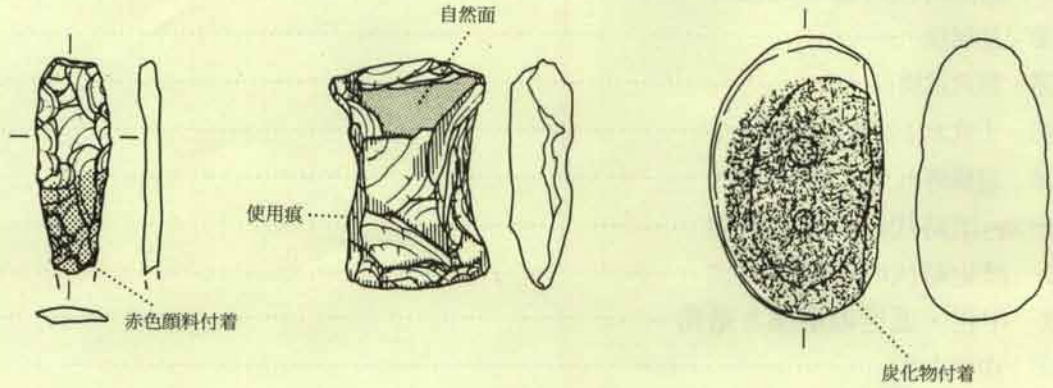
挿図番号	挿図に付した番号
図版番号	写真図版番号
整理番号	遺物整理のために付した個体別番号。したがって、報告書に掲載できなかった遺物等の欠番がある。
取り上げ番号	遺物取り上げの際に付した番号。また、番号を付さずに取り上げた遺構覆土中出土の遺物は覆土とした。
器種	石器の種類および器形をこの項目に記載した。
遺存状態	遺物の残存程度を記載した。
法量	単位はcm及びg（一部kg）である。欠損品における現存値には（　）を付した。

7. 第2図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」を加筆し、使用した。
8. 第1図は、大胡町役場発行2,500分の1現形図を加筆し、使用した。
9. 挿図に使用したトーン及びドットは次ページのとおりである。

挿図凡例







目　次

はじめに
例　　言
凡　　例
挿図凡例
目　　次
挿図目次
表目次
図版目次
序　編
第Ⅰ章　試掘・確認調査の概要 …… 1
第1節　平成5年度の試掘・確認調査について …… 1
第2節　平成6年度の試掘・確認調査について …… 1
第3節　平成7年度の試掘・確認調査について …… 1
第4節　平成8年度の試掘・確認調査について …… 1

本　編 …… 3
第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 3
第1節　遺跡の位置 …… 3
第2節　周辺の遺跡 …… 3
第Ⅲ章　調査の方法と遺跡の層序 …… 6
第1節　調査の方法 …… 6
第2節　遺跡の層序 …… 6
第Ⅳ章　旧石器時代の遺物 …… 9
第Ⅴ章　縄文時代の遺構と遺物 …… 10
第1節　住居址 …… 10
第2節　竪穴遺構 …… 99
第3節　土坑および集石遺構 …… 104
第4節　遺構外出土縄文時代遺物 …… 126
第Ⅵ章　古墳時代の遺構と遺物 …… 155
第Ⅶ章　歴史時代の遺構と遺物 …… 162
第Ⅷ章　中世・近世の遺構と遺物 …… 164
第1節　中世古墓 …… 164
第2節　廃社 …… 171
第3節　近世土坑 …… 177

第４節　溝状遺構 ……177
第５節　中世・近世出土遺物 ……181
第IX章　調査のまとめ ……182
第１節　縄文時代前期初頭から前葉の土器について ……182
第２節　縄文時代中期新崎式土器及び中期初頭の土器について ……183
第３節　古墳について ……184
第４節　中世古墓について ……184
第５節　廃社について ……185
第X章　あとがき ……185
抄　　録

挿　図　目　次

第１図　大胡町の遺跡…… 4
第２図　遺跡周辺図…… 7
第３図　遺跡全体図…… 8
第４図　旧石器時代遺物および出土位置図…… 9
第５図　第１号住居址平・断面図
　　および出土遺物……10
第６図　第２号住居址平・断面図……11
第７図　第２号住居址出土遺物……13
第８図　第３号住居址平・断面図
　　および出土遺物……14
第９図　第４号住居址平・断面図および
　　出土遺物（１）……16
第10図　第４号住居址出土遺物（２）……17
第11図　第５号住居址平・断面図
　　および出土遺物……19
第12図　第６号住居址平・断面図……20
第13図　第６号住居址出土遺物……22
第14図　第７・８号住居址平・断面図……23
第15図　第７号住居址出土遺物（１）……25
第16図　第７号住居址出土遺物（２）……27
第17図　第７号住居址出土遺物（３）……28
第18図　第７号住居址出土遺物（４）……29
第19図　第８号住居址出土遺物……30
第20図　第９号住居址平・断面図……31
第21図　第９号住居址出土遺物（１）……33
第22図　第９号住居址出土遺物（２）……34
第23図　第10・11号住居址平・断面図……35
第24図　第10号住居址出土遺物（１）……37
第25図　第10号住居址出土遺物（２）……38
第26図　第10号住居址出土遺物（３）……39
第27図　第11号住居址出土遺物……41
第28図　第12号住居址平・断面図……42
第29図　第12号住居址出土遺物（１）……44
第30図　第12号住居址出土遺物（２）……45
第31図　第12号住居址出土遺物（３）……46
第32図　第13・14・21号住居址平・断面図……49
第33図　第13号住居址出土遺物（１）……50
第34図　第13号住居址出土遺物（２）……51
第35図　第14号住居址出土遺物……52
第36図　第21号住居址出土遺物……54
第37図　第15号住居址平・断面図
　　および出土遺物（１）……56
第38図　第15号住居址出土遺物（２）……57
第39図　第16号住居址平・断面図（１）……58
第40図　第16号住居址断面図（２）……59
第41図　第16号住居址出土遺物……61
第42図　第17号住居址平・断面図
　　および出土遺物（１）……63
第43図　第17号住居址出土遺物（２）……64
第44図　第18号住居址平・断面図
　　および出土遺物……65
第45図　第19号住居址平・断面図
　　および出土遺物（１）……67
第46図　第19号住居址出土遺物（２）……68
第47図　第19号住居址出土遺物（３）……69
第48図　第19号住居址出土遺物（４）……70
第49図　第20号住居址平・断面図……73
第50図　第20号住居址出土遺物（１）……75
第51図　第20号住居址出土遺物（２）……76
第52図　第20号住居址出土遺物（３）……77
第53図　第20号住居址出土遺物（４）……78
第54図　第20号住居址出土遺物（５）……79

第55図　第20号住居址出土遺物(6)……80
第56図　第20号住居址出土遺物(7)……81
第57図　第20号住居址出土遺物(8)……82
第58図　第20号住居址出土遺物(9)……83
第59図　第20号住居址出土遺物(10)……84
第60図　第20号住居址出土遺物(11)……85
第61図　第20号住居址出土遺物(12)……86
第62図　第22号住居址平・断面図
　　および出土遺物……88
第63図　第23号住居址平・断面図
　　および出土遺物(1)……91
第64図　第23号住居址出土遺物(2)……92
第65図　第23号住居址出土遺物(3)……93
第66図　第24号住居址平・断面図
　　および出土遺物……95
第67図　第25号住居址平・断面図
　　および出土遺物……96
第68図　第26号住居址平・断面図……97
第69図　第26号住居址出土遺物……98
第70図　第1～4・6号竪穴遺構平・断面図 …101
第71図　第1・4・6号竪穴遺構出土遺物 ……103
第72図　第2号竪穴遺構出土遺物 ……104
第73図　第1～7・9～12号土坑平・断面図 …105
第74図　第13～20号土坑平・断面図 ……109
第75図　第21～29号土坑平・断面図 ……115
第76図　第30～39号土坑平・断面図 ……117
第77図　第1・3・4号土坑出土遺物 ……120
第78図　第6・7・9～11号土坑出土遺物 ……121
第79図　第13～15・17～20・26・27号土坑
　　出土遺物 ……122
第80図　第28～30号土坑出土遺物 ……123
第81図　第33～36・38号土坑出土遺物 ……124
第82図　集石遺構平・断面図 ……125
第83図　遺構外出土縄文時代土製品 ……126
第84図　遺構外出土縄文土器(1) ……127
第85図　遺構外出土縄文土器(2) ……129
第86図　遺構外出土縄文土器(3) ……130
第87図　遺構外出土縄文土器(4) ……131
第88図　遺構外出土縄文土器(5) ……132
第89図　遺構外出土縄文土器(6) ……133
第90図　遺構外出土縄文土器(7) ……135
第91図　遺構外出土縄文土器(8) ……136
第92図　遺構外出土縄文土器(9) ……137
第93図　遺構外出土縄文土器(10) ……138
第94図　遺構外出土縄文土器(11) ……139
第95図　遺構外出土縄文土器(12) ……140
第96図　遺構外出土縄文時代石器(1) ……146
第97図　遺構外出土縄文時代石器(2) ……147
第98図　遺構外出土縄文時代石器(3) ……148
第99図　遺構外出土縄文時代石器(4) ……149
第100図　遺構外出土縄文時代石器(5) ……150
第101図　遺構外出土縄文時代石器(6) ……151
第102図　漏1号墳平・断面図(1) ……156
第103図　漏1号墳平・断面図(2)、
　　漏れ2号墳平・断面図……157
第104図　漏3号墳平・断面図および出土遺物 …158
第105図　漏4号墳平・断面図(1) ……160
第106図　漏4号墳平・断面図(2) ……161
第107図　漏4号墳出土遺物 ……162
第108図　炭窯平・断面図 ……163
第109図　古墓平・断面図 ……165
第110図　古墓出土遺物(1) ……166
第111図　古墓出土遺物(2) ……167
第112図　廃社平・断面図(1) ……168
第113図　廃社平・断面図(2)……169・170
第114図　廃社埋納銭出土状況平・断面図 ……171
第115図　出土銭法量相関図 ……171
第116図　埋納銭拓影(1) ……172
第117図　埋納銭拓影(2) ……173
第118図　埋納銭拓影(3) ……174
第119図　廃社周辺出土銭拓影 ……175
第120図　近世土坑平・断面図 ……178
第121図　溝状遺構平・断面図 ……180
第122図　遺構外出土中・近世遺物 ……181
第123図　清水上遺跡出土土器(1/5)
　　((新潟県教育員会ほか1996)原図) ……184

表目次

第１表　試掘・確認調査の記録
（平成５年度から成８年度）…… 2
第２表　大胡町の遺跡一覧 ……4・5
第３表　第２号住居址出土石器観察表 ……12
第４表　第３号住居址出土石器観察表 ……15
第５表　第４号住居址出土石器観察表 ……18
第６表　第５号住居址出土石器観察表 ……20
第７表　第６号住居址出土石器観察表 ……21
第８表　第７号住居址出土石器観察表 ……26
第９表　第８号住居址出土石器観察表 ……30
第10表　第９号住居址出土石器観察表 ……32
第11表　第10号住居址出土石器観察表 ……39
第12表　第11号住居址出土石器観察表 ……40
第13表　第12号住居址出土石器観察表 ……47
第14表　第13号住居址出土石器観察表 ……48
第15表　第14号住居址出土石器観察表 ……53
第16表　第21号住居址出土石器観察表 ……55
第17表　第15号住居址出土石器観察表 ……57
第18表　第16号住居址出土石器観察表 ……60
第19表　第17号住居址出土石器観察表 ……62
第20表　第18号住居址出土石器観察表 ……66
第21表　第19号住居址出土石器観察表 ……71
第22表　第20号住居址出土石器観察表 ……87
第23表　第22号住居址出土石器観察表 ……89
第24表　第23号住居址出土石器観察表 ……90
第25表　第24号住居址出土石器観察表 ……94
第26表　第25号住居址出土石器観察表 ……96
第27表　第26号住居址出土石器観察表 ……99
第28表　第１号竪穴遺構出土石器観察表 ……99
第29表　第２号竪穴遺構出土石器観察表……100
第30表　第４号竪穴遺構出土石器観察表……102
第31表　第６号竪穴遺構出土石器観察表……102
第32表　第３号土坑出土石器観察表……106
第33表　第４号土坑出土石器観察表……107
第34表　第６号土坑出土石器観察表……107
第35表　第11号土坑出土石器観察表……110
第36表　第13号土坑出土石器観察表……110
第37表　第14号土坑出土石器観察表……111
第38表　第17号土坑出土石器観察表……112
第39表　第33号土坑出土石器観察表……118
第40表　第38号土坑出土石器観察表……119
第41表　遺構外出土縄文時代土製品一覧……126
第42表　遺構外出土縄文土器一覧 ……142～145
第43表　遺構外出土縄文時代石器観察表 …152～154
第44表　埋納銭観察表……176
第45表　廃社周辺出土銭観察表……177
第46表　近世土坑一覧……179
第47表　遺構外出土中・近世遺物観察表……182

図 版 目 版

ＰＬ－１　遺跡全景

ＰＬ－２　第１号住居址　第１号住居址炉　第２号住居址　第２号住居址炉　第３号住居址
第３号住居址炉

ＰＬ－３　第４号住居址　第４号住居址炉　第４号住居址遺物出土状態　第５号住居址
第５号住居址遺物出土状態　第５号住居址炉

ＰＬ－４　第６号住居址　第６号住居址炉　第６号住居址遺物出土状態　第７号住居址
第７号住居址炉

ＰＬ－５　第８号住居址　第８号住居址炉　第９号住居址　第９号住居址炉　第10号住居址
第10号住居址炉

ＰＬ－６　第11号住居址　第11号住居址炉　第12号住居址　第12号住居址炉　第13号住居址
第13号住居址炉

ＰＬ－７　第14号住居址　第14号住居址炉　第15号住居址　第15号住居址炉　第16号住居址

ＰＬ－８　第17号住居址　第17号住居址炉　第18号住居址　第18号住居址　第19号住居址
第20号住居址

ＰＬ－９　第20号住居址炉　第20号住居址遺物出土状態　第20号住居址遺物出土状態 第21号住居址
第22号住居址

ＰＬ－10　第23号住居址　第24号住居址遺物出土状態　第24号住居址　第25号住居址　第26号住居址　第26号住居址炉

ＰＬ－11　第１号竪穴遺構　第３号竪穴遺構　第１号土坑　第２号土坑　第３号土坑　第４号土坑

ＰＬ－12　第11号土坑　第11号土坑遺物出土状態　第13号土坑　第14号土坑　第15号土坑　第16号土坑

ＰＬ－13　第17号土坑　第18号土坑　第20号土坑　第21号土坑　第22号土坑　第23号土坑

ＰＬ－14　第25号土坑　第26号土坑　第27号土坑　第28号土坑　第29号土坑　第29号土坑遺物出土状態

ＰＬ－15　第30号土坑　第32号土坑　第34号土坑　第36号土坑　第38号土坑　作業風景（測量）

ＰＬ－16　漏１号墳　漏１号墳掘り方　漏１号墳前面　漏２号墳　漏３号墳

ＰＬ－17　漏４号墳　漏４号墳掘り方　漏４号墳前面　炭窯　炭窯煙道

ＰＬ－18　古墓全景　古墓遺物出土状況　古墓遺物出土状況　古墓遺物出土状況　古墓掘り方

ＰＬ－19　廃社礎石状況　廃社石祠　埋納銭出土状況　地割れ　近世土坑群　作業風景

ＰＬ－20　第４号住居址１　第４号住居址８　第５号住居址１　第10号住居址１　第12号住居址１
第13号住居址１　第19号住居址１　第20号住居址１　第20号住居址25

ＰＬ－21　第20号住居址３　第20号住居址41　第23号住居址１　第11号土坑１　第29号土坑１

大胡西北部遺跡群

横沢新屋敷遺跡

第Ⅰ章　試掘・確認調査の記録

第1節　平成5年度の試掘・確認調査について

平成5年度の試掘・確認調査は、当該年度工事実施予定地区のうち、前年度に実施できなかった地区を対象に実施した。対象地区とした地域は大字横沢字新屋敷、字持、大字堀越字芝山である。

以上の調査によって、大字横沢字新屋敷において縄文時代前期から近世にわたる複合遺跡を、大字横沢字字持において縄文時代の陥し穴を確認した。

第2節　平成6年度の試掘・確認調査について

平成6年度の試掘・確認調査は、いずれも当該年度工事実施予定地区内において実施した。対象とした地域は、大字堀越字中道、字乙薬師である。

また、大字堀越字甲薬師、字寺窪、字新畑の工事実施予定地区内において、踏査を実施した。

以上の調査によって、大字堀越字中道、字乙薬師において、縄文時代前期から近世にわたる大規模な複合遺跡を確認した。

第3節　平成7年度の試掘・確認調査について

平成7年度の試掘・確認調査も当該年度工事実施予定地区内においての実施となった。以上の調査によって、大字堀越字丁二本松において縄文時代から平安時代の複合遺跡を、大字横沢字向田において縄文時代の住居址・土坑及び終末期の横穴式古墳2基、字向山において縄文時代の住居址・土坑及び終末期の横穴式古墳2基、平安時代の掘立柱建物1棟を確認した。

第4節　平成8年度の試掘・確認調査について

平成8年度は、追加事業の実施があり「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」の面工事実施の最終年度にあたった。当該年度工事実施予定地区内の試掘・確認調査により、大字堀越字甲真木において古代の古墓を、大字茂木字二本松において縄文時代前期関山期の住居址1軒を確認した。

第1表　試掘・確認調査の記録（平成5年度から平成8年度）

調査年度	試掘・確認調査		工事実施年度	調査年度	本調査	備考
	調査地(大字・字)	調査概要			調査概要	
5	横沢・新屋敷	トレンチ調査 縄文時代住居址確認 古墳2基確認。 中世古墓確認。	5	5	横沢新屋敷遺跡 縄文時代集落。 古墳4基。 中世古墓。ほか	本書所収。
	横沢・宇持	トレンチ調査 縄文時代土坑確認。	5	5	宇持遺跡 縄文時代土坑2基。	
	堀越・芝山	トレンチ調査 遺構・遺物なし。	5			
6	堀越・中道、乙薬師	トレンチ調査 縄文時代遺物確認。 古墳時代前期住居址確認。 平安時代住居址確認。	6	6	堀越中道遺跡 縄文時代前期集落。 古墳時代前期集落。 平安時代集落。ほか	第3集所収。
	堀越・甲薬師	踏査 遺物散布せず。	6			
	堀越・寺窪	踏査 遺物散布せず。	6			
	堀越・新畑	踏査 遺物散布せず。	6			
7	横沢・向田	トレンチ調査 縄文時代住居址確認。 古墳2基確認。 平安時代住居址確認。	7	7	横沢向田遺跡 縄文時代住居址・土坑。 古墳2基。 平安時代住居址。	
	横沢・向山	トレンチ調査 縄文時代住居址確認。 古墳2基確認。	7	7	横沢向山遺跡 縄文時代住居址4軒。 古墳2基。ほか	
	堀越・丁二本松	トレンチ調査 縄文時代住居址確認。 平安時代住居址確認。	7	7	堀越丁二本松遺跡 縄文時代前期集落。 平安時代集落。ほか	
8	茂木・二本松	トレンチ調査 縄文時代住居址確認。 平安時代地割れ確認。	8	8	茂木二本松遺跡 縄文時代前期住居址 平安時代地割れ。ほか	
	茂木・米野道上	トレンチ調査 遺構・遺物なし。	8			
	堀越・乙二本松	トレンチ調査。 遺構・遺物なし。	8			
	堀越・甲真木	トレンチ調査 平安時代古墓確認。			堀越甲真木遺跡 平安時代古墓	事業対象外となり事業に伴う発掘調査は実施せず。

本　編

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯と調査の経過

横沢新屋敷遺跡は、平成５年度の工事実施予定地区内の大字横沢字新屋敷において実施した事前の試掘・確認調査において発見・確認された遺跡である。現地の状況は、杉の木が植林された山林で、まずそれらをバックホーにより伐採・抜根することから試掘・確認調査は開始された。この際、台地の北の鞍部において石の祠が存在することが判明。作業員により周辺を精査し、祠の範囲及び礎石を確認、また地域住民からの聞き取り調査を並行して実施し、神社跡であることを確認する。さらに、神社跡を除き周辺にトレンチを入れ、縄文時代の住居址を確認する。

その後、工事の内容が明らかとなり、本遺跡を載せる台地は東部の低地への盛り土として切り土されることが判明する。そこで、教育委員会は発掘調査を実施し記録保存を図ることで前橋土地改良事務所と協議の結果を見た。

本調査は前橋土地改良事務所との間に調査委託契約を締結し試掘・確認調査の実施から引き続いての平成５年９月１日からの土木重機の投入による表土除去から開始された。10月13日から平成６年１月27日まで作業員による現地発掘調査を実施した。引き続き３月25日まで遺物洗浄・遺物注記等の基本整理を実施し平成５年度の事業は終了した。本書の刊行および出土遺物の整理・保管・記録資料の整理は、断続的であるが平成６年度から平成８年度にわたり実施し、本遺跡に係わる事業のすべては完了した。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置

大胡町は、群馬県の中央やや南東寄りにあり「上毛三山」のひとつ赤城山の南麓に立地する。県庁所在地である前橋市とは西部および南部で接し、東部は宮城村・粕川村に接する。

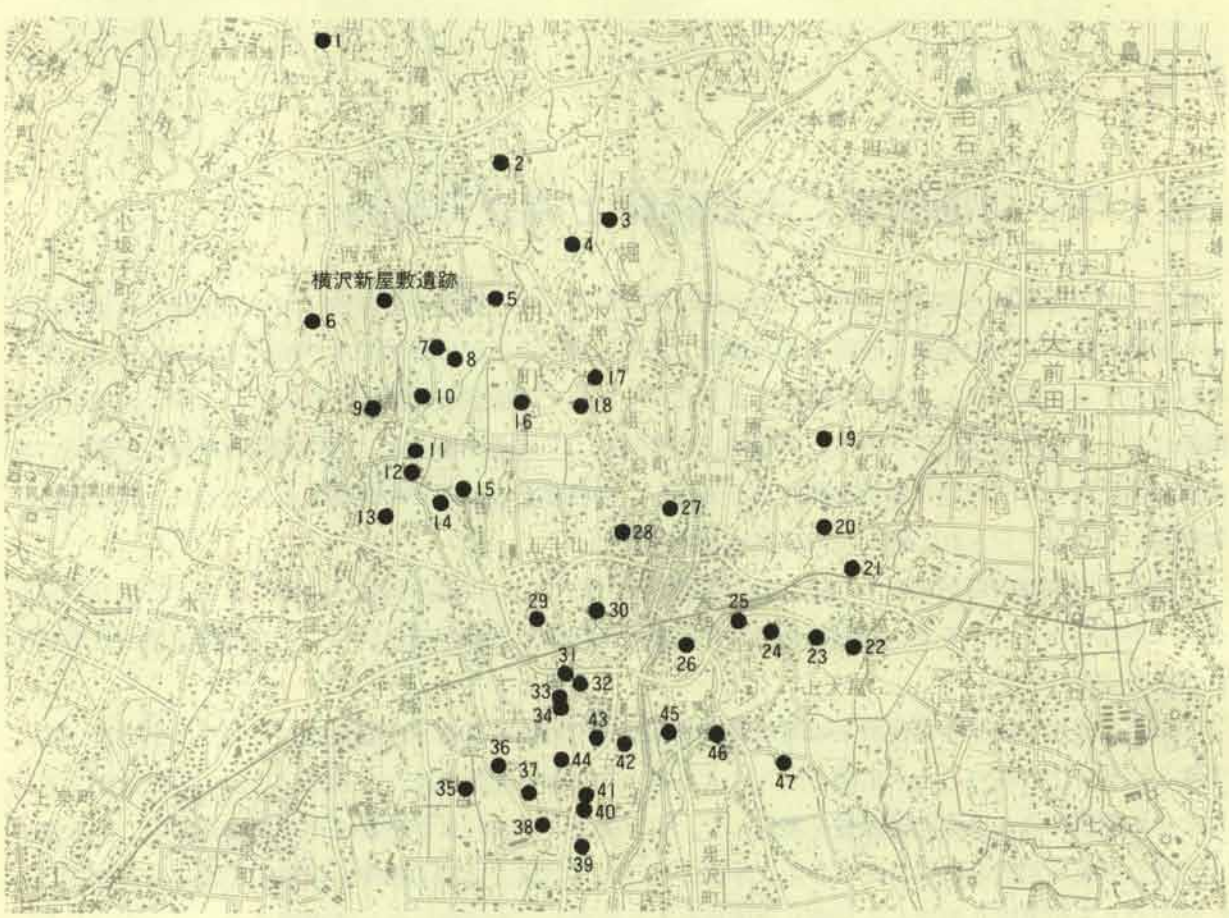
本遺跡は、大胡町の北西部の大字横沢字新屋敷に所在し、上毛電鉄大胡駅の北西約2.7km、大胡町立滝窪小学校の南約0.4kmに当たる。遺跡地は、南に長く延びる舌状台地の突端に位置する。遺跡を載せる台地は、開析谷によって東西を分断され南北に長い舌状台地で東西幅約90mを遺跡地で測る。

遺跡の標高は、遺跡地北部で最高の232.0mを測り、南に向かって緩やかに傾斜する。東部の開析谷との標高差約19m、西部の開析谷との標高差約10mを測る。

第２節　周辺の遺跡

本遺跡の周辺において、周知・確認されている遺跡は、横沢古墳群として周知される古墳群の一支群として大塚地区が遺跡地西方の開析谷を隔てた台地上に所在し、さらに西方には奈良・平安時代の集落跡である芳山遺跡（６）が所在する。

また、遺跡東方の開析谷を隔てた東の台地上には、縄文時代の遺跡、宇持遺跡（７）・丁二本松遺跡（８）・横沢向田遺跡（10）・横沢向山遺跡（11）が所在する。



第1図　大胡町の遺跡

第2表　大胡町の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	内容							文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	
	横沢新屋敷遺跡	横沢・新屋敷	○	◎		◎	◎	◎	◎	本書所収
1	西天神遺跡	滝窪・西天神		◎			◎			『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
2	乙西尾引遺跡	堀越・乙西尾引遺跡		○			◎			『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
3	甲諏訪遺跡	堀越・甲諏訪		◎						『甲諏訪遺跡Ⅰ』
4	西一丁田遺跡	堀越・西一丁田		◎					◎	
5	堀越芝山遺跡	堀越・芝山		◎		◎				『堀越芝山遺跡』
6	芳山遺跡	横沢・芳山					◎			
7	宇持遺跡	横沢・宇持		◎						
8	丁二本松遺跡	堀越・丁二本松		◎			◎		◎	
9	横沢城址	横沢・内出						◎		『大胡町誌』
10	横沢向田遺跡	横沢・向田		◎		◎				
11	横沢向山遺跡	横沢・向山		◎		◎	◎			
12	大胡町39号古墳	横沢・柴崎				◎				『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
13	横沢柴崎遺跡	横沢・柴崎		◎					◎	『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』

番号	遺跡名	所在地	内容							文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	
14	茂木二本松遺跡	茂木・二本松		◎			◎			
15	堀越甲真木遺跡	堀越・甲真木					◎			
16	新畑遺跡	堀越・新畑		◎		◎	◎			
17	乙関替戸遺跡	堀越・乙関替戸遺跡					◎			
18	堀越中道遺跡	堀越・中道		◎		◎	◎		◎	『堀越中道遺跡』
19	日光道東遺跡	河原浜・日光道東	◎	◎		◎	◎			『日光道東遺跡』
20	浅見遺跡	樋越・浅見		◎			◎			『浅見遺跡』
21	丁田城（稲垣屋敷）	樋越・六反畑						◎		『大胡町誌』
22	上大屋・樋越遺跡群	上大屋、樋越		◎						『上大屋・樋越地区遺跡群』
23	西前沖遺跡	樋越・西前沖							◎	『上大屋・樋越地区遺跡群』
24	稲荷塚古墳	上大屋・八ケ峰				◎				
25	八ケ峰遺跡	上大屋・八ケ峰					◎			『上大屋・樋越地区遺跡群』
26	中宮関遺跡	大胡・中宮関				◎	◎			
27	大胡城跡	河原浜・根古屋						◎	◎	『大胡町誌』ほか
28	殿町遺跡	堀越・殿町							◎	『殿町遺跡』
29	堀越古墳	堀越・房関				◎				『大胡町誌』ほか
30	天神遺跡	茂木・天神		◎			◎		◎	『群馬県史資料編１』
31～34	天神風呂遺跡	茂木・天神風呂		◎		◎	◎			『天神風呂遺跡』
35	足軽町遺跡	茂木・足軽町		◎		◎	◎			『大胡町誌』ほか
36	梅沢遺跡	茂木・梅沢					◎			
37	稲荷窪Ｂ地点遺跡	茂木・稲荷窪	○	◎		◎	◎			
38	稲荷窪Ａ地点遺跡	茂木・稲荷窪		◎		◎	◎			『稲荷窪Ａ地点遺跡』
39	大畑遺跡	茂木・大畑		○						『小林・山神・大畑遺跡』
40	山神遺跡	茂木・山神		◎		◎	◎			『小林・山神・大畑遺跡』
41	小林（三ツ屋）遺跡	茂木・小林	◎	◎		◎	◎			『小林・山神・大畑遺跡』
42	上ノ山遺跡	茂木・上ノ山	○	◎		◎	◎		◎	『上ノ山遺跡』
43	西小路遺跡	茂木・西小路	○	◎		◎	◎		◎	『西小路遺跡』
44	諏訪東遺跡	茂木・諏訪東		◎		◎	◎			
45	下宮関遺跡	大胡・下宮関				◎	○			
46	前橋東商業高校遺跡	大胡・前山				○				『大胡町誌』
47	上大屋下組遺跡	上大屋・下組		◎		◎	○			

◎は遺構が確認　○は遺物のみ確認

第Ⅲ章　調査の方法と遺跡の層序

第１節　調査の方法

調査にあたっては、国家座標Ⅸ系（Ｘ＝47710.0、Ｙ＝－62100.0）を基準とする10m×10mのグリッドを設定した。グリッド名は南北方向に南からＡ～Ｒの18区、東西方向に１～10の10区を設定し、南西コーナーの杭をもって呼称した。したがって、(大文字アルファベット)－(算用数字)、Ａ－５Ｇのように表現した。

調査は、土木重機による表土除去後ジョレンがけにより遺構検出・プラン確認を図り、必要に応じ土層確認用のベルトを設定し各遺構の精査を実施した。

遺跡の記録図面は、遺構図がＳ＝１：20を基本として、必要に応じＳ＝１：10の詳細図で記録した。調査区の全体図はＳ＝１：100で記録した。

記録写真は35㎜の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い逐次撮影した。また、バルーン（気球）により６×６ブローニー判の白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用いた空中写真撮影も実施した。

第２節　遺跡の層序

遺跡における、基本土層の把握のための特別な調査は実施しなかったが、廃社調査の際のトレンチで確認されたものが、現表土からハードロームまで比較的に良い保存状態を示すので、以下それについて記載する。(第112図　参照)

Ⅰ層　暗褐色土層　粘性なし。締まり弱い。砂質で均質。灰白色軽石（Ｈｒ－Ｆｐ）均質混入。Ⅱ層へは漸移的に変化する。

Ⅱ層　黒褐色土層　粘性なし。締まり有り。砂質（Ⅰ層よりさらに均質)。灰白色軽石（Hr—FP）均質混入。Ⅲ層へは漸移的に変化する。

Ⅲ層　暗褐色土層　粘性無し。締まり有り。黄色軽石均質混入。ざらざらしている。Ⅳ層へは漸移的に変化する。

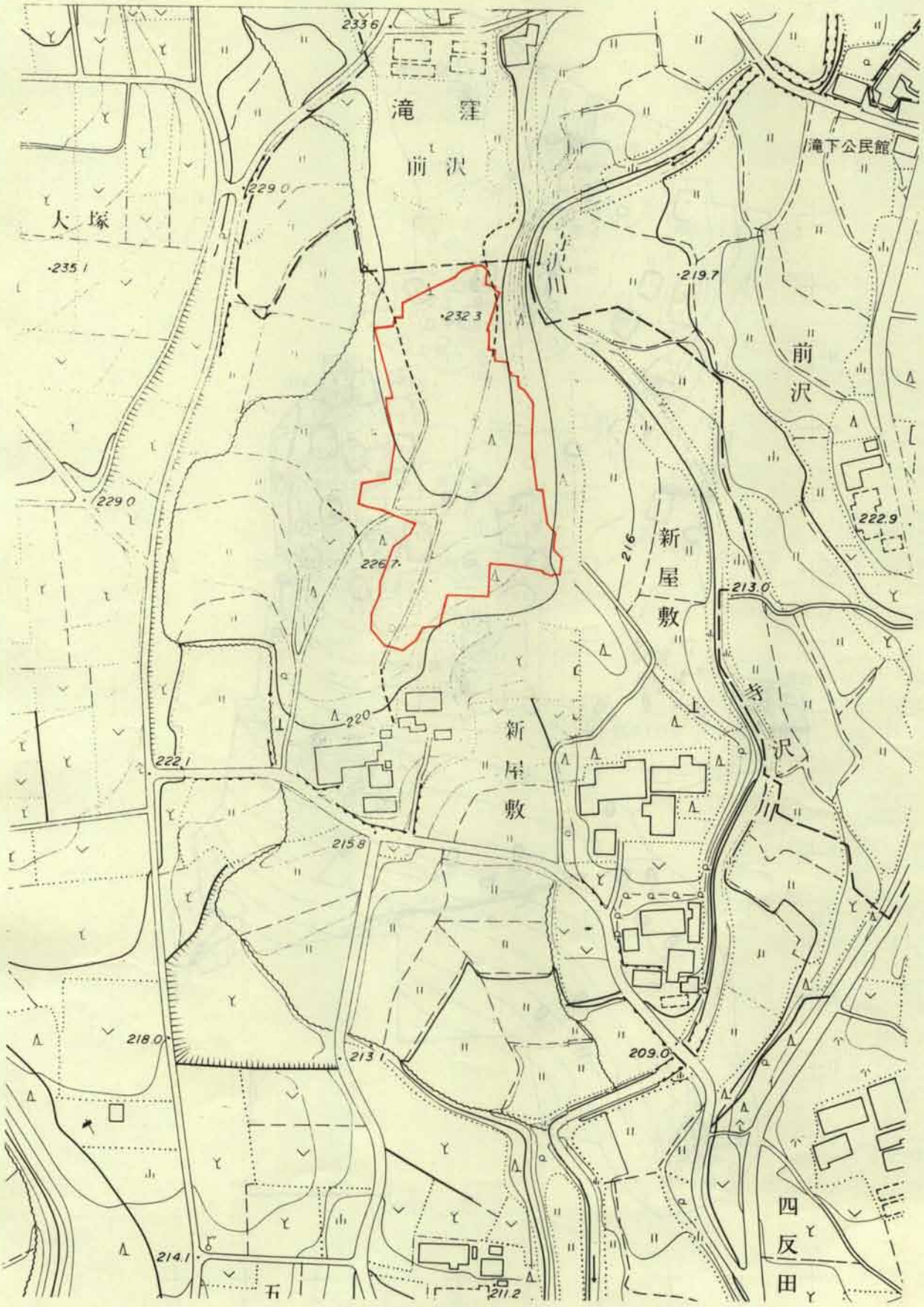
Ⅳ層　黒褐色土層　粘性無し。締まり有り。Ⅱ層に酷似する。

Ⅴ層　暗褐色土層　粘性有り。締まり有り。Ⅳ層からⅥ層への漸移層。

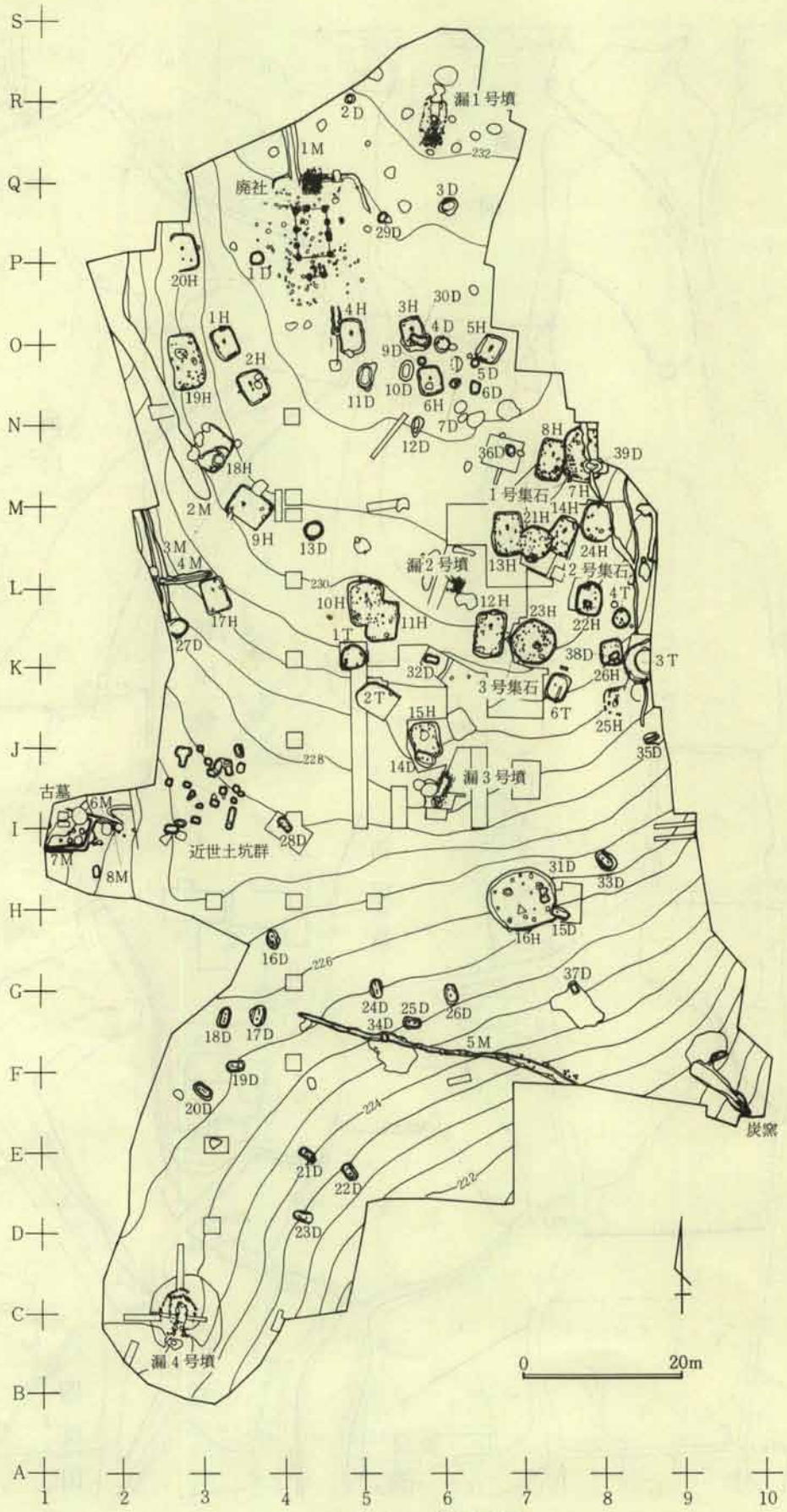
Ⅵ層　鈍い黄褐色土層　粘性有り。締まり有り。ソフトなローム土層。

Ⅶ層　黄褐色土層　粘性有り。締まり強い。ハードなローム土層。

縄文時代の遺構は、Ⅴ層から遺物の出土がありその存在を予想させるが平面プランの確認はⅦ層上面まで掘り下げて初めて明確になる。


滝窪
前沢
大塚
滝下公民館
寺沢川
前沢
新屋敷
新屋敷
寺沢川
四反田
五
233.6
229.0
235.1
232.3
219.7
229.0
226.7
216
222.9
213.0
220
222.1
215.8
218.0
213.1
209.0
214.1
211.2

第2図　遺跡周辺図


S
R
Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
漏1号墳
廃社
1M
2D
3D
29D
30D
1D
20H
1H
2H
19H
4H
3H
4D
5H
9D
5D
10D
6D
11D
6H
7D
12D
18H
36D
8H
39D
1号集石
7H
14H
21H
24H
2M
9H
13D
3M
4M
漏2号墳
13H
2号集石
4T
10H
12H
23H
22H
17H
11H
1T
27D
38D
3T
32D
26H
3号集石
2T
6T
15H
25H
35D
14D
漏3号墳
古墓
6M
7M
8M
近世土坑群
28D
31D
33D
16H
15D
16D
37D
24D
25D
26D
34D
18D
17D
5M
19D
20D
炭窯
21D
22D
23D
漏4号墳
0
20m

第3図　遺跡全体図

第Ⅳ章　旧石器時代の遺構・遺物

旧石器時代の石器（第４図）

本遺跡の発掘調査において、D・E・H－３G、F～N－４G、H－５Gの南西隅に２×２mの試掘溝を設け旧石器時代の遺構・遺物の追究を計った。しかし、遺物の出土はなく当該期の遺構・遺物はないものと判断し、本調査は実施しなかった。

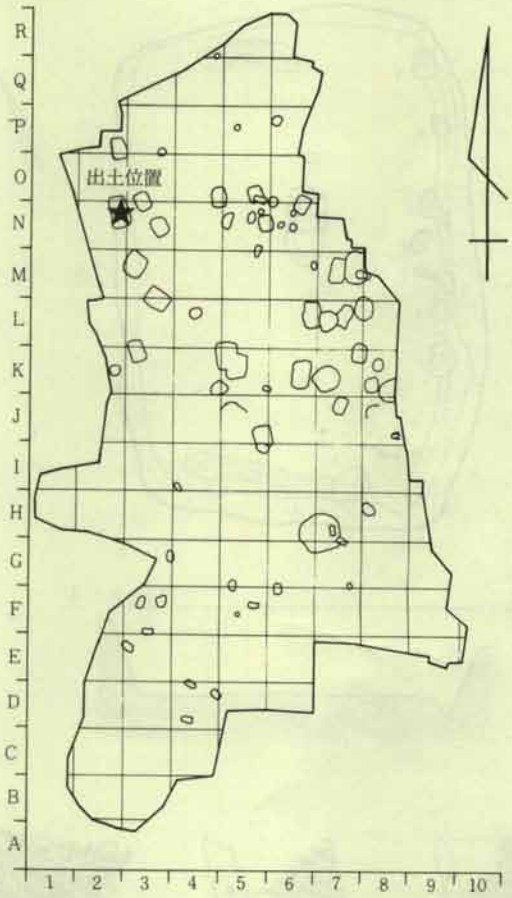
しかし、出土遺物を整理・検討する際当該期に属するものと考えられる遺物（細石核）が存在することが確認された。

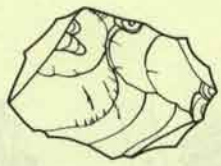
確認された細石核は、縄文時代の第19号住居址の覆土中から出土した(第４図)。濃緑色の珪質の石を石材とする錐形の石核で、長さ3.1cm、幅2.8cm、厚さ2.0cm、重量15.8ｇを測る。

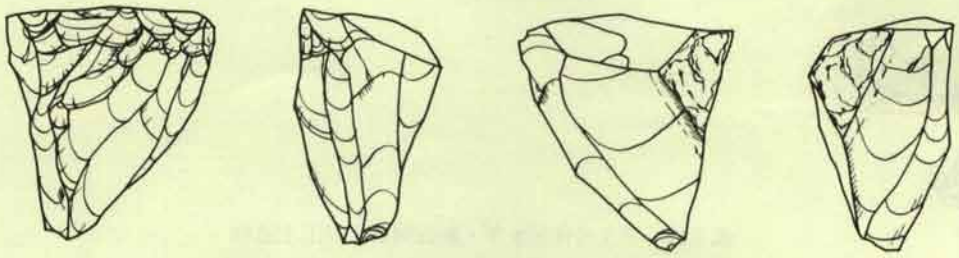
石核の打面は調整打面と、180°の打面転換を行い細石刃剥離作業面をもう１つの打面としている。裏面に自然面が残る。

この石核から剥離される細石刃は3.5cm程度の軸長を測るものと思われる。

当該期の資料は１点のみであり、本資料をもって本遺跡における旧石器時代の存在に言及するのは危険であるので、可能性を指摘するにとどめておく。







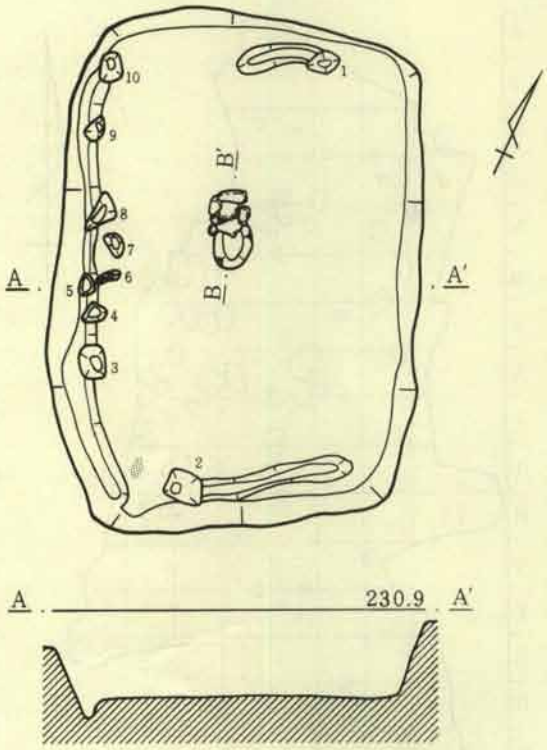
第４図　旧石器時代遺物および出土位置図

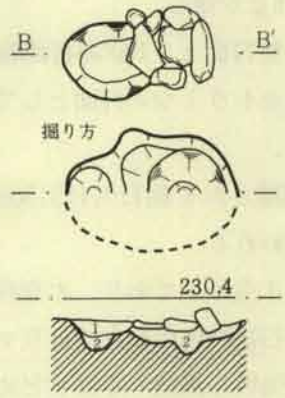
第Ⅴ章　縄文時代の遺構と遺物

本遺跡において検出された当該期の遺構は、住居址26軒、土坑39基、集石遺構３基。出土した遺物は早期から後期にわたるが、その中心となる時期は前期初頭の花積下層式期および二ツ木式期である。また、中期初頭の五領ヶ台式の遺物も多量に出土したほか、北陸系の土器・新崎式土器の出土も見た。

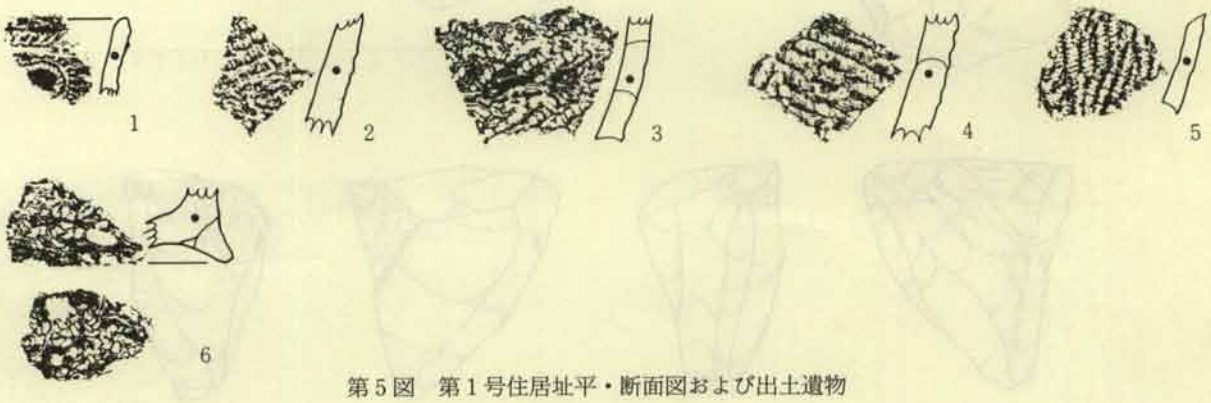
第１節　住　居　址

第１号住居址（第５図、ＰＬ－２）





第１号住居址・炉址土層説明
１層　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物粒混入。



第５図　第１号住居址平・断面図および出土遺物

本住居址は、調査区の北西部（N・O－3G）、標高230.5～231.0mに位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北4.00m、東西2.50mを測る。壁は38～63cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦であるが明確な堅緻面は確認できなかった。

ピットは10本確認され、東壁を除く3壁下に壁柱穴として把握できる。壁溝も柱穴と絡んで3壁で確認された。

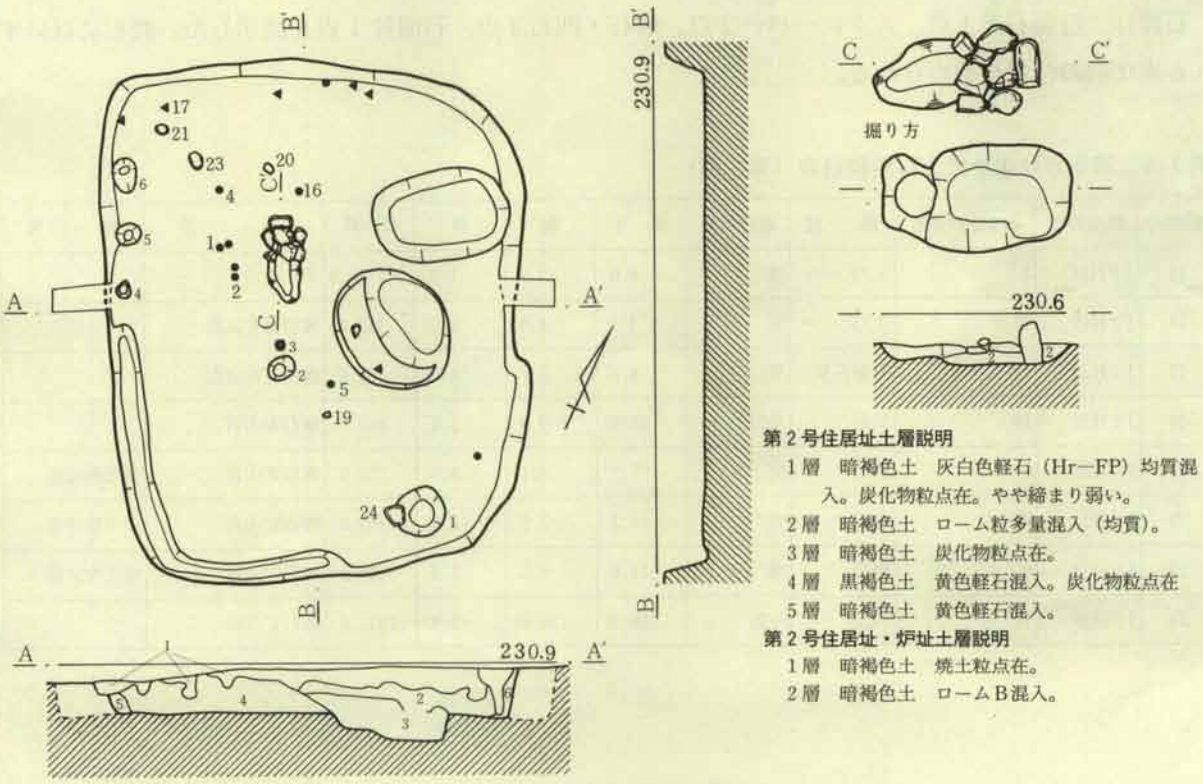
炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な2個の石を敷き周囲を5個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。開放した南部はやや窪む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は非常に少なく、破片資料が主である。

第1号住居址出土遺物（第5図）

1はやや外反して開く平口縁の破片。口唇下に刻み隆帯を2条施し、RとLの2本1組の撚糸側面圧痕と併走する連続の刻みにより蕨手文を構成する。2～4はいずれも胴部破片。2は0段多条のRLを羽状に施す。3は閉端環付LRを多段に施す。4は無節のL縄文を施す。5は0段多条のRLによる異方向縄文を施す。6は底部破片で上げ底を呈する。

第2号住居址（第6図、PL－2）



第6図　第2号住居址平・断面図

本住居址は、調査区の北西部（N－3G）、標高230.5～231.0mに位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北4.10m、東西3.30mを測る。壁は27～32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は西壁中央から南壁の中央まで確認できた。床面は、ほぼ平坦であるが、明確な堅緻面は確認できなかった。

ピットは6本確認されており、西壁下に3本壁柱穴として確認され、2本は炉址の南方部に、1本は南東の隅よりに確認された。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を主体とする3個の石を敷き周囲を5個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。開放した南方部はやや窪む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は散在的であるが、炉址を中心とする住居址の中央部にやや集中する。

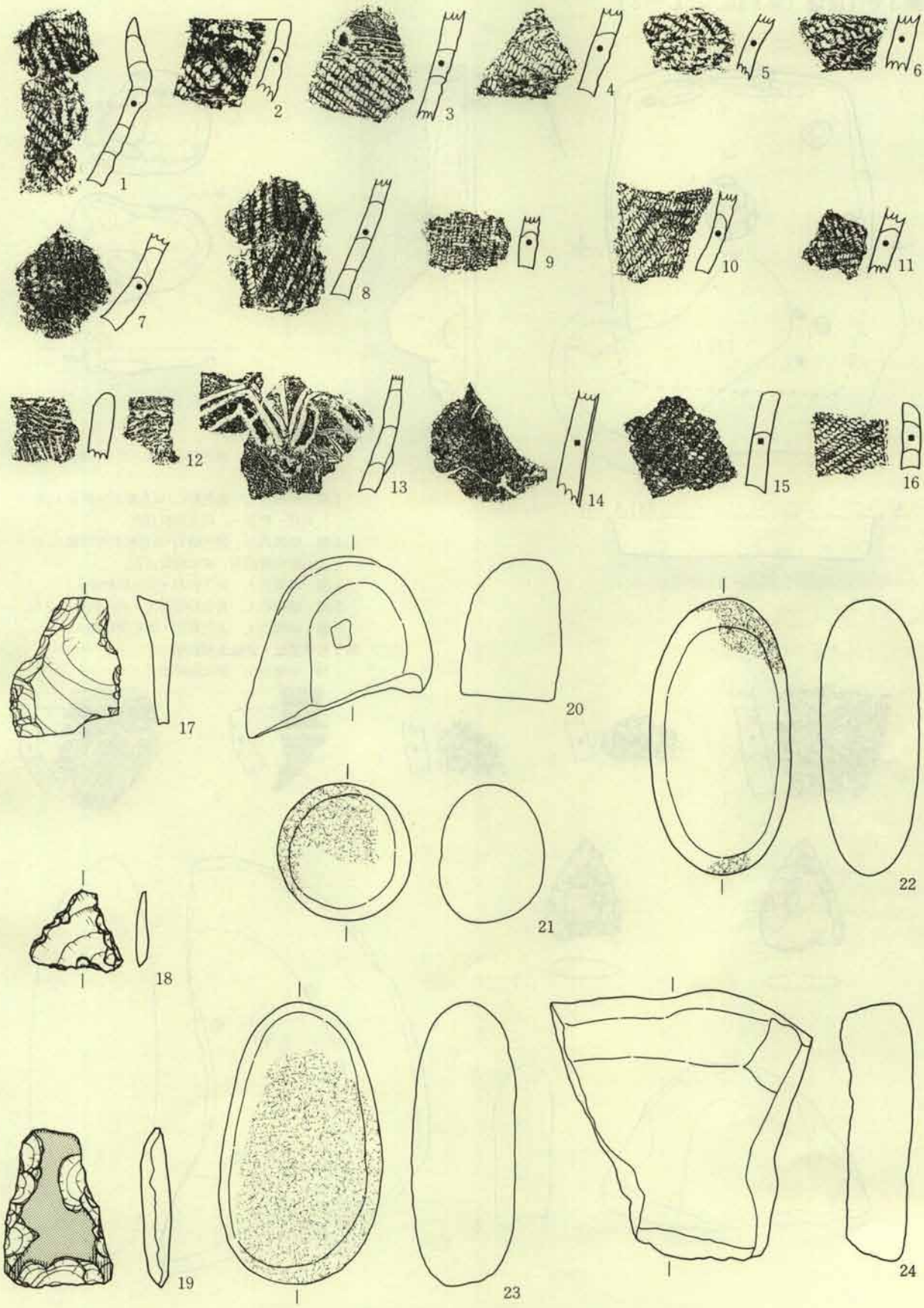
第2号住居址出土遺物（第7図）

1は外反する体部が「く」の字に屈曲し、内傾気味に口縁に向かい波状を呈する口縁部破片。0段多条のＲＬを施す。2はやや内傾気味の平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。3は頸部破片で、胴部との区画に2組の平行沈線を横送させ、瘤状の貼付を施す。胴部にはＲＬ縄文を施す。4～11はいずれも胴部破片である。4は0段多条ＲＬを、5は閉端環付ＲＬを、6は閉端環付ＲＬとＬＲを多段にそれぞれ施す。7は尖底を呈すると思われる底に近い部位でＲＬ縄文を、8は底部に近い部位の破片で0段多条ＲＬとＬＲを施す。10は0段多条ＬＲを、11は0段多条のＲＬ・ＬＲ結束第1種による羽状縄文をそれぞれ施す。12は条痕文土器の口縁部破片。13は隆帯を鋭角な波状に貼付し、沈線を併走させる。14～16は中期阿玉台式期に比定される胴部片。いずれもＲＬ縄文を施す。

石器は、打製石斧1点、スクレーパー2点、磨石・凹石4点、石皿片1点を図示した。磨石にはいずれも炭化物の付着が認められる。

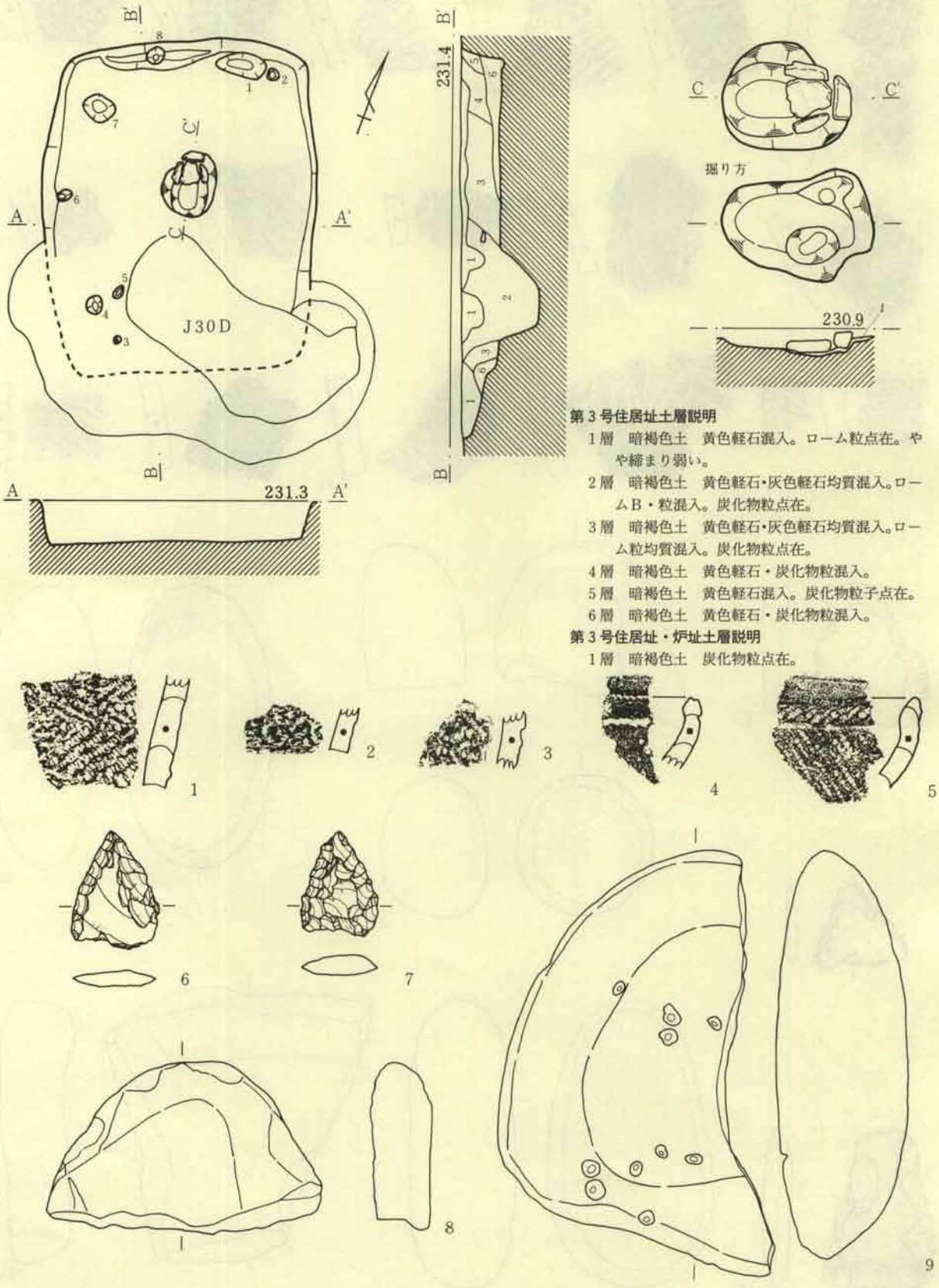
第3表　第2号住居址出土石器観察表（第7図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
17	J2H21	5	スクレーパー	完	4.9	3.9	1.3	18.0	デイサイト	
18	J2H19	覆土	スクレーパー	完	4.3	4.9	0.7	13.2	緻密質安山岩	
19	J2H20	17	打製石斧	完	8.3	5.7	1.6	81.5	緻密質安山岩	
20	J2H22	10	凹石	半分	(9.5)	9.8	5.4	480.0	輝石安山岩	
21	J2H25	6	磨石	完	7.2	7.1	5.6	226.0	輝石安山岩	炭化物付着
22	J2H24	覆土	磨石	完	14.3	7.5	5.3	753.0	輝石安山岩	炭化物付着
23	J2H23	8	磨石	完	14.8	8.5	5.5	960.0	輝石安山岩	炭化物付着
24	J2H26	20	石皿	一部	(19.0)	(18.9)	5.3	1931.0	輝石安山岩	



第７図　第２号住居址出土遺物

第３号住居址（第８図、ＰＬ－２）



第３号住居址土層説明

1層　暗褐色土　黄色軽石混入。ローム粒点在。やや締まり弱い。

2層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石均質混入。ロームB・粒混入。炭化物粒点在。

3層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石均質混入。ローム粒均質混入。炭化物粒点在。

4層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒混入。

5層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒子点在。

6層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒混入。

第３号住居址・炉址土層説明

1層　暗褐色土　炭化物粒点在。

第８図　第３号住居址平・断面図および出土遺物

本住居址は、調査区の北部（N・O－5G）、標高231.0～231.5mに位置し、南半部で第30号土坑と重複する。新旧関係は、第30号土坑のほうが新しい。

平面形態は、南北にやや長い長方形を呈し、規模は、南北3.40m、東西2.80mを測る。壁は37～46cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は北壁で確認された。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは8本確認されているが、主柱穴は把握できなかった。壁柱穴としては4本確認できる。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を1個敷き周囲を3個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。開放する南方部はやや窪む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は非常に少なく、破片資料が主である。

第3号住居址出土遺物（第8図）

1～3は、いずれも胴部の破片で、1は0段多条のRL・LRによる羽状縄文を施す。2・3はいずれも胴部破片。4・5は中期五領ヶ台式期に比定できる口縁部破片でいずれも平口縁を呈する。4は口唇部および口唇部下に半截竹管による連続の刻みを施す。5はやや肥厚する口唇で1条沈線を施し、RLの縄文を施文する。

図示した、石器は石鏃2点と石皿片2点である。

第4表　第3号住居址出土石器観察表（第8図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
6	J3H8	覆土	石鏃	完	3.0	2.3	0.4	3.0	デイサイト	
7	J3H7	覆土	石鏃	完	2.6	2.0	0.6	3.1	デイサイト	
8	J3H9	覆土	石皿	半分	(8.9)	14.0	3.2	422.0	輝石安山岩	
9	J3H10	覆土	石皿	半分	29.0	(18.9)	9.0	3950.0	輝石安山岩	

第4号住居址（第9図、PL－3）

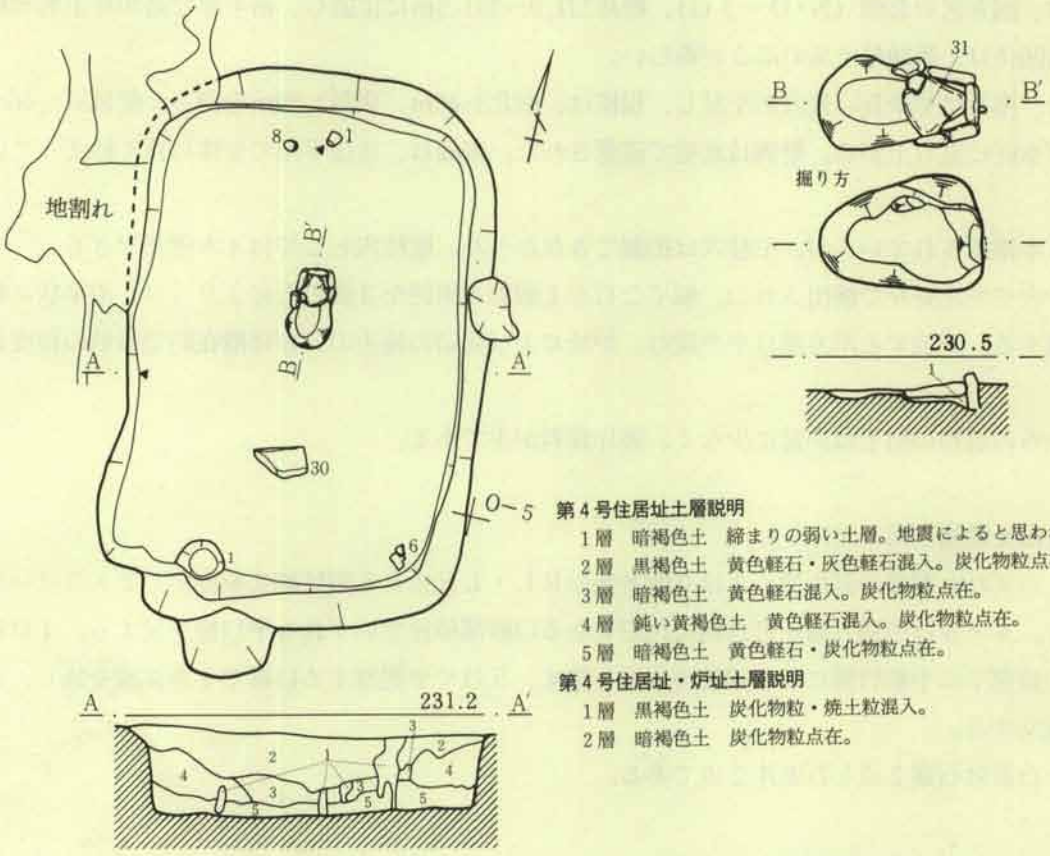
本住居址は、調査区の北部中央（N・O－4G）、標高231.0～231.5mに位置する。周辺は地震による地割れがあり住居址北西部は若干崩れる。また、土層断面にも大小の地割れが確認できる。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北4.30m、東西2.80mを測る。壁は56～70cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦であるが、明確な堅緻面はなくやや軟質な床面である。

ピットは1本南壁中央やや西よりに確認できる。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石1個を敷き周囲を5個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。開放する南部はやや窪む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、北部で遺物（1、8）が流れ込むように出土している。

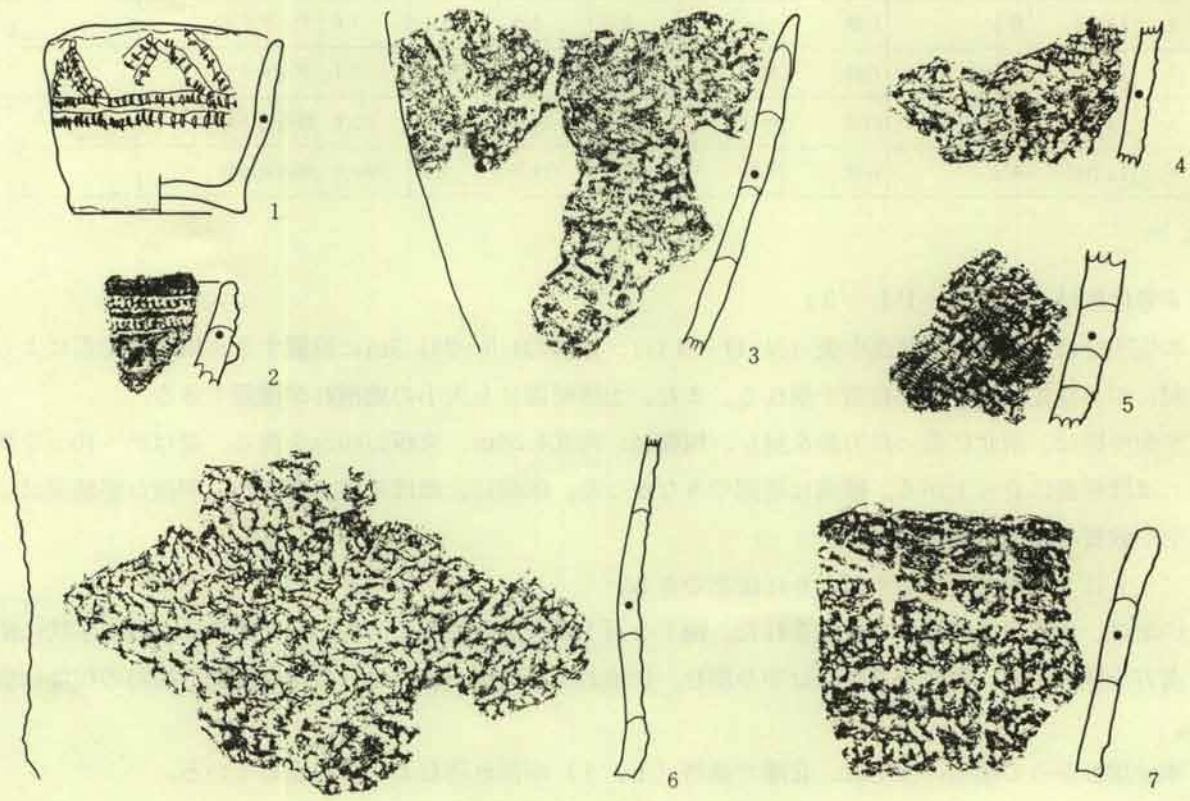


第4号住居址土層説明

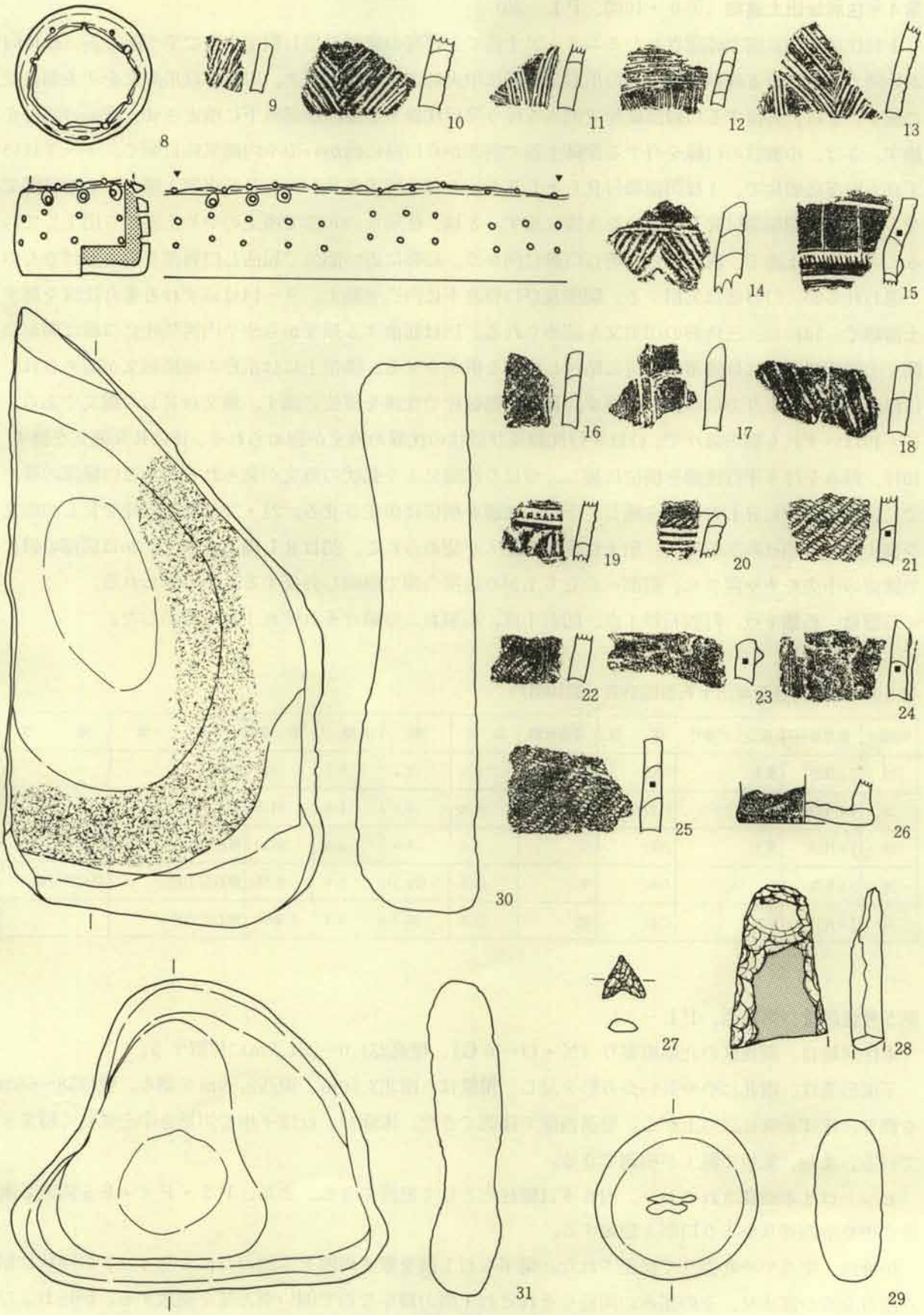
1層　暗褐色土　締まりの弱い土層。地震によると思われる地割れの層。
2層　黒褐色土　黄色軽石・灰色軽石混入。炭化物粒点在。
3層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。
4層　鈍い黄褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。
5層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒点在。

第4号住居址・炉址土層説明

1層　黒褐色土　炭化物粒・焼土粒混入。
2層　暗褐色土　炭化物粒点在。



第9図　第4号住居址平・断面図および出土遺物（1）



第10図　第４号住居址出土遺物（２）

第４号住居址出土遺物（第９・10図、ＰＬ－20）

１は住居址の北部で確認されたミニチュア土器で上げ底の底部を呈し胴部中央でやや膨らみ口縁に向かい開く。爪による浅い押し引きの爪形文を胴部中央に２条横位に施す。口縁部は爪形文を２条鋸歯状に施す。２は、外反する口縁部破片で刻みを伴う平行沈線を２条口縁部直下に横走させ、瘤条の貼付を施す。３は、小波状の口縁を有する深鉢土器で胴部から口縁に向かいやや内湾気味に開く。４～７はいずれも胴部の破片で、４は閉端環付ＲＬとＬＲを、５は０段多条ＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を、６・７は閉端環付ＲＬとＬＲを多段に施す。８は、住居址の北部で覆土のやや上層から出土しているミニチュア土器で、底部から内湾し口縁に向かう。口唇に近い部位で屈曲し口唇部を立ち上げるものと思われるが、口唇部は欠損する。胴部及び口唇直下に円孔を施す。９～14はいずれも集合沈線を施す土器群で、14には、三角形の印刻文も認められる。15は屈曲する頸部からやや内湾気味に口縁に向かい開く土器片で頸部には隆帯を横位に貼付し沈線を併走させる。隆帯上には爪形の連続施文が認められ、口縁部は沈線により方形の区画を施す。16は胴部破片で沈線を縦位に施す。地文はＲＬの縄文である。17～19はいずれも胴部破片で、17は平行沈線及び弧状の沈線の施文が認められる。18はＲＲ縄文を施す。19は、刻みを伴う平行沈線を横位に施し、やはり沈線により弧状の施文が見られる。20は口縁部の破片で、口唇部直下にＲＬの縄文を施し、下位に沈線を横位に併走させる。21・22は胴部破片でＲＬの縄文を施す。23～25は胴部破片で、胎土に雲母の混入が認められる。25はＲＬ縄文を施す。26は底部の破片で底面の中央をやや窪ませ、胴部への立ち上がりは接合部で屈曲し外反するものと思われる。

石器は、石鏃１点、打製石斧１点、凹石１点、石皿および破片それぞれ１点を図示した。

第５表　第４号住居址出土石器観察表（第10図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
27	J４H28	覆土	石鏃	完	1.2	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
28	J４H27	覆土	打製石斧	刃部欠損	(8.6)	5.0	1.8	84.5	デイサイト	
29	J４H29	覆土	凹石	完	8.6	8.5	3.6	367.0	輝石安山岩	
30	J４H31	2	石皿	半分	42.8	(22.3)	9.0	9.5kg	輝石安山岩	炭化物付着
31	J４H30	炉１	石皿	完	21.8	26.2	5.4	3159.0	輝石安山岩	

第５号住居址（第11図、ＰＬ－３）

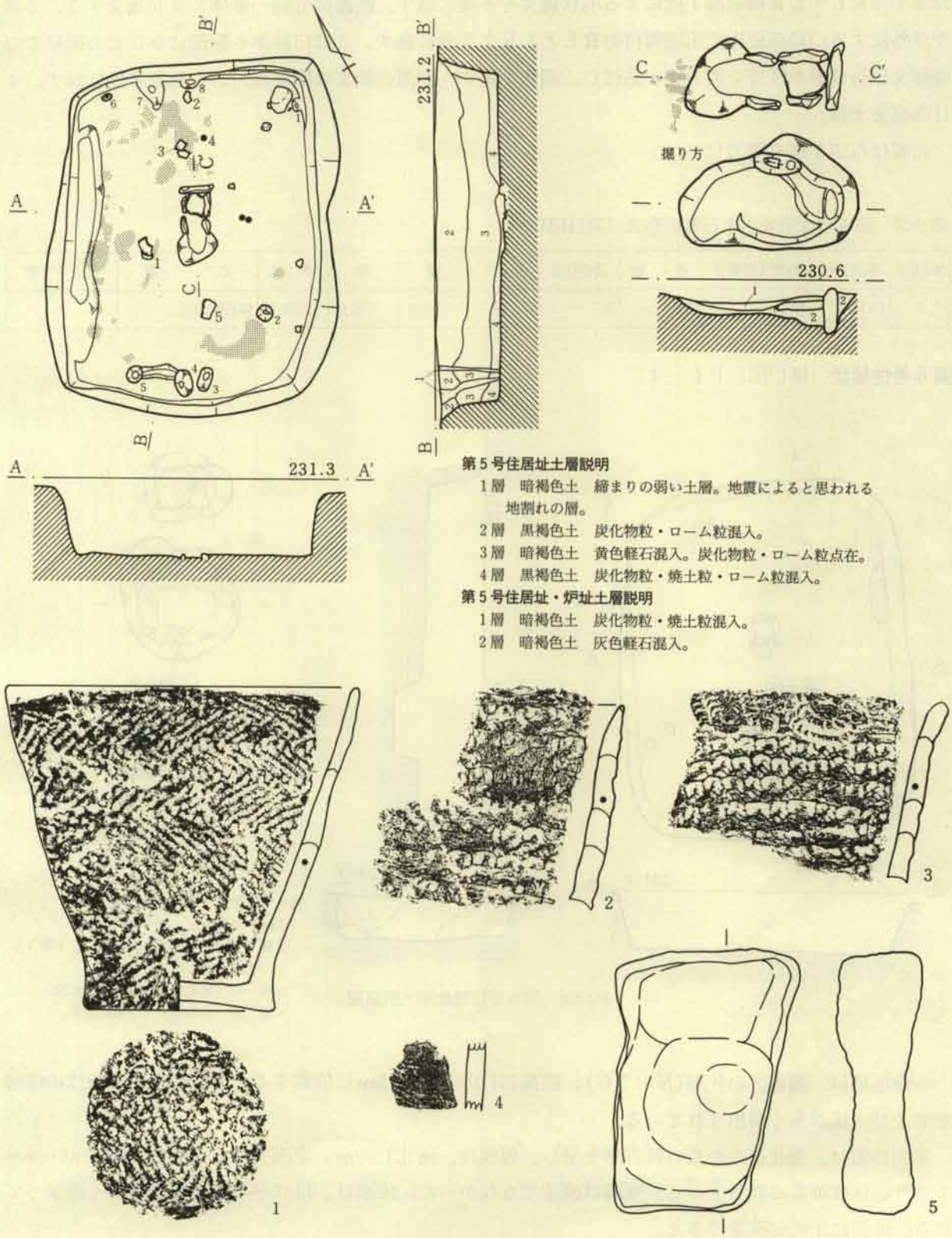
本住居址は、調査区の北部東寄り（Ｎ・Ｏ－６Ｇ）、標高231.0～231.5mに位置する。

平面形態は、南北にやや長い長方形を呈し、規模は、南北3.50m、東西2.90mを測る。壁は58～68cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝西壁で確認できた。床面は、ほぼ平坦で炉址を中心に良く締まっている。また、随所で焼土が確認できる。

ピットは８本確認されており、内６本は壁柱穴として把握できる。また、Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５のある南壁中央やや西寄りを入り口部と想定する。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石１個を敷き周囲を３個の石により「コ」の字状に組み南方をやや窪ませ、その窪みの両脇をそれぞれ１個の扁平な石で囲い南方部を開放する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で広範囲に及ぶ。

本住居址からの遺物の出土は、炉址周辺および北東隅に集中する。



第5号住居址土層説明

1層　暗褐色土　締まりの弱い土層。地震によると思われる地割れの層。
2層　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒混入。
3層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒・ローム粒点在。
4層　黒褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム粒混入。

第5号住居址・炉址土層説明

1層　暗褐色土　炭化物粒・焼土粒混入。
2層　暗褐色土　灰色軽石混入。

第11図　第5号住居址平・断面図および出土遺物

第５号住居址出土遺物（第11図、ＰＬ－20））

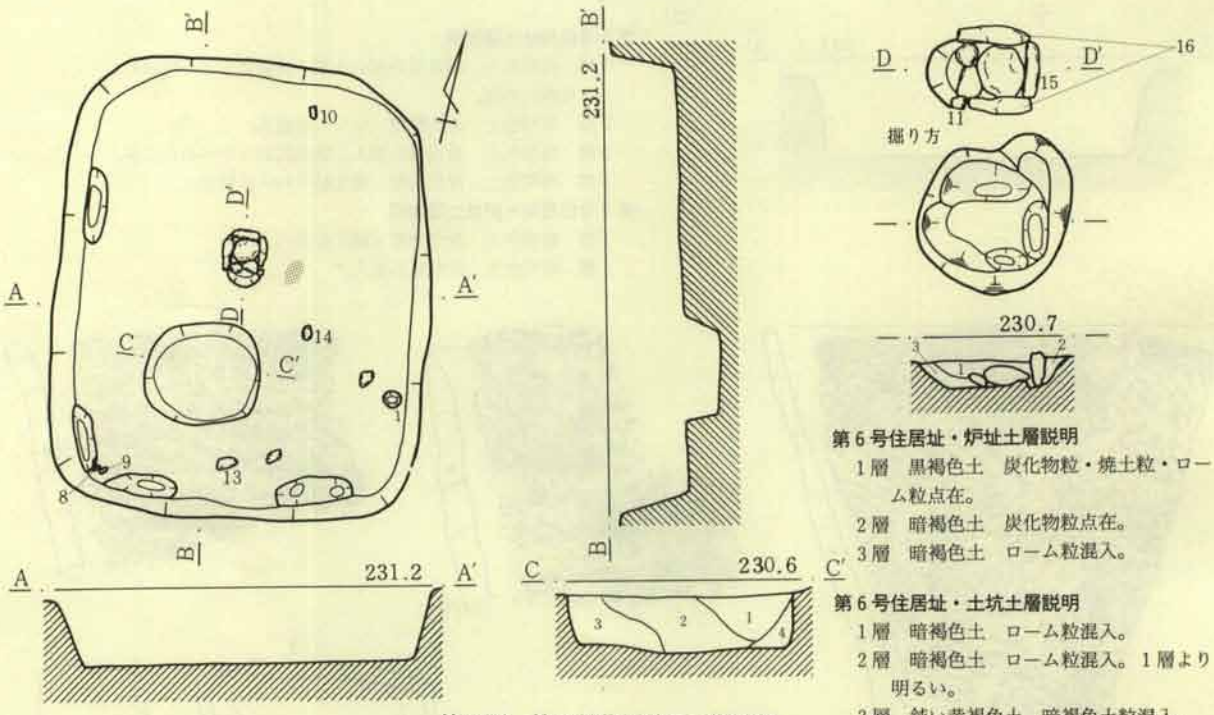
１は底部から逆「ハ」の字に外反しながら開き口縁に向かう深鉢土器で、底部は上げ底を呈する。０段多条のＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を多段に施す。底面にも同一原体により施文する。２はやや外反する口縁部破片で閉端環付のＲＬとＬＲを多段に施す。３は口縁から胴部にかけての破片で口縁部文様帯は刻み隆帯を蕨手状に貼付し、刺切を施す。胴部の施文は閉端環付のＬＲを多段に施す。４は条痕文土器。

石器は石皿１点を図示した。

第６表　第５号住居址出土石器観察表（第11図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
5	J５H５	12	石皿	完	18.1	12.6	5.9	1585.0	輝石安山岩	

第６号住居址（第12図、ＰＬ－４）



第12図　第６号住居址平・断面図

第６号住居址・炉址土層説明

１層　黒褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム粒点在。
２層　暗褐色土　炭化物粒点在。
３層　暗褐色土　ローム粒混入。

第６号住居址・土坑土層説明

１層　暗褐色土　ローム粒混入。
２層　暗褐色土　ローム粒混入。１層より明るい。
３層　鈍い黄褐色土　暗褐色土粒混入。
４層　鈍い黄褐色土　３層に酷似。

本住居址は、調査区の北部（Ｎ－５Ｇ）、標高231.0から231.5mに位置する。周辺には縄文時代の住居址および土坑が多く検出されている。

平面形態は、南北にやや長い長方形を呈し、規模は、南北3.60m、東西3.00mを測る。壁は50～56cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で比較的に良く締まっている。床面に土坑が確認できた。

ピットは１本確認されているが主柱穴としては把握できない。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を３個の石を敷き周囲を４個の石により「コ」の字

状に組み南方を開放する。開放した南部はやや窪む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。炉址の東の床面が焼けている。

本住居址からの遺物の出土には明確な集中は認められないが、住居址の南方部からの出土が多い。

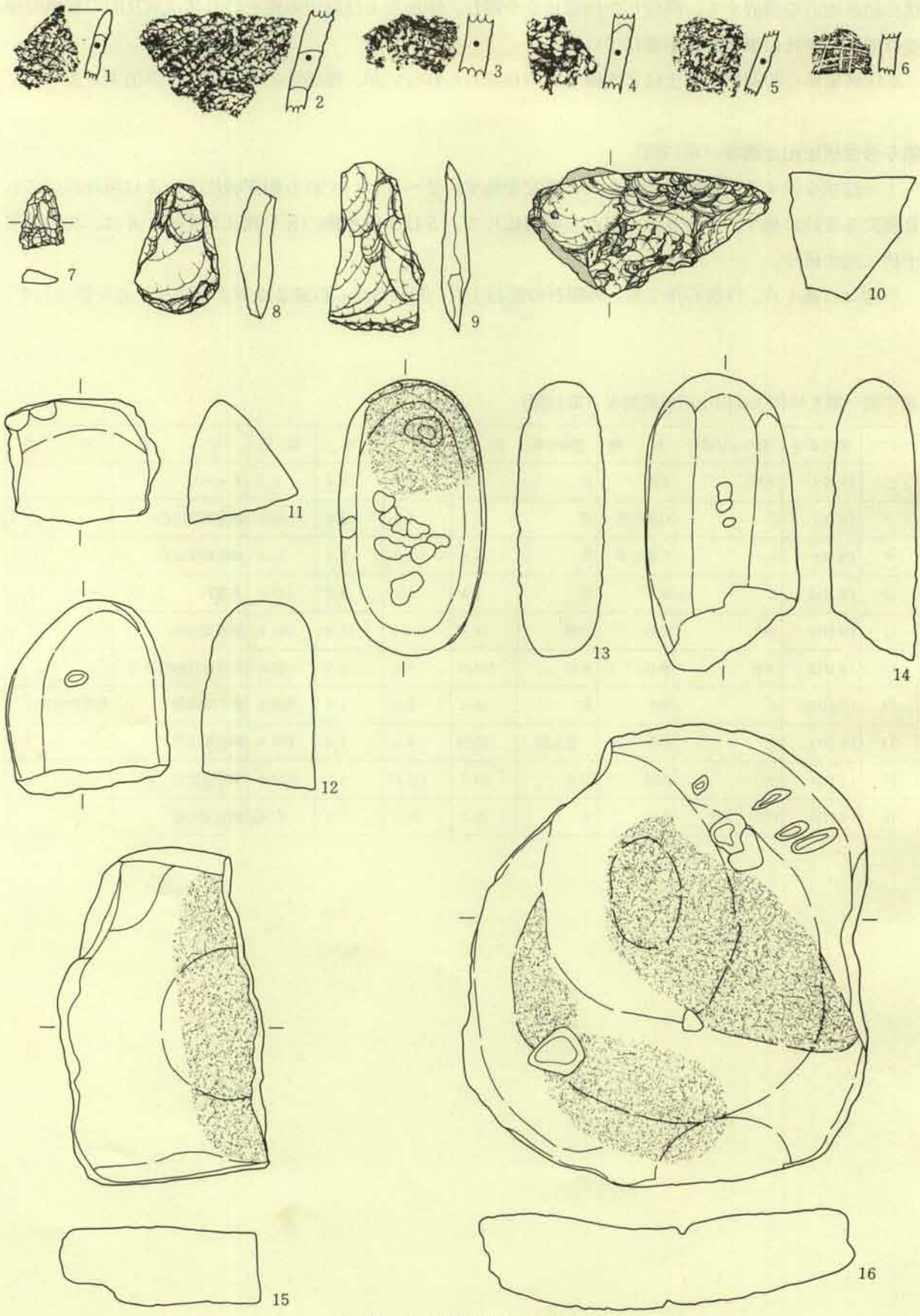
第６号住居址出土遺物（第13図）

１は波状を呈する口縁部破片でＬＲの縄文を施す。２～５はいずれも胴部破片で、２は閉端環付のＬＲ縄文を多段に施す。３～６はいずれも胴部破片で、５は０段多条のＲＬ縄文を施す。６は、沈線を格子状に施す破片。

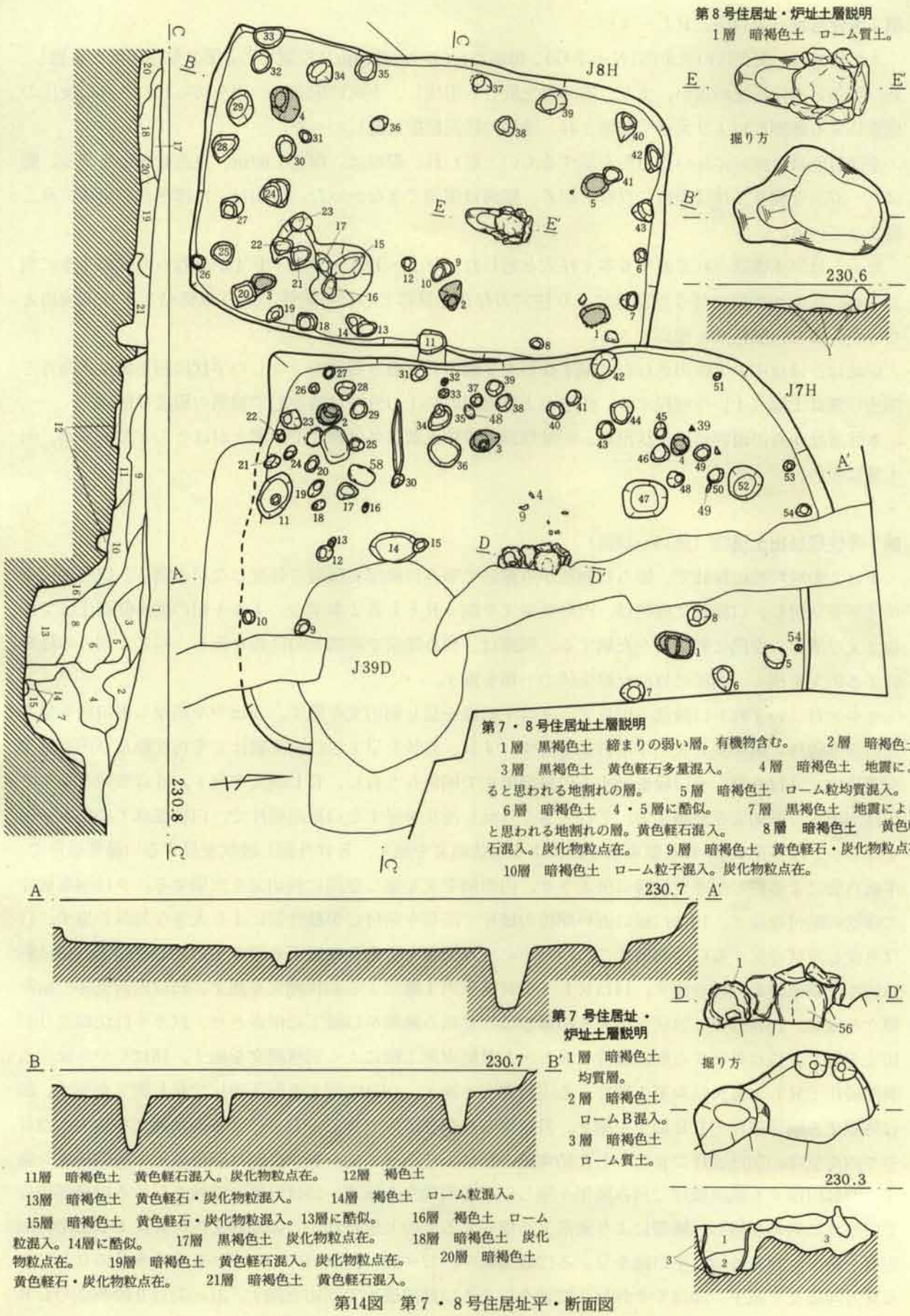
石器は石鏃１点、打製石斧２点、黒曜石の原石１点、凹石３点、石皿２点および破片１点を図示した。

第７表　第６号住居址出土石器観察表（第13図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
7	J６H９	土坑	石鏃	完	1.7	1.2	0.4	0.8	チャート	
8	J６H７	5	打製石斧	完	6.8	4.6	2.0	58.0	緻密質安山岩	
9	J６H８	4	打製石斧	完	8.9	5.0	1.5	51.5	緻密質安山岩	
10	J６H10	1	原石	完	4.4	8.6	4.5	135.0	黒曜石	
11	J６H16	炉４	石皿	一部	(8.7)	(10.9)	(7.8)	593.0	輝石安山岩	
12	J６H12	土坑	磨石	2/3	(10.1)	8.6	6.0	662.0	黒雲母花崗閃緑岩	
13	J６H13	3	磨石	完	14.4	7.8	4.6	680.0	輝石安山岩	炭化物付着
14	J６H11	2	磨石	一部欠損	(15.5)	8.0	4.6	676.0	輝石安山岩	
15	J６H14	炉２	石皿	半分	23.7	(15.0)	5.7	2521.0	輝石安山岩	
16	J６H15	炉１、炉３	石皿	完	32.2	28.3	7.2	6.5kg	輝石安山岩	



第13図　第６号住居址出土遺物



第8号住居址・炉址土層説明

1層　暗褐色土　ローム質土。

第7・8号住居址土層説明

1層　黒褐色土　締まりの弱い層。有機物含む。　2層　暗褐色土　3層　黒褐色土　黄色軽石多量混入。　4層　暗褐色土　地震によると思われる地割れの層。　5層　暗褐色土　ローム粒均質混入。　6層　暗褐色土　4・5層に酷似。　7層　黒褐色土　地震によると思われる地割れの層。黄色軽石混入。　8層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。　9層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒点在。　10層　暗褐色土　ローム粒子混入。炭化物粒点在。

第7号住居址・炉址土層説明

1層　暗褐色土　均質層。
2層　暗褐色土　ロームB混入。
3層　暗褐色土　ローム質土。

11層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。　12層　褐色土　13層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒混入。　14層　褐色土　ローム粒混入。　15層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒混入。13層に酷似。　16層　褐色土　ローム粒混入。14層に酷似。　17層　黒褐色土　炭化物粒点在。　18層　暗褐色土　炭化物粒点在。　19層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。　20層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒点在。　21層　暗褐色土　黄色軽石混入。

第14図　第7・8号住居址平・断面図

第７号住居址（第14図、ＰＬ－４）

本住居址は、調査区の北東部（Ｎ－７Ｇ）、標高231.0から231.5mに位置する。第８号住居址と重複し、新旧関係は本住居址が古い。また、第39号土坑とも重複し、土坑に床面の一部を切られ、さらに後代の地震による地割れにより大きく破壊され。遺構の状況把握は難しかった。

平面形態は、南北に長い長方形を呈するものと思われ、規模は、南北6.00m、東西4.40mを測る。壁は２～37cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは54本確認されており６本主柱穴と思われ、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４がそれらの内の４本に当たるが、床面が地震に伴う地割れにより柱穴の存在を見落とした可能性もあり東側の２本は未検出となった。また、壁柱穴も確認できる。

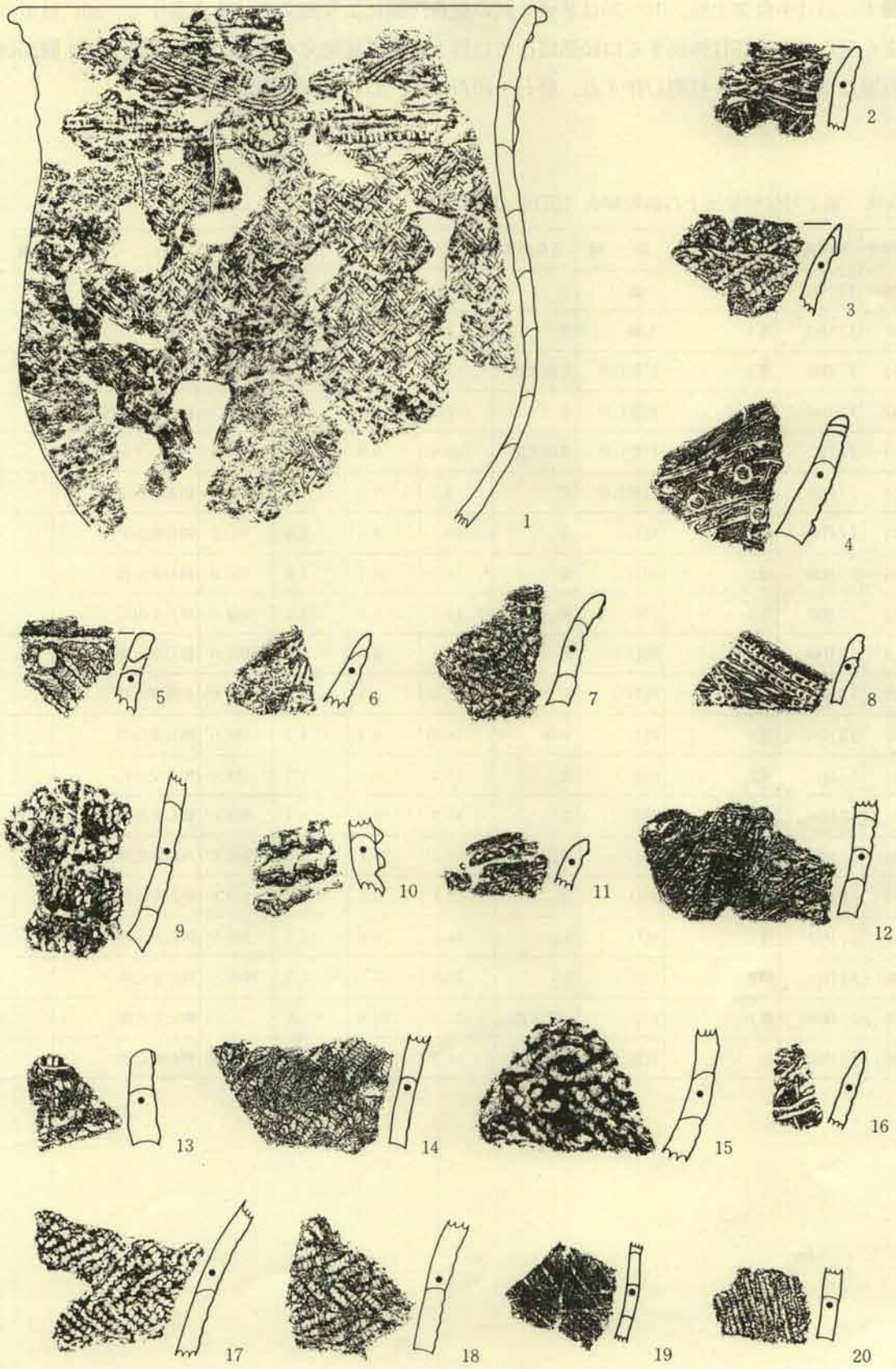
炉址は、ほぼ中央で検出された。偏平な石を２個の石を敷き周囲を「コ」の字状に石を組み、南方を開放し深鉢土器（１）を埋設する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土状況は、炉址埋設の深鉢土器以外は破片での出土がほとんどであるが、出土量は多い。

第７号住居址出土遺物（第15～18図）

１は、炉址埋設の深鉢で、膨らむ胴部から頚部で窄み口縁部文様帯で外反しながら開く。口唇部直下に隆帯を貼付し、口縁部文様帯は、円形刺突文を抱くＲとＬ各２本ずつの４本１組の撚糸側面圧痕で渦巻き文を描き、空間に刺切文を充填する。頚部は、刻み隆帯で胴部との区画を施し、同じく刻みの隆帯による円文を描く、胴部には回転絡条体の一種を施す。

２～８は、いずれも口縁部の破片で、２は平口縁を呈し刺切文を施す。３はやや肥厚し平口縁を呈する口縁部破片で附加条ＬＲ＋１本付加を施す。４は、波状を呈する口縁部破片で平行沈線及び円形刺突文を施す。５は外反し平口縁を呈する口縁部破片で補修孔を有し、ＲＬ縄文を施す。６は波状を呈する口縁部破片で刺切文を充填する。７は大きく外反し波状を呈する口縁部破片で、口唇部直下に刻み隆帯を施し、０段多条ＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。８は外傾し波状を呈する口縁部破片で、半截竹管による押し引きを口縁に併走させ、円形刺突文を施し空間に刺切文を充填する。９は胴部破片で瘤状の貼付を施す。10は口縁に近い部位の破片で隆帯を貼付し半截竹管により大きな刻みを施す。11は外反し波状を呈する口縁部破片で、口唇下に刻み隆帯を併走させ以下０段多条のＲＬを施す。12は胴部破片で絡条体の一種を施す。14はＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。15は内湾気味で結節縄文を施す。16は外傾し波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯を口唇下に併走させ、以下平行沈線及び刺切文を施す。17は外反する胴部破片でＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。18はやや外反する胴部破片でＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。19は内湾する胴部破片でＲＬ縄文を施す。20は外傾する胴部破片でＬＲ縄文を施す。21は膨らむ胴部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。22はやや内湾気味の胴部破片でＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。23は胴部破片で結節縄文を施す。24は内傾する頚部破片で刻み隆帯を施し以下結節縄文を施す。25は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇部に刻みを施し、隆帯により菱形文を構成するものと思われ、この菱形文内にＲによる撚糸側面圧痕を施す。26は外傾し平口縁を呈する口縁部破片。27～29は胴部破片でいずれも０段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。30はやや外反し波状を呈する口縁部破片で刺切を施す。31・32は０段多条のＬＲ



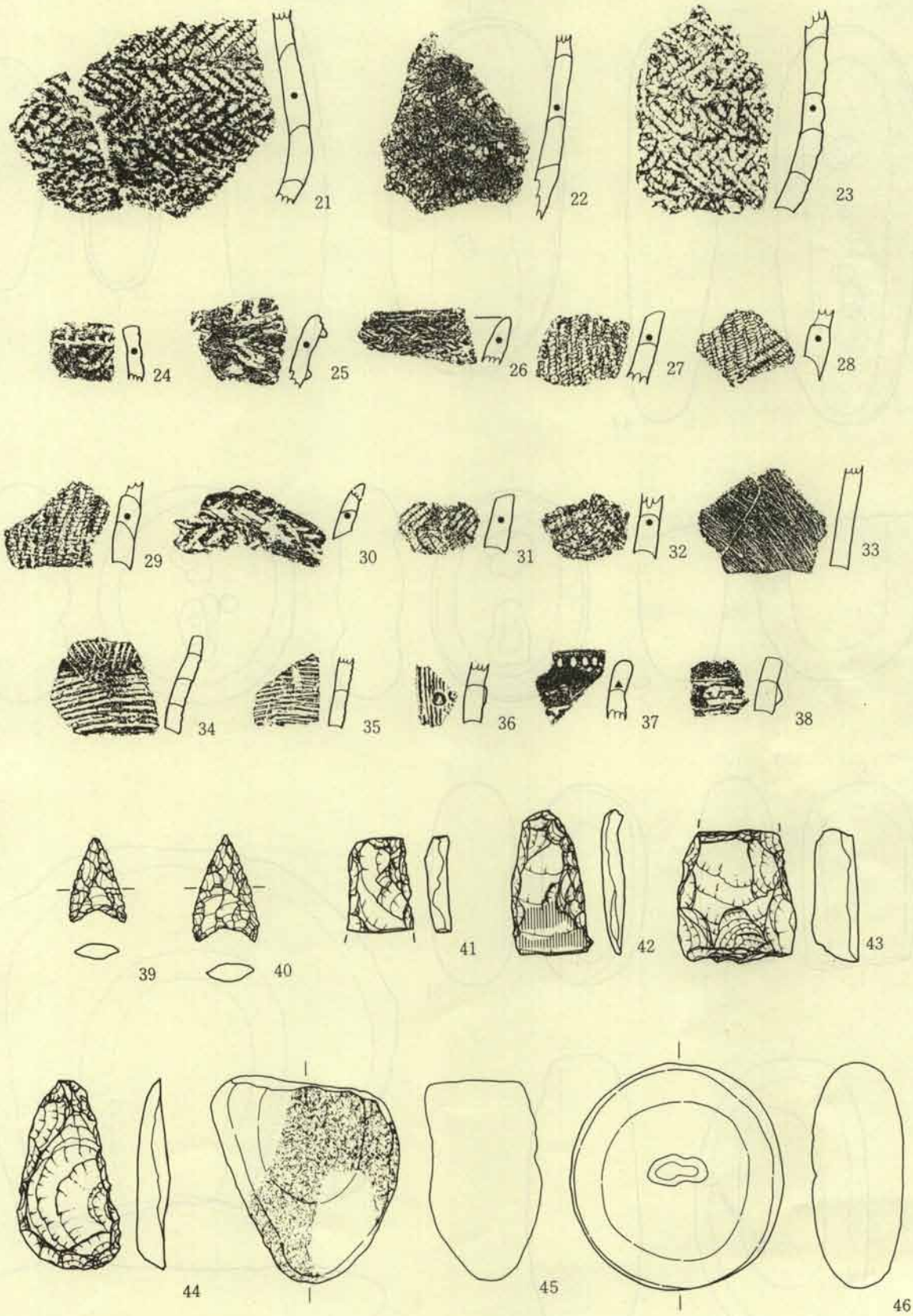
第15図　第７号住居址出土遺物（１）

を施す。33は条痕文土器。34～36は諸磯ｃ式の集合沈線により施文される土器片で、36にはボタン状貼付文も見られる。37は外反する口縁部破片で口唇下に連続刺突文を施す。38は隆帯を施す胴部破片。

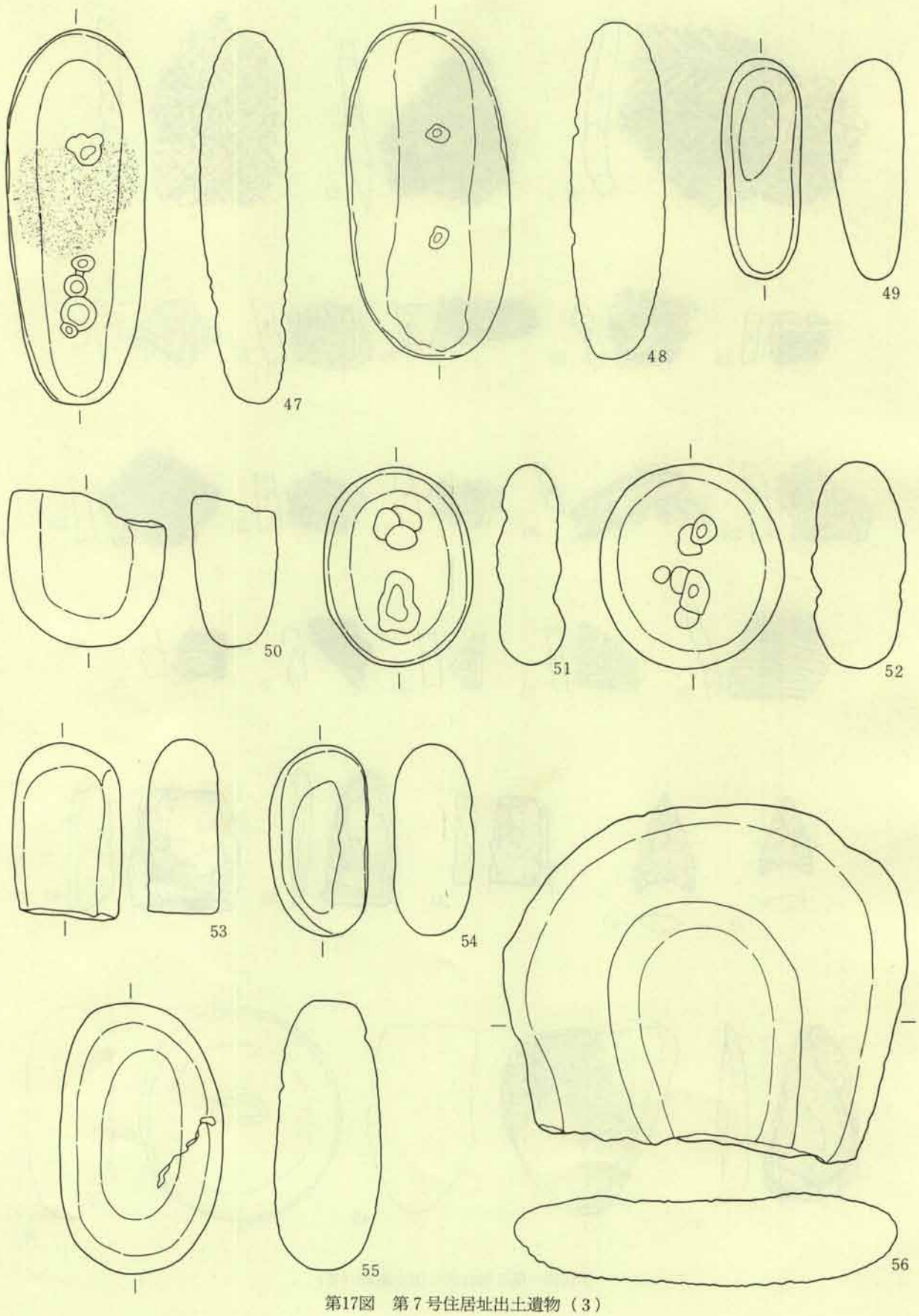
石器は、石鏃２点、打製石斧４点、磨石・凹石11点、石皿３点を図示した。

第８表　第７号住居址出土石器観察表（第16～18図）

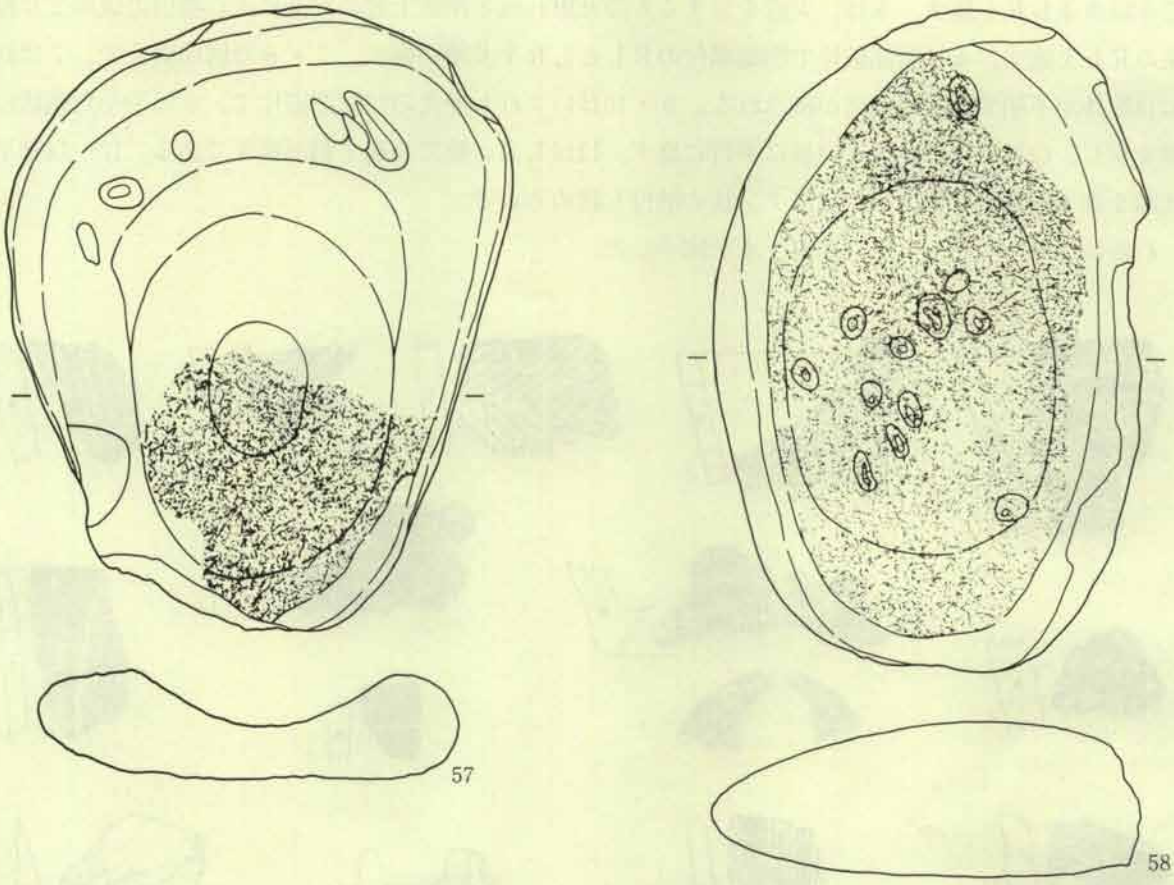
挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
39	J７H44	1	石鏃	完	2.1	1.5	0.4	0.9	変質流紋岩	
40	J７H43	覆土	石鏃	完	2.7	1.7	0.5	1.5	黒曜石	
41	J７H41	覆土	打製石斧	刃部欠損	(4.8)	3.4	1.3	26.8	デイサイト	
42	J７H40	覆土	打製石斧	完	7.3	4.0	1.2	35.2	緻密質安山岩	
43	J７H42	覆土	打製石斧	基部欠損	(6.6)	5.9	2.4	135.0	ホルンフェルス	
44	J７H39	覆土	打製石斧	完	9.5	5.7	1.8	72.0	緻密質安山岩	
45	J７H45	覆土	磨石	完	10.5	9.3	5.9	573.0	輝石安山岩	
46	J７H55	覆土	凹石	完	11.3	10.7	4.6	715.0	輝石安山岩	
47	J７H52	覆土	凹石	完	19.5	7.5	4.7	864.0	輝石安山岩	
48	J７H46	11	凹石	完	17.7	8.8	5.0	1002.0	輝石安山岩	
49	J７H54	3	磨石	完	11.6	4.1	4.0	287.0	変質安山岩	
50	J７H51	覆土	磨石	半分	(8.3)	8.4	4.7	388.0	輝石安山岩	
51	J７H48	覆土	凹石	完	10.5	8.0	3.7	314.0	輝石安山岩	
52	J７H56	覆土	凹石	完	10.9	9.9	5.1	671.0	輝石安山岩	
53	J７H50	覆土	磨石	半分	(9.5)	5.7	4.0	366.0	角閃緑花崗閃緑岩	
54	J７H58	4	磨石	完	10.1	5.2	4.3	339.0	輝石安山岩	
55	J７H53	覆土	磨石	完	14.4	8.8	5.7	905.0	輝石安山岩	
56	J７H62	炉２	石皿	2/3	28.5	(25.5)	6.7	5905.0	輝石安山岩	
57	J７H59	覆土	石皿	一部欠損	(32.3)	26.8	5.8	6.5kg	輝石安山岩	
58	J７H60	12	石皿	一部欠損	34.3	(23.0)	8.1	8.5kg	輝石安山岩	



第16図　第７号住居址出土遺物（２）



第17図　第７号住居址出土遺物（３）



第18図　第７号住居址出土遺物（４）

第８号住居址（第14図、ＰＬ－５）

本住居址は、調査区の東部(Ｎ－７Ｇ)、標高230.5～231.0に位置する。北東部で第７号住居址と重複する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.10m、東西3.10mを測る。壁は6～55cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは43本確認されており、６本主柱穴と思われるＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５がそれらの内の５本に当たるが、西側の中央の１本は未検出である。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を１個の石を敷き周囲を６個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。開放する南部はやや窪む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

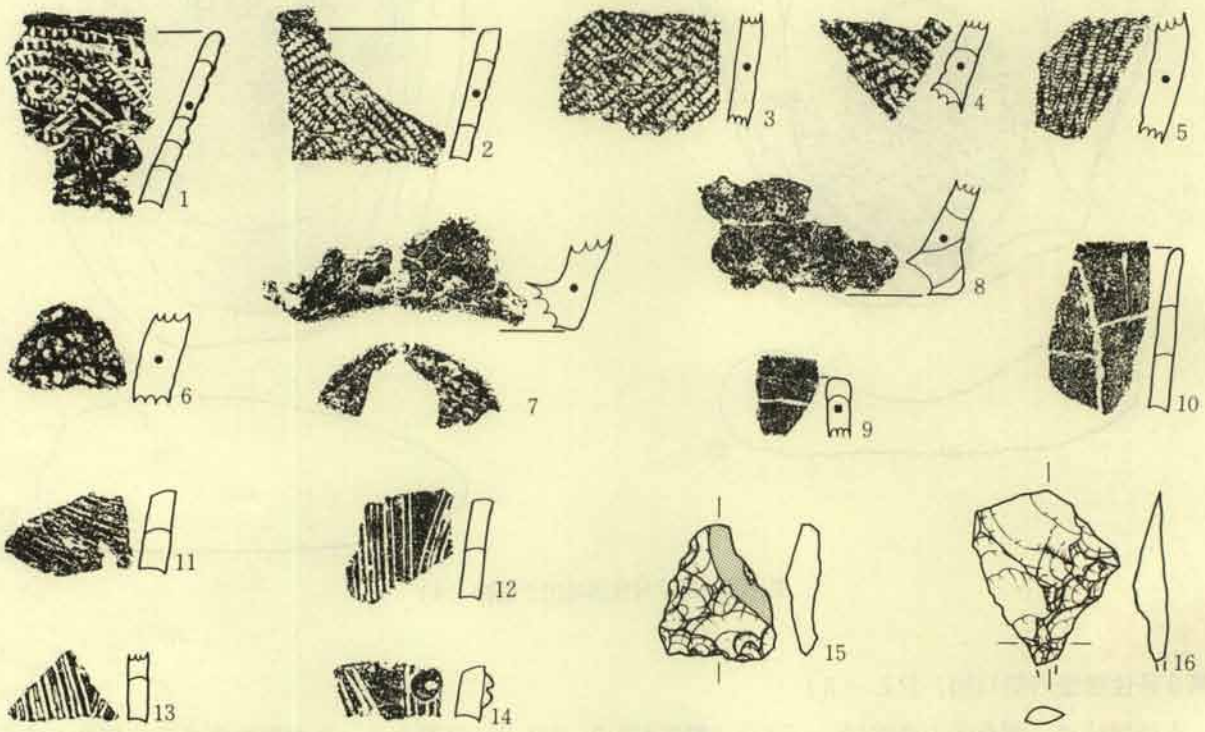
本住居址からの遺物の出土は少なく、破片資料が多い。

第８号住居址出土遺物（第19図）

１は、平口縁を呈する口縁部破片で刻み隆帯を２条口唇下に走向させ、この隆帯下に２条の刻み隆帯による蕨手文を施し、空間に刺切文を施す。さらにこの口縁部文様帯と胴部文様帯との境には２条の刻み隆帯で区画する。２は平口縁を呈する口縁部の破片でＲＬ・ＬＲ結束第１種により羽状縄文を施す。３は、２と同一個体と思われる胴部破片でＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。４は胴部破片

で0段多条ＬＲを施す。5は、尖底を呈するものと思われる深鉢土器の底部に近い部位の破片で0段多条のＲＬを施す。6は胴部破片で閉端環付のＲＬとＬＲを多段に施す。7・8は底部破片で、7は底面には原体が不明であるが縄文が施される。9・10はいずれも無文の口縁部破片で、9はやや角頭状の口唇を呈し、口唇下には沈線を口縁に平行に施す。11はＬＲの縄文を施す胴部破片である。12～14は平行沈線を施す胴部破片で、14にはボタン状の貼付も認められる。

石器はスクレーパー1点、石錐1点を図示した。



第19図　第8号住居址出土遺物

第9表　第8号住居址出土石器観察表（第19図）

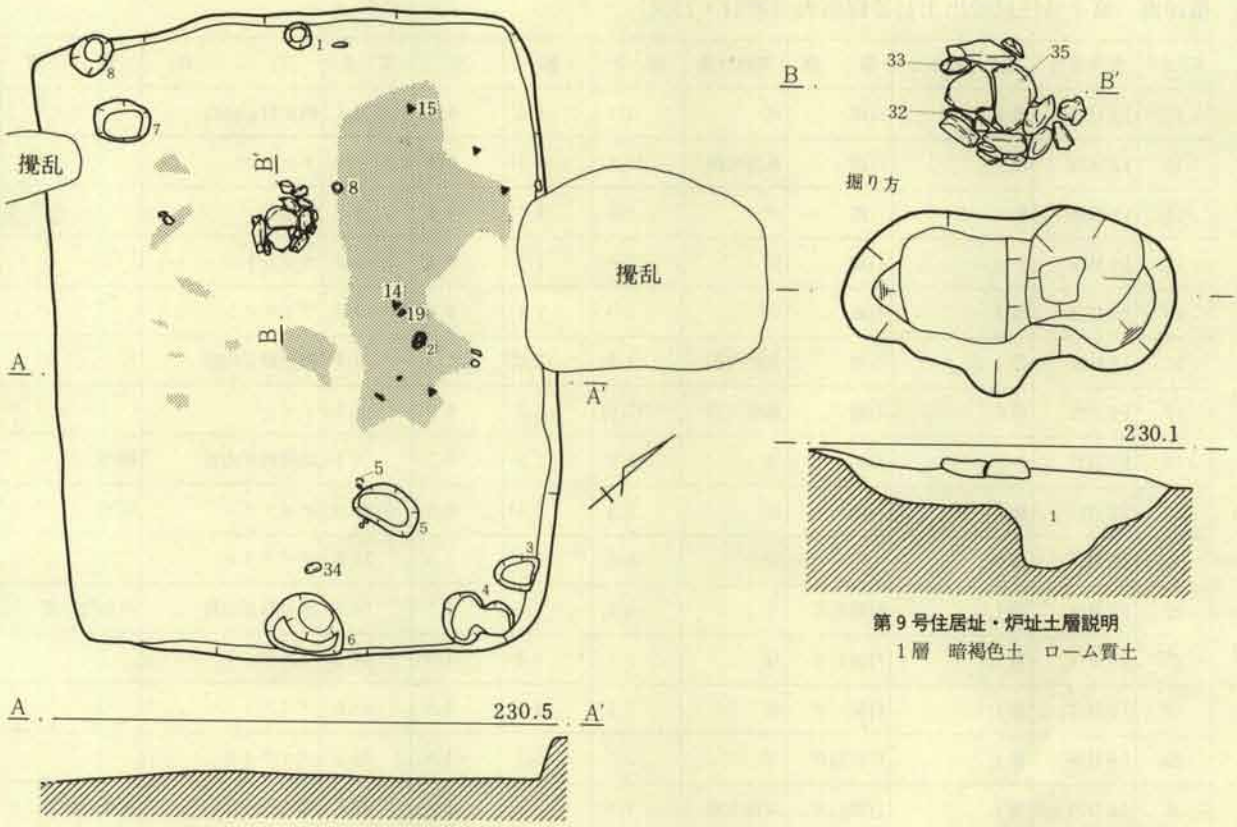
挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
15	J8H15	覆土	スクレーパー	完	5.3	4.6	1.4	28.2	デイサイト	
16	J8H16	覆土	石錐	錐部欠損	(6.8)	5.7	1.4	34.0	緻密質安山岩	

第9号住居址（第20図、ＰＬ－5）

本住居址は、調査区西部（Ｌ・Ｍ－３Ｇ）、標高230.0～230.5mに位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈するものと思われが、西方部は斜面に吸収される。規模は、南北5.00m、東西3.90mを測る。壁は22～32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。炉址東方の床面は広範囲に焼土化する。

ピットは8本確認されているが主柱穴は把握できなかった。



第20図　第9号住居址平・断面図

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を2個の石を敷き周囲を十数個の石により「コ」の字状に組んだものと思われる。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、焼土化した床面に集中する。

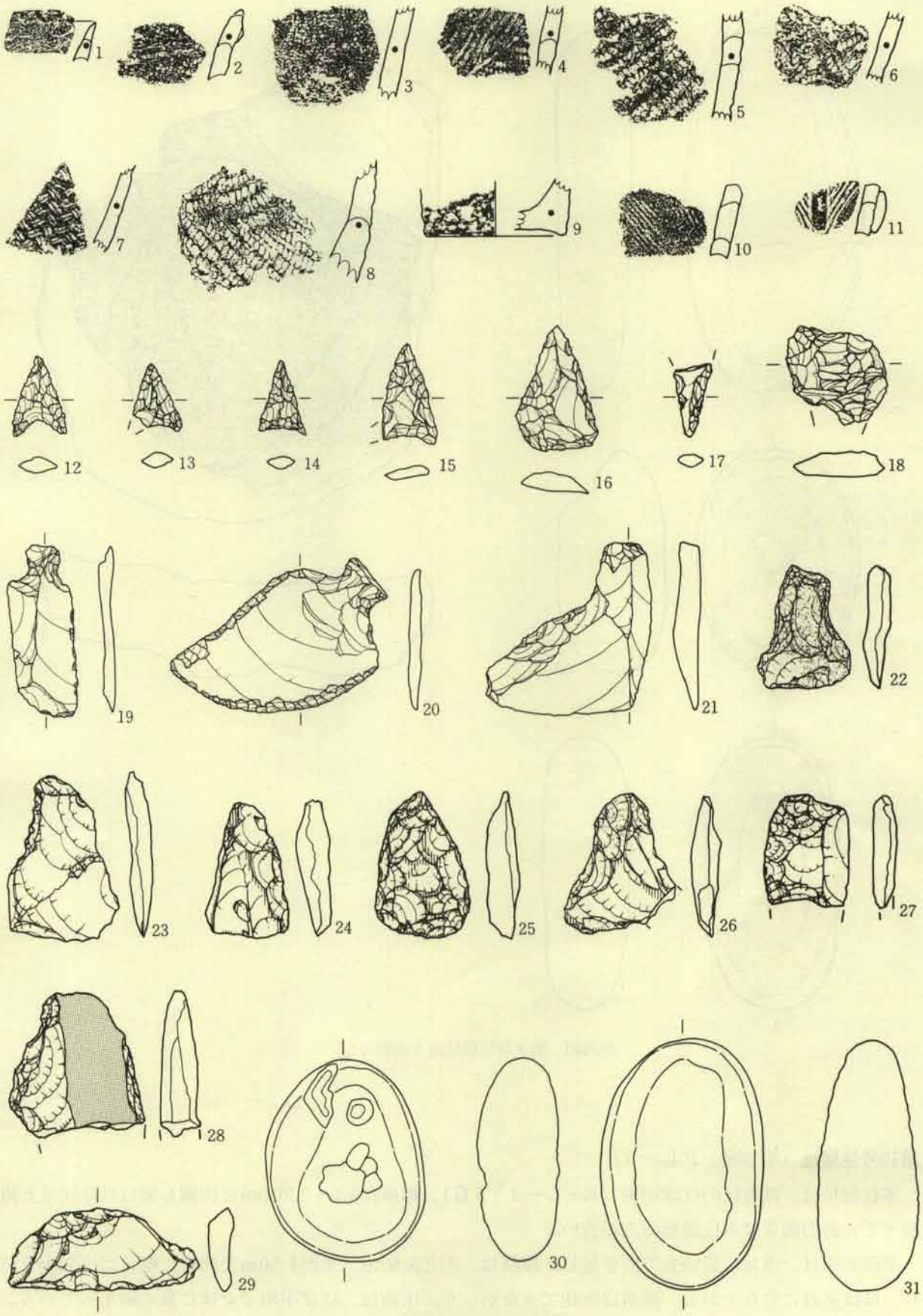
第9号住居址出土遺物（第21図）

1は尖り気味で外反する口縁部破片。2は肥厚する口縁部破片。3～8いずれも胴部破片である。4はＲＬとＬＲによる羽状縄文を、5はＬＲ縄文を、6はＲＬとＬＲによる羽状縄文を、7は回転絡条体を、8は0段多条のＲＬとＬＲによる羽状縄文をそれぞれ施す。9は上げ底の底部破片。10は胴部破片でＬＲ縄文を施す。諸磯ａ式期に比定できる。11は集合沈線と隆帯を施す胴部破片。諸磯ｃ式期に比定できる。

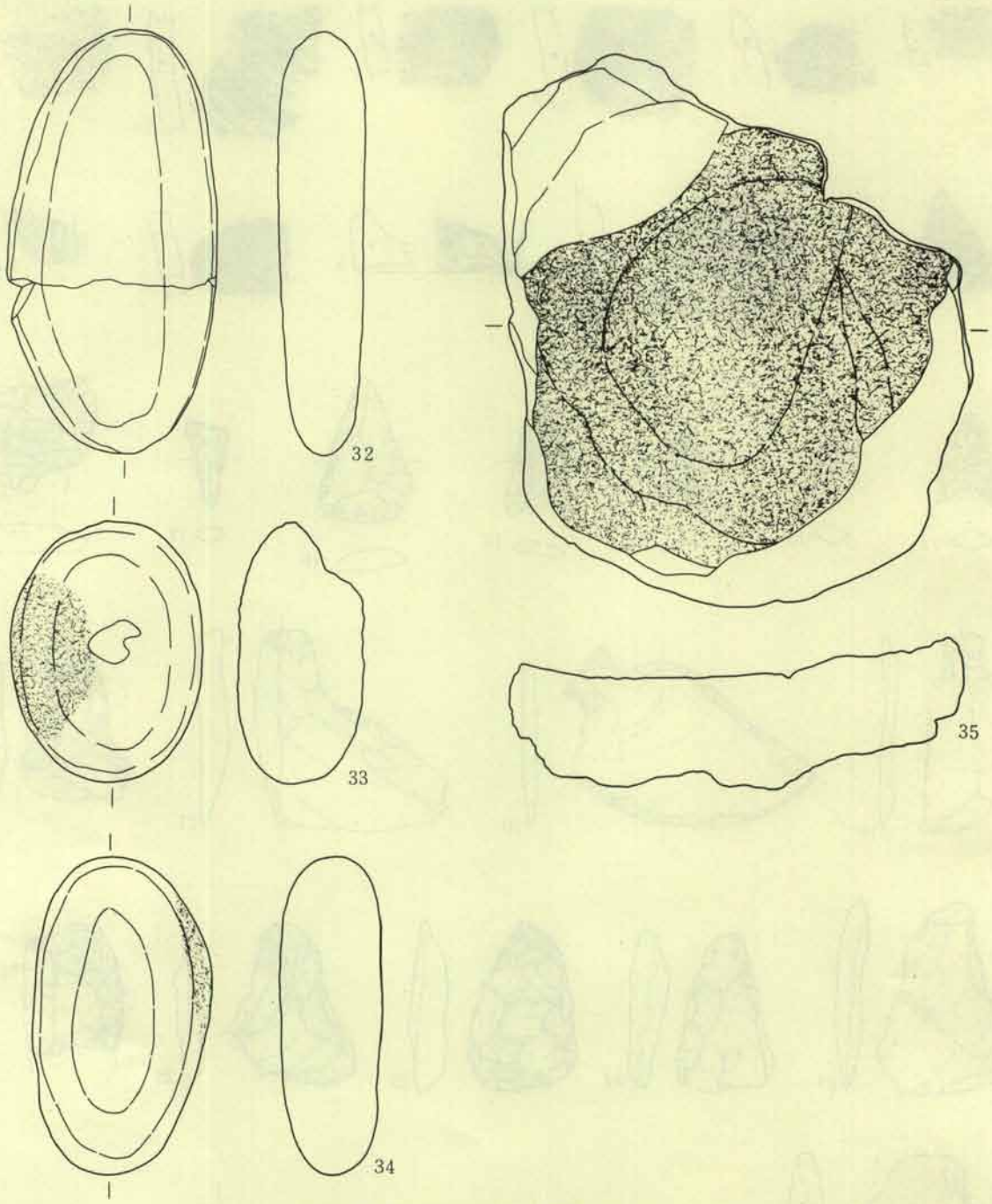
石器は、石鏃5点、石錐2点、石匙3点、打製石斧7点、スクレーパー2点、磨石・凹石5点、石皿1点を図示した。

第10表　第９号住居址出土石器観察表（第21・22図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
12	J９H29	覆土	石鏃	完	2.2	1.5	0.4	0.7	緻密質安山岩	
13	J９H25	覆土	石鏃	基部欠損	(1.8)	(1.3)	0.4	0.6	チャート	
14	J９H26	8	石鏃	完	2.0	1.3	0.3	0.5	黒曜石	
15	J９H28	2	石鏃	完	2.6	1.5	0.4	1.3	チャート	
16	J９H31	覆土	石鏃	完	3.3	2.2	0.6	3.5	デイサイト	
17	J９H27	覆土	石錐	基部欠損	(1.9)	(1.0)	0.3	0.6	緻密質安山岩	
18	J９H22	覆土	石錐	錐部欠損	(2.6)	2.7	0.7	5.5	チャート	
19	J９H23	9	石匙	完	6.0	2.5	0.5	8.1	緻密質安山岩	縦型
20	J９H24	覆土	石匙	完	5.4	7.5	0.5	23.6	デイサイト	横型
21	J９H30	覆土	スクレーパー	完	6.0	5.8	1.0	24.6	デイサイト	
22	J９H18	覆土	打製石斧	完	6.4	4.8	1.5	34.2	緻密質安山岩	炭化物付着
23	J９H14	覆土	打製石斧	完	8.7	5.8	1.3	54.5	デイサイト	
24	J９H17	覆土	打製石斧	完	7.1	4.5	1.8	49.6	デイサイト	
25	J９H16	覆土	打製石斧	完	7.7	5.1	1.8	70.0	デイサイト	
26	J９H21	覆土	打製石斧	刃部欠損	7.6	5.7	1.6	47.6	緻密質安山岩	炭化物付着
27	J９H15	覆土	打製石斧	刃部欠損	(5.9)	4.5	1.3	39.8	デイサイト	
28	J９H19	覆土	打製石斧	刃部欠損	(7.6)	7.2	2.2	122.0	緻密質安山岩	
29	J９H20	覆土	スクレーパー	完	4.4	10.0	1.4	54.0	デイサイト	
30	J９H33	覆土	凹石	完	10.5	8.2	4.4	415.0	輝石安山岩	
31	J９H32	覆土	磨石	完	13.1	8.5	5.4	720.0	輝石安山岩	
32	J９H35	炉３	磨石	完	18.8	9.4	4.0	314.0	輝石安山岩	
33	J９H37	炉２	凹石	一部欠損	11.6	8.6	5.7	629.0	輝石安山岩	
34	J９H36	19	磨石	完	14.2	8.1	4.6	750.0	輝石安山岩	
35	J９H34	炉４	石皿	一部欠損	(27.9)	(32.8)	8.9	8.0kg	輝石安山岩	



第21図　第９号住居址出土遺物（１）



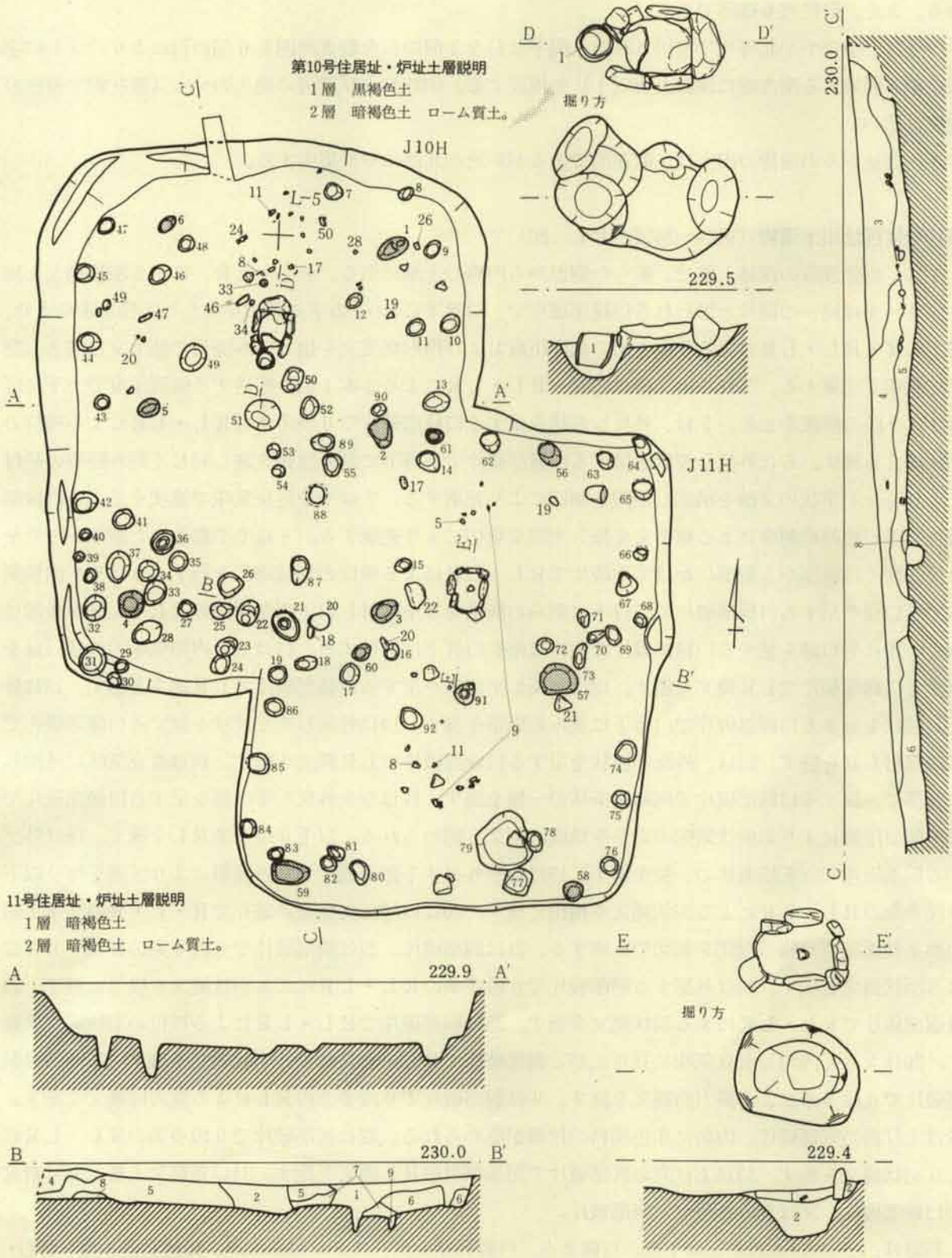
第22図　第９号住居址出土遺物（２）

第10号住居址（第23図、ＰＬ－５）

本住居址は、調査区のほぼ中央（Ｋ・Ｌ－４・５Ｇ）、標高229.5～230.0mに位置し第11号住居址と重複する。新旧関係は本住居址の方が古い。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.60m、東西4.50mを測る。壁は22～52cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは57本確認されており、６本主柱穴と思われＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６がそれに当



第10・11号住居址土層説明

1層　暗褐色土　ロームB混入。
2層　黒褐色土　黄色軽石・ローム粒混入。
3層　黒褐色土　灰色軽石混入。ローム粒点在。
4層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石混入。炭化物粒点在。
5層　黒褐色土　ローム粒・炭化物粒・黄色軽石混入。遺物を多量に包含する層。
6層　暗褐色土　ローム粒混入。
7層　鈍い黄褐色土　ローム質土。
8層　鈍い黄褐色土　ロームB。
9層　鈍い黄褐色土　ローム質土。

第23図　第10・11号住居址平・断面図

たる。また、壁柱穴も確認できる。

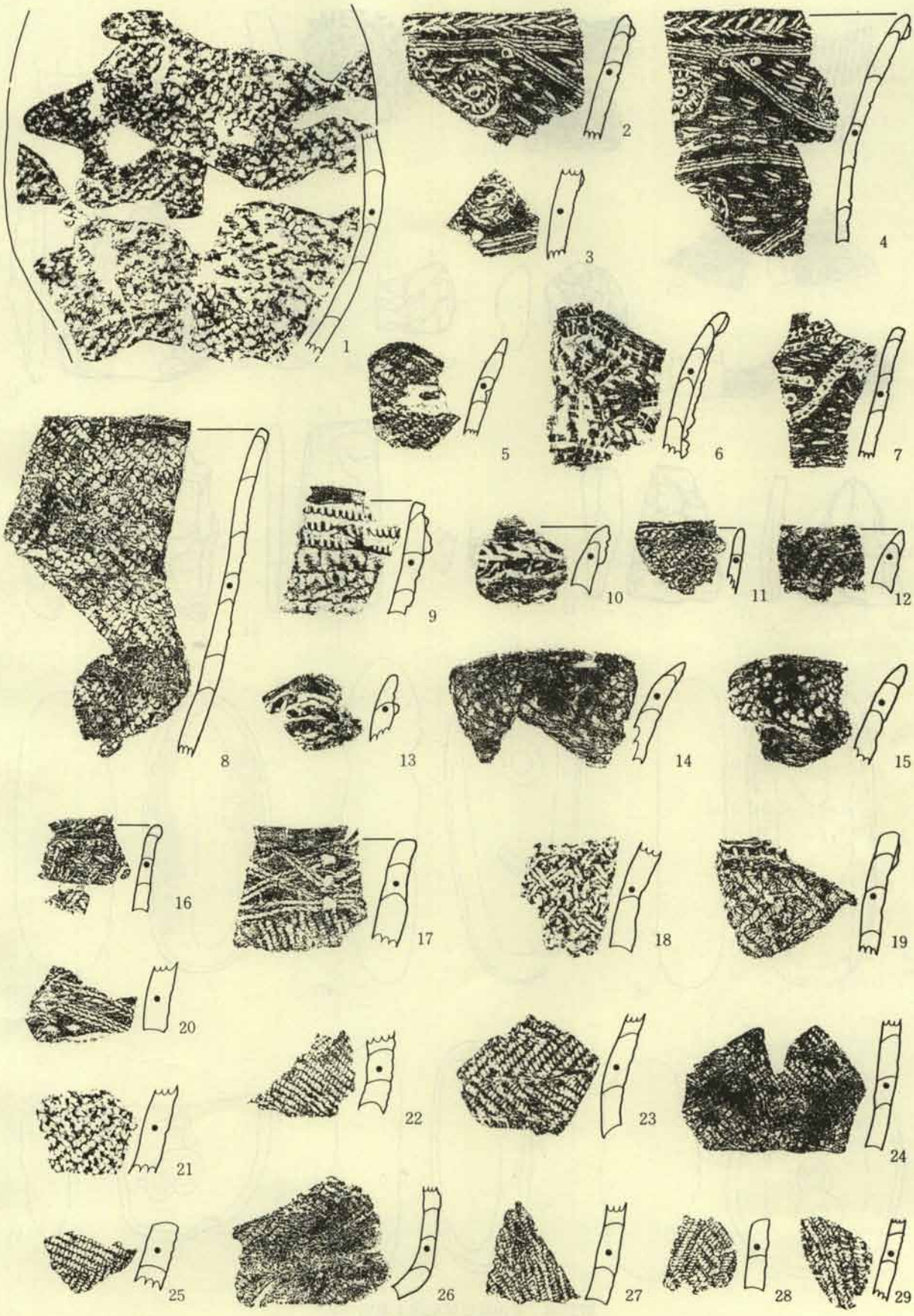
炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を1個の石を敷き周囲を6個の石により「コ」の字状に組み開放する南方部に深鉢土器（1）を埋設する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的であるが炉址の北部にやや集中する。

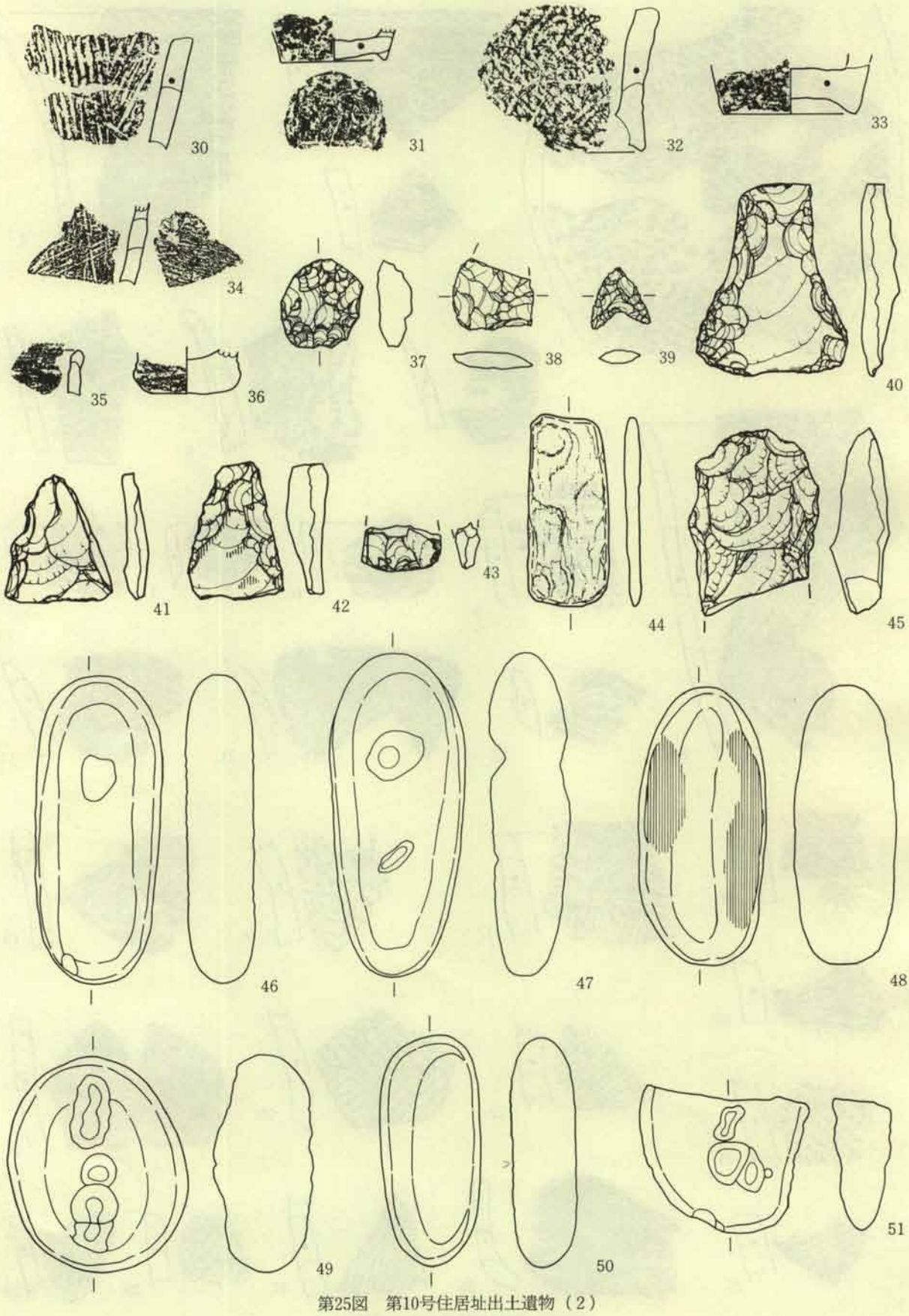
第10号住居址出土遺物（第24～26図、ＰＬ－20）

1は、炉址埋設の深鉢土器で、膨らむ胴部から内湾し上部に至る。ＲＬ・ＬＲ、による羽状縄文を施す。2～4は同一の個体と思われる口縁部破片で、口唇下に「ハ」の字に刺切を施した隆帯を走向させ、以下ＬＲ・ＲＬ・ＬＲによる3本1組の側面圧痕および円形刺突文を抱く刻み隆帯で蕨手文を描き、空間に刺切を充填する。これらの文様はＬＲ・ＲＬ・ＬＲによる3本1組の横送する側面圧痕で上下に区画され2段の構成をとる。5は、外反し波状を呈する口縁部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲによる横位の羽状縄文を施す。6は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇下に刻み隆帯を施し同じく刻み隆帯の貼付により「×」字状の文様を構成し空間を刺切により充填する。7はやや外反気味で波状を呈する口縁部破片で円形の連続刺突による蕨手文を施し空間を刺切により充填する。8はやや膨らんだ胴部からやや外反し開く口縁部から胴部にかけての破片でＲＬ・ＬＲによる横位の羽状縄文を施す。9はやや内傾気味で平口縁を呈する口縁部破片で口唇下に刻みの隆帯を3条貼付し以下閉端環付のＲＬ・ＬＲを多段に施す。10は平口縁を呈する口縁部破片で刻み隆帯を口唇下に貼付する。11はやや内傾気味の波状口縁を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。12は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。13は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇下に刻みの隆帯を施す。14は外反しやや波状を呈する口縁部破片で閉端環付ＬＲを施す。15は、外反し波状を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。16は直立気味に外傾し口唇部で外反する口縁部破片で回転絡条体の一種を施す。17はやや外反し平口縁を呈する口縁部破片で撚糸側面圧痕により鋸歯状気味の菱形を構成、刺突も認められる。以下0段多条ＲＬを施す。18は外反する胴部破片で回転絡条体の一種を施す。19はやや外反する頸部破片で刻み隆帯により区画を作り以下0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を横位に施す。20は口縁部文様帯の破片でＲ・Ｌ・Ｒの3本1組の撚糸側面圧痕を施し空間を刺切で充填する。21は胴部破片。22は胴部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。23は外反する胴部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を横位に施す。24は胴部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。25は胴部破片でＲＬ・ＬＲによる横位の羽状縄文を施す。26は大きく内湾し直立気味に立ち上がる胴部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。27～29は胴部破片で0段多条による異方向縄文を施す。30は胴部破片で0段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。31は上げ底の底部破片。内面に赤色顔料の付着が認められる。32は底部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲにより羽状縄文を施す。33は上げ底の底部破片で閉端環付のＲＬ縄文を施す。34は条痕文土器。35は無文の口縁部破片。36は丸みを帯びた底部破片。

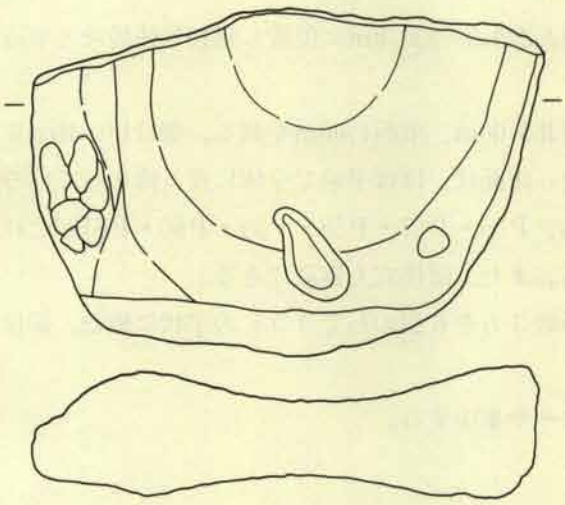
石器は、ピエス・エスキーユ1点、石鏃2点、打製石斧4点、スクレパー1点、棒状石器1点、磨石・凹石6点、石皿1点を図示した。



第24図　第10号住居址出土遺物（1）



第25図　第10号住居址出土遺物（2）



52

第26図　第10号住居址出土遺物（3）

第11表　第10号住居址出土石器観察表（第25・26図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
37	J10H45	覆土	ピエス・エスキーユ	完	2.4	2.2	1.0	4.6	黒曜石	
38	J10H43	覆土	石鏃	先端欠損	(1.9)	2.2	0.5	2.3	黒曜石	
39	J10H44	覆土	石鏃	完	1.7	1.6	0.4	0.6	チャート	
40	J10H41	覆土	打製石斧	完	10.0	7.9	2.1	132.0	デイサイト	
41	J10H38	覆土	スクレーパー	完	6.6	5.6	1.3	42.4	緻密質安山岩	
42	J10H39	覆土	打製石斧	完	7.2	5.0	2.1	65.5	緻密質安山岩	
43	J10H46	覆土	打製石斧	刃部のみ	2.5	4.3	1.3	14.0	デイサイト	
44	J10H40	覆土	棒状石器	完	10.1	14.3	0.9	72.0	黒色千枚岩	
45	J10H42	覆土	打製石斧	刃部欠損	(9.7)	6.9	3.2	205.0	デイサイト	
46	J10H49	28	磨石	完	16.0	6.6	3.6	622.0	輝石安山岩	
47	J10H48	32	凹石	完	16.8	7.2	4.3	661.0	輝石安山岩	
48	J10H52	覆土	磨石	完	14.5	6.7	5.4	657.0	輝石安山岩	
49	J10H47	31	凹石	完	11.4	9.5	5.3	742.0	輝石安山岩	
50	J10H50	7	磨石	完	12.1	5.3	3.5	349.0	閃緑岩	
51	J10H51	覆土	凹石	半分	(8.0)	8.9	3.0	198.0	輝石安山岩	
52	J10H53	覆土	石皿	半分	(18.1)	(26.9)	7.1	4721.0	輝石安山岩	

第11号住居址（第23図、ＰＬ－６）

本住居址は、調査区のほぼ中央（Ｋ－４・５Ｇ）、標高229.5～230.0mに位置し第10号住居址と重複する。本住居址のほうが新しい。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.00m、東西4.00mを測る。壁は18～46cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは33本確認されており、６本主柱穴と思われ、Ｐ56・Ｐ57・Ｐ58・Ｐ59・Ｐ60・Ｐ61がそれに当たる。Ｐ56・Ｐ58・Ｐ59・Ｐ61は壁寄りに位置する。また、壁柱穴も確認できる。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。皿状の窪みの３方を６個の石で「コ」の字状に組む。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的で炉址周辺にやや集中する。

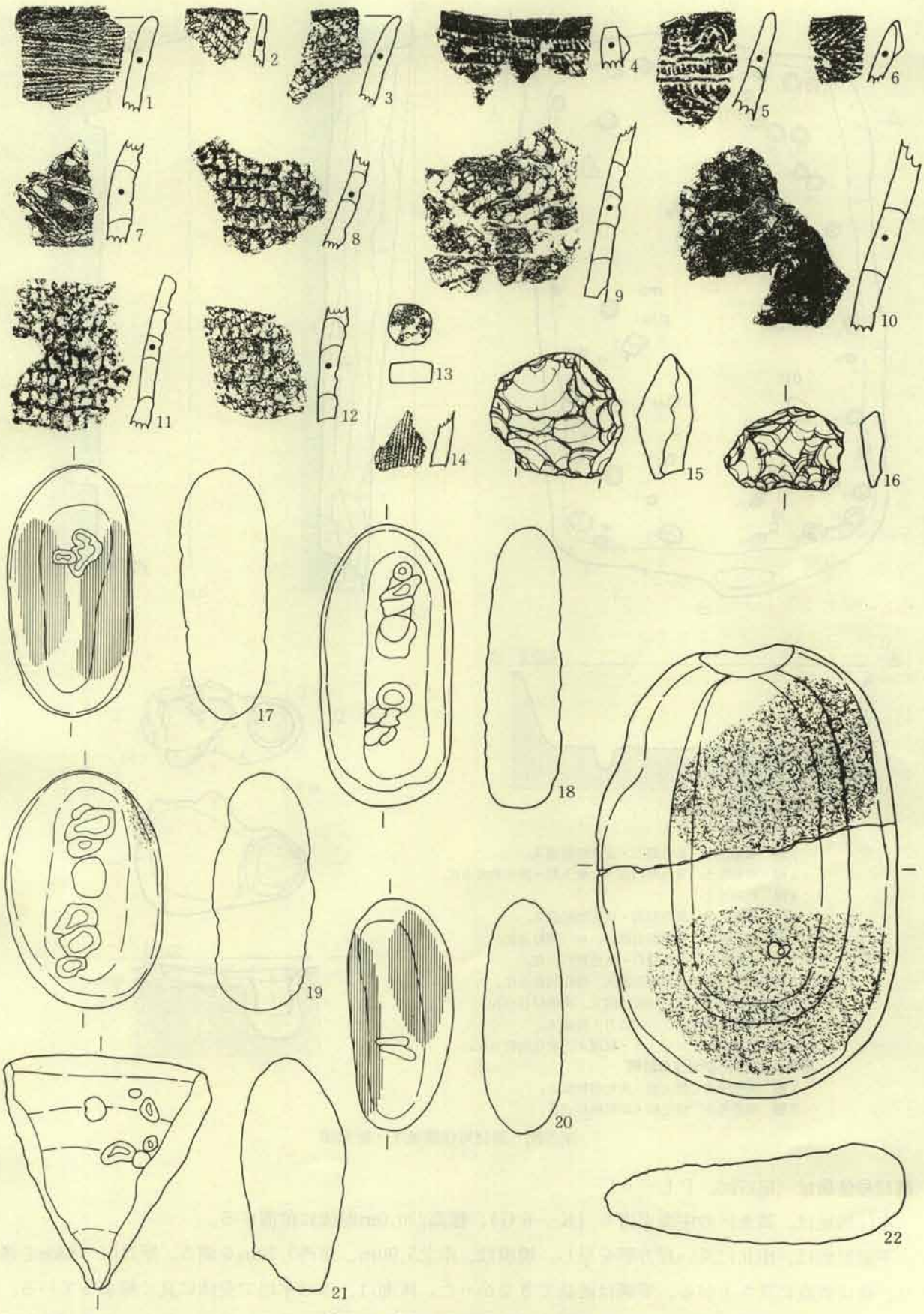
第11号住居址出土遺物（第27図）

１はＲ・Ｌの２本１組の撚糸側面圧痕を施す。２は直立気味の平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。３は外反し平口縁を呈する口縁部破片で０段多条のＲＬ・ＬＲにより羽状縄文を施す。４は内傾し波状を呈するものと思われる口縁部の破片で口唇部を欠損する。刻み隆帯を３条横位に貼付する。５は外傾し波状を呈する口縁部破片で平行沈線を波状および水平に施し、以下ＬＲ縄文を施す。６は口唇部が肥厚する口縁部破片で０段多条ＬＲ・ＲＬによる羽状縄文を横位に施す。７は外反する口縁部文様帯の破片でＲＬ・ＬＲによる撚糸側面圧痕で菱形を構成、空間を刺切により充塡する。８～12はいずれも胴部破片で８は閉端環付ＬＲを多段に施す。９はＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を、10は結節縄文を、11は閉端環付ＬＲを多段に、12は閉端環付ＲＬを多段に施す。13は土製円盤で施文は不明。14は諸磯ａ式期の胴部破片でＬＲ縄文を施す。

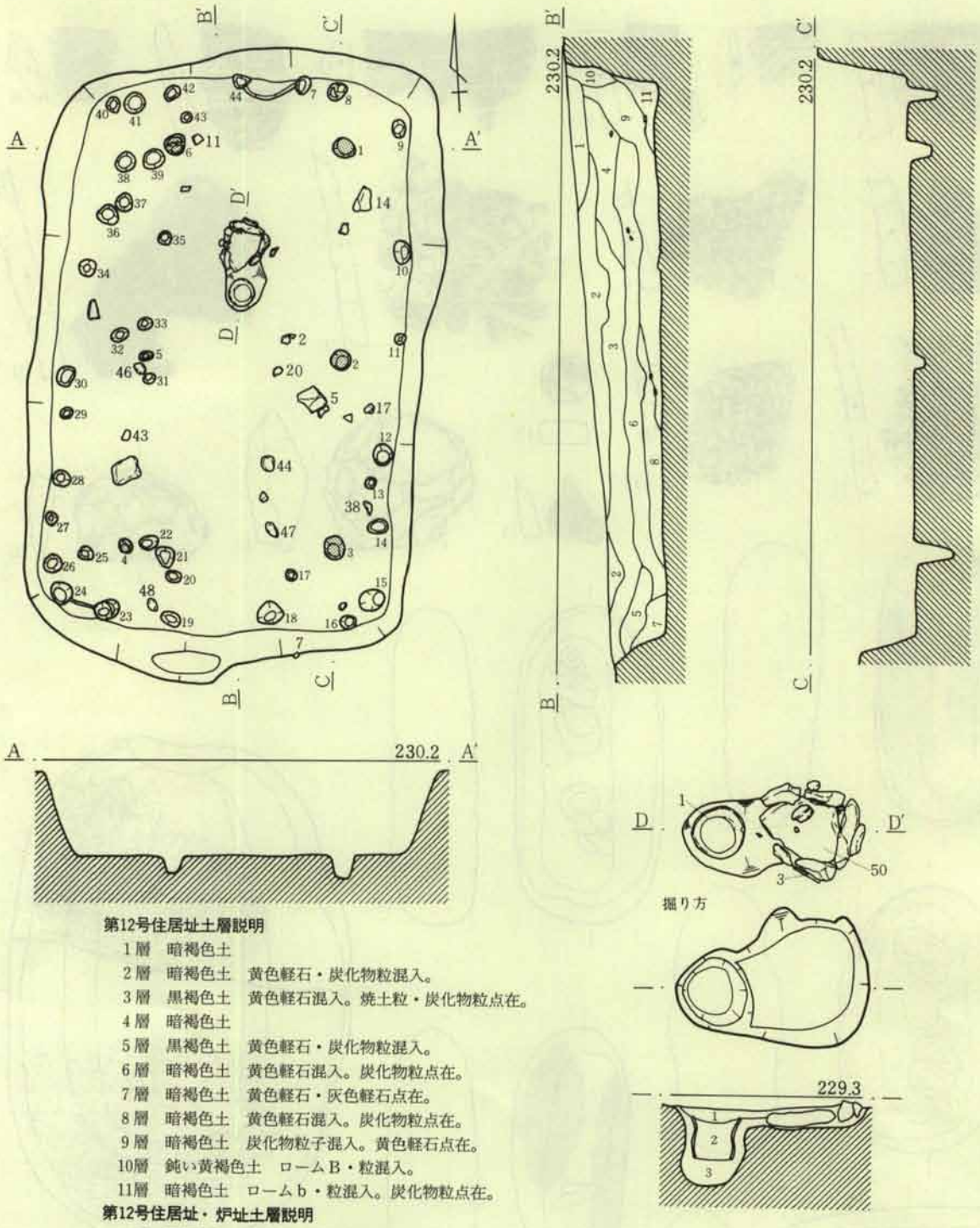
石器は、石錐１点、スクレーパー１点、磨石・凹石４点、石皿２点を図示した。なお、22の石皿は接合個体で、第14号住居址の炉址に使われていた破片と本住居址中からの資料が接合したものである。

第12表　第11号住居址出土石器観察表（第27図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
15	J11H16	覆土	石錐	錐部欠損	(6.5)	7.0	2.9	146.0	デイサイト	
16	J11H15	覆土	ピエス・エスキーユ	完	2.2	3.2	0.6	5.8	チャート	
17	J11H19	9	磨石	完	13.2	6.7	4.8	556.0	輝石安山岩	
18	J11H21	11	凹石	完	14.8	7.0	4.1	551.0	輝石安山岩	
19	J11H17	2	凹石	完	12.4	8.3	5.4	712.0	輝石安山岩	
20	J11H18	12	磨石	完	12.2	5.6	4.3	423.0	輝石安山岩	
21	J11H20	29	石皿	一部	(16.5)	(14.7)	7.3	1526.0	輝石安山岩	
22	J11H22	10、J14H覆土	石皿	ほぼ完形	(31.7)	21.4	7.1	5950.0	輝石安山岩	J14H遺物と接合



第27図　第11号住居址出土遺物



第12号住居址土層説明

1層　暗褐色土
2層　暗褐色土　黄色軽石・炭化物粒混入。
3層　黒褐色土　黄色軽石混入。焼土粒・炭化物粒点在。
4層　暗褐色土
5層　黒褐色土　黄色軽石・炭化物粒混入。
6層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。
7層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石点在。
8層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。
9層　暗褐色土　炭化物粒子混入。黄色軽石点在。
10層　鈍い黄褐色土　ロームB・粒混入。
11層　暗褐色土　ロームb・粒混入。炭化物粒点在。

第12号住居址・炉址土層説明

1層　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒混入。
2層　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒点在。

第28図　第12号住居址平・断面図

第12号住居址（第27図、ＰＬ－６）

本住居址は、調査区の中央東寄り（Ｋ－６Ｇ）、標高230.0m前後に位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.90m、東西3.70mを測る。壁は51～83cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは44本確認されており、６本主柱穴と思われ、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６がそれに

当たる。

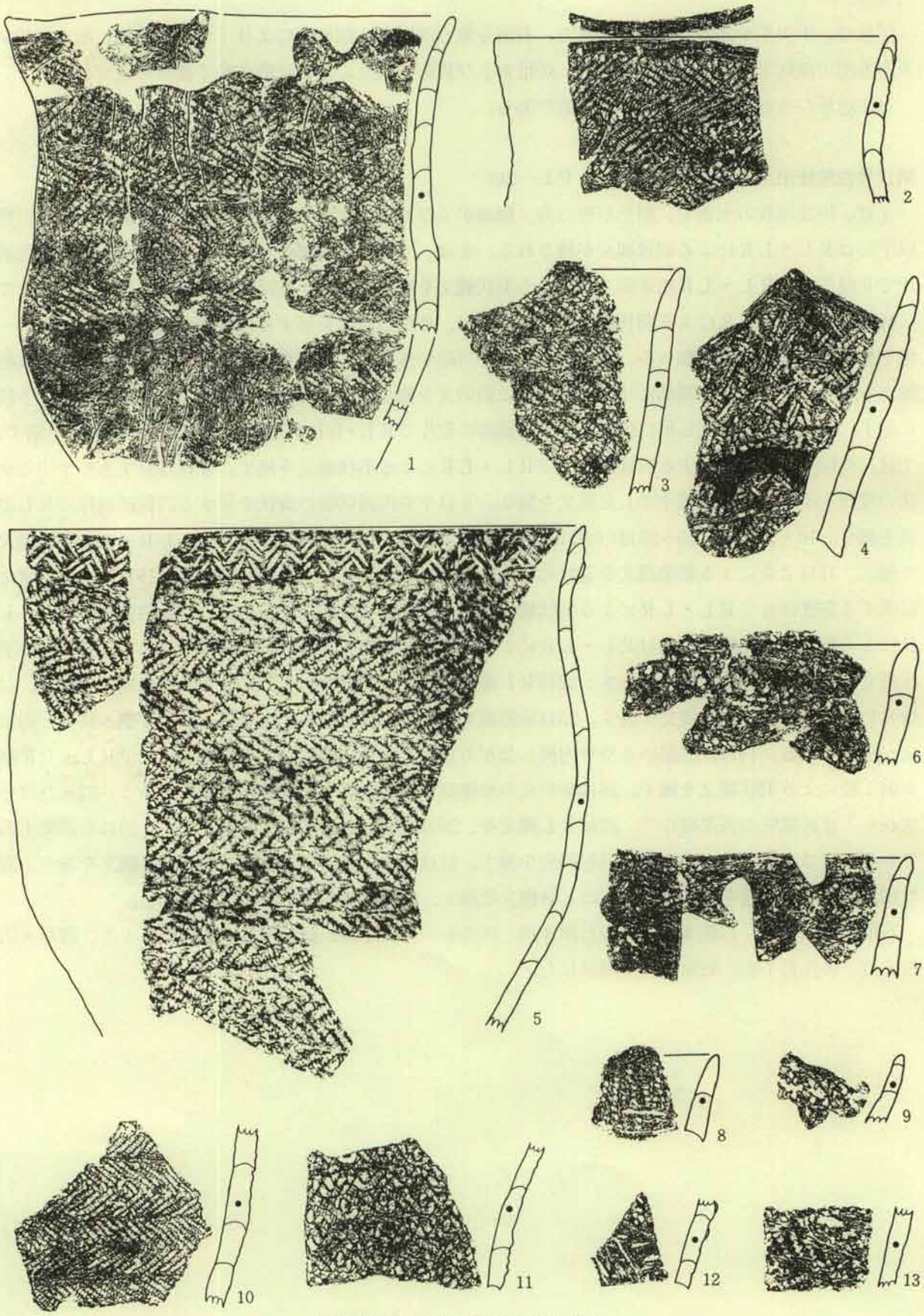
炉址は、中央やや北寄りで検出された。石皿を敷き周囲を8個の石により「コ」の字状に組み開放する南方部に深鉢土器（1）を埋設する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的である。

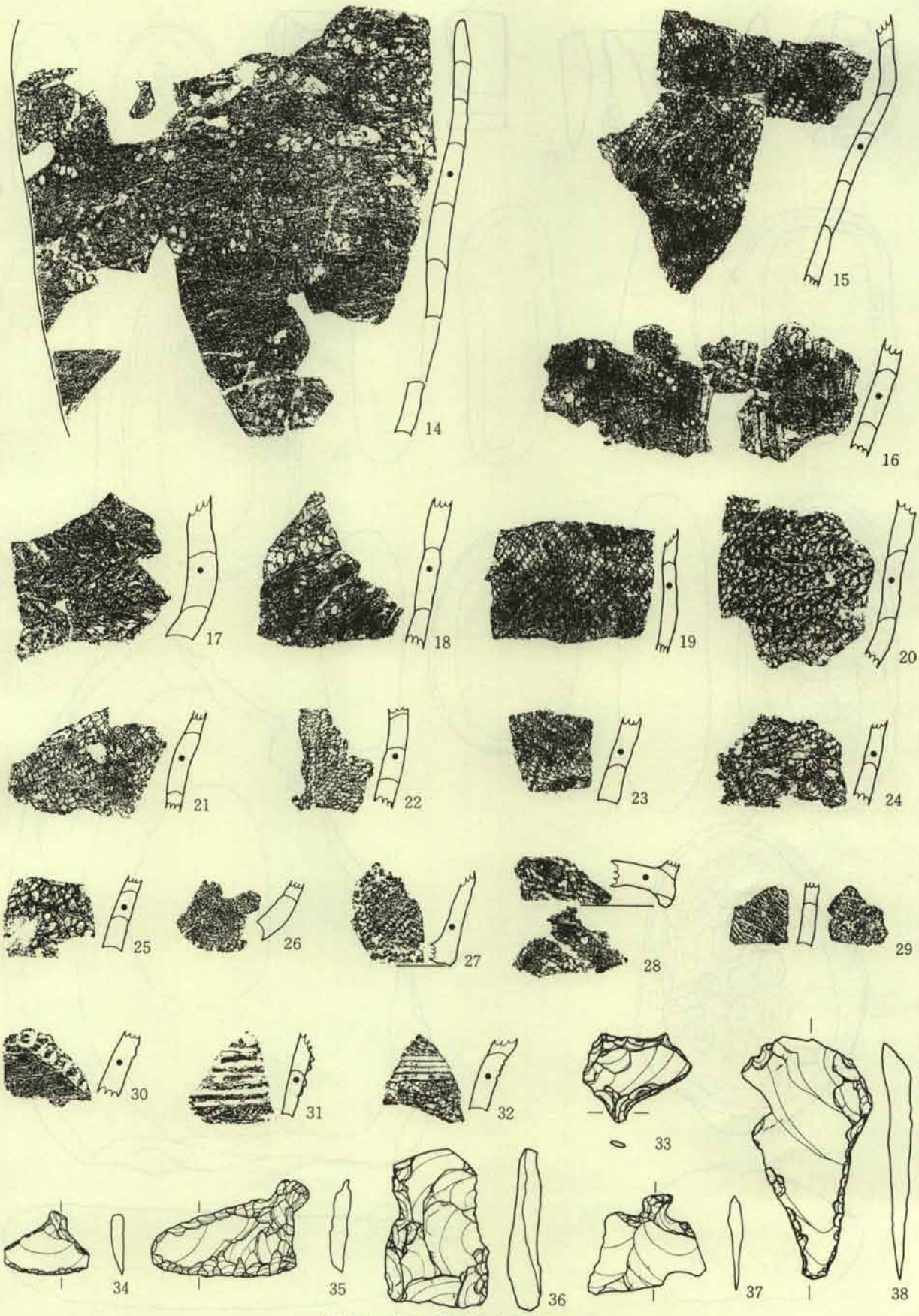
第12号住居址出土遺物（第29～31図、ＰＬ－20）

1は、炉址埋設の土器で、胴部が膨らみ、頸部がくびれ、口縁が外反し平口縁となる深鉢土器。口縁以下にはＲＬ・ＬＲによる羽状縄文が施される。2は、くびれた頸部から外反し平口縁となる口縁部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲ結束第1種による羽状縄文を施す。3は、外反し波状となる口縁部の破片で口縁以下にＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。4は、外反し波状を呈する口縁部破片で回転絡状体の一種を施す。5は、胴部が膨らみ、頸部がくびれ、口縁が外反し平口縁を呈する深鉢土器で、口縁部は肥厚する。この肥厚する口縁部に「ハ」の字状に刺切文を施し、以下はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を多段に施す。6は、やや外反し平口縁を呈する口縁部の破片でＲＬ・ＬＲ結束第1種による羽状縄文を施す。7は、外反し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。8は外反するやや尖り気味の波状を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。9はやや内湾気味の波状を呈する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。10・11、13・15～25はいずれも胴部破片である。10は0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。11は2条による結節縄文を羽状に施す。13はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、15は「く」の字に屈曲する胴部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。16はＲＬ縄文を施す。17は0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。19はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。20は閉端環付のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。21はＲＬ縄文を施す。22はＲＬ縄文を施す。23はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。24はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。25は結節縄文を施す。13は口縁部文様帯の破片で刻み隆帯と刺切文が認められる。14は、底部からやや内湾しながら立ち上がり口縁に向かう深鉢土器で、ＲＬ・ＬＲ結束第1種による羽状縄文を施す。26はやや丸みを帯びる尖底土器の底部破片で無文である。27・28はいずれも上げ底気味の底部破片で、27はＲＬ縄文を、28は底面も含めＲＬ・ＬＲを施す。29は条痕文土器である。30は、竹管による連続の円形刺突を施す。31は横走する隆帯を有し、以下ＬＲ縄文を施す。32は横走する平行沈線を施し、沈線下にＬＲ縄文を施す。30～32は前期中葉に比定される。

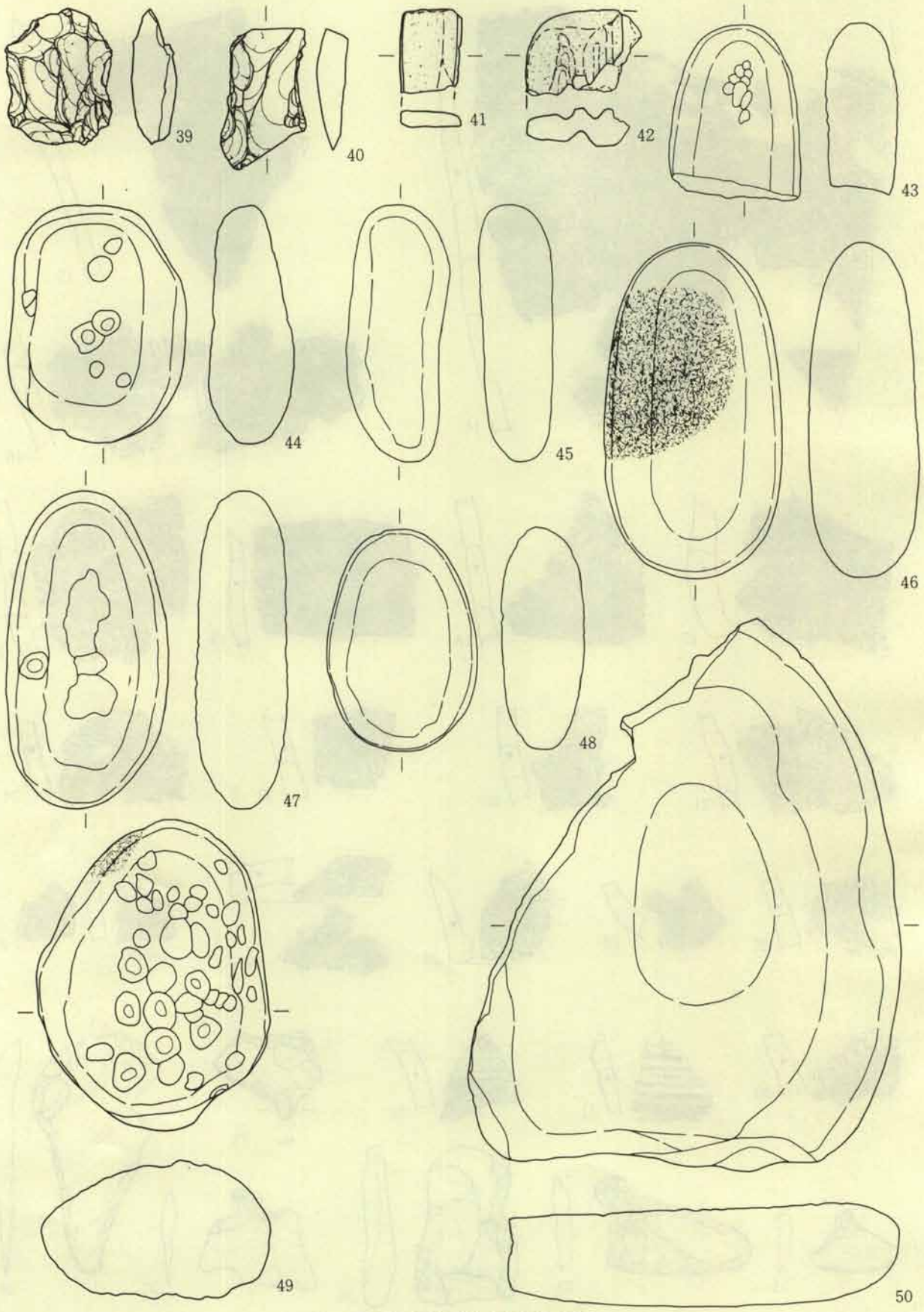
石器は石錐1点、石匙3点、打製石斧3点、スクレーパー2点、砥石1点、有溝砥石1点、磨石・凹石6点、多孔石1点、石皿1点を図示した。



第29図　第12号住居址出土遺物（1）



第30図　第12号住居址出土遺物（2）



第31図　第12号住居址出土遺物（3）

第13表　第12号住居址出土石器観察表（第31図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
33	J12H41	覆土	石錐	完	4.7	5.6	0.4	26.4	デイサイト	
34	J12H34	覆土	石匙	完	2.3	3.0	0.5	2.5	デイサイト	横型
35	J12H33	覆土	石匙	完	3.5	5.6	0.8	12.0	デイサイト	横型
36	J12H36	覆土	打製石斧	完	8.4	5.5	1.8	82.0	デイサイト	
37	J12H35	覆土	石匙	完	3.1	4.1	0.6	5.9	デイサイト	縦型
38	J12H37	13	スクレーパー	完	12.6	7.0	1.6	94.5	デイサイト	
39	J12H38	覆土	スクレーパー	完	7.1	5.6	2.9	105.0	緻密質安山岩	
40	J12H42	覆土	打製石斧	完	7.3	4.5	1.6	49.0	緻密質安山岩	
41	J12H40	覆土	砥石	一部欠損	(4.4)	3.2	0.9	19.0	砂岩	
42	J12H39	覆土	有溝砥石	一部欠損	(4.5)	(6.0)	2.0	47.2	砂岩	
43	J12H47	15	磨石	半分	(9.2)	7.0	3.8	296.0	輝石安山岩	敲き面有り
44	J12H48	14	凹石	完	16.6	12.5	6.0	1153.0	輝石安山岩	
45	J12H46	覆土	磨石	完	13.4	5.5	4.0	455.0	安山岩	
46	J12H43	8	磨石	完	17.5	9.4	5.8	1319.0	輝石安山岩	炭化物付着
47	J12H44	18	凹石	完	16.6	8.6	4.9	885.0	輝石安山岩	
48	J12H45	20	磨石	完	11.5	7.9	4.4	541.0	輝石安山岩	
49	J12H50	覆土	多孔石	完	21.6	16.4	9.9	3280.0	輝石安山岩	
50	J12H49	炉3	石皿	一部欠損	(38.6)	30.3	7.4	10.0kg	輝石安山岩	

第13号住居址（第32図、ＰＬ－６）

本住居址は、調査区の東部（Ｌ－６Ｇ）、標高230.5～231.0mに位置し第21号住居址と東側で重複する。新旧関係は本住居址の方が新しい。

平面形態は、南北に長く南壁部がやや長い長台形を呈し、規模は、南北5.20m、東西3.40m（南壁）を測る。壁は36～59cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは41本確認されており、６本主柱穴と思われ、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８の６本もしくはＰ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ８の６本がそれに当たる。また、壁柱穴も確認できる。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を主体とする５個の石を敷き周囲を５個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。開放する南部に深鉢土器（１）を埋設する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的で明確な集中はなかった。

第13号住居址出土遺物（第33・34図、ＰＬ—20）

1は、炉址埋設の土器で、胴部が膨らみ、頸部がくびれ、外反し平口縁となる深鉢土器で、口縁部以下にＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。2は外反し波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯で蕨手文を構成するものと思われる。3は「く」の字に屈曲・外反し平口縁を呈する口縁部破片。4は尖り気味に外反する口縁部破片で爪形の連続刺突を施す。5は外反し平口縁を呈する口縁部破片で0段多条のＬＲ縄文を施す。6は、外反し平口縁を呈する口縁部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。7は、外反し波状を呈する口縁部の破片。8は、口縁部文様帯の破片で刻み隆帯により円形刺突文を抱く渦巻き文を構成する。9～12、14～17はいずれも胴部破片。9は0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、10・11は結節縄文を、12は0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、14・15は0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。16は0段多条のＬＲによる羽状縄文を、17はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。13は肥厚し平口縁を呈する口縁部破片で0段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。18は底部破片。19は角頭状を呈する口縁部の破片で無文である。20は押型文土器でやや細かい山形文を縦位に施す。21は条痕文土器である。

石器は石鏃1点、石匙2点、打製石斧1点、磨石・凹石4点、多孔石片1点を図示した。

第14表　第13号住居址出土石器観察表（第33・34図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
22	J13H22	覆土	石鏃	完	3.0	1.5	0.5	1.3	チャート	
23	J13H24	覆土	石匙	完	3.8	5.7	0.7	11.4	デイサイト	横型
24	J13H23	3	石匙	完	5.8	8.5	1.3	39.0	デイサイト	横型
25	J13H25	22	打製石斧	完	8.6	5.5	1.9	69.5	デイサイト	
26	J13H28	覆土	凹石	完	12.8	7.5	4.1	510.0	輝石安山岩	
27	J13H27	27	凹石	半分	(9.4)	9.0	2.9	240.0	安山岩	
28	J13H26	28	磨石	完	15.5	8.9	4.8	819.0	輝石安山岩	赤色顔料付着
29	J13H29	炉2	磨石	完	10.8	10.2	5.0	737.0	輝石安山岩	赤色顔料付着
30	J13H30	覆土	多孔石	一部	(16.4)	13.7	8.9	2626.0	輝石安山岩	

第13号住居址土層説明

1層　暗褐色土　灰色軽石均質混入。炭化物粒・黄色軽石少量点在。　2層　暗褐色土　1層に酷似し、1層より明るい。
3層　暗褐色土　2層に酷似。さらに明るい。

第13号住居址・炉址土層説明

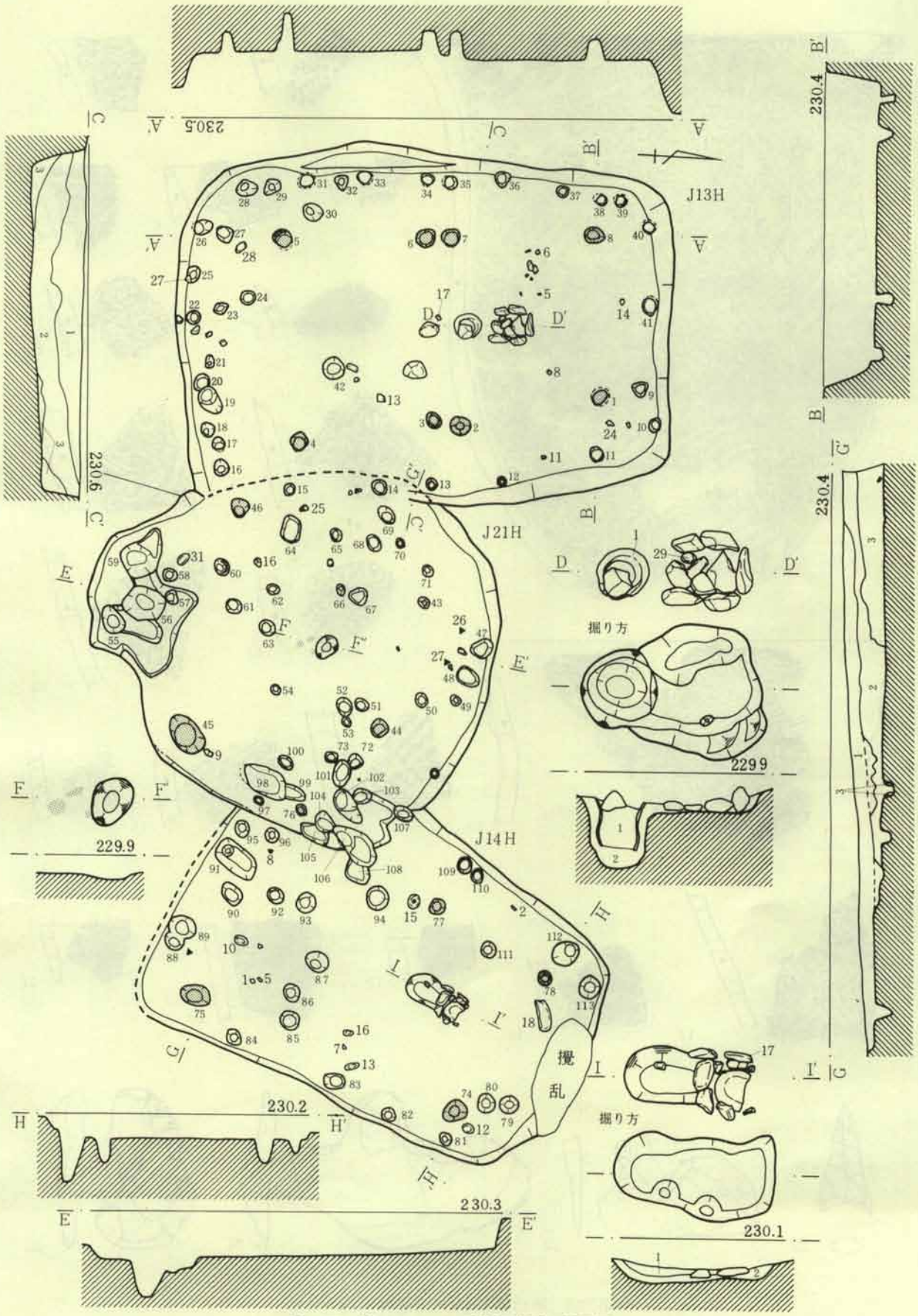
1層　暗褐色土　焼土粒点在。　2層　暗褐色土　ローム粒点在。

第14・21号住居址土層説明

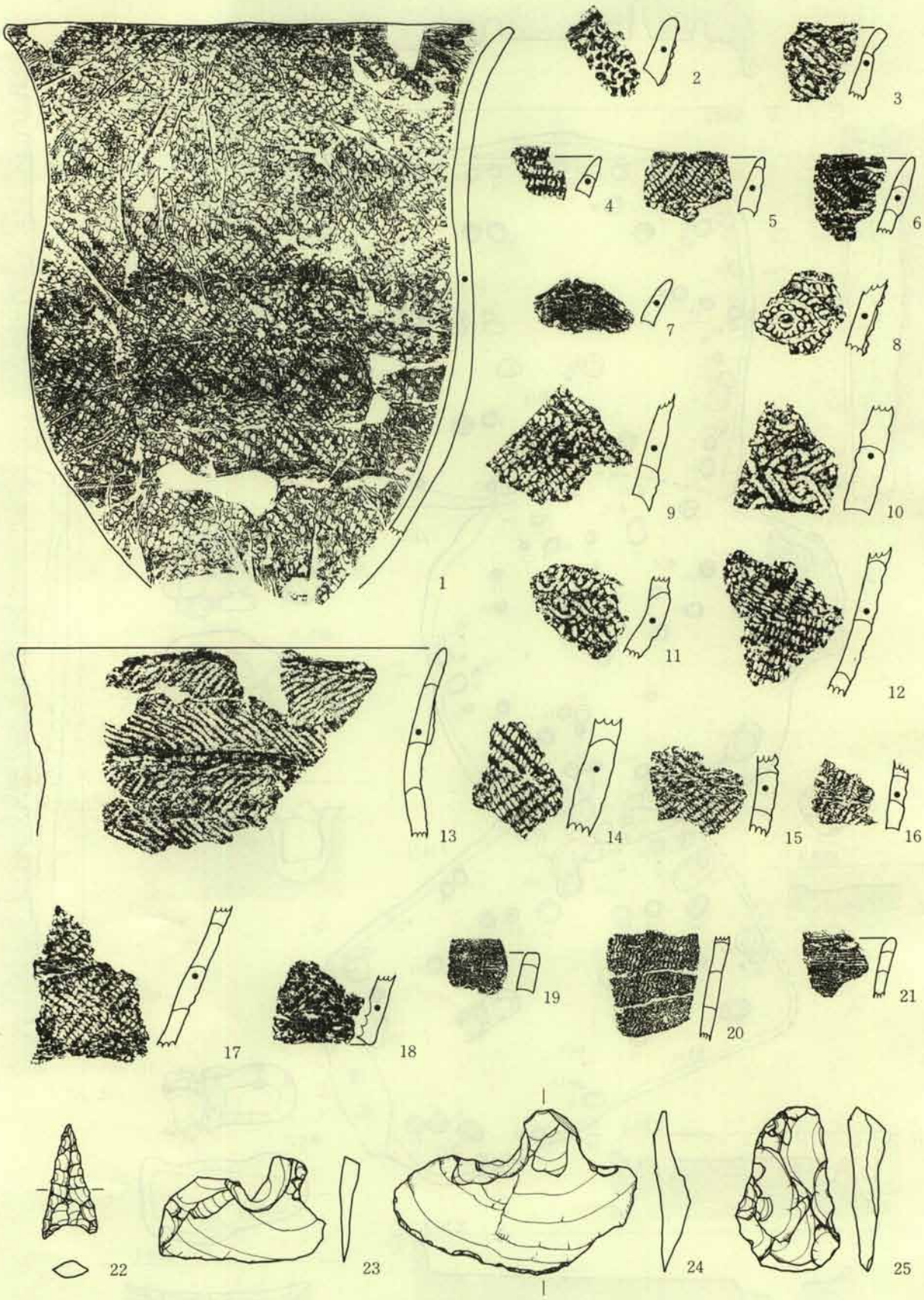
1層　黒褐色土　黄色軽石・灰色軽石混入。炭化物粒・ローム粒点在。
2層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石混入。炭化物粒・ロームＢ点在。
3層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石・ロームＢ混入。炭化物粒点在。

第14号住居址・炉址土層説明

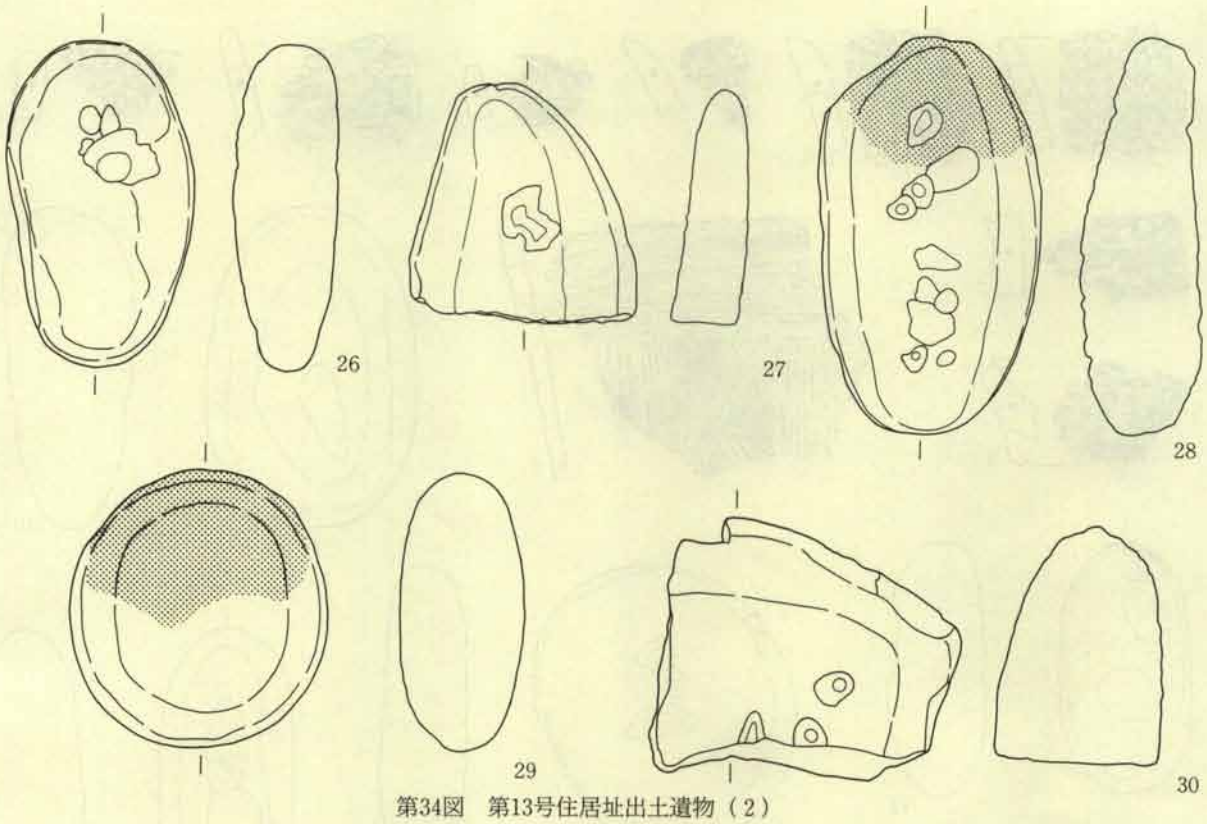
1層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒・ローム粒点在。　2層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。



第32図　第13・14・21号住居址平・断面図



第33図　第13号住居址出土遺物（1）



第34図　第13号住居址出土遺物（２）

第14号住居址（第32図、ＰＬ－７）

本住居址は、調査区の東部（Ｌ－７Ｇ）、標高230.5～231.0mに位置し西方で第21号住居址と重複する。新旧関係は本住居址の方が新しい。

平面形態は、南北に長く南壁が長い長台形を呈し、規模は、南北4.50m、東西3.60m（南壁）を測る。壁は６～13cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは40本確認されており、６本主柱穴と思われが、Ｐ74・Ｐ75・Ｐ76・Ｐ77・Ｐ78がそれらの内の５本に当たる。東側の中央の１本は確認できなかった。また、壁柱穴も確認できる。

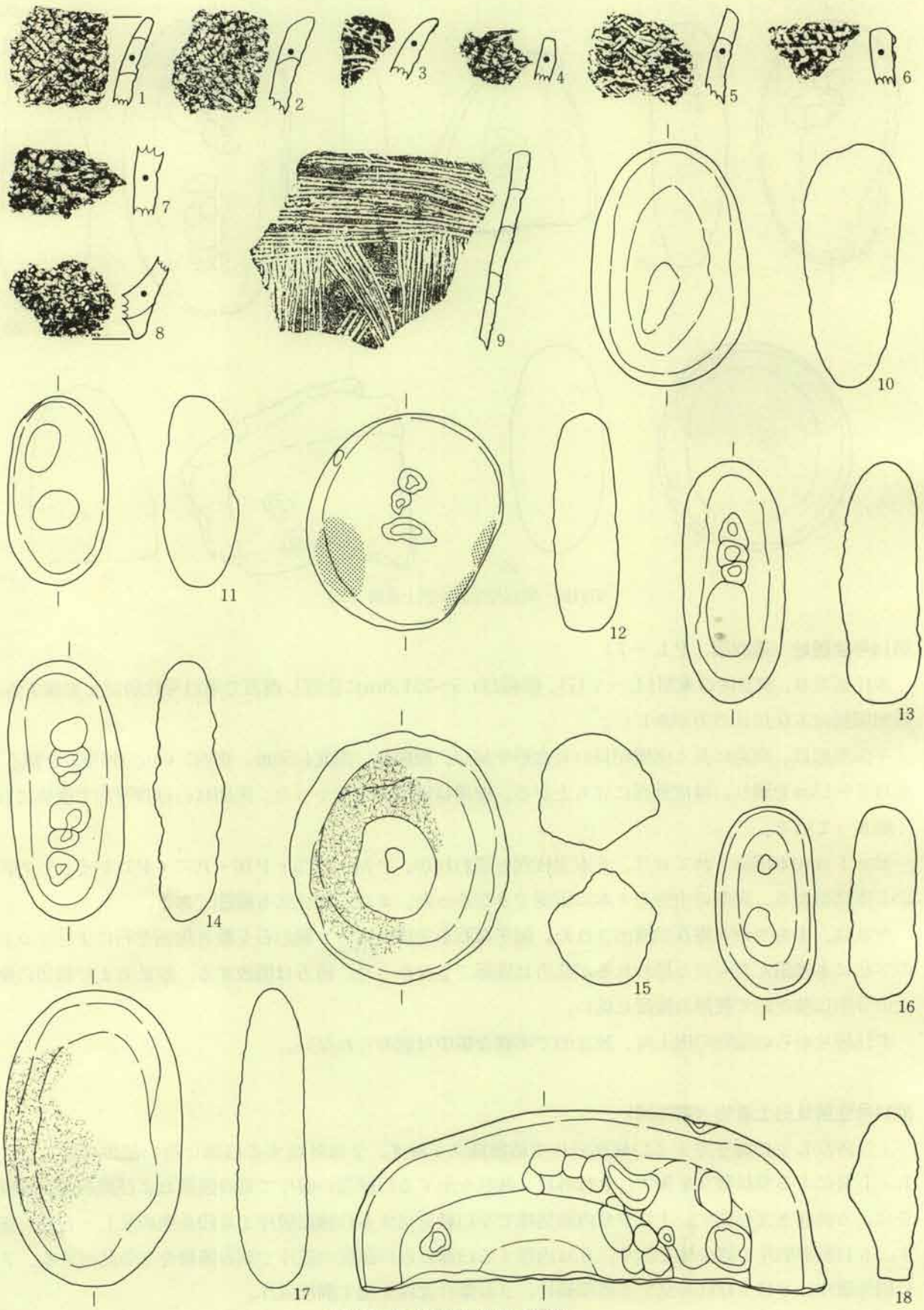
炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を主体とする２個の石を敷き周囲を石により「コ」の字状に本来組んだものと思われるが北方は確認できなかった。南方は開放する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的で明確な集中は認められない。

第14号住居址出土遺物（第35図）

１は外反し平口縁を呈する口縁部破片で結節縄文を施す。２は外反する口縁に近い部位の破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。３は外反し波状を呈する口縁部の破片で刻み隆帯および撚糸側面圧痕をによる渦巻き文を施す。４はやや内湾気味で平口縁を呈する口縁部破片で０段多条のＲＬ・ＬＲを施す。５は胴部破片で絡条体を施す。６は内傾する口縁に近い部位の破片で刻み隆帯を２条貼付する。７は胴部破片。８は上げ底を呈する底部破片。９は集合沈線を施す胴部破片。

石器は凹石・磨石７点、環状石器１点、石皿１点を図示した。



第35図　第14号住居址出土遺物

第15表　第14号住居址出土石器観察表（第35図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
10	J14H11	9	磨石	完	12.5	8.3	5.2	654.0	輝石安山岩	
11	J14H10	覆土	凹石	完	9.9	5.3	4.1	304.0	輝石安山岩	
12	J14H12	2	凹石	完	11.3	10.3	3.4	504.0	輝石安山岩	赤色顔料付着
13	J14H17	3	凹石	完	12.6	5.5	4.2	366.0	輝石安山岩	
14	J14H16	覆土	凹石	完	13.1	6.2	3.7	391.0	輝石安山岩	
15	J14H13	7	環状石器	完	13.2	11.5	6.3	849.0	輝石安山岩	炭化物付着
16	J14H15	5	凹石	完	10.1	5.4	3.6	282.0	輝石安山岩	
17	J14H14	炉2	磨石	完	15.6	9.4	3.7	682.0	輝石安山岩	炭化物付着
18	J14H18	1	石皿	半分	33.0	(12.9)	4.8	1662.0	輝石安山岩	多孔有り

第21号住居址（第32図、ＰＬ－９）

本住居址は、調査区の東部（M・Ｌ－６．７Ｇ）、標高230.5m前後に位置し、西方で第13号住居址と、東方で第14号住居址と重複し、本住居址が最も古い。

平面形態は、円形を呈し、規模は、径3.80mを測る。壁は８～31cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは32本確認されており、４本主柱穴と思われ、Ｐ44・Ｐ45・Ｐ46・Ｐ47がそれに当たる。

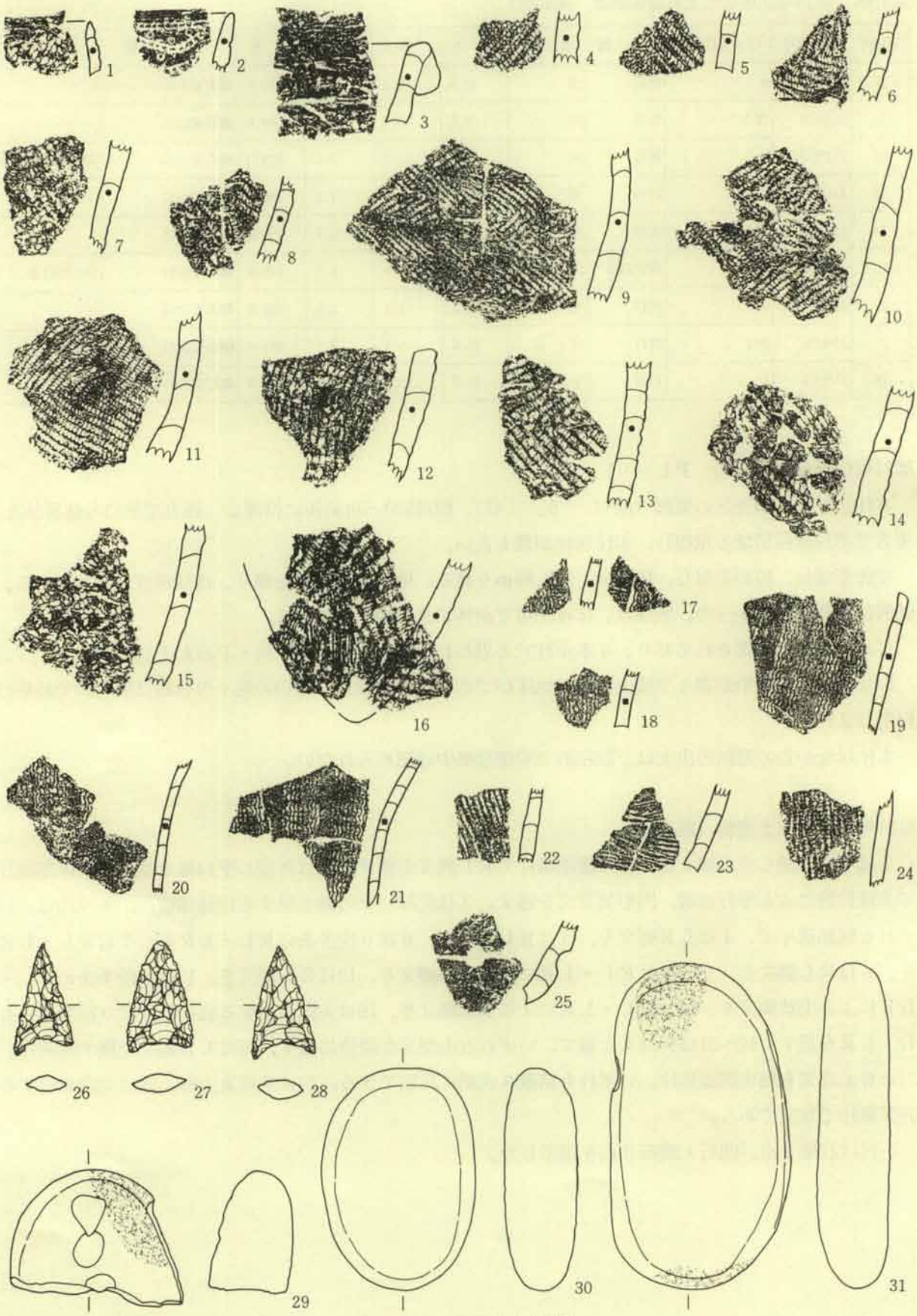
炉址は、中央やや北寄りで検出された地床炉である。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的で明確な集中は認められない。

第21号住居址出土遺物（第36図）

１はやや内傾し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。２は外反し平口縁を呈する口縁部破片で半截竹管による平行沈線、円形刺突文を施す。３は肥厚し平口縁を呈する口縁部破片。４～15は、いずれも胴部破片で、４はＬＲ縄文を、５はＲＬ縄文を、６は０段多条のＲＬ・ＬＲを、７はＲＬ・ＬＲを、８はＲＬ縄文を、９～11はＲＬ・ＬＲによる羽条縄文を、12はＲＬ縄文を、13は０段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、14はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、16は尖底を呈する底部破片で０段多条のＲＬ・ＬＲを施す。17～21は押型文土器で、いずれも山型文を縦位に施す。22はＬＲ縄文を施す胴破片。24はＲＬ縄文を施す胴部破片。いずれも諸磯ａ式期に比定できる。23は条痕文土器。25は尖底を呈する底部破片で無文である。

石器は石鏃３点、凹石・磨石３点を図示した。



第36図　第21号住居址出土遺物

第16表　第21号住居址出土石器観察表（第36図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
26	J21H28	9	石鏃	完	2.9	1.6	0.4	1.3	チャート	
27	J21H27	10	石鏃	完	3.0	1.8	0.5	2.3	チャート	
28	J21H26	覆土	石鏃	完	2.9	1.7	0.5	1.8	チャート	
29	J21H29	覆土	凹石	半分	(7.3)	(9.1)	4.4	306.0	輝石安山岩	炭化物付着
30	J21H31	覆土	磨石	完	11.8	8.2	3.9	504.0	輝石安山岩	
31	J21H30	8	磨石	完	17.1	9.4	3.3	996.0	輝石安山岩	炭化物付着

第15号住居址（第37図、ＰＬ－７）

本住居址は、調査区の中央部（Ｉ・Ｊ－５Ｇ）、標高228.5m前後に位置し、第14号土坑に南部を切られ、本住居址のほうが古い。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北4.50m、東西3.60mを測る。壁27～52cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは20本確認されており、Ｐ４・Ｐ６・Ｐ12以外はいずれも壁柱穴として確認できる。

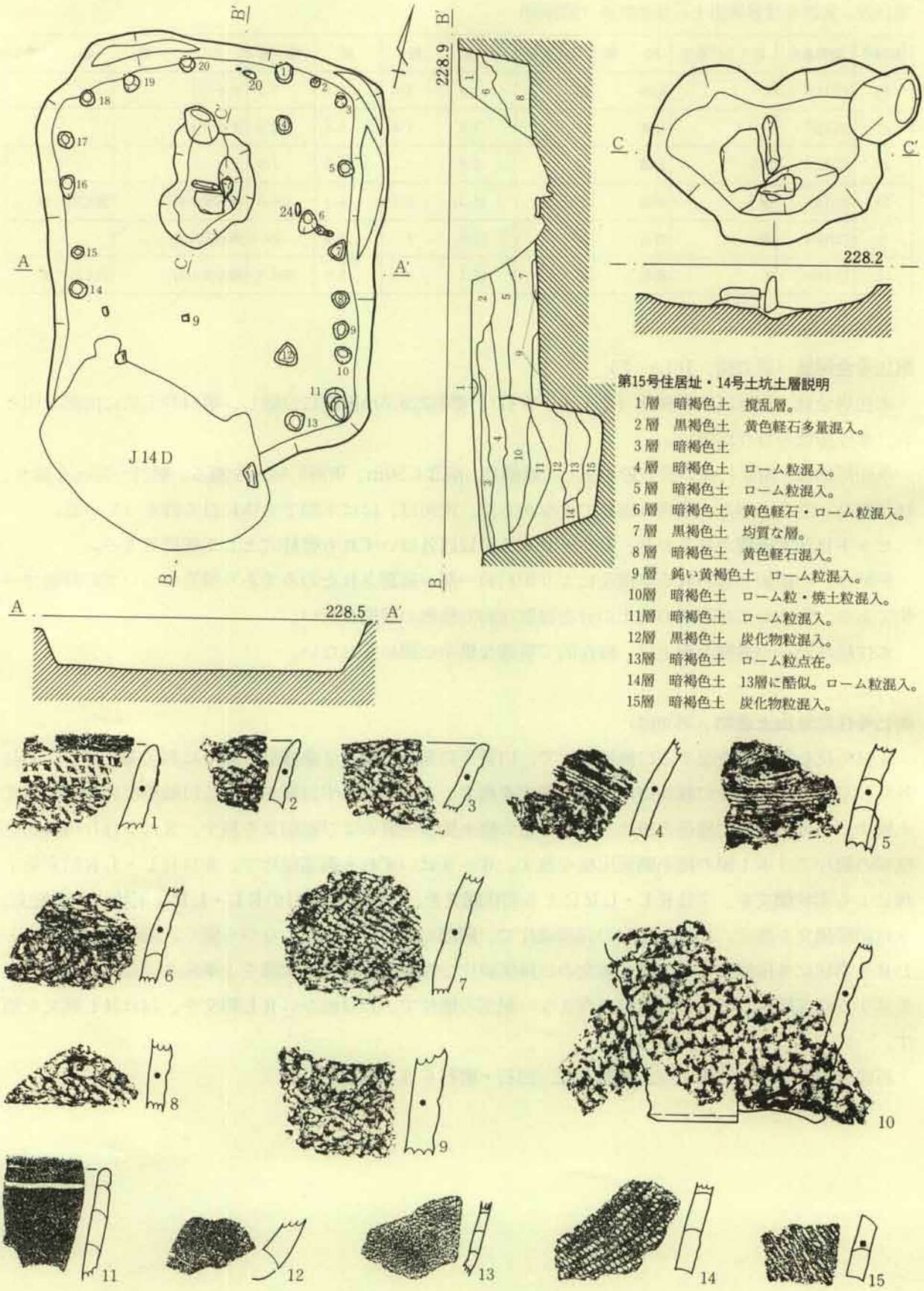
炉址は、石組炉と思われるが撹乱により炉石の一部が確認されたのみであり構造についての詳細は不明である。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、散在的で明確な集中は認められない。

第15号住居址出土遺物（第38図）

１は外反し平口縁を呈する口縁部破片で、口唇下に刻み隆帯を２条施し、以下に刺切文を施す。２は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。３は外反し平口縁を呈する口縁部破片で結節縄文を施す。４は口縁部文様帯の破片で３本１組の撚糸側面圧痕および刺切文を施す。５はやはり口縁部文様帯の破片で３本１組の撚糸側面圧痕を施す。６～９はいずれも胴部破片で、６はＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を、７はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、８は閉端環付のＲＬ・ＬＲを羽状に多段施文、９は結節縄文を施す。10は上げ底の底部破片で、胴部に向かって外反しながら開く、閉端環付のＲＬ・ＬＲを羽状に多段施文する。11は無文の口縁部破片で口縁に平行する沈線を１条施す。12は無文の尖底を呈する底部破片。13～15は繊維を含まない胴部の破片で、13は細かいＲＬ縄文を、14はＲＬ縄文を施す。

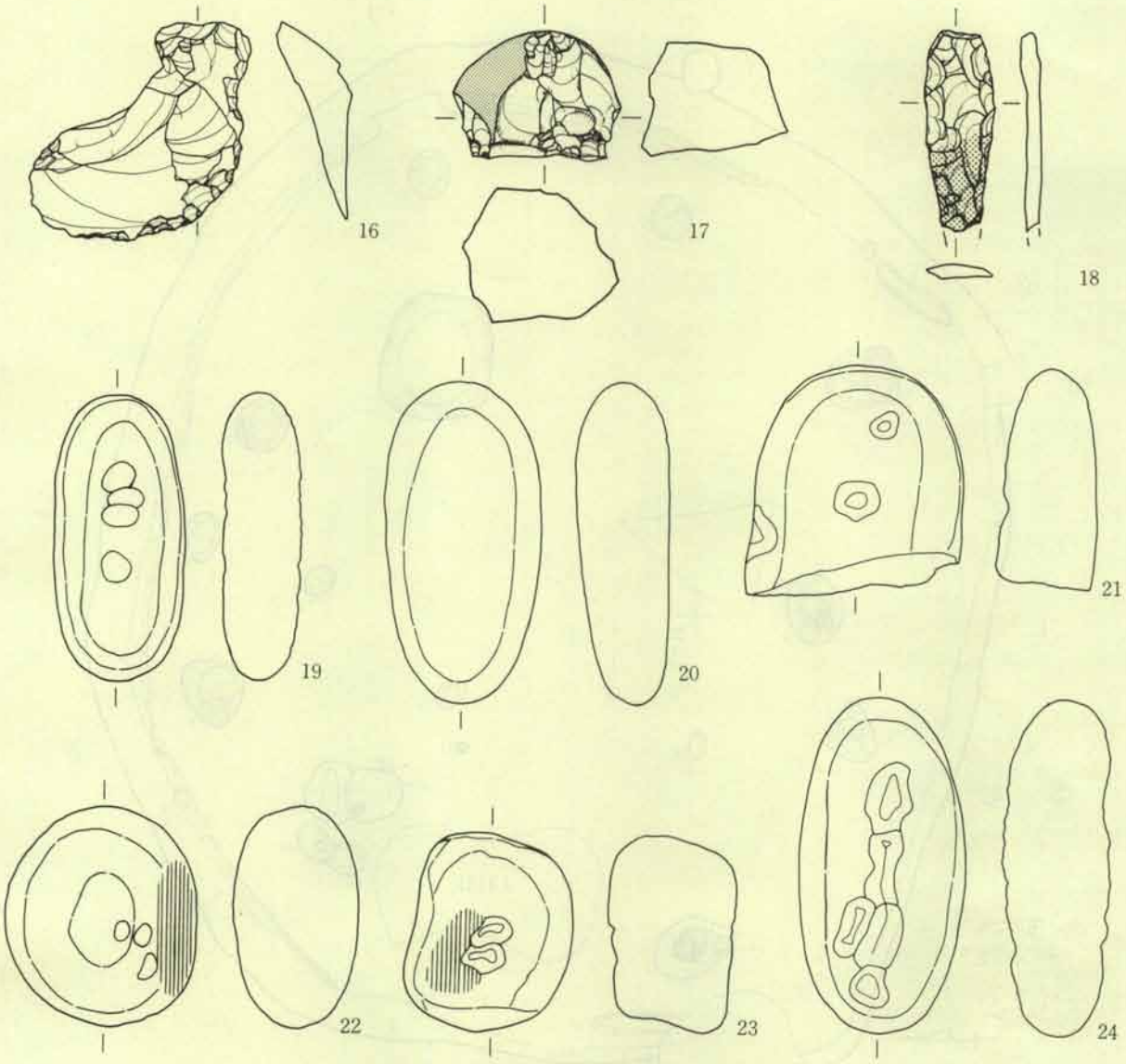
石器は石匙１点、石錐１点、礫器１点、凹石・磨石６点を図示した。



第15号住居址・14号土坑土層説明

1層　暗褐色土　撹乱層。
2層　黒褐色土　黄色軽石多量混入。
3層　暗褐色土
4層　暗褐色土　ローム粒混入。
5層　暗褐色土　ローム粒混入。
6層　暗褐色土　黄色軽石・ローム粒混入。
7層　黒褐色土　均質な層。
8層　暗褐色土　黄色軽石混入。
9層　鈍い黄褐色土　ローム粒混入。
10層　暗褐色土　ローム粒・焼土粒混入。
11層　暗褐色土　ローム粒混入。
12層　黒褐色土　炭化物粒混入。
13層　暗褐色土　ローム粒点在。
14層　暗褐色土　13層に酷似。ローム粒混入。
15層　暗褐色土　炭化物粒混入。

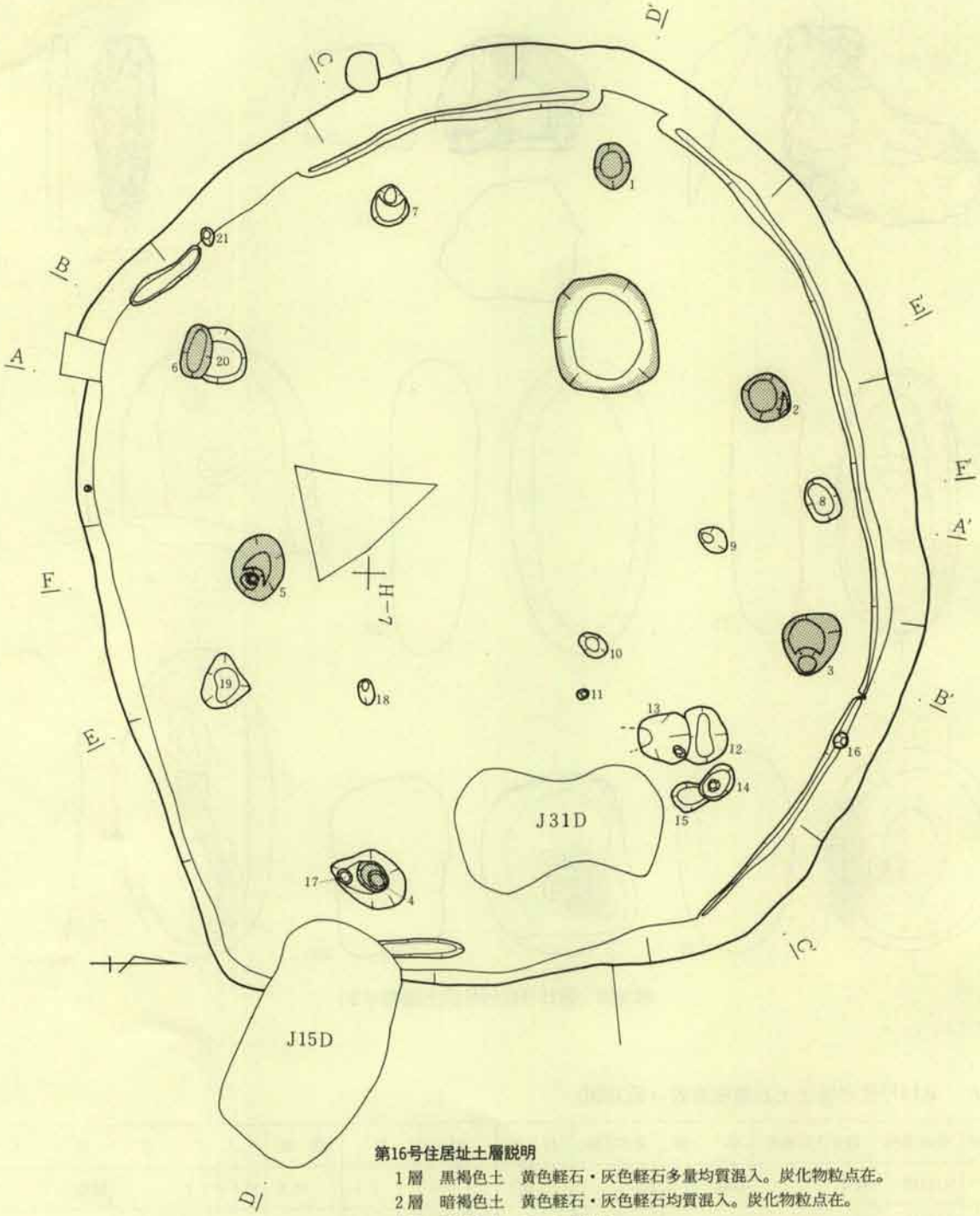
第37図　第15号住居址平・断面図および出土遺物（1）



第38図　第15号住居址出土遺物（2）

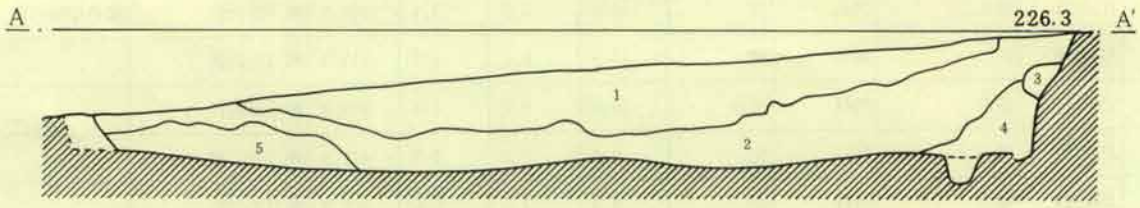
第17表　第15号住居址出土石器観察表（第38図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
16	J15H16	覆土	石匙	完	6.2	6.4	2.1	35.8	デイサイト	横型
17	J15H18	周辺	礫器	完	5.5	7.2	6.7	296.0	デイサイト	
18	J15H17	覆土	石錐	錐部欠損	(8.3)	3.0	1.0	25.6	流紋岩	
19	J15H21	覆土	凹石	完	12.0	5.7	3.4	346.0	輝石安山岩	赤色顔料付着
20	J15H20	2	磨石	完	13.5	6.7	4.0	512.0	輝石安山岩	
21	J15H19	覆土	凹石	半分	(9.8)	9.2	4.4	482.0	輝石安山岩	
22	J15H22	覆土	凹石	完	9.3	8.2	5.3	417.0	輝石安山岩	
23	J15H23	覆土	凹石	完	8.4	7.3	5.6	401.0	輝石安山岩	
24	J15H24	3	凹石	完	14.1	7.2	4.7	590.0	輝石安山岩	

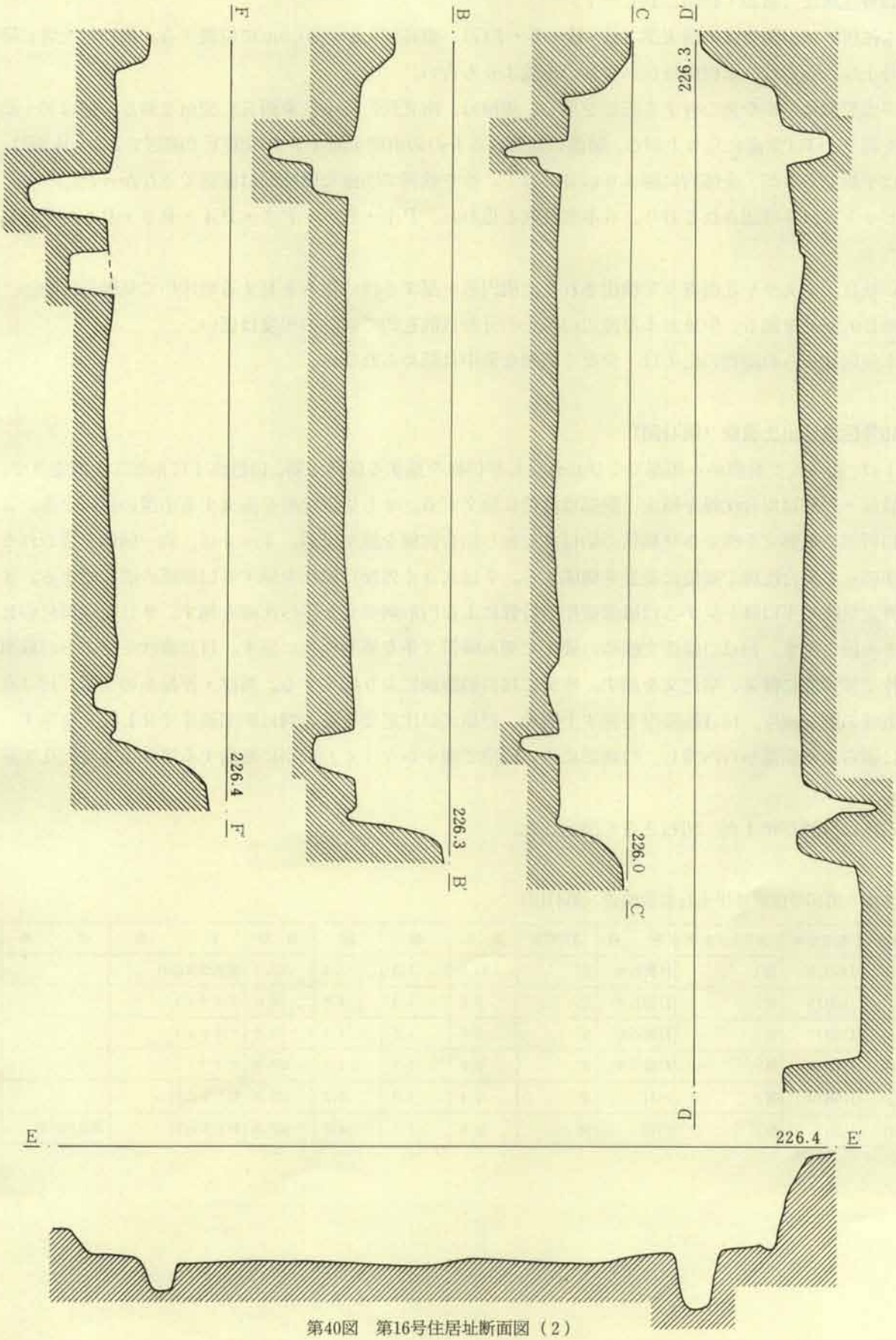


第16号住居址土層説明

1層　黒褐色土　黄色軽石・灰色軽石多量均質混入。炭化物粒点在。
2層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石均質混入。炭化物粒点在。
3層　暗褐色土　ロームB混入。
4層　暗褐色土　黄色軽石・灰色軽石均質混入。炭化物粒点在(2層よりやや多い)。
5層　鈍い黄褐色土　黄色軽石・灰色軽石少量均質混入。



第39図　第16号住居址平・断面図（1）



第40図　第16号住居址断面図（2）

第16号住居址（第39・40図、ＰＬ－７）

本住居址は、調査区の南東部（Ｇ・Ｈ－６・７Ｇ）、標高225.5～230.5mに位置する。第15号土坑、第31号土坑に切られ、本住居址がいずれの土坑よりも古い。

平面形態は、やや角を有する円形を呈し、規模は、南北長7.68m、東西長8.52mを測る。壁は26～85cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は途切れるものの南壁を除く３方の壁下で確認できた。床面は、ほぼ平坦であるが、全体的に締まりは良くなく、やや軟弱で明確な堅緻面は確認できなかった。。

ピットは21本確認されており、６本主柱穴と思われ、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６がそれに当たる。

炉址は、中央やや北西寄りで検出された。楕円形を呈する浅い窪みを有する地床炉で長軸長1.08cm、短軸長0.96cmを測る。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は、少なく明確な集中は認められない。

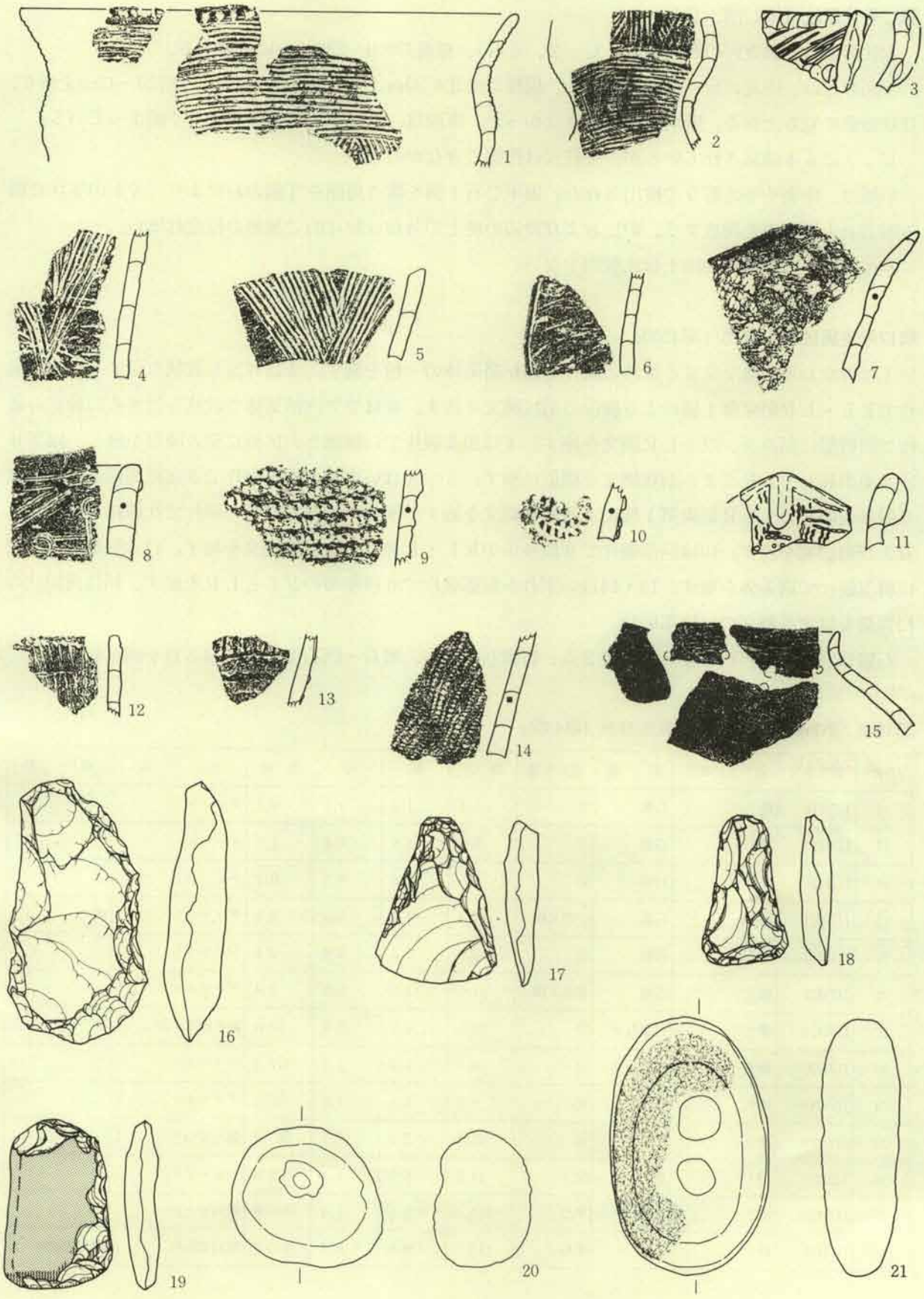
第16号住居址出土遺物（第41図）

１は、膨らんだ胴部から頚部でくびれ外反し平口縁を呈する深鉢土器。口唇直下に爪形文を横走させ、口縁部・頚部は集合沈線を横走、胴部は縦位に施文する。２も集合沈線を施文する小型の深鉢土器。３は口唇部に爪形文を横走させ棒状の貼付文を施し集合沈線を施す土器。４～６は、同一個体と思われる胴部破片で集合沈線で縦位に菱形を構成する。７は大きく外反し波状を呈する口縁部の破片である。８は直立気味の平口縁を呈する口縁部破片で竹管による円形刺突文と平行沈線を施す。９は閉端環付のＲＬを多段に施す。10は口縁部文様帯の破片で刻み隆帯２条を渦巻き状に施す。11は波状を呈する口縁部破片で波頂部に棒条の貼付文を施す。地文には貝殻腹縁により施文する。興津・浮島系の土器。12は直立気味の胴部破片。13は細隆帯を施す土器片。野島式に比定できる。14は胴部破片でＲＬ縄文を施す。15は膨らんだ胴部から内湾し、口縁部に近い部位で緩やかな「く」の字に屈曲する浅鉢土器で円孔を施す。

石器は打製石斧４点、凹石２点を図示した。

第18表　第16号住居址出土石器観察表（第41図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
16	J16H19	覆土	打製石斧	完	13.8	7.5	3.3	345.0	緻密質安山岩	
17	J16H18	覆土	打製石斧	完	8.7	6.5	1.9	96.0	デイサイト	
18	J16H17	覆土	打製石斧	完	7.9	4.6	1.7	59.0	デイサイト	
19	J16H16	覆土	打製石斧	完	9.0	5.9	1.9	136.0	デイサイト	
20	J16H20	覆土	凹石	完	7.4	8.0	5.2	325.0	輝石安山岩	
21	J16H21	覆土	凹石	完	13.6	8.5	4.2	693.0	輝石安山岩	炭化物付着



第41図　第16号住居址出土遺物

第17号住居址（第42図、ＰＬ－８）

本住居址は、調査区の西部（Ｋ・Ｌ－２．３Ｇ）、標高229.0～229.5mに位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は南北4.30m、東西3.00mを測る。壁は3～43cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に良く締まっている。

ピットは６本確認されているが、主柱穴は把握できなかった。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石１個を敷き周囲を３個の石により「く」の字状に組み南方および西方を開放する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は比較的少ない。

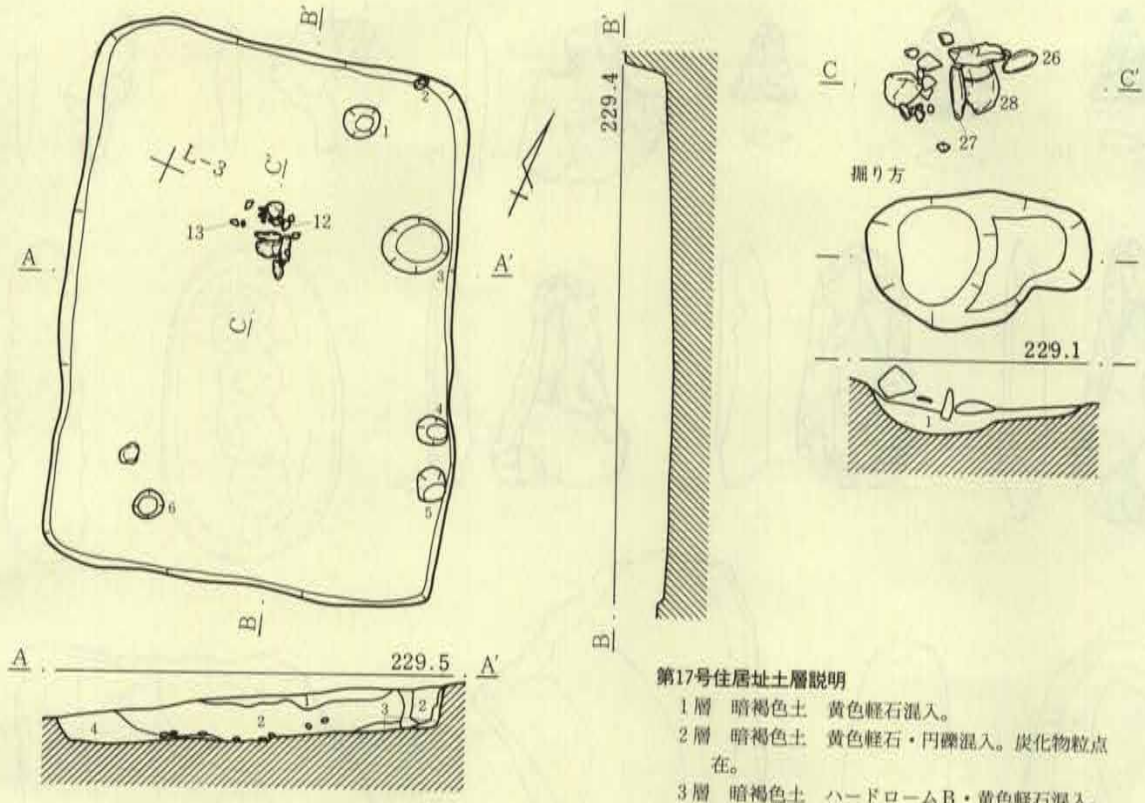
第17号住居址出土遺物（第43図）

１は外反し平口縁を呈する深鉢の破片で回転絡条体の一種を施す。２は外反し波状を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲ結束第１種による横位の羽状縄文を施す。３はやや内傾気味で波状を呈する口縁部の破片で口唇部に刻みを、以下ＬＲ縄文を施す。４は頸部破片で口縁部との区画に刻み隆帯を施し、以下０段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を横位に施す。５～８はいずれも胴部破片で５は結節縄文を、７は０段多条のＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を施す。９は口縁部文様帯の破片で沈線による弧状文および刺切文を施す。10は胴部破片で０段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。11は胴部破片。12は胴部破片で絡条体を施す。13・14はいずれも胴部破片で０段多条のＲＬとＬＲを施す。15は角頭状の口唇部を呈する無文の口縁部破片。

石器は石鏃３点、石匙１点、石錐２点、打製石斧３点、磨石・凹石２点、石皿２点を図示した。

第19表　第17号住居址出土石器観察表（第43図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
16	J17H18	覆土	石鏃	完	1.8	1.3	0.4	0.7	チャート	
17	J17H17	覆土	石鏃	完	2.4	1.6	0.4	1.7	チャート	
18	J17H16	覆土	石鏃	完	1.6	1.4	0.3	0.7	チャート	
19	J17H24	覆土	石匙	一部欠損	4.2	(4.1)	0.6	8.3	デイサイト	横型
20	J17H23	覆土	石錐	完	2.6	2.3	0.6	2.4	デイサイト	
21	J17H22	覆土	石錐	基部欠損	(4.0)	(1.9)	0.5	3.9	デイサイト	
22	J17H21	覆土	打製石斧	完	11.2	4.7	2.0	92.0	緻密質安山岩	
23	J17H20	覆土	打製石斧	完	9.6	4.7	2.1	117.0	デイサイト	
24	J17H19	覆土	打製石斧	完	8.3	5.4	1.8	62.0	デイサイト	
25	J17H26	覆土	凹石	完	12.4	7.3	3.3	367.0	輝石安山岩	
26	J17H25	炉１	磨石	完	14.5	6.9	4.3	578.0	デイサイト	
27	J17H27	炉２	石皿	半分	(15.4)	(22.5)	5.5	1985.0	輝石安山岩	
28	J17H28	炉３	石皿	半分	(17.7)	(20.9)	5.5	2055.0	輝石安山岩	炭化物付着

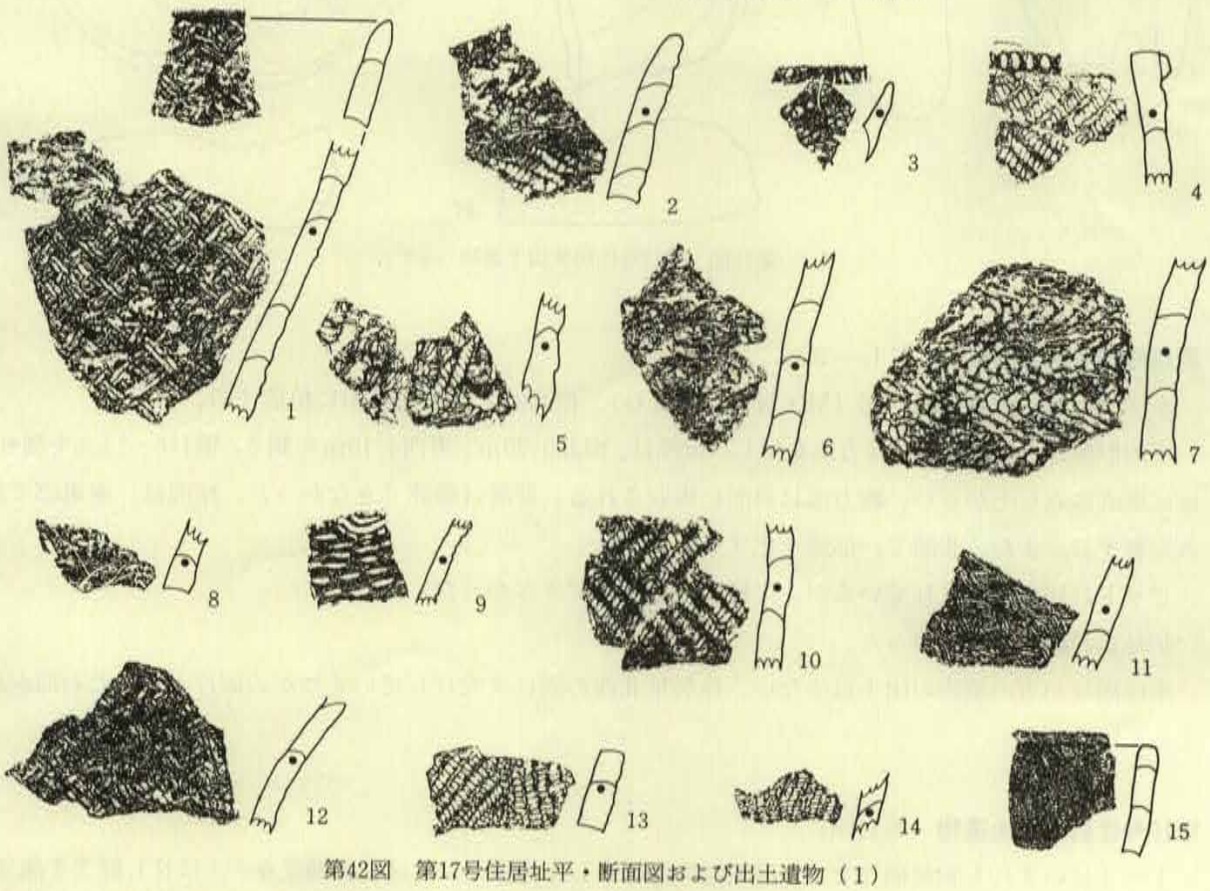


第17号住居址土層説明

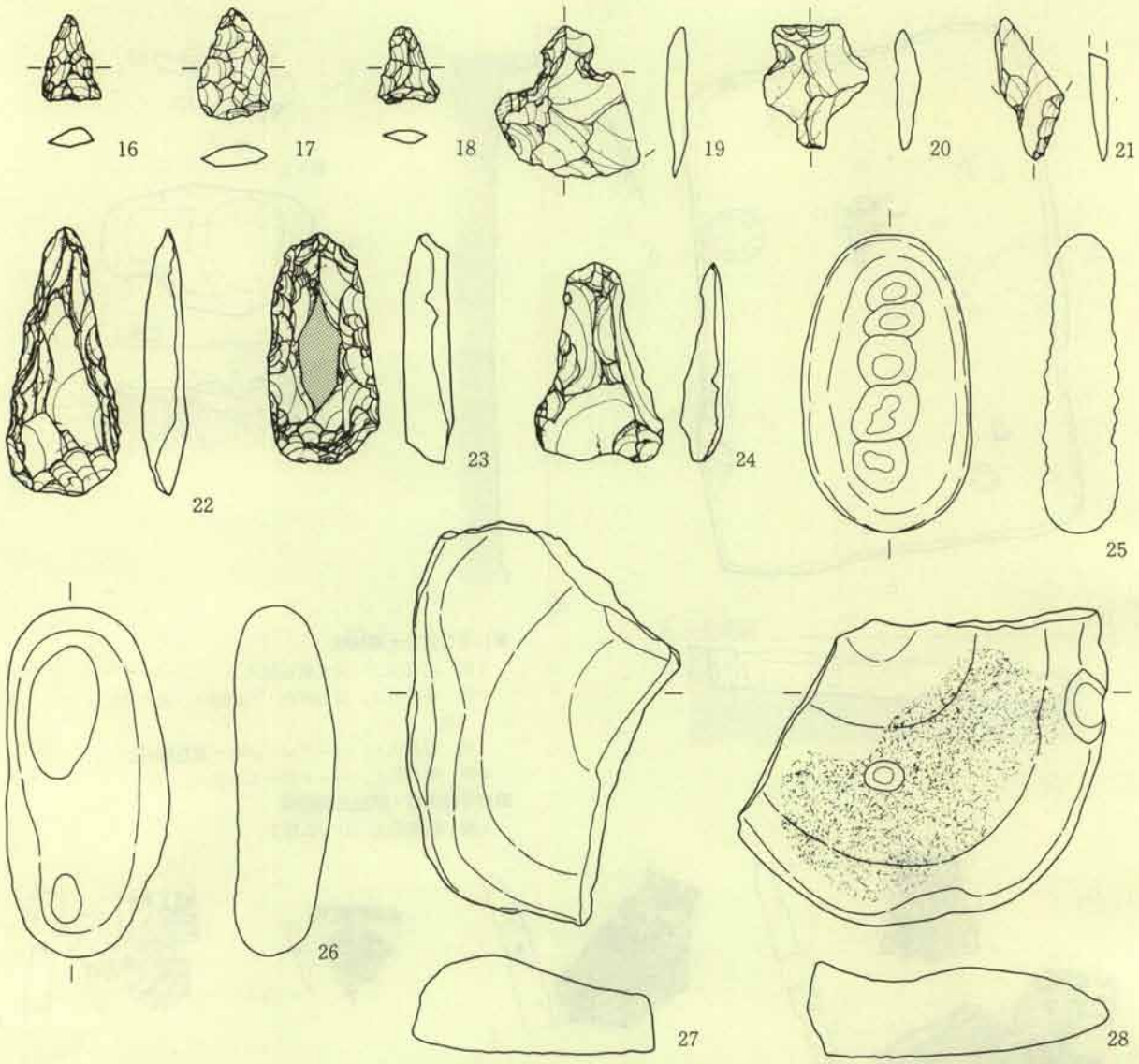
1層　暗褐色土　黄色軽石混入。
2層　暗褐色土　黄色軽石・円礫混入。炭化物粒点在。
3層　暗褐色土　ハードロームB・黄色軽石混入。
4層　暗褐色土　ハードロームB混入。

第17号住居址・炉址土層説明

1層　暗褐色土　ローム質土。



第42図　第17号住居址平・断面図および出土遺物（1）



第43図　第17号住居址出土遺物（2）

第18号住居址（第44図、ＰＬ－８）

本住居址は、調査区の西部（Ｍ・Ｎ－２．３Ｇ）、標高230.0～230.5mに位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北5.20m、東西4.10mを測る。壁は6～14cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がるが、西方部は斜面に吸収される。壁溝は確認できなかった。床面は、南東部で窪みを有する。また、北部で一部焼土化する。

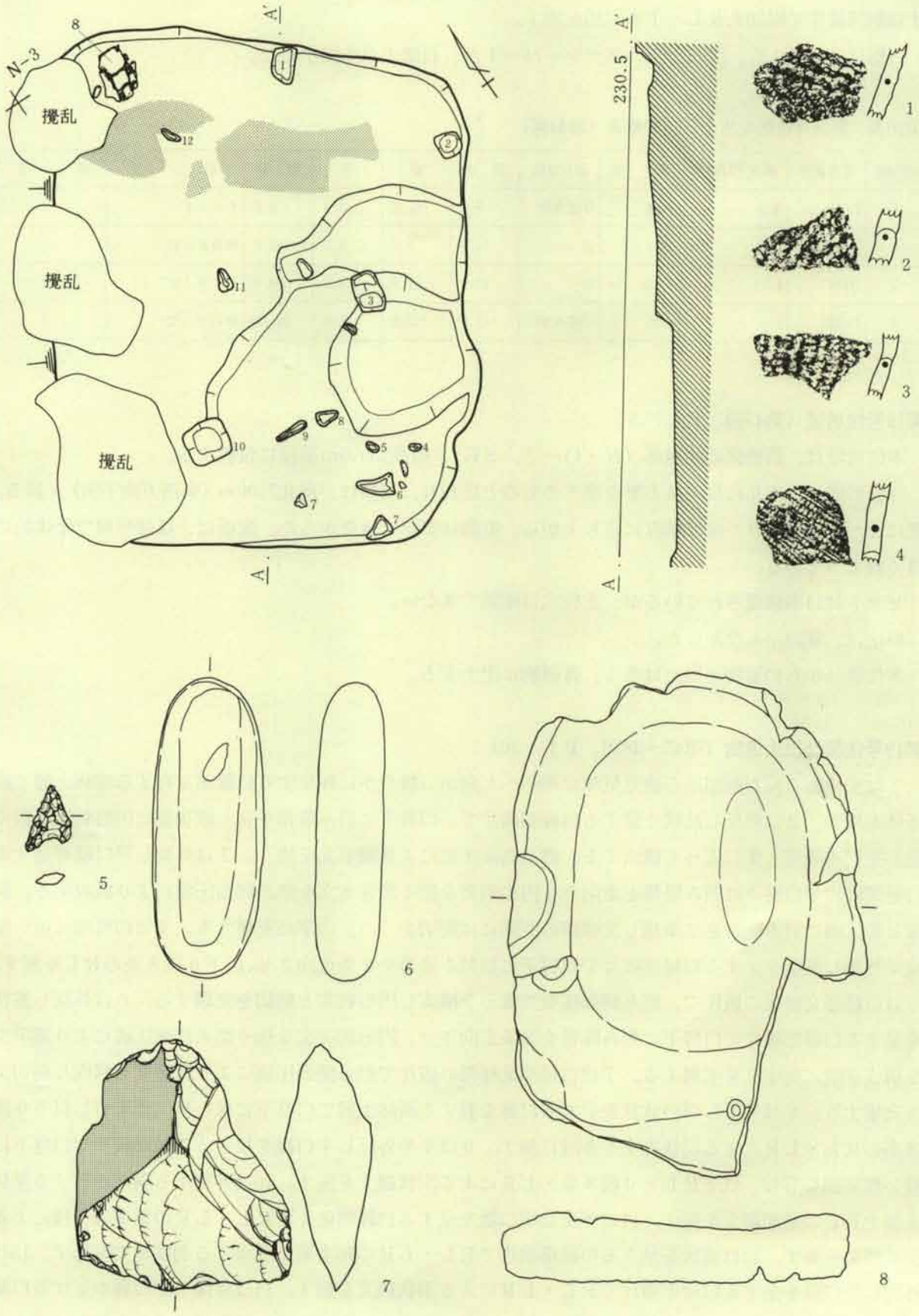
ピットは10本確認されているが、主柱穴の把握はできなかった。

炉址は、確認できなかった。

本住居址からの遺物の出土は少ない。住居址北西の隅に火受けしていくつかの破片となった石皿が出土している。

第18号住居址出土遺物（第44図）

１～３はいずれも胴部破片で、１は閉端環付のＲＬを多段に、２はＬＲ縄文を、３はＲＬ縄文を施す。



第44図　第18号住居址平・断面図および出土遺物

4は胴部破片で附加条ＲＬ＋１本附加を施す。

石器は、石鏃１点、磨石１点、スクレーパー１点、石皿１点を図示した。

第20表　第18号住居址出土石器観察表（第44図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　き	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
5	J18H6	覆土	石鏃	基部欠損	1.8	(1.2)	0.3	0.5	チャート	
6	J18H7	覆土	磨石	完	15.4	5.8	3.5	481.0	輝石安山岩	
7	J18H5	4	スクレーパー	完	12.9	11.3	4.5	538.0	デイサイト	
8	J18H8	1	石皿	一部欠損	(52.5)	37.6	8.0	20.0kg	輝石安山岩	

第19号住居址（第45図、ＰＬ－８）

本住居址は、調査区の北西部（Ｎ・Ｏ－２．３Ｇ）、標高230.0m前後に位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈するものと思われ、規模は、南北7.00m（東西方向不明）を測る。壁は20～37cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に良く締まっている。

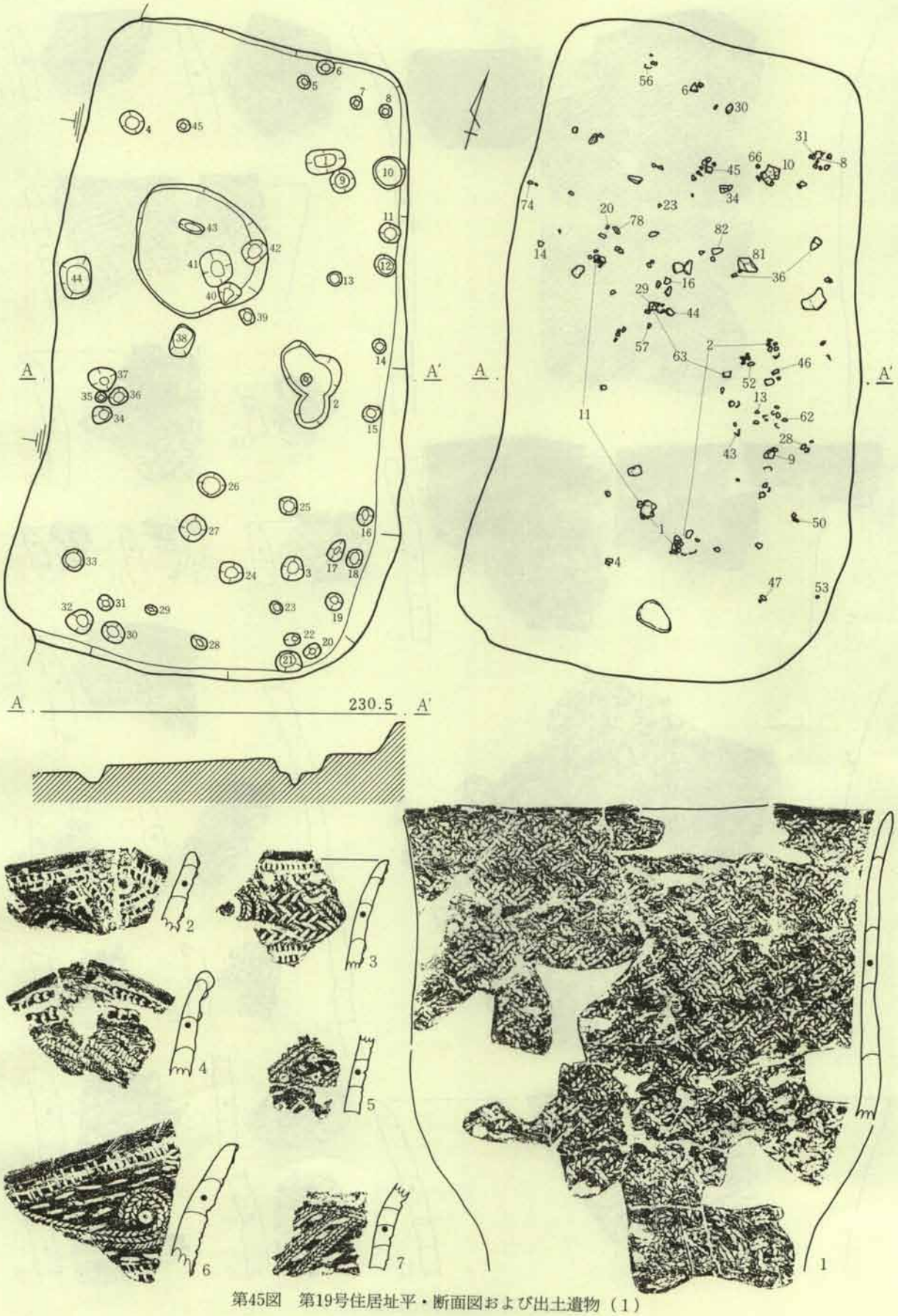
ピットは11本確認されているが、主柱穴は確認できない。

炉址は、確認出来なかった。

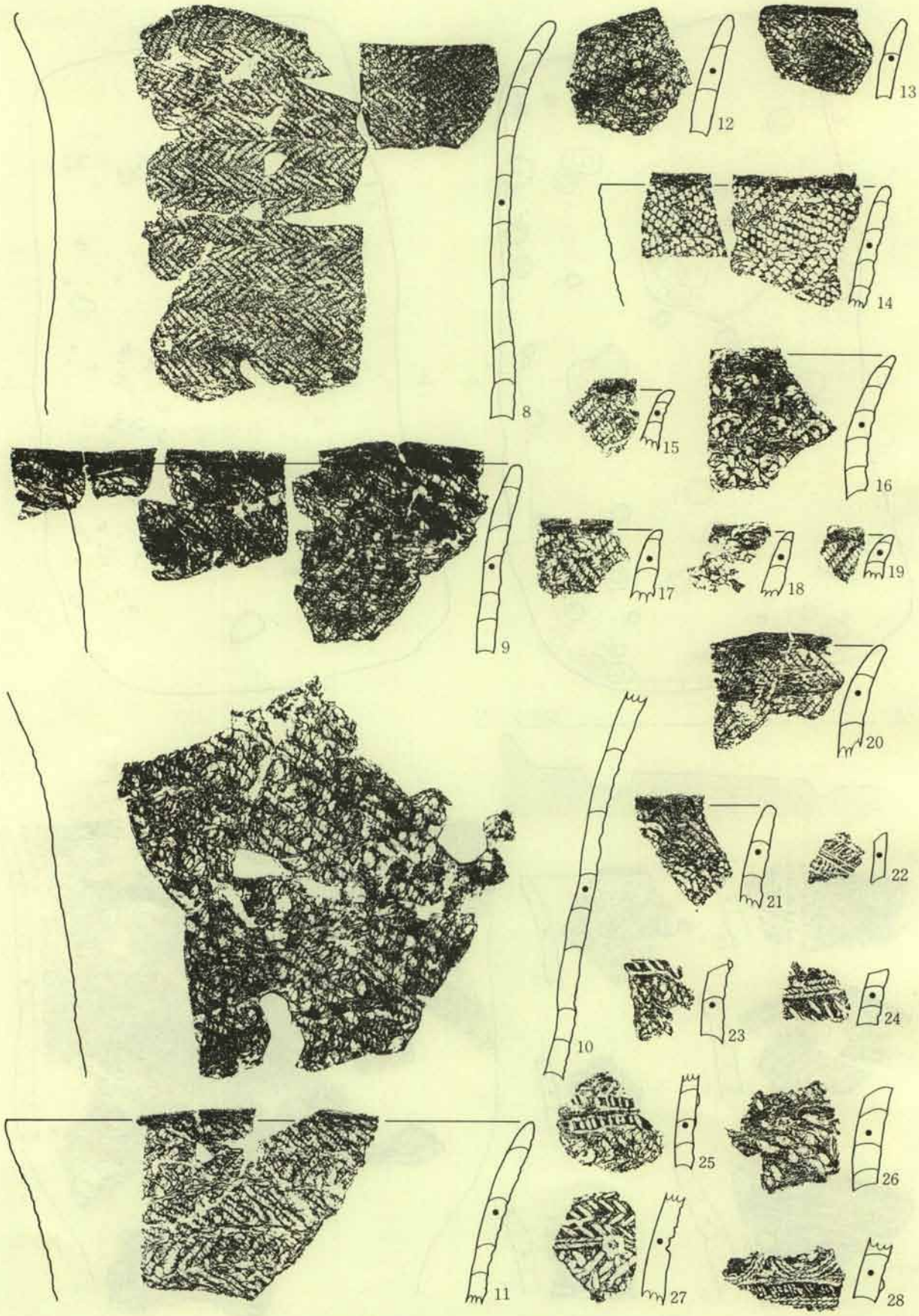
本住居址からの遺物の出土は多く、普遍的に出土する。

第19号住居址出土遺物（第45～48図、ＰＬ－20）

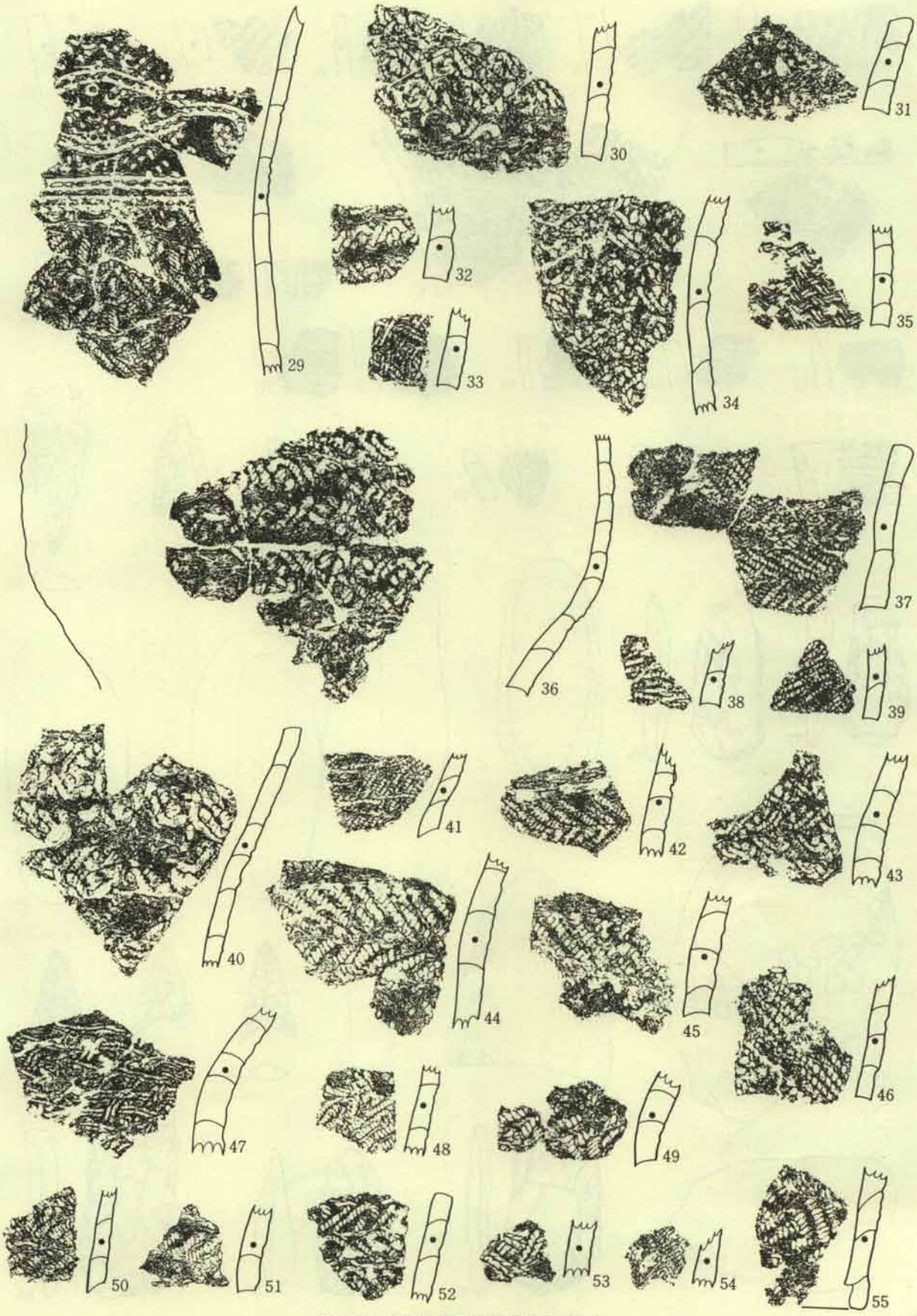
１はやや膨らんだ胴部から直立気味に頸部へと向かい緩やかに外反する口縁部を有する深鉢土器で絡条体を施す。２は外反し波状を呈する口縁部破片で、口唇下に刻み隆帯を施し波頂部に円形刺突を抱く菱形を刻み隆帯２条によって構成する。撚糸側面圧痕により蕨手文を描く。３は外反し平口縁を呈する口縁部破片で口唇下に刻み隆帯を走向させ円形刺突を抱く渦巻き文を撚糸側面圧痕により構成する。胴部との区画に刻み隆帯を２条施し文様帯の空間には刺切を「ハ」の字に充填する。４は口唇部に近い部位で外傾し波状を呈する口縁部破片で口唇下には刻み隆帯を２条走向させ、以下０段多条のＲＬを施す。５は口縁部文様帯の破片で、撚糸側面圧痕で菱形を構成し円形刺突と刺切を充填する。６は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇下に刻み隆帯を２条走向させ、円形刺突文を抱く撚糸側面圧痕により蕨手文を構成空間に刺切文を充填する。７は口縁部文様帯の破片で撚糸側面圧痕により菱形文を構成し刺切文を充填する。８は外反し弱い波状を呈する口縁を有する深鉢土器で口唇下に狭い無文部を有し以下０段多条のＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を多段に施す。９はやや外反し平口縁を呈する口縁部破片で口唇下に狭い無文部を有し、以下ＲＬと０段多条のＬＲによる羽状縄文を施す。10は外反する胴部を有する深鉢土器でＲＬの結節縄文を施す。11は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を施す。12は波状を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を施す。13は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。14は外傾し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。15は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。16は大きく外反し平口縁を呈するする口縁部破片で結節縄文を施す。17は外反し平口縁を呈する口縁部



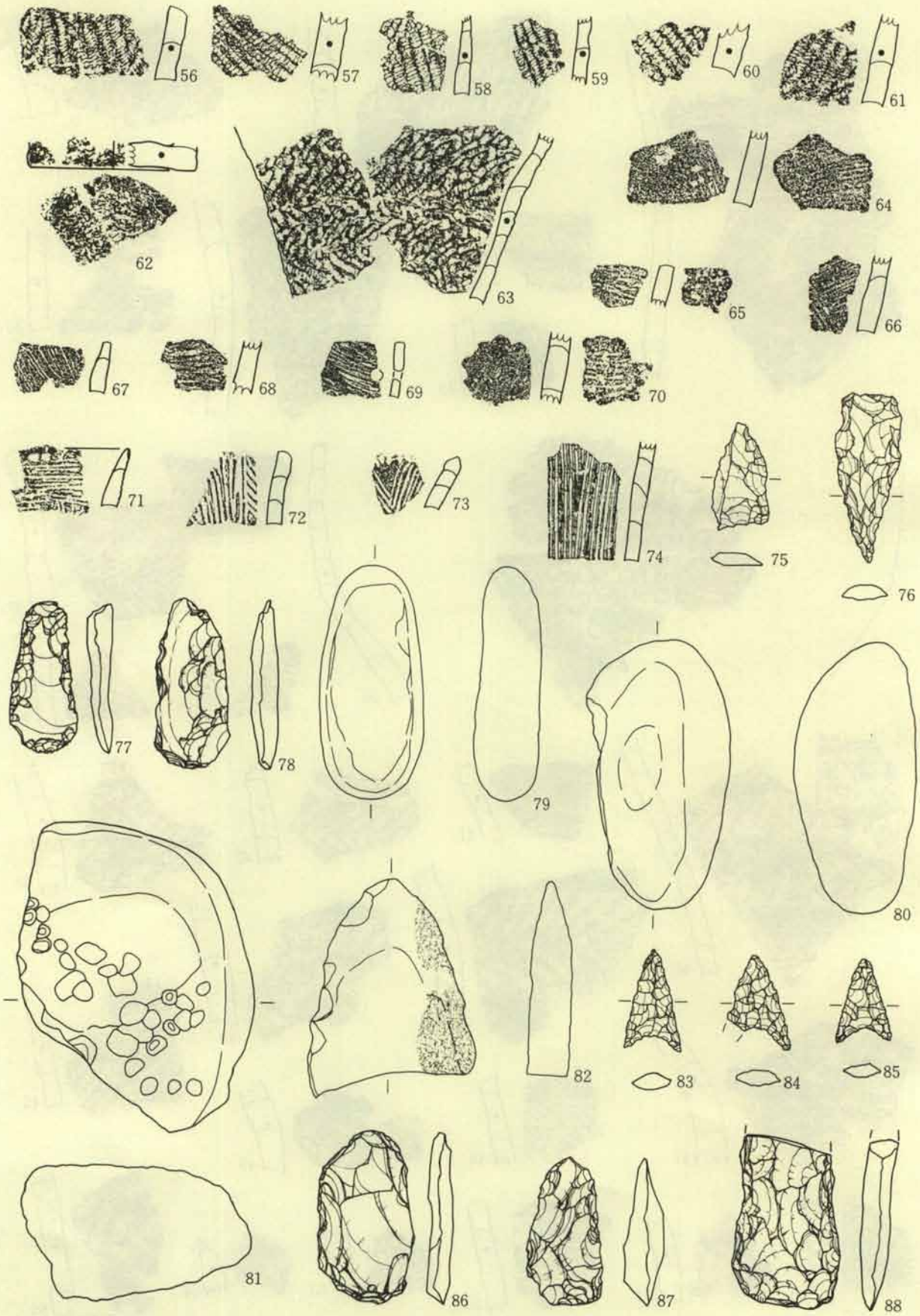
第45図　第19号住居址平・断面図および出土遺物（1）



第46図　第19号住居址出土遺物（2）



第47図　第19号住居址出土遺物（3）



第48図　第19号住居址出土遺物（4）

破片でＬＲおよび０段多条のＲＬによる羽状縄文を施す。18は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。19は外反する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。20は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。21は外反する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。22は口縁部文様帯の破片と思われ平行沈線及び刺切を施す。23は頸部破片で胴部との区画に刻み隆帯を横走させ以下結節縄文を施す。24は口縁部文様帯の破片で撚糸側面圧痕及び刺切を施す。25は頸部破片で胴部との区画に刻み隆帯を２条横走させ口縁部には刺切が認められ、胴部はＲＬ縄文を施す。26は胴部破片でＲ縄文を施す。27は頸部破片で胴部との区画に撚糸側面圧痕を施しさらに円形刺突を加え、口縁部文様帯は「ハ」の字に刺切文を充塡、胴部は絡条体を施す。28は頸部破片で隆帯及び併走させる撚糸圧痕により胴部との区画をなし、隆帯上にも撚糸側面圧痕を施す。口縁部文様帯は撚糸側面圧痕で渦巻き文を構成する。29は頸部でややくびれ口縁部で外反する深鉢土器の破片。胴部との区画は平行沈線による。口縁部文様帯は、平行沈線により波状文・蕨手文を構成し刺突を充塡する。30～54はいずれも胴部破片である。30・32・34・36・40・43・52は結節縄文を施す。31は原体不明。33・35・47・53は絡条体を施す。37はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。38・39は貝殻腹縁文を施す。41ＲＬの結節縄文を施す。42は０段多条ＬＲを、44・45はＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を、46はＲＬ縄文を、49はＲＬおよび０段多条ＲＬを、50は０段多条ＬＲをそれぞれ施す。55は底部破片で０段多条のＲＬ・ＬＲを施す。56～61はいずれも０段多条の縄文による異方向縄文を施した土器片。62は底部破片。63は「ハ」の字に開く胴部破片で結節縄文を施す。64～70は条痕文土器。71～74は集合沈線を施す土器。

第21表　第19号住居址出土石器観察表（第48図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
75	J19H84	覆土	石鏃	完	2.9	1.6	0.4	1.8	緻密質安山岩	
76	J19H83	覆土	石錐	完	4.5	1.8	0.4	4.6	デイサイト	
77	J19H80	覆土	打製石斧	完	7.9	3.6	1.4	41.2	頁岩	
78	J19H81	59	打製石斧	完	8.9	4.0	1.5	49.6	デイサイト	
79	J19H89	覆土	磨石	完	12.3	5.6	3.5	351.0	輝石安山岩	
80	J19H87	覆土	磨石	一部欠損	14.0	(7.7)	6.5	714.0	輝石安山岩	
81	J19H90	43	多孔石	完	21.6	16.7	9.8	3588.0	輝石安山岩	
82	J19H88	46	石皿	半分	(11.5)	8.9	2.3	237.0	輝石安山岩	
83	J19H86	周辺	石鏃	完	2.7	1.5	0.5	1.3	チャート	
84	J19H85	周辺	石鏃	完	2.5	(1.7)	0.4	1.3	チャート	
85	J19H82	周辺	石鏃	完	2.3	1.5	0.4	0.8	チャート	
86	J19H79	周辺	打製石斧	完	9.2	5.2	1.4	83.5	緻密質安山岩	
87	J19H77	周辺	打製石斧	完	7.9	4.0	2.1	57.0	デイサイト	
88	J19H78	周辺	打製石斧	基部欠損	(9.2)	5.7	1.9	118.0	緻密質安山岩	

第20号住居址（第49図、ＰＬ－８・９）

本住居址は、調査区の北西部（Ｏ・Ｐ－２Ｇ）、標高230.0m前後に位置する。

平面形態は、南北に長く南壁の長い長台形を呈し、規模は、南北4.90m、東西3.80m（南壁）を測るものと思われる。斜面に位置するところから住居の西部の形状は判然としない。壁は14～77cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは２本確認されているが、主柱穴は確認できなかった。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石１個を敷き周囲を６個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は非常に多く、北部から西部にかけて大型の縄文土器片が出土、中央部から南部にかけては比較的小型の土器片が多く出土している。

また、本住居址のプラン確認時にも多量の遺物が出土している。住居址覆土中の遺物と接合した遺物は本住居址に伴うものと判断したが、それ以外の遺物については参考資料として別に図示した。（第59～61図）

第20号住居址出土遺物（第50～61図）

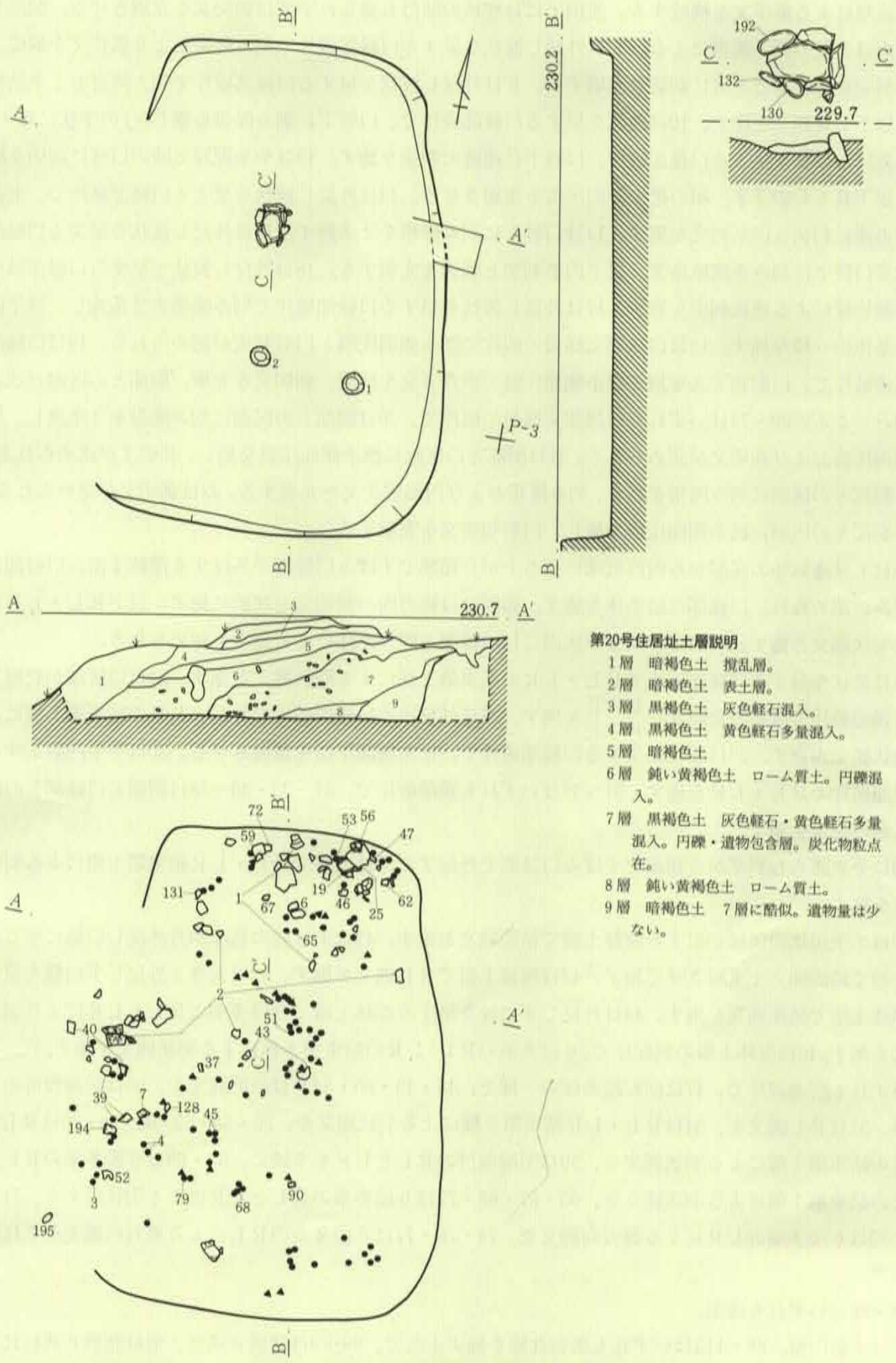
１はやや膨らむ胴部から緩やかに頸部でくびれ外反し４単位の波状の口縁を呈する深鉢土器。胴部との区画は刻み隆帯を３条と半截竹管による連続刺突文によりなされる。口縁部文様帯は波頂部から垂下する４条の刻み隆帯により縦位区画を構成する。この隆帯の左右に円形刺突文を配置しさらに円形刺突文を抱く蕨手文を刻み隆帯で左右対称に構成する。また、胴部との区画の刻み隆帯と縦位区画の刻み隆帯との接合部は３条の刻み隆帯で三角形を左右対象に配する。口唇下にも刻み隆帯は２条認められる。縦位の区画内には円形刺突文を抱くＬ・Ｒ・Ｌの撚糸側面圧痕による蕨手文、菱形文を配する。空間は４本単位の刺切文を充填する。胴部には結節縄文を施す。

２は膨らむ胴部から頸部でくびれ外反し波状を呈する口縁を呈する深鉢土器。口縁部と胴部の区画は半截竹管による刻み隆帯を２条施すことにより成す。この刻み隆帯に施された刻みは鋭角に刺突される。口縁部文様帯は、円形刺突文を抱くＲ・Ｌによる撚糸側面圧痕を蕨手状に施し、空間にやや乱れた矢羽条の刺切で充填する。胴部以下は閉端環付のＲＬとＬＲを多段に施す。

３は胴部から外反しながら口縁に向かって開き平口縁を呈する深鉢土器。口唇下には刻み隆帯を２条横走させ、胴部との区画には２条の刻み隆帯を施こす。口縁部文様帯は刺切文を矢羽状に充填する。胴部には結節縄文を施す。

４は寸胴気味で垂直に立ち上がり波状を呈する深鉢土器の破片で、口唇下に半截竹管の連続刺突を２列施す。波頂下には円形刺突文を垂下し刺切による「×」字状文様を構成する。円形刺突文を抱くＲ・Ｌ・Ｒの３本一組の撚糸側面圧痕で渦巻き文を構成する。胴部との区画は口唇下と同じ連続刺突によりなす。

５は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇下には刻み隆帯を２条横走させ波頂下には刻み隆帯により弧状文を配す。以下ＲＬ縄文を施す。６は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇下に半截竹管による刻み隆帯を２条走向させ波頂下には円形刺突文を中心とする刻み隆帯による菱形文を構成、円形刺突文でさらに囲み、以下は円形刺突を抱く刻み隆帯による蕨手文を配し、刺切による矢羽状文様を充填する。７は外傾し突起状の小波状を呈する口縁部破片。口唇下は刻み隆帯を２条走向させ、円形刺突文を抱く



第20号住居址土層説明

1層　暗褐色土　撹乱層。
2層　暗褐色土　表土層。
3層　黒褐色土　灰色軽石混入。
4層　黒褐色土　黄色軽石多量混入。
5層　暗褐色土
6層　鈍い黄褐色土　ローム質土。円礫混入。
7層　黒褐色土　灰色軽石・黄色軽石多量混入。円礫・遺物包含層。炭化物粒点在。
8層　鈍い黄褐色土　ローム質土。
9層　暗褐色土　7層に酷似。遺物量は少ない。

第49図　第20号住居址平・断面図

刻み隆帯による蕨手文を構成する。波頂下には瘤状の貼付も見られ空間は刺突文を充塡させる。胴部との区画は2条の刻み隆帯による。8は外傾し波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯により弧状文を構成、円形刺突を配するとともに刺切を充塡する。9は外反し波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯を1条貼付し、以下ＬＲ縄文を施す。10は波状を呈する口縁部破片で、口唇下に刻み隆帯を横「ハ」の字状に施す。11は外反し波状を呈する口縁部破片。口唇下に連続の刺突を施す。12はやや肥厚気味の口唇に刺切を施し、以下ＲとＬの2本一組の撚糸側面圧痕を重層させる。13は外反し波状を呈する口縁部破片で、半截竹管の連続刺突と円形刺突を施す。14は口唇下に刻み隆帯を2条施す。15は外反し波状を呈する口縁部破片で口唇下に刻みを連続施文、以下円形刺突と刺切を充塡する。16は外反し波状を呈する口縁部破片で半截竹管による連続刺突を施す。17は外反し波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯を2条施し、以下回転絡条体の一種を施す。18は口縁部文様帯の破片で撚糸側面圧痕と円形刺突が認められる。19は口縁部文様帯破片で、円形刺突文を抱く撚糸側面圧痕で渦巻き文を構成、刺切文を充塡。胴部との区画は連続の刻みによる。20～24はいずれも口縁部文様帯の破片で、20は胴部との区画に刻み隆帯を2条施し、撚糸側面圧痕および刺切文が認められる。21は胴部との区画に撚糸側面圧痕を施し、刺切文が認められる。22は胴部との区画に刻み隆帯を施し、刻み隆帯および円形刺突文を充塡する。23は刺切文が認められる。24は胴部との区画に撚糸側面圧痕を施し、円形刺突文を充塡する。

25は上げ底気味の底部から内湾気味に立ち上がり頸部ですぼみ口縁部で外反する深鉢土器。口唇部には刻みが認められ、口縁部は絡条体を施す。頸部には縦方向の刺切文を連続に施す。以下ＲＬ・ＬＲによる羽状縄文を施す。胴部下半および底面には口縁部と同一原体による施文も認められる。

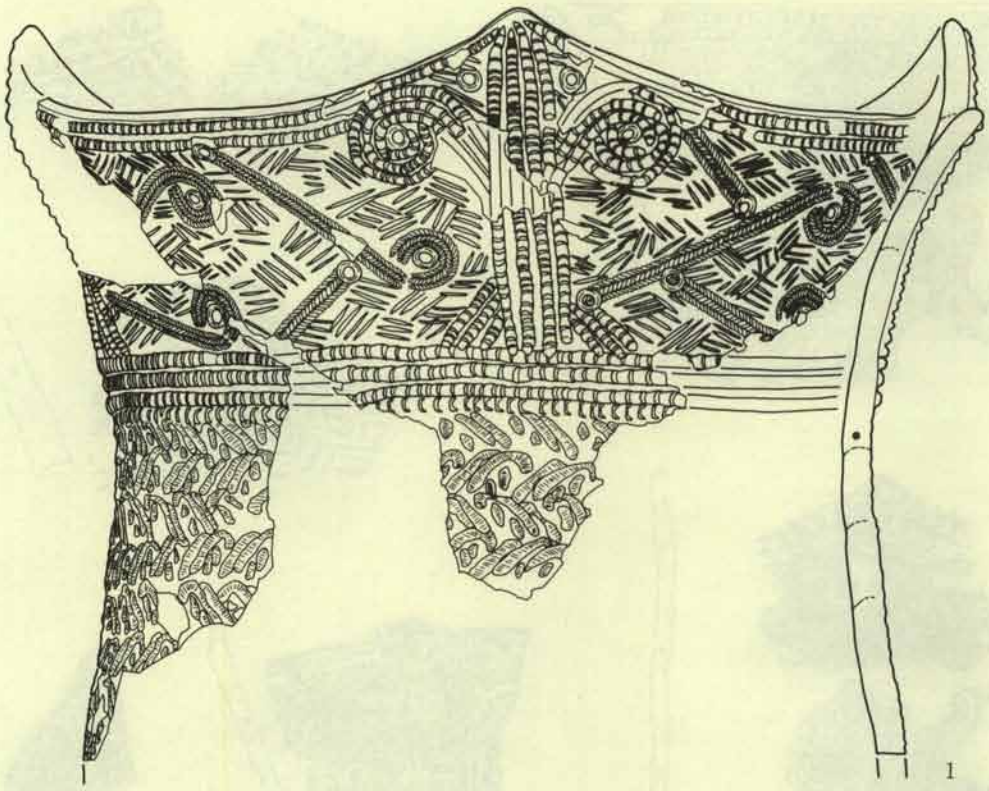
26は波状を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を施す。27は口唇部が肥厚する口縁部破片で直前段合撚R<L<R / R<L<L を施す。28は外反する口縁部破片でＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を施す。29は波状を呈する口縁部破片で、撚糸側面圧痕を重層させる。30はやや内傾気味の口縁部破片でＲＬ・ＬＲを施す。31～38はいずれも頸部破片で、31～33・36～38は胴部と口縁部との区画に刻み隆帯を施す。

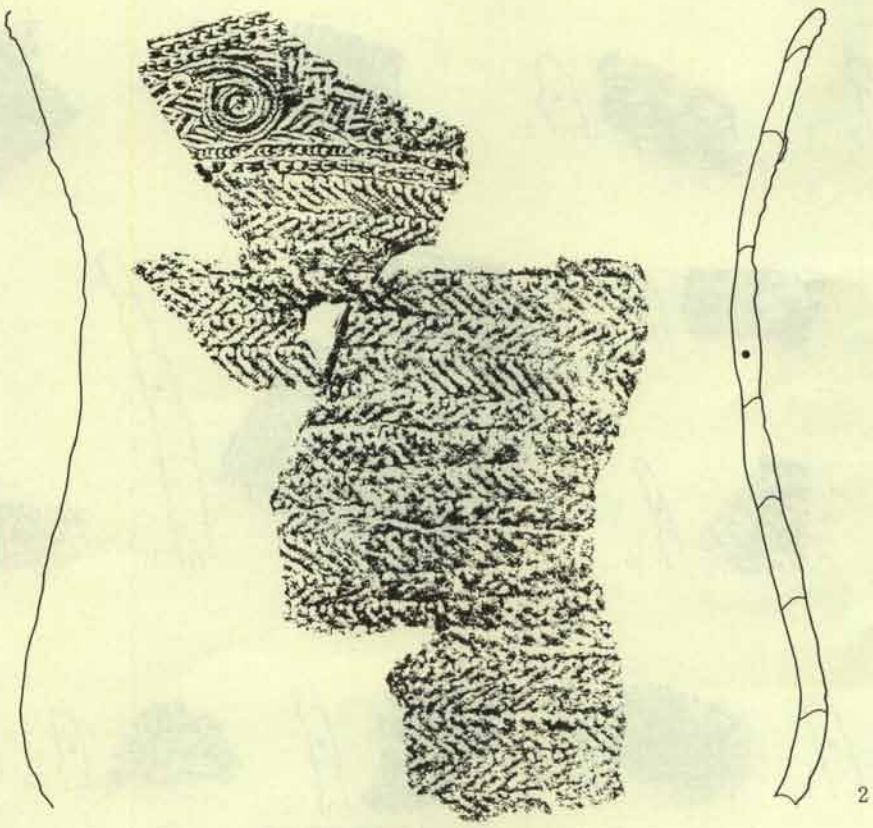
39はやや膨らむ胴部から頸部ですぼみ口縁部で外反する深鉢土器でＲＬ・ＬＲ結束第1種による羽状縄文を施す。

40は小突起状の口縁を呈する深鉢土器で結節縄文を施す。41は上げ底の底部から外反し口縁に至る深鉢土器で結節縄文を重層させて施す。42は深鉢土器でＲＬ縄文を施す。43は大きく外反し平口縁を呈する深鉢土器で結節縄文を施す。44は外反し平口縁を呈する深鉢土器で0段多条のＲＬとＬＲにより羽状縄文を施す。46は深鉢土器の胴部片で、0段多条のＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を施す。47～77はいずれも胴部破片で、47は回転絡条体の一種を、48・49・60・64・は結節縄文を、50は閉端環付のＲＬを、51はＲＬ縄文を、54はＲＬ・ＬＲ結束第2種による羽状縄文を、56～58・63・65・66・70はＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を、59は閉端環付のＲＬとＬＲを多段に、63・69は0段多条のＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を、65・67・68・72は0段多条のＲＬとＬＲによる羽状縄文を、71・73・75は0段多条のＬＲによる異方向縄文を、74・76・77は0段多条のＲＬによる異方向縄文をそれぞれ施す。

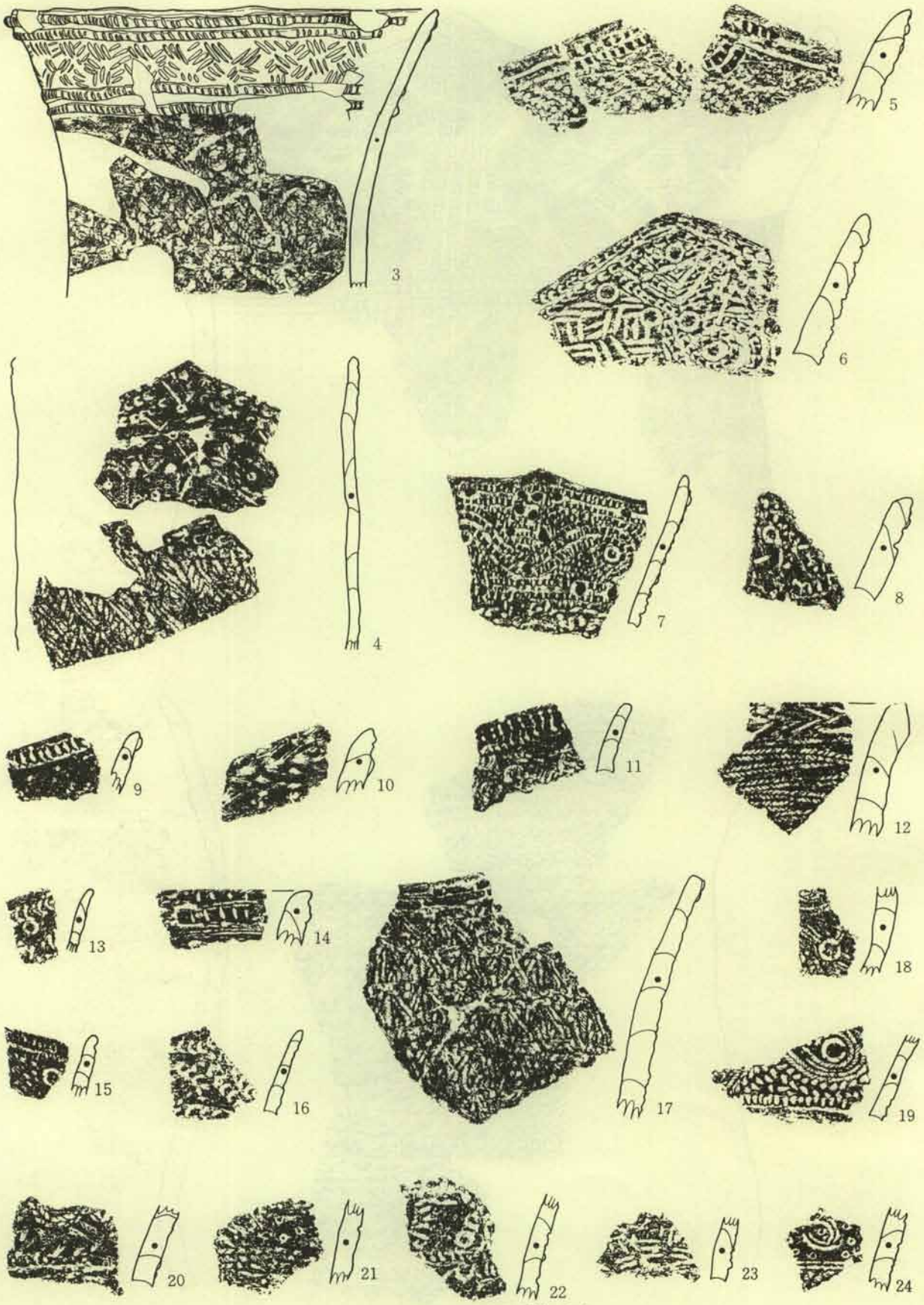
78～86はいずれも底部。

87は土製円盤。88～113はいずれも集合沈線を施す土器で、88・89は諸磯ａ式に、他は諸磯ｃ式に比定できよう。114・115は五領ヶ台式に比定できよう。

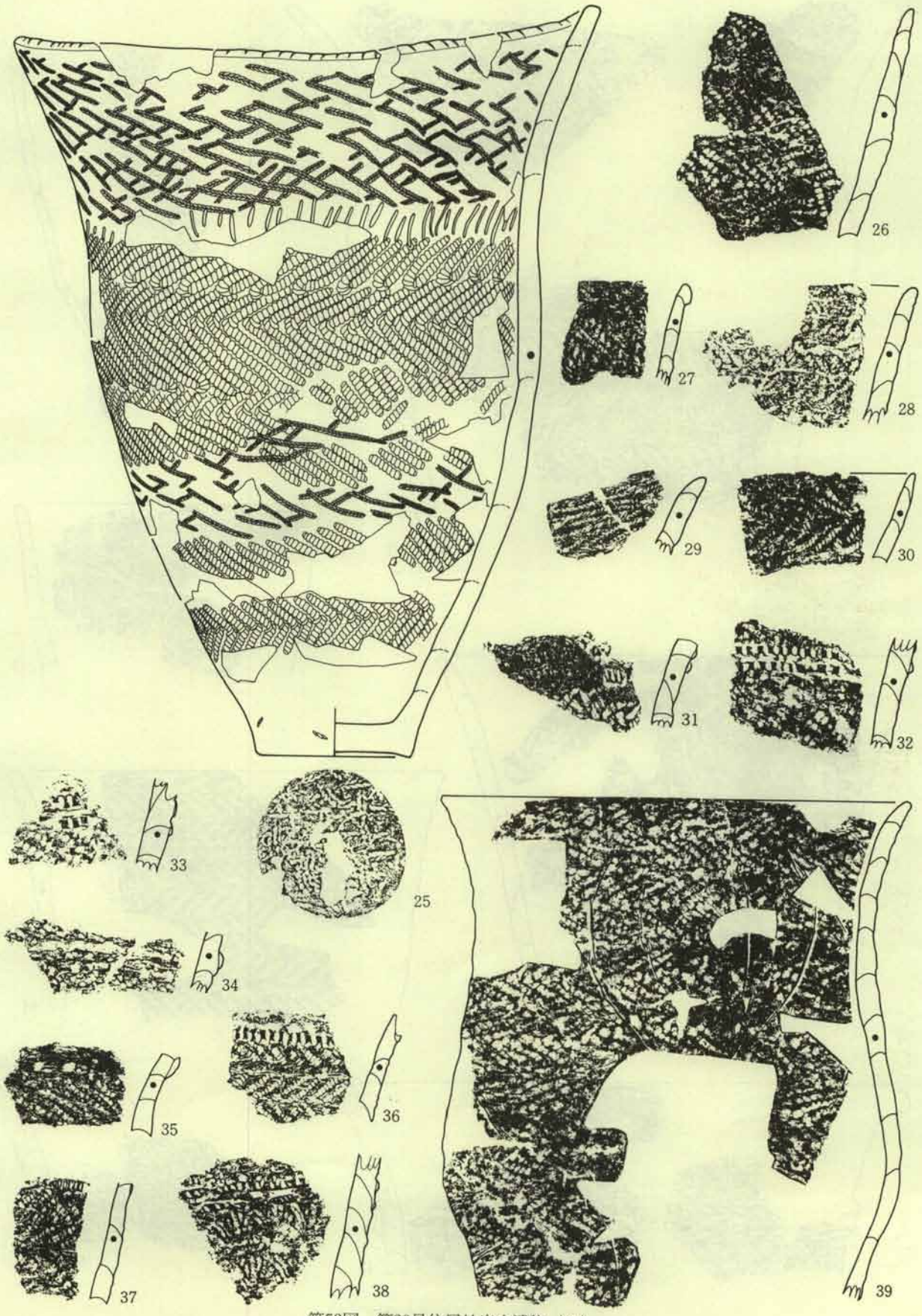




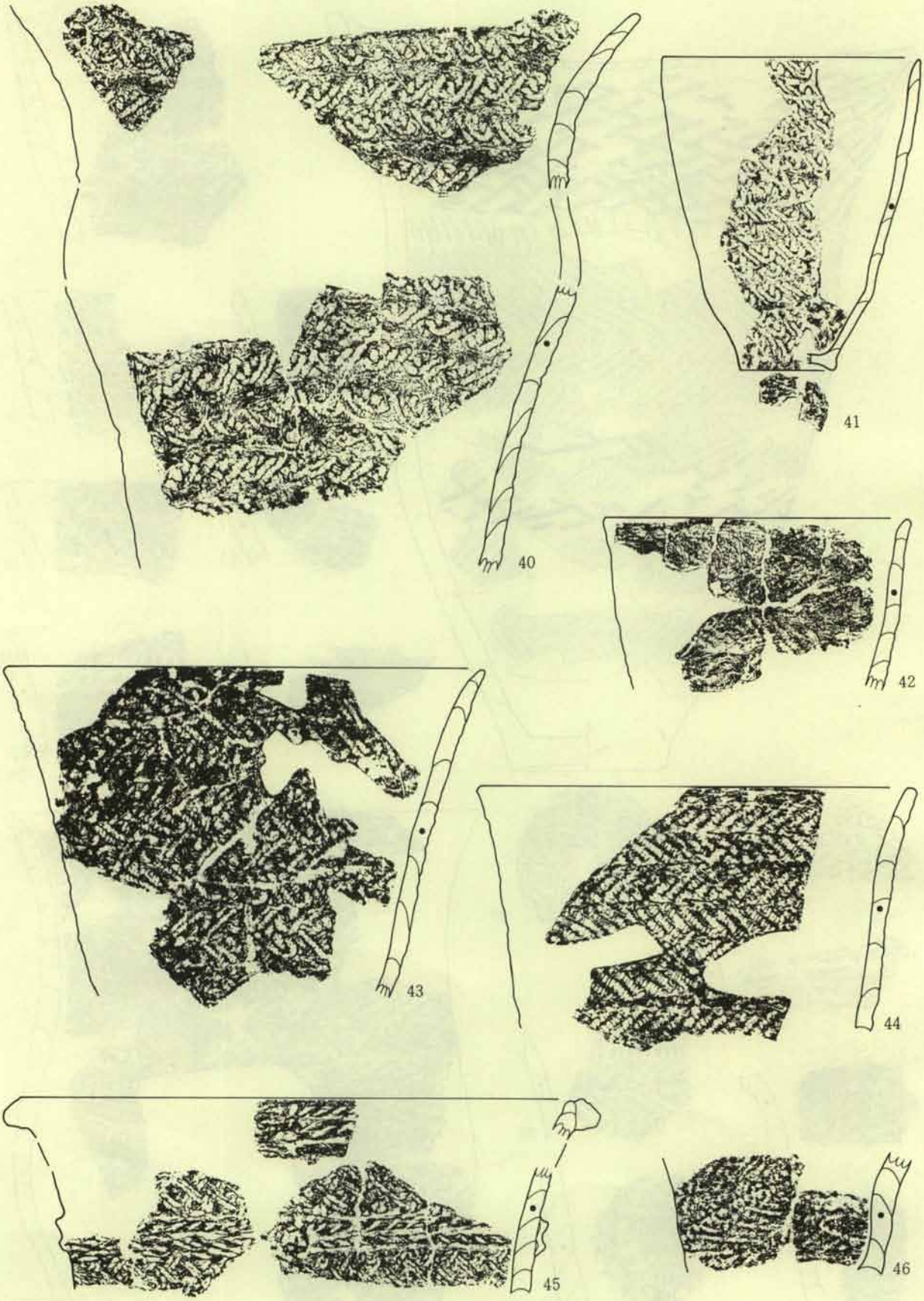
第50図　第20号住居址出土遺物（1）



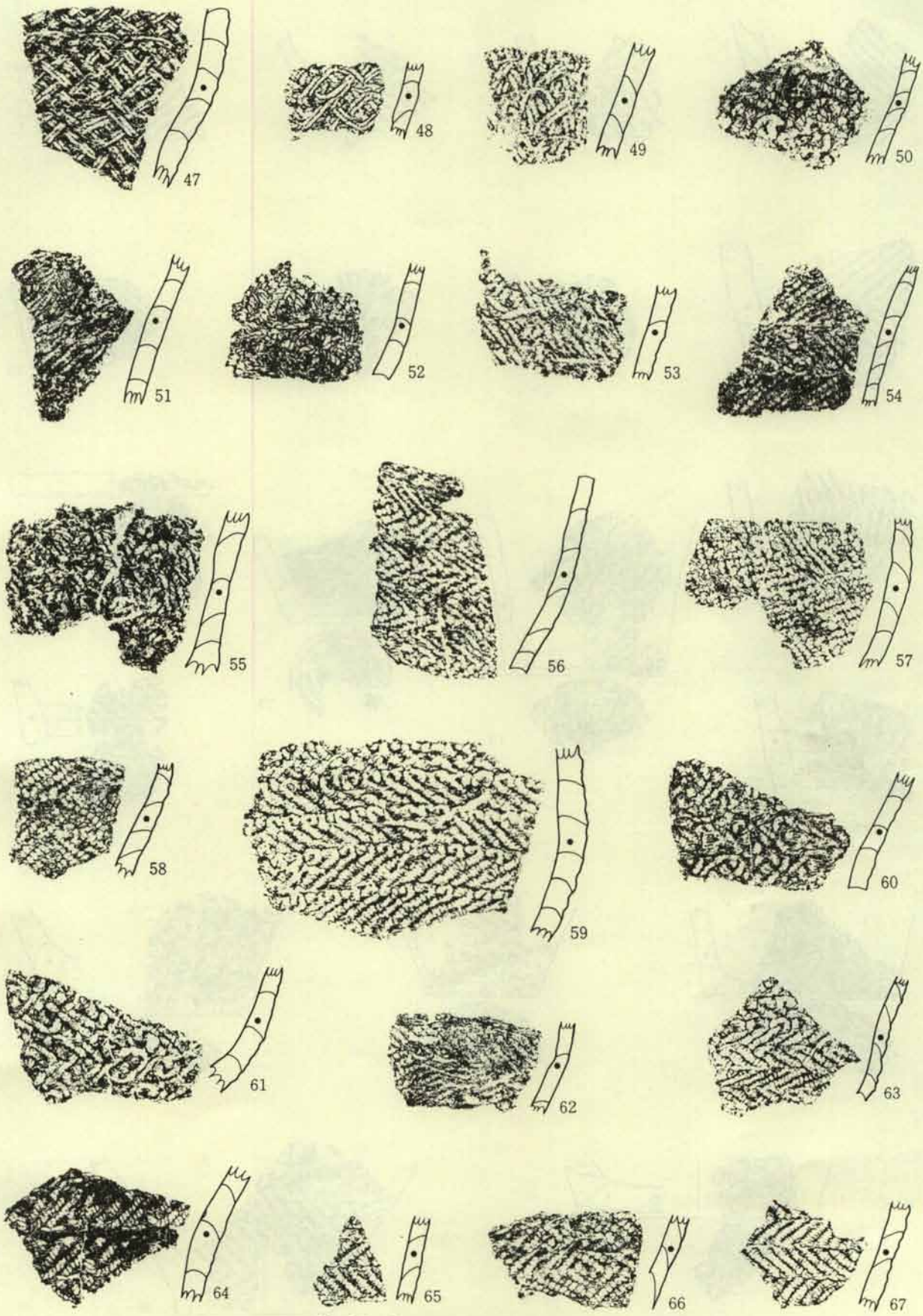
第51図　第20号住居址出土遺物（2）



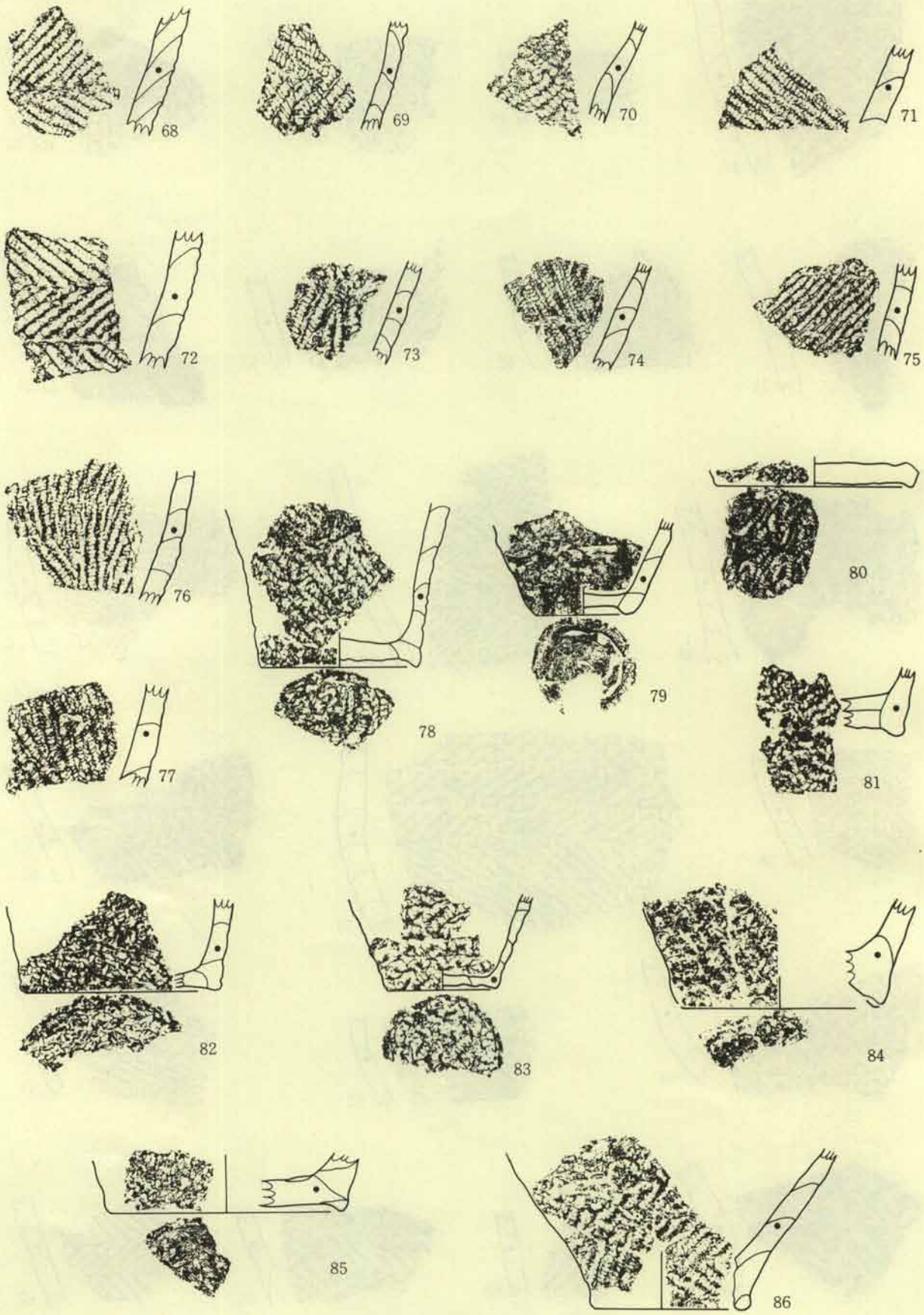
第52図　第20号住居址出土遺物（3）



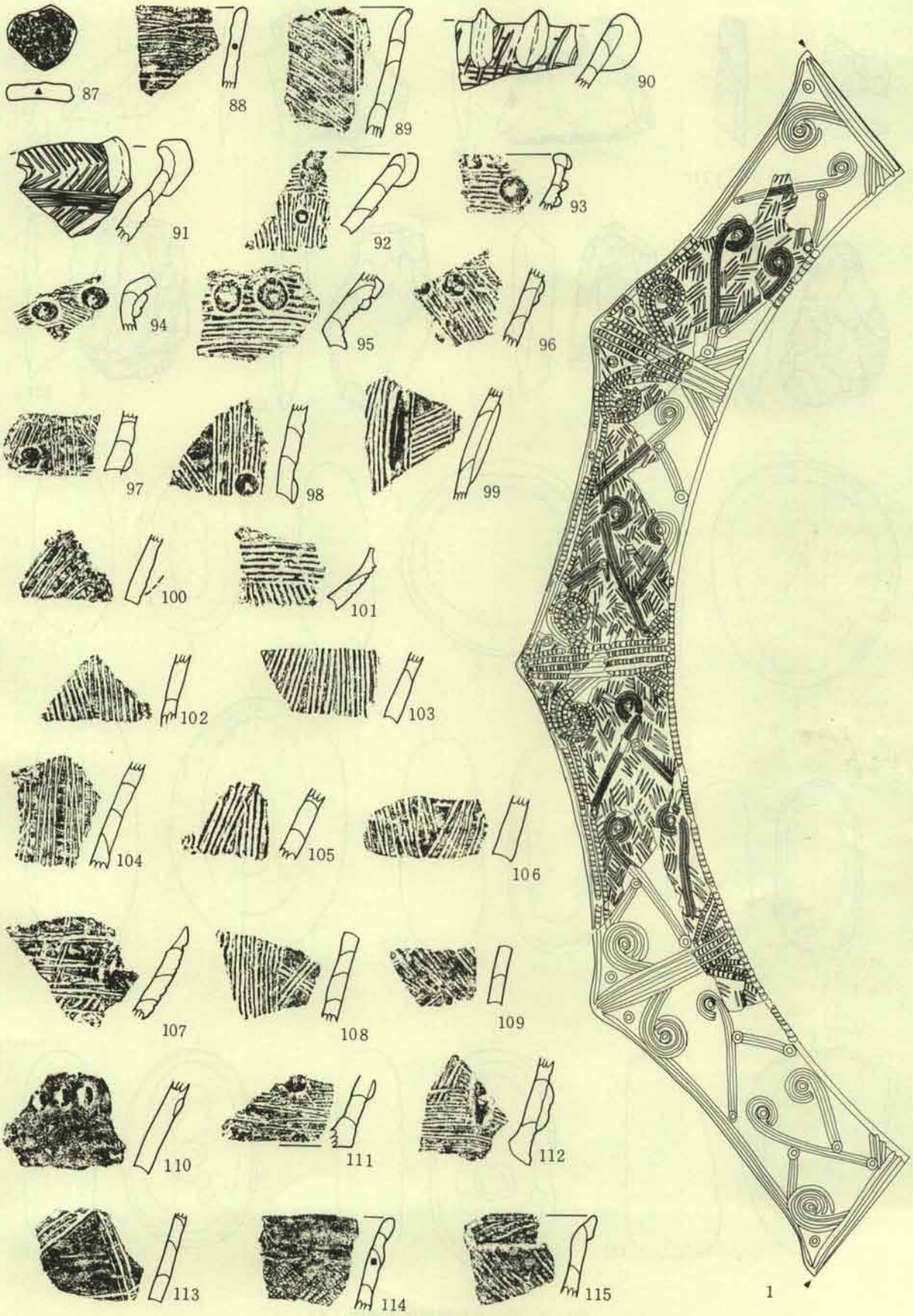
第53図　第20号住居址出土遺物（4）



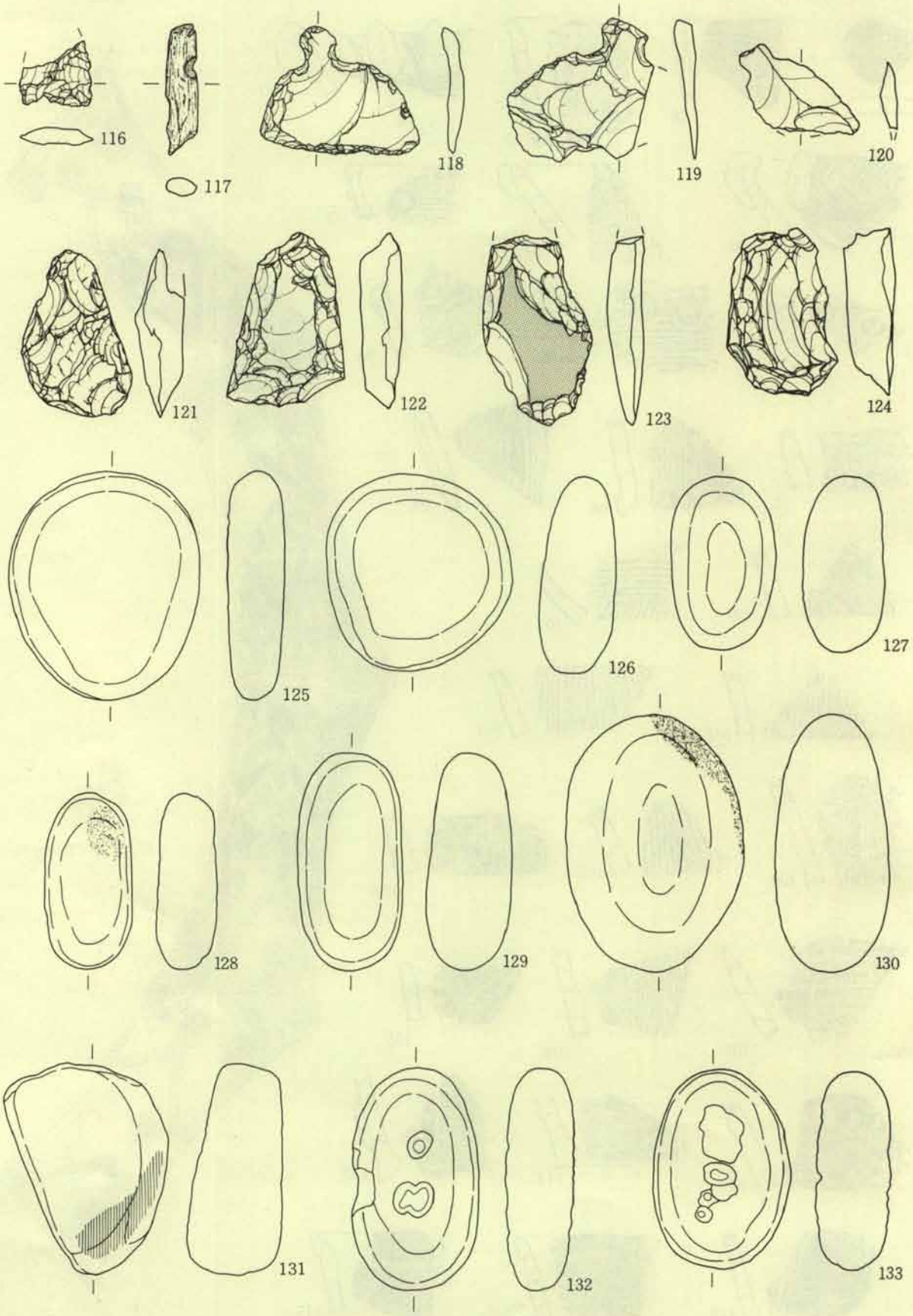
第54図　第20号住居址出土遺物（5）



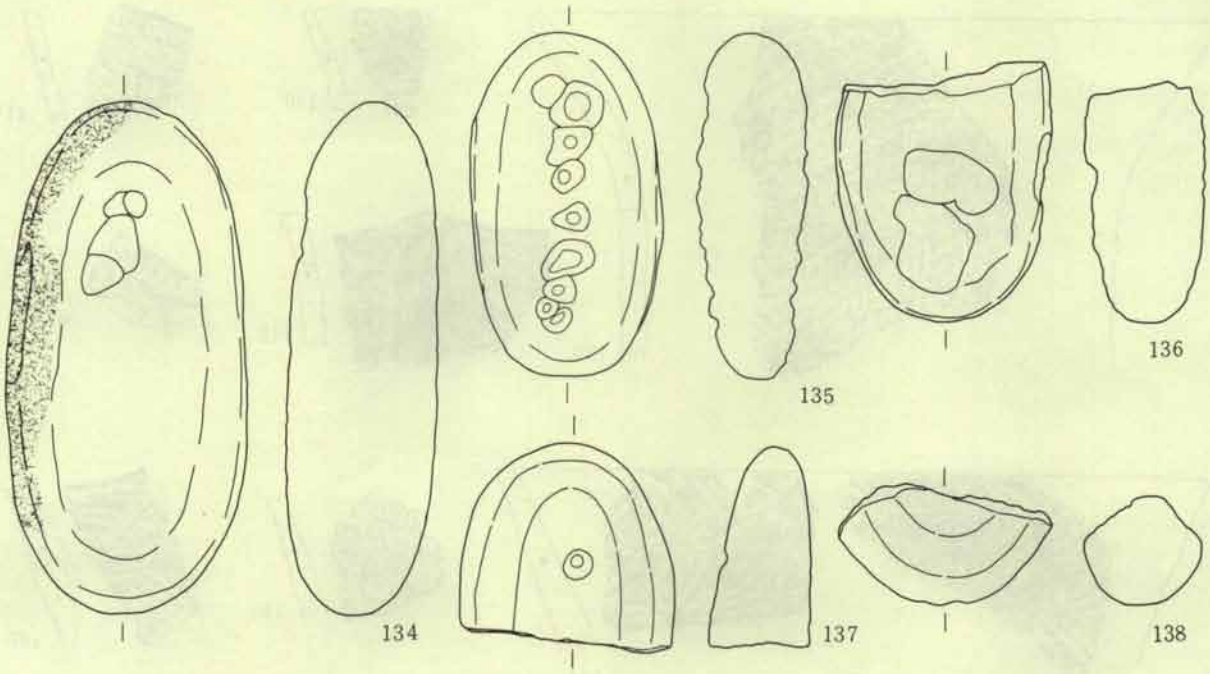
第55図　第20号住居址出土遺物（6）



第56図　第20号住居址出土遺物（7）



第57図　第20号住居址出土遺物（8）



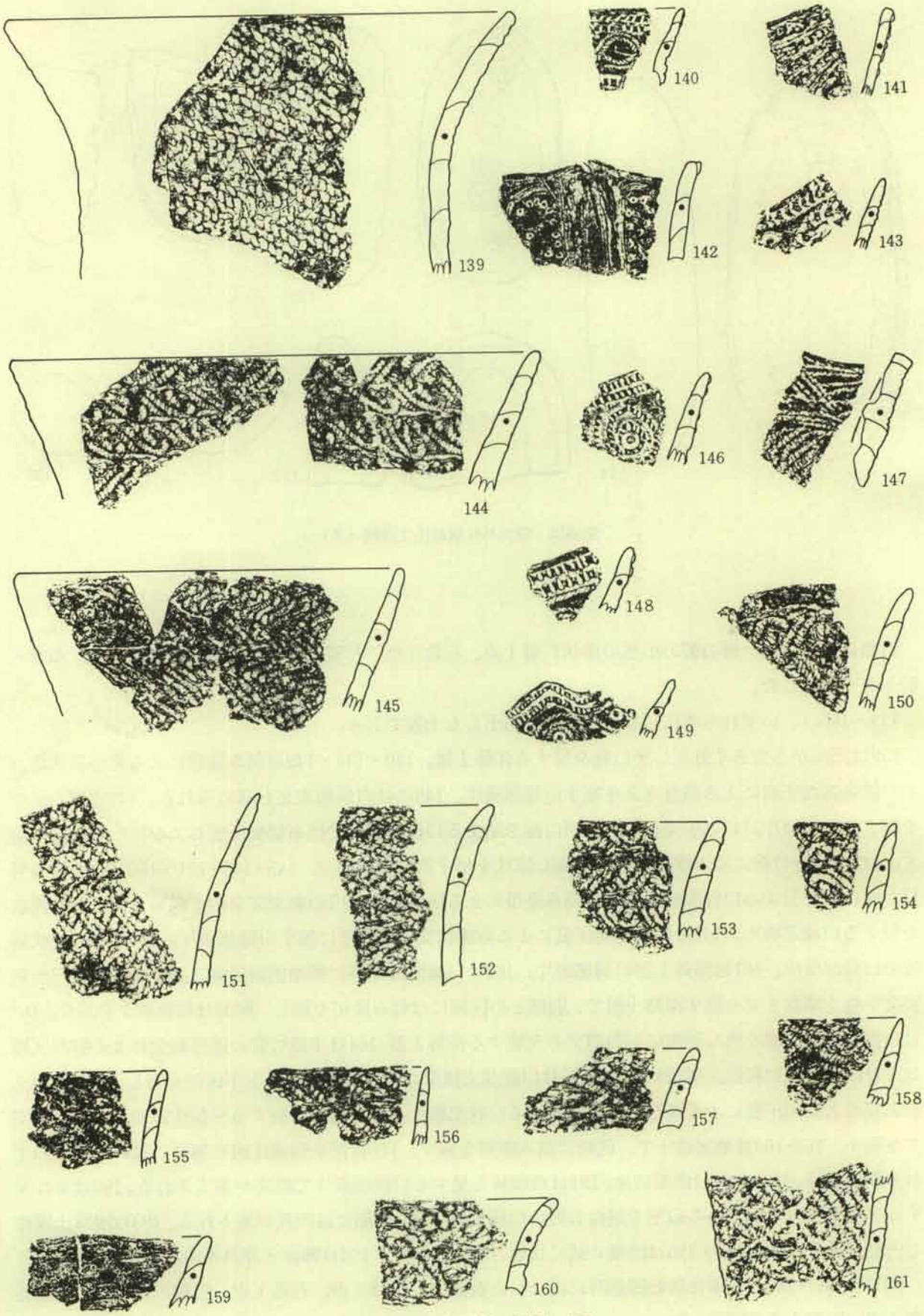
第58図　第20号住居址出土遺物（9）

石器は石鏃1点、滑石製の小型の棒状石器1点、石匙3点、打製石斧4点、磨石・凹石13点、環状石器1点を図示した。

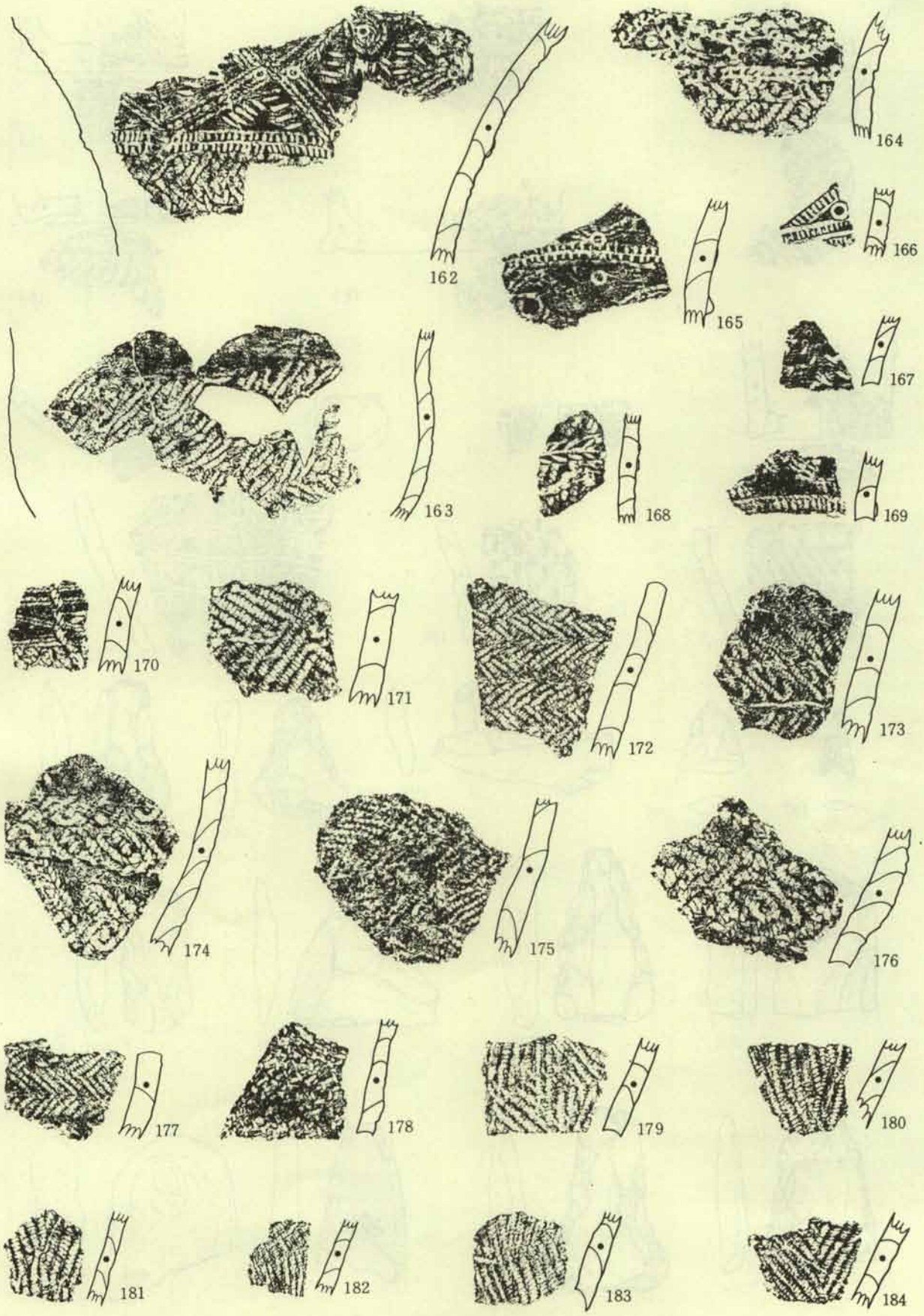
139～196は、いずれも本住居址の確認時に出土した土器である。

139は頚部から大きく外反し平口縁を呈する深鉢土器。140・148・149は刻み隆帯による文様帯区画および撚糸側面圧痕による渦巻き文を施す口縁部破片。149には円形刺突文も認められる。141は刻み隆帯を施す口縁部破片。142は小突起を有し平口縁を呈する口縁部破片で撚糸側面圧痕および円形刺突文を施す。143は半截竹管による連続爪形文を施し波状を呈する口縁部破片。145・146・151～160はいずれも外反し平口縁を呈する口縁部破片。146は刻み隆帯による区画および円形刺突文を抱く渦巻き文を施し波状を呈する口縁部破片。147は撚糸側面圧痕による鋸歯状文を口縁部に施す口縁部破片。150はやや波状気味の口縁部破片。161は深鉢土器の胴部破片。162は口縁部文様帯に撚糸側面圧痕で菱形文および円形刺突文を抱く渦巻き文を施す深鉢土器で、胴部との区画には刻み隆帯を施し、胴部は結節縄文を施す。163は口縁部に無文部を有し胴部に結節縄文を充填する深鉢土器。164は半截竹管の連続刺突による胴部区画および円弧文を口縁部文様帯に施す。165は口縁部文様帯に刻み隆帯による上下区画を有し、円形刺突文および撚糸側面圧痕による渦巻き文を充填する口縁部破片。166は刻みを有する平行沈線および円形刺突文を施す。168・169は頚部破片で。区画に刻み隆帯を施す。170は撚糸側面圧痕を施す。171～184はいずれも胴部破片。185～190は底部破片。191は角頭状を呈する口縁部破片で縄文が施文される。192はミニュチュア土器で丸い胴部から頚部で屈曲し短い口縁を有する。頚部には円孔が施される。193は浅鉢土器片で円孔が施される。194・195は諸磯c式に比定される土器片。196は興津・浮島系の土器片。

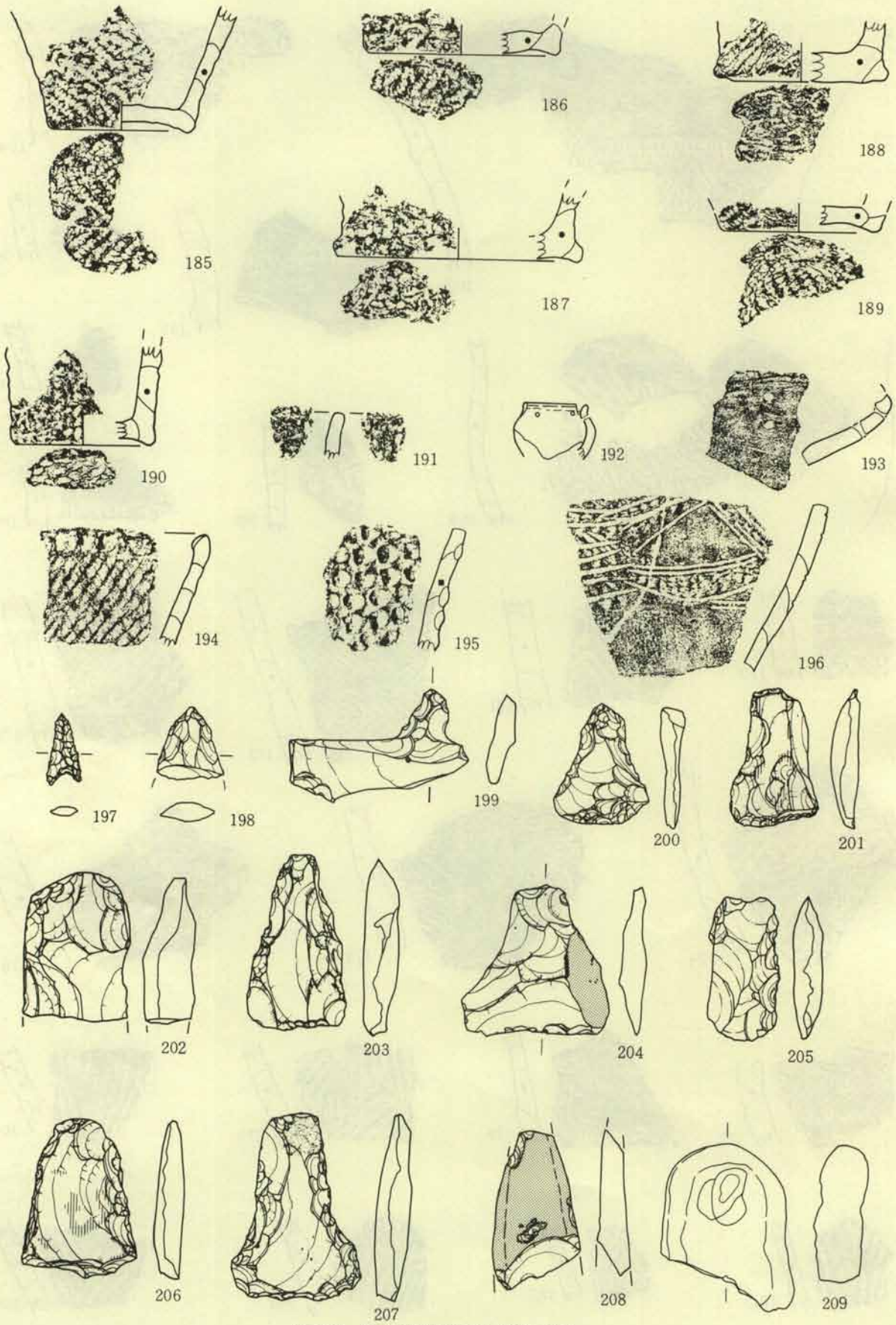
同じく197～209は、本住居址確認時に出土した石器で、石鏃2点、石匙1点、打製石斧8点、磨製石斧1点、凹石1点を図示した。



第59図　第20号住居址出土遺物（10）



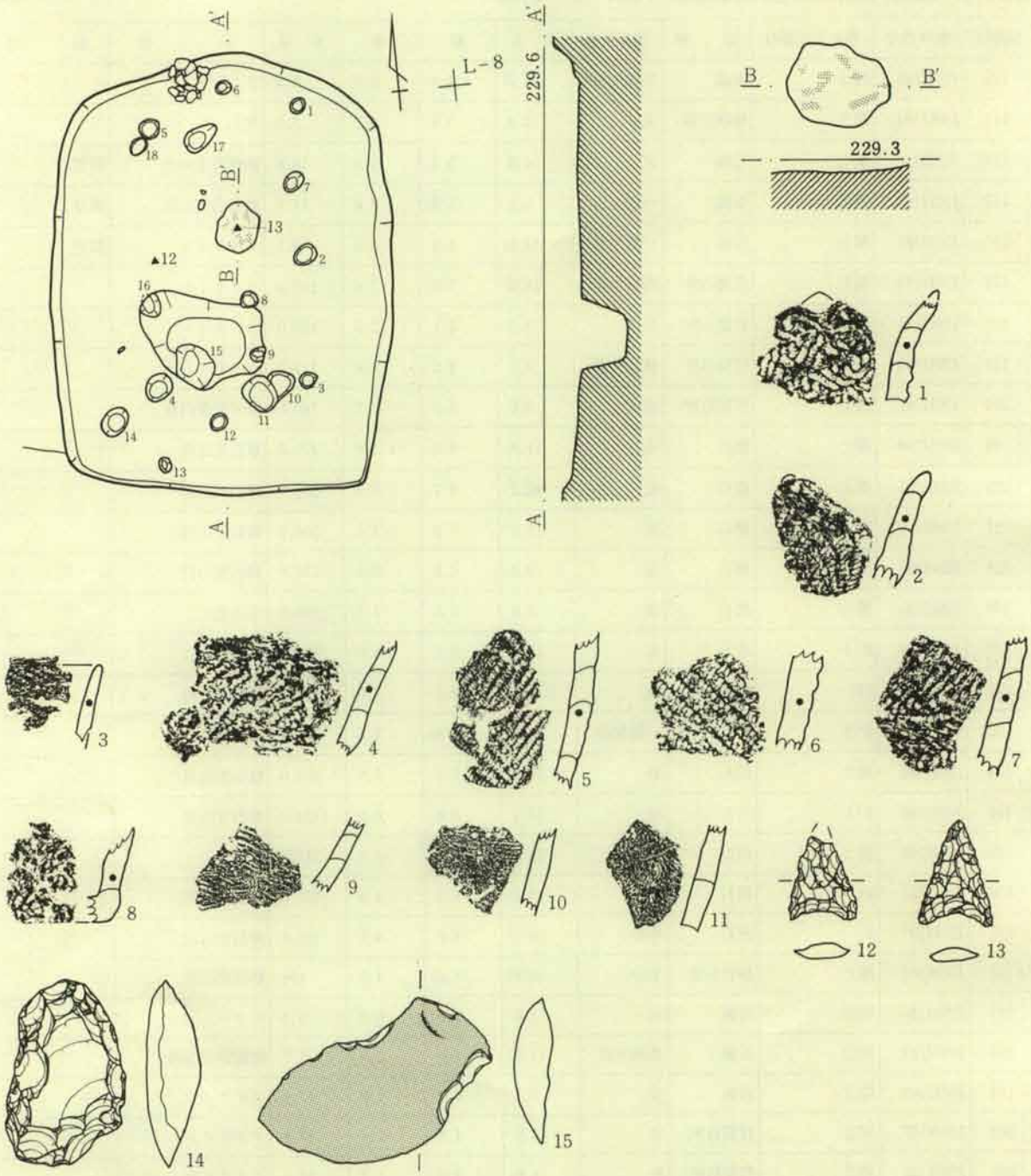
第60図　第20号住居址出土遺物（11）



第61図　第20号住居址出土遺物（12）

第22表　第20号住居址出土石器観察表（第57・58・61図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
116	J20H188	覆土	石鏃	先端欠損	(1.7)	1.9	0.5	1.4	チャート	
117	J20H164	覆土	棒状石器	完	3.4	0.9	0.5	2.0	滑石	
118	J20H190	覆土	石匙	完	4.4	5.5	0.8	16.6	緻密質安山岩	横型
119	J20H191	覆土	石匙	一部欠損	5.0	(5.0)	0.8	11.8	緻密質安山岩	横型
120	J20H189	覆土	石匙	一部欠損	(3.1)	4.2	0.6	6.1	デイサイト	横型
121	J20H174	覆土	打製石斧	基部欠損	(8.6)	5.8	2.6	109.0	デイサイト	
122	J20H175	覆土	打製石斧	完	9.0	6.1	2.3	139.0	デイサイト	
123	J20H162	覆土	打製石斧	基部欠損	9.7	5.6	2.0	114.0	デイサイト	
124	J20H161	覆土	打製石斧	完	8.6	5.8	2.7	143.0	緻密質安山岩	
125	J20H200	覆土	磨石	完	11.8	9.9	3.0	472.0	輝石安山岩	
126	J20H201	覆土	磨石	完	10.2	9.7	3.9	510.0	輝石安山岩	
127	J20H206	覆土	磨石	完	11.2	5.5	4.5	396.0	輝石安山岩	
128	J20H205	52	磨石	完	9.0	4.6	3.2	174.0	輝石安山岩	
129	J20H193	覆土	磨石	完	9.0	5.5	4.3	289.0	安山岩	
130	J20H194	炉3	磨石	完	13.3	9.2	6.0	834.0	輝石安山岩	
131	J20H203	172	磨石	完	11.1	8.5	5.0	592.0	輝石安山岩	
132	J20H192	炉2	凹石	一部欠損	11.6	(6.6)	3.6	344.0	安山岩	
133	J20H195	覆土	凹石	完	10.4	7.2	3.9	358.0	輝石安山岩	
134	J20H196	炉1	凹石	完	20.1	9.6	6.0	1528.0	輝石安山岩	
135	J20H199	覆土	凹石	完	13.5	7.2	4.5	512.0	安山岩	
136	J20H202	44	凹石	2/3	(10.2)	8.5	4.9	525.0	輝石安山岩	
137	J20H197	1	凹石	半分	(8.2)	8.6	4.1	352.0	輝石安山岩	
138	J20H204	覆土	環状石器	半分	(4.8)	(8.5)	4.7	196	輝石安山岩	
197	J20H186	周辺	石鏃	完	2.0	1.0	0.3	0.3	チャート	
198	J20H187	周辺	石鏃	基部欠損	(1.9)	1.8	0.5	1.7	緻密質安山岩	
199	J20H165	周辺	石匙	完	4.1	6.4	1.0	17.6	デイサイト	横型
200	J20H167	周辺	打製石斧	完	7.2	4.8	1.5	44.8	デイサイト	
201	J20H166	周辺	打製石斧	完	6.9	5.0	1.3	30.4	デイサイト	
202	J20H170	周辺	打製石斧	刃部欠損	(7.8)	5.6	2.8	147.0	緻密質安山岩	
203	J20H171	周辺	打製石斧	完	9.2	5.3	2.0	94.0	デイサイト	
204	J20H168	周辺	打製石斧	完	7.9	7.9	1.4	75.5	デイサイト	
205	J20H169	周辺	打製石斧	完	7.5	3.7	1.6	58.5	デイサイト	
206	J20H172	周辺	打製石斧	完	8.5	6.2	1.6	89.5	デイサイト	
207	J20H163	周辺	打製石斧	完	10.0	6.9	2.0	106.0	緻密質安山岩	
208	J20H173	周辺	磨製石斧	刃部欠損	(8.5)	4.7	1.8	71.0	緻密質安山岩	
209	J20H198	周辺	凹石	2/3	(9.0)	7.1	2.9	160.0	輝石安山岩	



第62図　第22号住居址平・断面図および出土遺物

第22号住居址（第62図、ＰＬ－９）

本住居址は、調査区の東部（Ｍ・Ｌ－７Ｇ）、標高230.0前後に位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北4.10m、東西3.10mを測る。壁は7～31cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは17本確認されているが、主柱穴の確認はできなかった。

炉址は、中央やや北寄りで検出された地床炉である。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低く、明確な掘り込みも認められなかった。。

本住居址からの遺物の出土は少なく、破片資料が主である。

第22号住居址出土遺物（第62図）

１・２は、外反し波状を呈する口縁部破片で１は結節縄文を、２は０段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。３は外傾し平口縁を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。４～７はいずれも胴部破片で、４は０段多条のＬＲ縄文を、５・６は０段多条のＲＬによる異方向縄文を、７は０段多条のＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を施す。８は底部破片。９～11はいずれも条痕文土器である。

石器は石鏃２点、打製石斧１点、石匙１点を図示した。

第23表　第22号住居址出土石器観察表（第62図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
12	J22H13	4	石鏃	先端欠損	(2.0)	1.6	0.3	1.1	チャート	
13	J22H14	3	石鏃	完	2.4	1.7	0.3	1.1	チャート	
14	J22H15	覆土	打製石斧	完	8.6	5.6	2.5	117.0	デイサイト	
15	J22H12	覆土	石匙	完	5.2	7.1	1.2	37.2	菫青ホルンフェルス	

第23号住居址（第63図、ＰＬ－10）

本住居址は、調査区の中央やや東寄り（Ｋ－６・７Ｇ）、標高229.5～230.0mに位置する。

平面形態は、円形を呈し、規模は、径5.60mを測る。壁は10～35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは45本確認されており、６本主柱穴と思われ、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５がそれらの内の５本に当たり、第３号集石の下に１本存在したものと思われる。

炉址は、確認できなかった。

本住居址からの遺物の出土は多いものの、明確な集中は認められなかった。

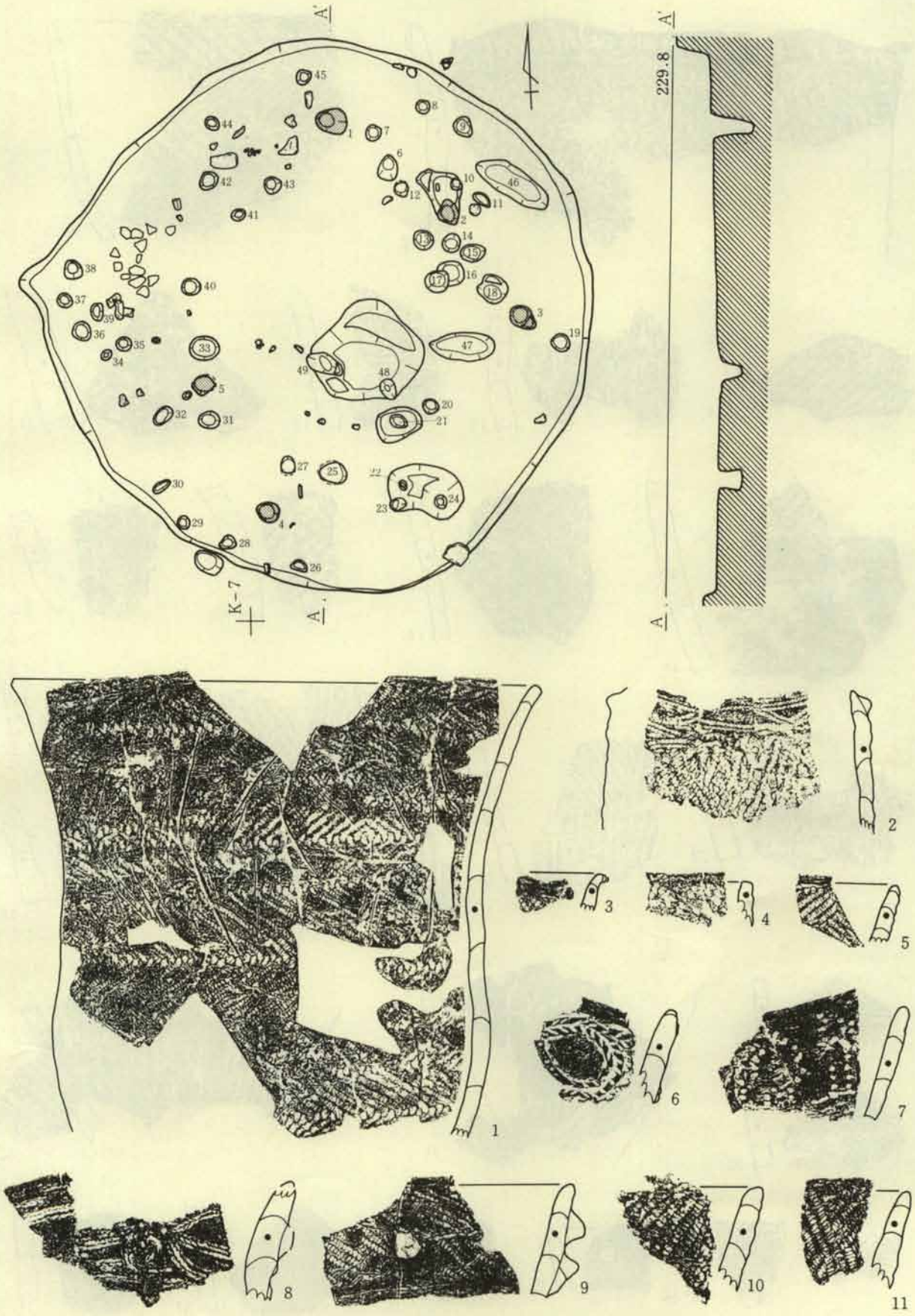
第23号住居址出土遺物（第63～65図、ＰＬ－21）

１は、やや膨らんだ胴部から頚部でややくびれ口縁に外反し平口縁を呈する深鉢土器で０段多条のＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状の縄文を横位に施す。２は内傾し波状口縁を呈する深鉢土器で口縁部の文様帯は肥厚する。この口縁部にはＲとＬの２本１組による撚糸側面圧痕で菱形を構成する。３は外反する口唇部に隆帯を併走させる、以下ＲＬ縄文を施す。４は平口縁を呈する口縁部破片でＬＲ縄文を

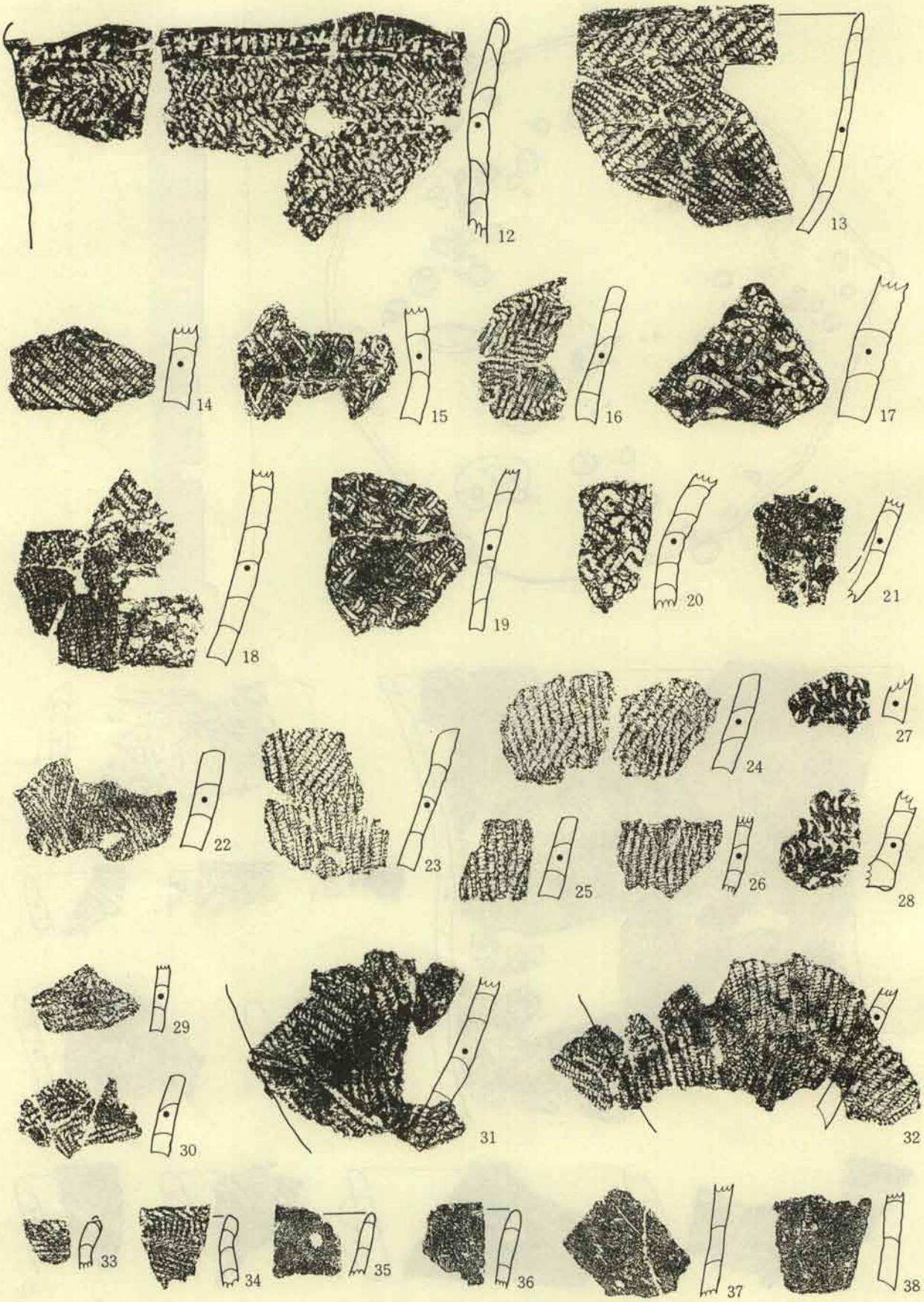
第24表　第23号住居址出土石器観察表（第65図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
45	J23H64	覆土	石鏃	先端欠損	(1.2)	1.5	0.2	0.3	チャート	
46	J23H63	覆土	石鏃	先端欠損	(1.8)	1.7	0.4	0.9	デイサイト	
47	J23H65	覆土	石鏃	先端欠損	(1.6)	1.7	0.4	0.9	チャート	
48	J23H66	覆土	石鏃	完	2.0	1.6	1.3	1.0	黒曜石	
49	J23H67	覆土	石錐	錐部欠損	(1.9)	1.9	0.7	2.4	チャート	
50	J23H69	覆土	石鏃	完	3.2	1.8	0.5	2.3	デイサイト	
51	J23H68	覆土	石鏃	完	3.4	2.6	0.6	6.3	デイサイト	
52	J23H72	覆土	スクレーパー	完	4.5	3.8	1.7	27.8	デイサイト	
53	J23H70	23	打製石斧	完	8.1	4.5	1.8	60.5	デイサイト	
54	J23H74	27	打製石斧	基部欠損	17.7	7.9	4.4	629.0	デイサイト	
55	J23H73	22	スクレーパー	完	8.2	5.3	1.5	38.8	デイサイト	
56	J23H71	31	打製石斧	完	10.4	3.9	1.5	74.5	緻密質安山岩	
57	J23H75	11	凹石	完	16.7	9.9	4.0	801.0	輝石安山岩	
58	J23H76	覆土	磨石	完	11.6	6.7	5.1	470.0	輝石安山岩	
59	J23H80	16	凹石	完	10.9	9.9	4.3	530.0	輝石安山岩	
60	J23H79	13	磨石	完	10.8	9.1	4.2	570.0	輝石安山岩	
61	J23H77	覆土	磨石	1/3	(10.8)	(8.9)	2.8	328.0	輝石安山岩	
62	J23H78	18	石皿	半分	(19.7)	23.8	8.4	5050.0	輝石安山岩	

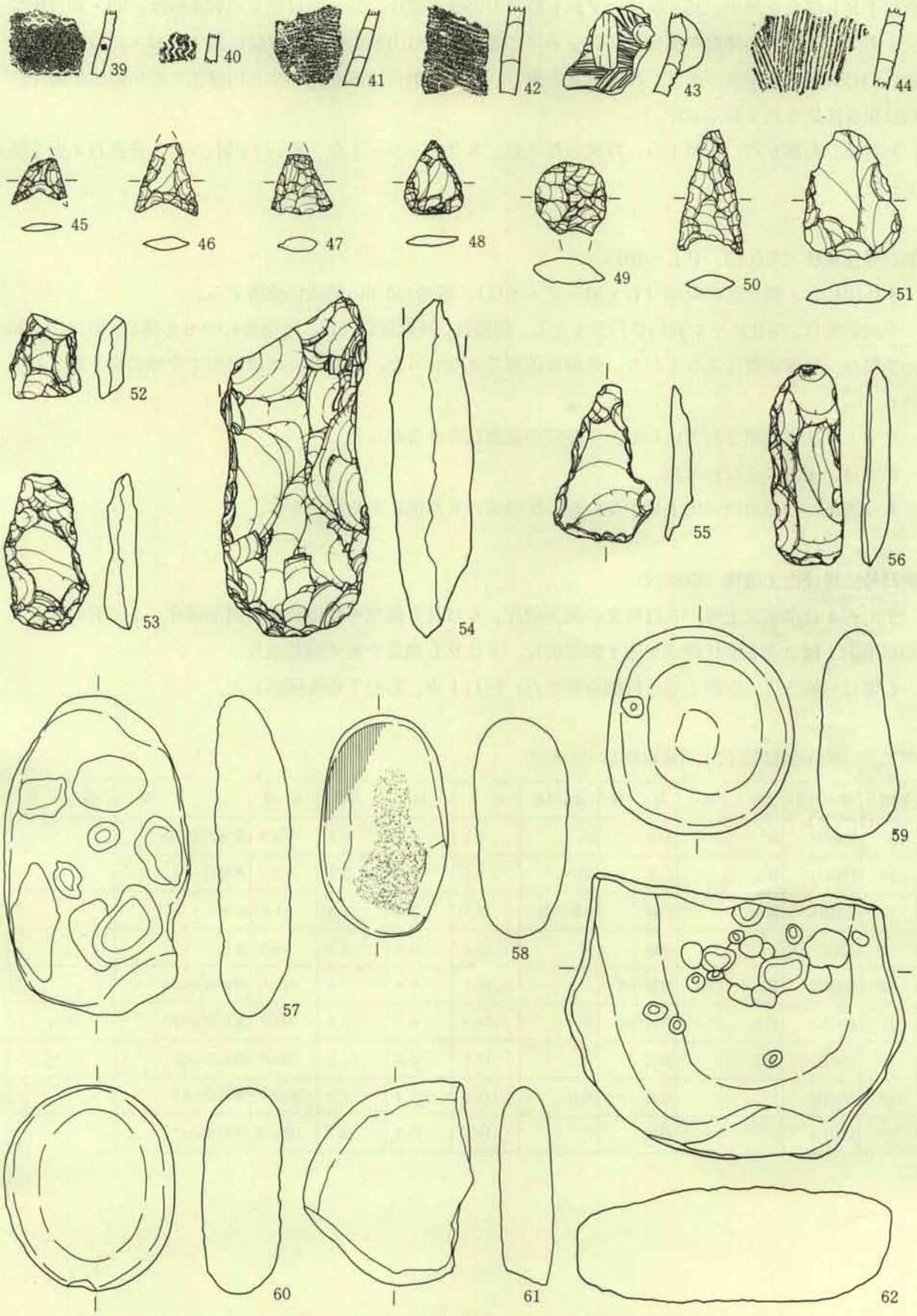
施す。5は外傾し平口縁を呈する口縁部破片で0段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。6は波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯で渦巻き文を構成する。7は外傾し波状を呈する口縁部破片で刺突による渦巻き文を施す。8は波状を呈するものと思われる口縁部破片でＲの3本1組の撚糸側面圧痕で弧状の文様帯を構成する。9は平口縁を呈する口縁部破片で、隆帯を円形に貼付・肥厚させＲＬ縄文を施す。10はやや内傾し平口縁を呈する口縁部破片で0段多条のＬＲを施す。11は平口縁を呈する口縁部破片で0段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。12は外反し小波状を呈する深鉢土器で、口唇部に隆帯を貼付しその上に大きめの刻みを施し、以下ＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を施す。13は胴部から内湾気味に口縁に向かい平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を施す。14～20はいずれも胴部破片で14は0段多条のＲＬ縄文を、15は回転絡条体の一種を、16は0段多条のＲＬ・ＬＲの結束第1種による羽状縄文を、17は結節縄文を、18は0段多条のＲＬによる異方向縄文を、19は回転絡条体の一種を、20は結節縄文をそれぞれ施す。21は尖底を呈するものと思われる底部破片でＲＬとＬＲを施す。22～26はいずれも0段多条の原体による異方向縄文を施す胴部破片で、22・24・25はＲＬとＬＲを、23・26はＲＬをそれぞれ施す。27・28は爪形文を施す胴部及び底部破片で同一個体と思われる。29はＲＬ縄文を施す胴部破片。30は0段多条のＲＬ・ＬＲ結束第1種による羽状縄文を施す胴部破片。31・32は尖底を呈する底部破片で0段多条のＲＬとＬＲによる異方向縄文を施す。33は外反しやや肥厚気味の口唇部を有する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。34は外反する口縁部破片で口唇部にＬＲ縄文



第63図　第23号住居址平・断面図および出土遺物（1）



第64図　第23号住居址出土遺物（2）



第65図　第23号住居址出土遺物（3）

を以下ＲＬ縄文を施す。35・36はいずれも無文の口縁部破片。37・38は無文の胴部破片。39・40は押型文土器で39は楕円の押型を横位に間隔をあけて施す。40は山形の押型を縦位に施す。41・42は条痕文土器。43は貝殻状隆帯及びボタン状貼付文を施し。地文に集合沈線を充填する口縁部に近い部位の破片。44は集合沈線を施す胴部破片。

石器は、石鏃６点、石錐１点、打製石斧４点、スクレーパー１点、磨石・凹石５点、多孔石１点を図示した。

第24号住居址（第66図、ＰＬ―10）

本住居址は、調査区の東部（Ｌ・Ｍ―７・８Ｇ）、標高230.0m前後に位置する。

平面形態は、南北にやや長い楕円形を呈し、規模は、長軸長4.70m、短軸長4.00mを測る。壁は10～26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっている。

ピットは10本確認されているが、主柱穴の確認はできなかった。

炉址は、確認できなかった。

本住居址からの遺物の出土は少ないが、住居址の北西部にやや集中する。

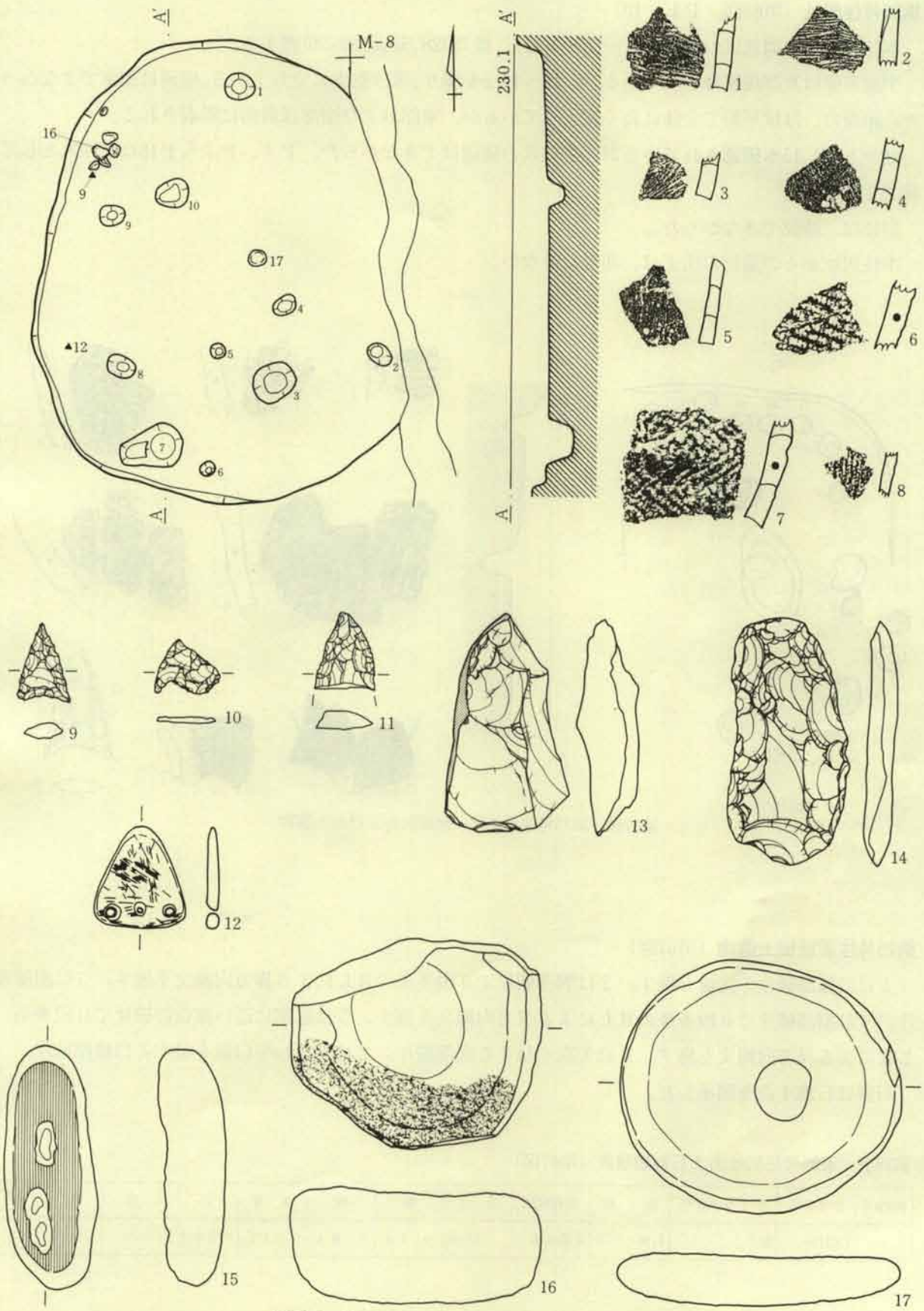
第24号住居址出土遺物（第66図）

１から４は条痕文土器。５は無文の胴部破片。６はＲＬ縄文を多段に施す胴部破片。７はＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を施す胴部破片。８はＲＬ縄文を施す胴部破片。

石器は石鏃３点、垂飾１点、打製石斧２点、凹石１点、石皿２点を図示した。

第25表　第24号住居址出土石器観察表（第66図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
9	J24H12	3	石鏃	完	2.1	1.5	0.4	0.9	緻密質安山岩	
10	J24H11	覆土	石鏃	完	1.5	1.7	0.2	0.4	黒曜石	
11	J24H10	覆土	石鏃	基部欠損	(2.1)	1.6	0.5	1.7	チャート	
12	J24H9	4	垂飾	完	3.7	3.2	0.5	8.9	滑石	
13	J24H14	覆土	打製石斧	完	11.3	6.4	3.4	214.0	緻密質安山岩	
14	J24H13	覆土	打製石斧	完	12.8	6.5	1.8	149.0	緻密質安山岩	
15	J24H17	覆土	凹石	完	12.6	5.0	3.5	285.0	輝石安山岩	
16	J24H15	2	石皿	半分	(14.7)	17.4	8.2	3064.0	輝石安山岩	
17	J24H16	5	石皿	完	19.7	17.7	3.7	1662.0	輝石安山岩	



第66図　第24号住居址平・断面図および出土遺物

第25号住居址（第67図、ＰＬ—10）

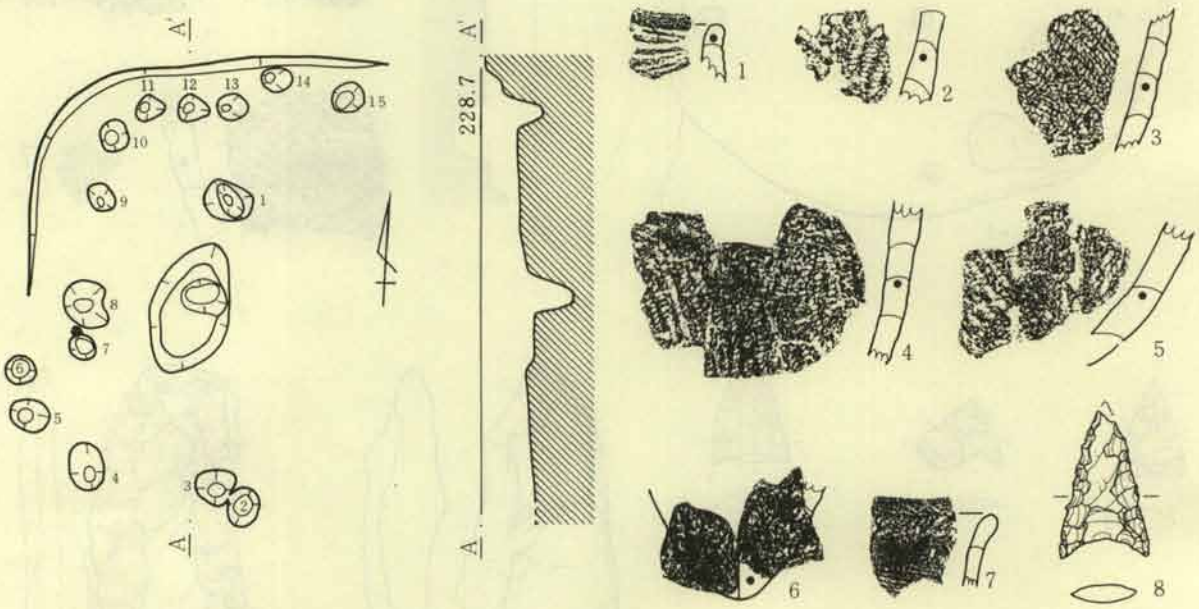
本住居址は、調査区の東部（Ｌ－７・８Ｇ）、標高228.5m前後に位置する。

平面形態は及び規模は不明である。壁は3～13cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっているが、東部および南部は斜面に吸収される。

ピットは　15本確認されているが、主柱穴の確認はできなかった。Ｐ４、Ｐ７～Ｐ15は壁柱穴として確認できる。

炉址は、確認できなかった。。

本住居址からの遺物の出土は、非常に少ない。



第67図　第25号住居址平・断面図および出土遺物

第25号住居址出土遺物（第67図）

１は口縁部破片で沈線を施す。２は胴部破片で０段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。３は胴部破片。４は胴部破片で０段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。５は底部に近い部位の破片で０段多条のＬＲによる異方向縄文を施す。６は尖底を呈する底部破片。７は外反し平口縁を呈する口縁部破片。

石器は石鏃１点を図示した。

第26表　第25号住居址出土石器観察表（第67図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
8	J25H10	覆土	石鏃	先端欠損	(3.0)	1.8	0.4	1.7	デイサイト	

第26号住居址（第68図、ＰＬ—10）

本住居址は、調査区の東部（Ｋ—７・８Ｇ）、標高229.0m前後に位置する。

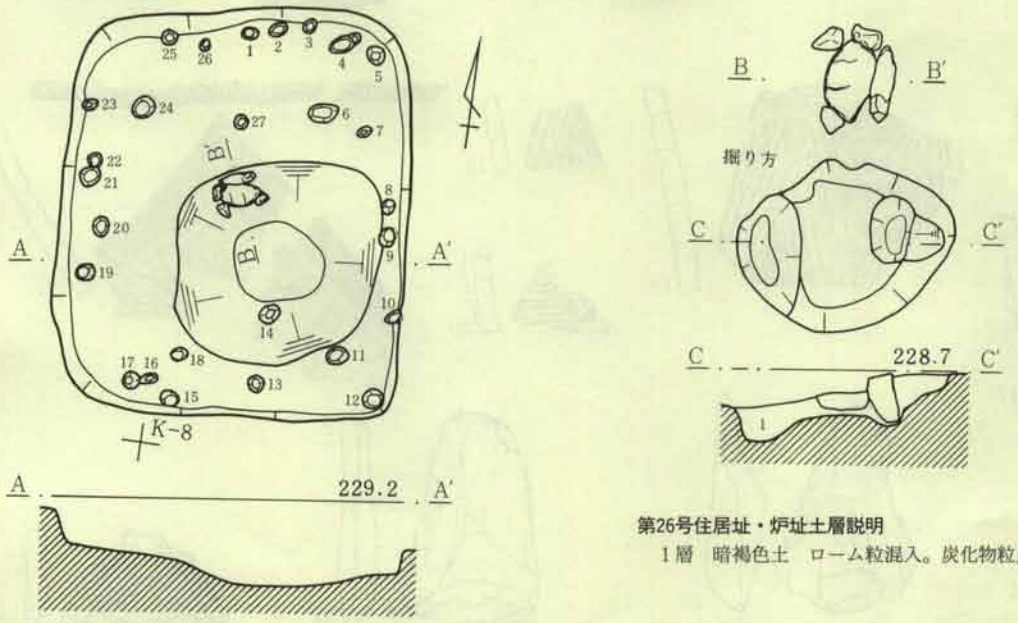
平面形態は、南北に長い長方形を呈し、規模は、南北3.20m、東西2.60mを測る。壁は12～39cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体に良く締まっているが、炉址の南東部は、本住居址以前に構築された第38号土坑のためやや窪む。

ピットは27本確認されているが、主柱穴の確認はできなかった。壁柱穴は北・東・西壁下で確認できる。

炉址は、中央やや北寄りで検出された。偏平な石を１個敷き周囲を４個の石により「コ」の字状に組み南方を開放する。炉址および周辺の焼土の分布は散在的で被熱の程度は低い。

本住居址からの遺物の出土は比較的少なく、明確な集中は認められなかった。

なお、本住居址は当初第５号竪穴遺構として調査をすすめ、炉址の確認をもって住居址として把握できた。



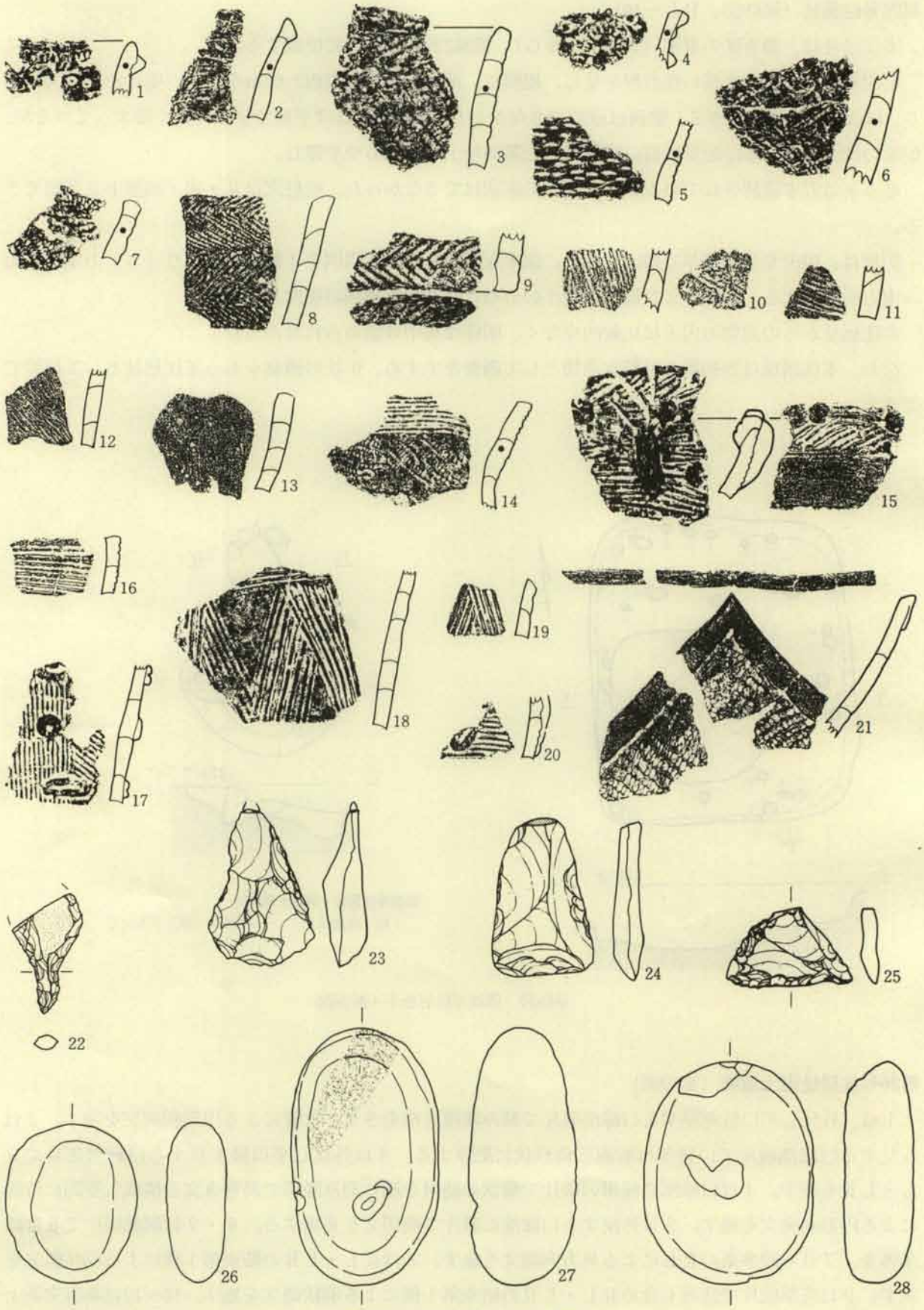
第26号住居址・炉址土層説明

１層　暗褐色土　ローム粒混入。炭化物粒点在

第68図　第26号住居址平・断面図

第26号住居址出土遺物（第69図）

１は、外反し平口縁を呈する口縁部破片で刻み隆帯を横走させ、竹管による円形刺突文を施す。２は外反する口縁部破片で口唇部は断面三角形状に肥厚する。３は外反し平口縁を呈する口縁部破片でＲＬ・ＬＲを施す。４は口縁部文様帯の破片で瘤状の貼付を施し刻み隆帯で渦巻き文を構成し空間に竹管による円形刺突文を施す。５は外反する口縁部の破片で刺切文を充塡する。６・７は胴部破片で６は絡条体を、７は０段多条のＲＬによる異方向縄文を施す。８はＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を施す。９は底部破片で底面も含めＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を施す。10～12は条痕文系土器である。13は無文の土器。14は胴部破片で集合沈線を横走させ、下位にＲＬ縄文を施す。15はやや内



第69図　第26号住居址出土遺物

傾する口縁部破片で口唇部内部に肥厚し、貝殻状貼付文を施す。16～20はいずれも集合沈線を施す胴部破片である。17・20にはボタン状の貼付文も認められる。21はやや内湾気味に開き波状を呈する口縁部破片で口唇部は折り返しにより肥厚する地文はＲＬ縄文を施す。

石器は、石錐１点、打製石斧２点、スクレーパー１点、磨石３点を図示した。

第27表　第26号住居址出土石器観察表（第69図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
22	J26H23	覆土	石錐	基部欠損	(3.2)	1.9	0.4	2.5	緻密質安山岩	
23	J26H26	覆土	打製石斧	完	8.3	5.6	2.3	81.5	安山岩質凝灰岩	
24	J26H25	覆土	打製石斧	完	8.4	5.3	1.7	77.5	ホルンフェルス	
25	J26H24	覆土	スクレーパー	完	4.1	6.6	1.0	25.0	緻密質安山岩	
26	J26H28	覆土	磨石	完	7.0	8.6	3.7	231.0	輝石安山岩	
27	J26H27	覆土	磨石	完	13.6	7.8	5.7	734.0	輝石安山岩	炭化物付着
28	J26H29	覆土	磨石	完	11.8	9.0	3.7	579.0	輝石安山岩	

第２節　竪穴遺構

第１号竪穴遺構（第70図、ＰＬ―11）

本遺構は、調査区の中央部（Ｊ・Ｋ－４・５Ｇ）、標高229.5m前後に位置する。

平面形態は、円形を呈するものと思われる。規模は径3.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度9～35cmを測る。

遺物は、縄文時代前期の土器片および石器が出土している。

第28表　第１号竪穴遺構出土石器観察表（第71図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
13	J１T13	覆土	石鏃	完	2.4	1.6	0.4	1.4	チャート	
14	J１T16	覆土	打製石斧	完	8.9	4.9	2.1	92.5	流紋岩	
15	J１T17	1	磨石	完	11.4	9.7	5.5	707.0	輝石安山岩	
16	J１T15	2	礫器	完	19.9	7.7	4.5	695.0	デイサイト	
17	J１T14	3	礫器	完	19.4	8.4	4.9	921.0	ホルンフェルス	

第１号竪穴遺構出土遺物（第71図）

１は外反し平口縁を呈する小型の深鉢土器で０段多条のＲＬとＬＲを施す。２～６はいずれも胴部破片で、２は無節のＲ縄文を、３はＲＬ縄文を、４は０段多条のＬＲを、５は０段多条のＲＬを、６は０段多条のＲＬを施す。７～９はいずれも尖底を呈する底部破片で、７・８は０段多条のＲＬを、９は尖底を呈する底部破片で０段多条のＲＬを施す。10～12は条痕文土器。

石器は石鏃１点、打製石斧１点、磨石１点、礫器２点を図示した。

第２号竪穴遺構（第70図）

本遺構は、調査区の中央部（Ｊ－４・５Ｇ）、標高229.0m前後に位置する。本遺構の北西には第１号竪穴遺構が位置する。

平面形態は、不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度26cmを測る。

遺物は、縄文時代前期の土器片および石器が出土している。

第２号竪穴遺構出土遺物（第72図）

１は口唇下に太めの沈線を横走させる口縁部破片。２～７は条痕文土器。８・９は諸磯ａ式の胴部破片でＲＬ縄文を施す。

石器は石鏃２点、打製石斧３点、スクレーパー１点、磨石１点を図示した。

第29表　第２号竪穴遺構出土石器観察表（第72図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
10	J２T10	覆土	石鏃	完	2.1	1.1	0.7	1.0	黒曜石	
11	J２T11	覆土	石鏃	先端部欠損	(2.0)	2.0	0.5	1.8	チャート	
12	J２T12	覆土	打製石斧	完	7.8	6.1	2.5	115.0	緻密質安山岩	
13	J２T13	覆土	打製石斧	完	9.3	5.1	1.8	93.5	安山岩質凝灰岩	
14	J２T15	覆土	打製石斧	完	11.8	9.1	3.5	368.0	緻密質安山岩	
15	J２T14	覆土	スクレーパー	完	11.0	6.3	3.8	285.0	デイサイト	
16	J２T16	1	磨石	完	11.6	10.1	6.8	1122.0	輝石安山岩	

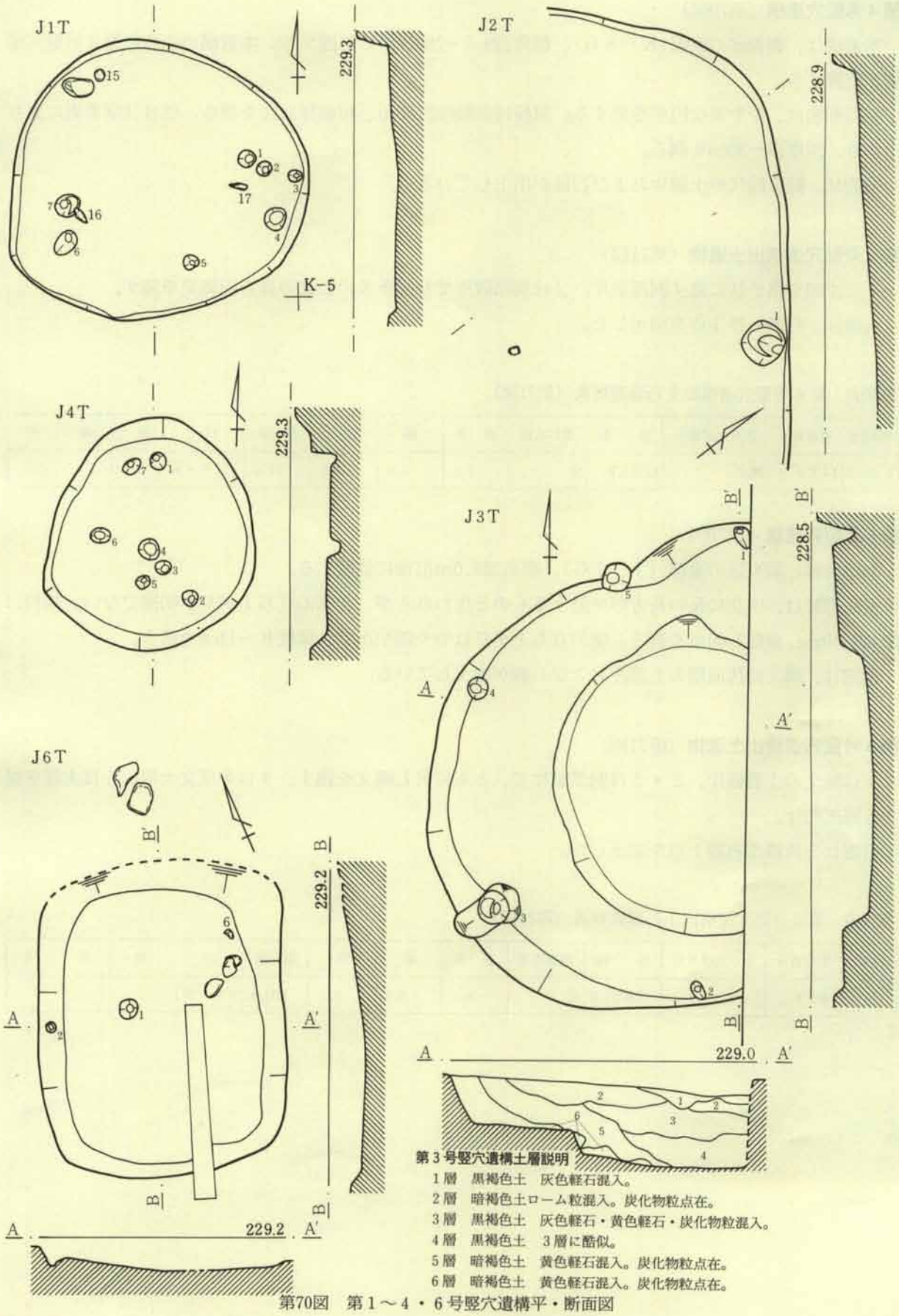
第３号竪穴遺構（第70図、ＰＬ－11）

本遺構は、調査区の東部（Ｊ・Ｋ－８Ｇ）、標高228.5～229.0mに位置し一部は調査区外に存在する。

平面形態は、円形を呈する。規模は径4.68mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度12～54cmを測る。床面は有段で24～30cmの段差を測り、さらに同心円状に円形の掘り込み（径3.24m）を有する。

ピットは５本確認できたが、ほぼ等間隔に配置し壁柱穴として把握できる。

遺物は少なく、図示できるものはなかった。



第3号竪穴遺構土層説明

1層　黒褐色土　灰色軽石混入。
2層　暗褐色土ローム粒混入。炭化物粒点在。
3層　黒褐色土　灰色軽石・黄色軽石・炭化物粒混入。
4層　黒褐色土　3層に酷似。
5層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。
6層　暗褐色土　黄色軽石混入。炭化物粒点在。

第70図　第1～4・6号竪穴遺構平・断面図

第４号竪穴遺構（第70図）

本遺構は、調査区の東部（K－８G）、標高229.5～230.0mに位置する。本遺構の南西に第３号竪穴遺構が位置する。

平面形態は、やや歪な円形を呈する。規模は長軸径2.50m、短軸径2.20を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度17～30cmを測る。

遺物は、縄文時代の土器片および石器が出土している。

第４号竪穴遺構出土遺物（第71図）

１は沈線を格子状に施す胴部破片。２は胴部破片で０段多条のＬＲの異方向縄文を施す。

石器は、打製石斧１点を図示した。

第30表　第４号竪穴遺構出土石器観察表（第71図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
3	J４T３	覆土	打製石斧	完	7.1	5.4	1.9	61.0	デイサイト	

第６号竪穴遺構（第70図）

本遺構は、調査区の東部（Ｊ－７Ｇ）、標高229.0m前後に位置する。

平面形態は、南北に長い長方形を呈するものと思われるが、北部の立ち上がりが明確でない。規模は南北3.40m、東西2.60mを測る。壁の立ち上がりはやや緩やかで、深度９～11cmを測る。

遺物は、縄文時代前期の土器片および石器が出土している。

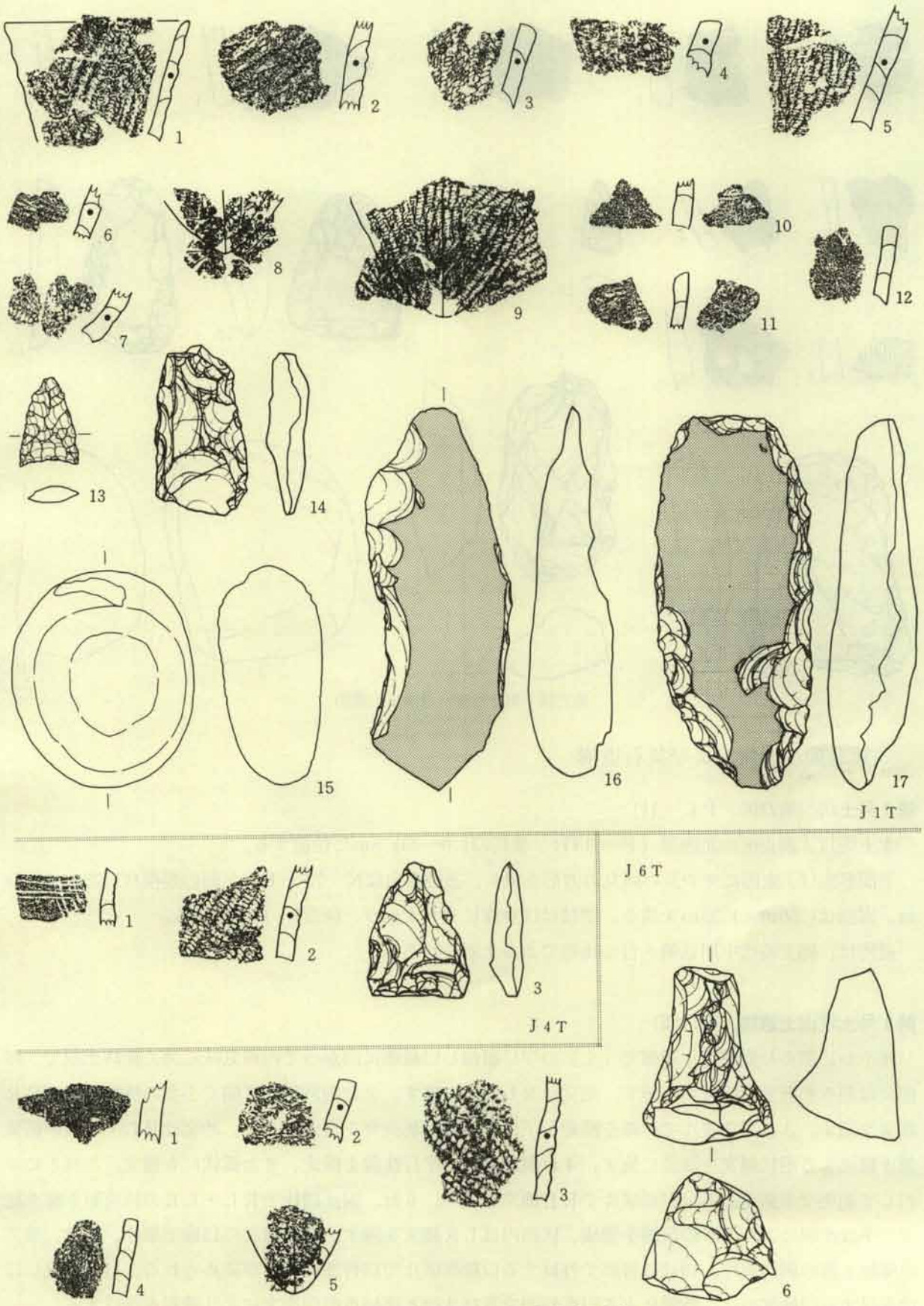
第６号竪穴遺構出土遺物（第71図）

１は無文の土器破片。２・３は胴部破片で、ともにＲＬ縄文を施す。４は条痕文土器。５は尖底を呈する底部破片。

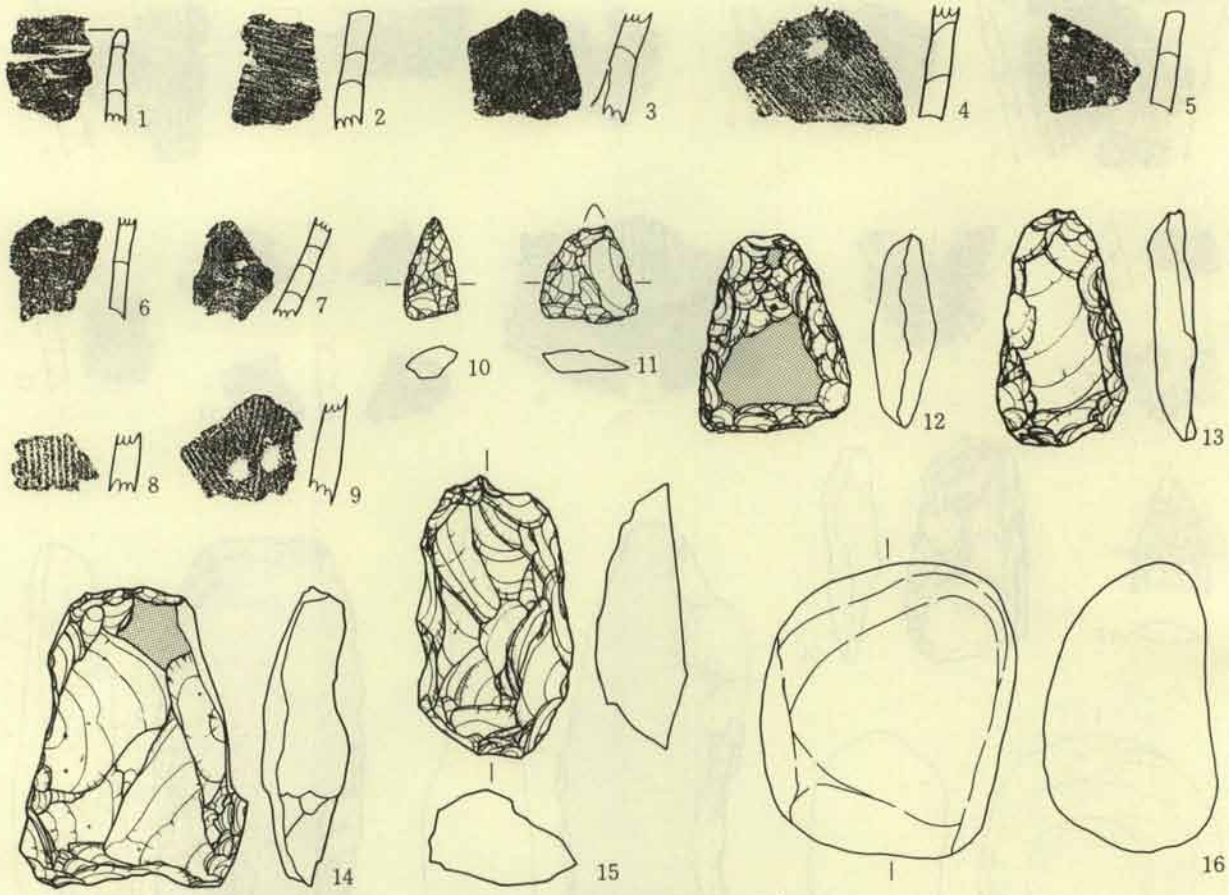
石器は三角錐型石器１点を図示した。

第31表　第６号竪穴遺構出土石器観察表（第71図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
6	J６T６	1	三角錐型石器	完	9.4	6.8	5.7	320.0	デイサイト	



第71図　第１・４・６号竪穴遺構出土遺物



第72図　第２号竪穴遺構出土遺物

第３節　土坑および集石遺構

第１号土坑（第73図、ＰＬ―11）

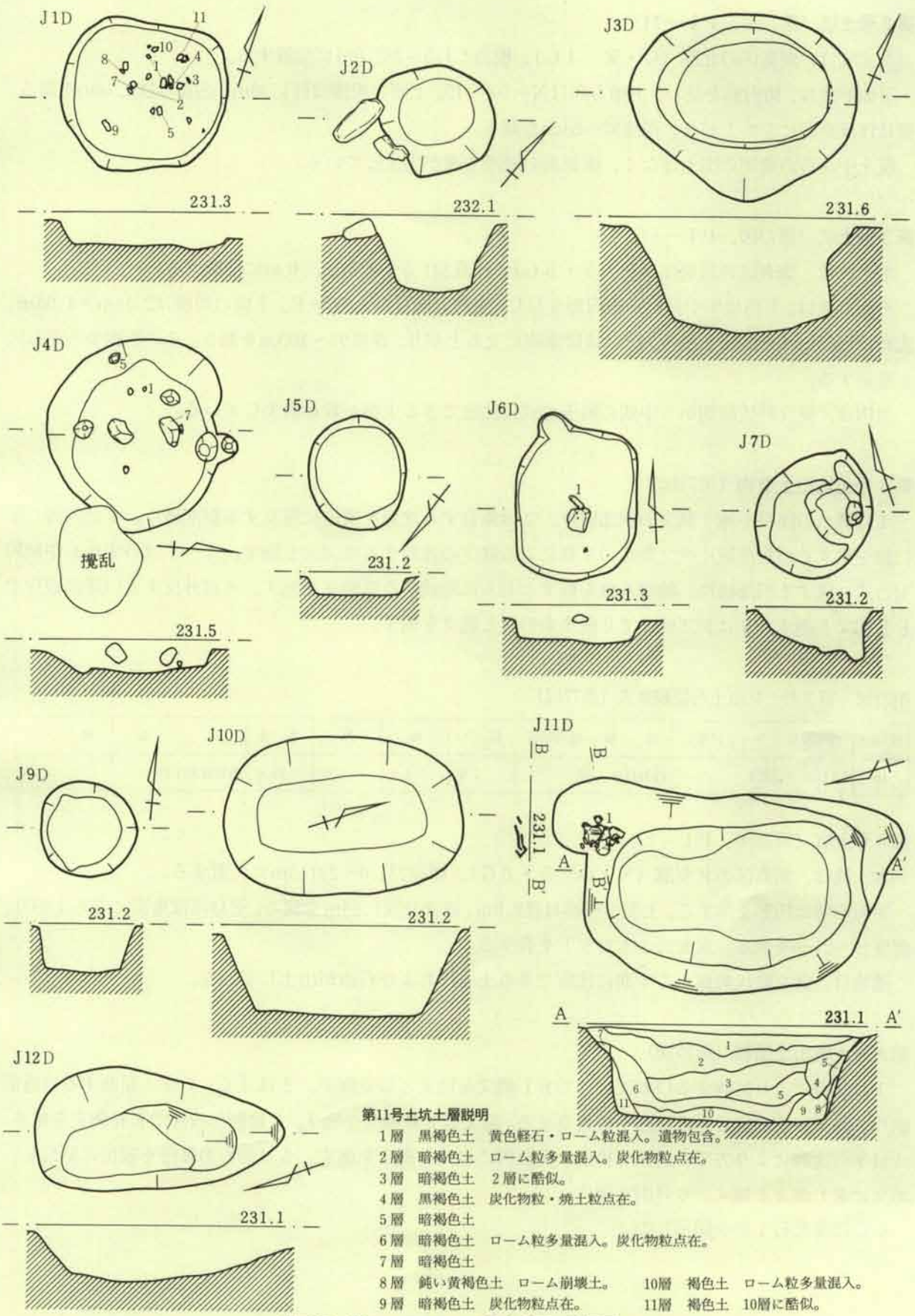
本土坑は、調査区の北西部（Ｐ－３Ｇ）、標高231.0～231.5mに位置する。

平面形態は、東西にやや長い隅丸の方形を呈し、主軸方向はＮ－73°－Ｅ。上面の規模は1.75m×1.58m、底面は1.55m×1.35mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度8～16cmを測る。

遺物は、縄文時代中期五領ヶ台に比定できる土器片がある。

第１号土坑出土遺物（第77図）

緩やかに膨らむ胴部から頸部で「く」の字に屈曲し口縁部に向かって内湾気味に開く深鉢土器で、頸部には刻みを有する貼付文を施す。地文はＲＬ縄文を施す。２は内湾気味に開く小型の浅鉢土器でＲＲ縄文を施す。３は胴部破片で沈線を横走し下位に連続の刺突文を併走させる。地文はＲＬ・ＬＲの結束第１種による羽状縄文を縦位に施す。４は胴部破片で平行沈線を横走、また弧状にも施文、これらに並行して刺突文を施す。５は胴部破片でＲＬ縄文を施す。６は、胴部破片でＲＬ・ＬＲの結束第２種を施す。７は沈線により方形の区画を構成、区画内はＬＲ縄文を施す。８は無文の口縁部破片。９は、無文の深鉢土器の胴部破片。10は口唇部で外反する口縁部破片で口唇部に刻みが認められる。11は外反し波状を呈する口縁部破片、竹管による円形刺突文及び沈線と連続爪形刺突文により菱形を構成する。



第11号土坑土層説明

1層　黒褐色土　黄色軽石・ローム粒混入。遺物包含。
2層　暗褐色土　ローム粒多量混入。炭化物粒点在。
3層　暗褐色土　2層に酷似。
4層　黒褐色土　炭化物粒・焼土粒点在。
5層　暗褐色土
6層　暗褐色土　ローム粒多量混入。炭化物粒点在。
7層　暗褐色土
8層　鈍い黄褐色土　ローム崩壊土。
9層　暗褐色土　炭化物粒点在。
10層　褐色土　ローム粒多量混入。
11層　褐色土　10層に酷似。

第73図　第1～7・9～12号土坑平・断面図

第２号土坑（第73図、ＰＬ－11）

本土坑は、調査区の北部（Ｑ・Ｒ－４Ｇ）、標高231.5～232.0mに位置する。

平面形態は、楕円形を呈し、主軸方向はＮ－50°－Ｅ。上面の規模は径1.30m、底面は径0.78mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度57～61cmを測る。

覆土中からの遺物の出土はなく、確認面の壁際で礫が出土している。

第３号土坑（第73図、ＰＬ－11）

本土坑は、調査区の北東部（Ｐ－５・６Ｇ）、標高231.5～２３２．０mに位置する。

平面形態は、東西にやや長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－69°－Ｅ。上面の規模は2.40m×1.95m、底面は1.65m×1.05mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度94～100cmを測る。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代前期から中期の阿玉台式に比定できる土器が数点出土している。

第３号土坑出土遺物（第77図）

１は低めの隆帯を施す無文の胴部破片。２は集合する沈線を縦位に施文する胴部破片。３は内湾し平口縁を呈する口縁部破片ペン先状の工具による縦位の連続する刺突文を施す。４～７はいずれも中期阿玉台式に属する胴部破片。輪積み痕を残すとともに連続する爪形文を施す。８は外反する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。９は胴部破片で０段多条のＲＬ縄文を施す。

第32図　第３号土坑出土石器観察表（第77図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
10	J３D10	覆土	打製石斧	完	7.0	4.9	1.6	52.0	緻密質安山岩	

第４号土坑（第73図、ＰＬ－11）

本土坑は、調査区の北東部（Ｎ・Ｏ－５・６Ｇ）、標高231.0～231.5mに位置する。

平面形態は円形を呈する。上面の規模は径2.0m、底面は径1.65mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度19～21cmを測る。底面に３本ピットを有する。

遺物は、縄文時代前期から中期に比定できる土器片および石皿が出土している。

第４号土坑出土遺物（第77図）

１は沈線により区画する口縁部破片でＲＬ縄文を地文として施す。２は「く」の字に屈曲する口縁部破片で隆帯および併走する沈線を横走させる。地文はＬＲ縄文を施す。３は胴部破片でＲＲ縄文を施す。４は平行沈線により方形の区画を構成、区画内にはＲＬ縄文を施す。５は低めの隆帯を縦位に貼付し、地文にＲＬ縄文を施す。６は胴部破片。

石器は多孔石１点を図示した。

第33表　第４号土坑出土石器観察表（第77図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
7	J４D７	1	多孔石	完	23.2	27.9	12.3	9.0kg	輝石安山岩	

第５号土坑（第73図）

本土坑は、調査区の北東部（N－６G）、標高231.0～231.5mに位置する。本土坑の北東には第５号住居址が近接する。

平面形態は円形を呈する。主軸方向はN－51°－W。上面の規模は径1.20m、底面は径0.98mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度16～17cmを測る。

出土遺物はなかった。

第６号土坑（第73図）

本土坑は、調査区の北東部（N－６G）、標高231.0～231.5mに位置する。本土坑の北には第５号土坑が、西には第７号土坑が位置する。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はN－8°－E。上面の規模は1.58m×1.26m、底面は1.46m×1.15mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度18～22cmを測る。

遺物は、磨石が出土している。

第６号土坑出土遺物（第78図）

図示した遺物は磨石１点のみである。

第34表　第６号土坑出土石器観察表（第78図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
1	J６D１	2	磨石	完	16.9	5.2	4.1	504.0	ヒン岩	

第７号土坑（第73図）

本土坑は、調査区の北東部（N－６G）、標高231.0～231.5mに位置する。本土坑の西には第６号住居址が位置する。

平面形態は、東西にやや長い長楕円形を呈し、主軸方向はN－69°－W。上面の規模は1.40m×1.18m、底面は1.00m×0.90mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度24cmを測る。

遺物は、縄文時代中期に比定できる土器が出土している。

第７号土坑出土遺物（第78図）

１は口縁部破片で口唇部および直下にＬＲ縄文を施し、沈線を横位に施す。２は交互刺突を施し、以下沈線により方形の区画を構成し、半截竹管による連続刺突を充填する。

第９号土坑（第73図）

本土坑は、調査区の北東部（N－５G）、標高231.0～231.5mに位置する。本土坑は第３号住居址と第６号住居址の中間に位置する。

平面形態は円形を呈する。主軸方向はN－84°－E。上面の規模は径1.04m、底面は径0.75mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度42～46cmを測る。

遺物は、縄文時代の土器片が出土している。

第９号土坑出土遺物（第78図）

１は内湾し平口縁を呈する無文の口縁部破片。２は外傾する口縁部破片で無文。３は胴部破片でＲＬ縄文を施す。

第10号土坑（第73図）

本土坑は、調査区の北東部（N－５G）、標高231.0～231.5mに位置する。本土坑の南東には第６号住居址が、西には第11号土坑が位置する。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はN－15°－E。上面の規模は2.50m×1.56m、底面は1.78m×0.78mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度80～90cmを測る。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代の土器片が出土している。

第10号土坑出土遺物（第78図）

１は沈線を格子状に施す土器片。２は胴部破片でＲＬ縄文を施す。３は無文の胴部破片。４は直立気味に外傾する口縁部破片で隆帯を横位に貼付しＲＬ縄文を施す。

第11号土坑（第73図、ＰＬ－12）

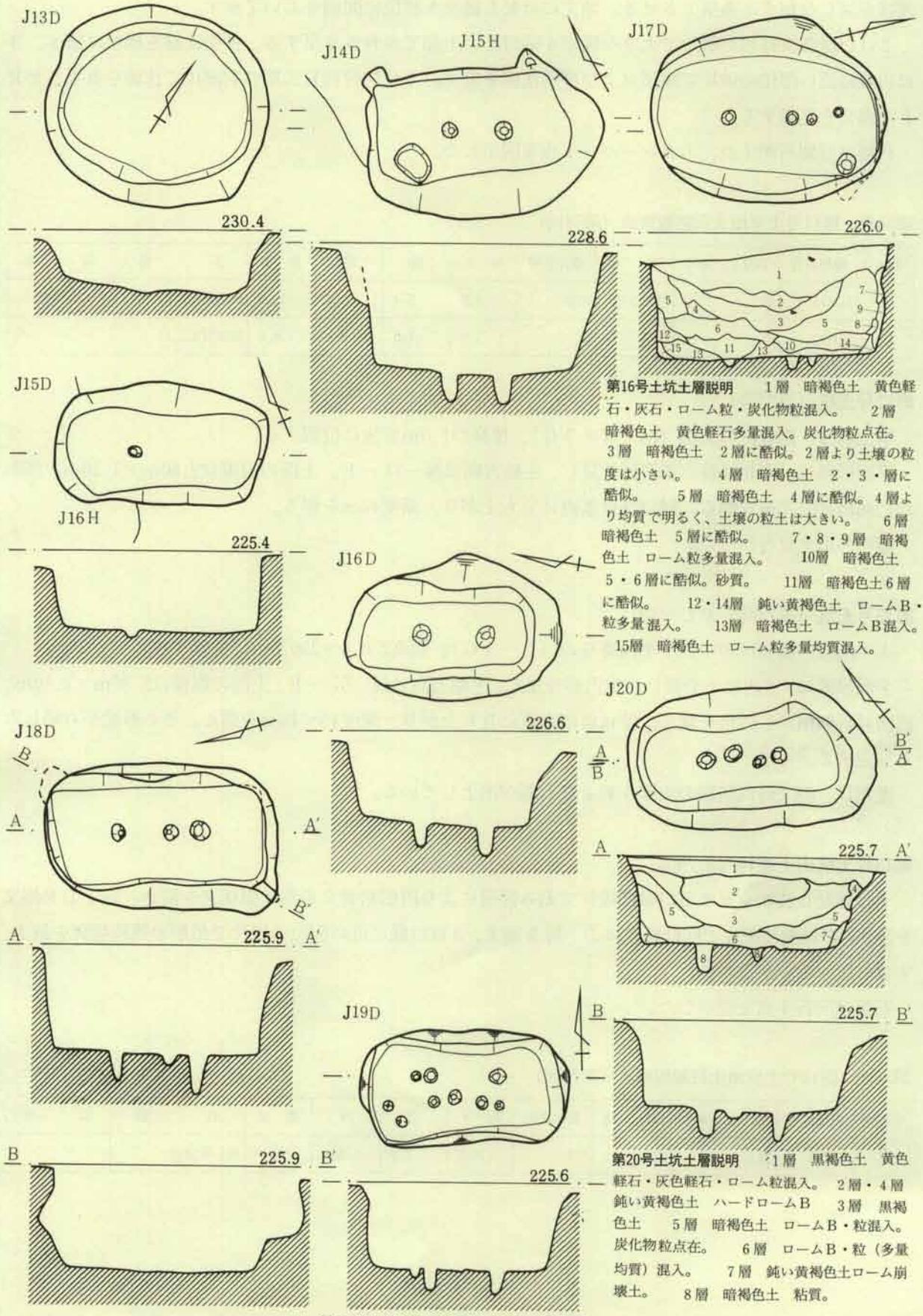
本土坑は、調査区の北部（N－４・５G）、標高231.0～231.5mに位置する。本土坑の北には第４号住居址が位置する。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はN－12°－E。上面の規模は3.18m×2.08m、底面は2.18m×1.14mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度77～89cmを測る。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は確認面に近いレベルで縄文時代中期五領ヶ台式の深鉢土器（１）が倒れ込むように、潰された状態で出土している。また、覆土中からの遺物は、中期の阿玉台式期から加曽利Ｅ式期の土器片及び石器が出土している。

第11号土坑出土遺物（第78図、ＰＬ－21）

１は五領ヶ台式に属する深鉢土器で、４単位の波状口縁を呈する。胴部はやや膨らみ頸部で若干くびれ口縁で大きく開く。底部は極端な平底で胴部から寸胴気味に落ちる。波頂部には刻みを施し、以下竹管による連続押引沈線を２条口縁部に施す。波頂部下の胴部からは隆帯を「Ｙ」字状に垂下させる。頸部には押引沈線を４条施し、垂下する隆帯に沿ってその内の１条を垂下させ、さらに押引沈線で鋭角な



第16号土坑土層説明　1層　暗褐色土　黄色軽石・灰石・ローム粒・炭化物粒混入。　2層　暗褐色土　黄色軽石多量混入。炭化物粒点在。　3層　暗褐色土　2層に酷似。2層より土壌の粒度は小さい。　4層　暗褐色土　2・3・層に酷似。　5層　暗褐色土　4層に酷似。4層より均質で明るく、土壌の粒土は大きい。　6層　暗褐色土　5層に酷似。　7・8・9層　暗褐色土　ローム粒多量混入。　10層　暗褐色土　5・6層に酷似。砂質。　11層　暗褐色土6層に酷似。　12・14層　鈍い黄褐色土　ロームB・粒多量混入。　13層　暗褐色土　ロームB混入。　15層　暗褐色土　ローム粒多量均質混入。

第20号土坑土層説明　1層　黒褐色土　黄色軽石・灰色軽石・ローム粒混入。　2層・4層　鈍い黄褐色土　ハードロームB　3層　黒褐色土　5層　暗褐色土　ロームB・粒混入。炭化物粒点在。　6層　ロームB・粒（多量均質）混入。　7層　鈍い黄褐色土ローム崩壊土。　8層　暗褐色土　粘質。

第74図　第13～20号土坑平・断面図

波状を呈しながら１条垂下させる。地文にはＲＬ縄文を縦位に間隔をおいて施す。

２は口縁部文様帯の破片で大きな隆帯を貼付し、上部で渦巻きを呈する。押引沈線を横位に施す。３は口縁に近い部位の破片で隆帯および押引沈線を施す。４は加曽利Ｅ式期の胴部片で沈線を垂下させＲＬの縄文を充填する。

石器は打製石斧１点、スクレーパー１点を図示した。

第35表　第11号土坑出土石器観察表（第78図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
6	J11D 8	覆土	打製石斧	刃部	6.6	5.4	1.4	53.5	緻密質安山岩	
7	J11D 7	覆土	スクレーパー	完	7.8	7.3	2.4	128.0	緻密質安山岩	

第12号土坑（第73図）

本土坑は、調査区の北部（Ｍ・Ｎ－５Ｇ）、標高231.0m前後に位置する。

平面形態は、南北に長い玉子形を呈し、主軸方向はＮ－14°－Ｅ。上面の規模は2.60m×1.30m、底面は1.85m×0.70mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度47cmを測る。

遺物の出土はなかった。

第13号土坑（第74図、ＰＬ－12）

本土坑は、調査区の中央やや西寄りの（Ｌ－４Ｇ）、標高230.0～230.5mに位置する。

平面形態は、東西にやや長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－57°－Ｅ。上面の規模は2.36m×2.10m、底面は1.94m×1.52mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度45～48cmを測る。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代前期の土器片および石器が出土している。

第13号土坑出土遺物（第79図）

１は外反し波状を呈する口縁部破片で刻み隆帯により円形刺突文を抱く弧状文を描き、以下ＬＲ縄文を施す。２は胴部破片で回転絡条体の一種を施す。３は口縁に近い部位の破片で爪形の連続刺突を施す。４は外反する胴部破片。

石器は凹石１点を図示した。

第36表　第13号土坑出土石器観察表（第79図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
5	J13D 5	覆土	凹石	2/3	(10.0)	7.9	5.8	659.0	輝石安山岩	

第14号土坑（第74図、ＰＬ－12）

本土坑は、調査区の中央部（Ｉ－５Ｇ）、標高228.5m前後に位置する。本土坑は第15号住居址と重複し、本土坑のほうが新しい。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－66°－Ｗ。上面の規模は2.50m×1.60m、底面は2.05m×1.00mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度100cmを測る。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代の土器片および石匙が出土している。

第14号土坑出土遺物（第79図）

１は内湾する胴部破片でＬＲ縄文を施す。２は直立気味の胴部破片。３・４は胴部破片。

石器は縦型の石匙１点を図示した。

第37表　第14号土坑出土石器観察表（第79図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
5	J14D5	覆土	石匙	刃部欠損	3.8	3.2	0.6	6.6	デイサイト	縦型

第15号土坑（第74図、ＰＬ－12）

本土坑は、調査区の南東部（Ｇ・Ｈ－７Ｇ）、標高225.5m前後に位置し、第16号住居址と重複する。新旧関係は本土坑が新しい。

平面形態は、南北に長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－68°－Ｗ。上面の規模は2.20m×1.20m、底面は2.00m×0.75mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度79cmを測る。底面に１本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は縄文時代前期の土器片が出土している。

第15号土坑出土遺物（第79図）

１は底部から内湾気味に立ち上がりいったんくびれ再び内湾気味に立ち上がる胴部破片で０段多条のＲＬ・ＬＲ結束第１種による羽状縄文を横位に施文する。２は胴部破片でＲＬ縄文を施す。

第16号土坑（第74図、ＰＬ－12）

本土坑は、調査区の南西部（Ｇ－３Ｇ）、標高226.0～226.5mに位置する。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－８°－Ｗ。上面の規模は2.30m×1.50m、底面は1.78m×0.68mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度78～84cmを測る。底面に２本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第17号土坑（第74図、ＰＬ—13）

本土坑は、調査区の南西部（Ｆ－３Ｇ）、標高225.5～226.0mに位置する。

平面形態は、南北に長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ—12°—Ｅ。上面の規模は2.52m×1.94m、底面は2.35m×1.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度97～114cmを測る。底面に５本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代の打製石斧が出土している。

第17号土坑出土遺物（第79図）

図示した遺物は打製石斧１点のみである。

第38表　第17号土坑出土石器観察表（第79図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
1	J17D 1	覆土	打製石斧	完	10.8	7.2	3.8	274.0	緻密質安山岩	

第18号土坑（第74図、ＰＬ—13）

本土坑は、調査区の南西部(Ｆ－３Ｇ)、標高225.5～226.0mに位置する。本土坑の東には第17号土坑が位置し、主軸方向もほぼ一致する。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ—14°—Ｅ。上面の規模は2.45m×1.52m、底面は2.20m×0.94mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度96～102cmを測る。底面に３本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代前期の土器片が出土している。

第18号土坑出土遺物（第79図）

１は外反し波状を呈する口縁部破片で　刻み隆帯により円形刺突文を取り囲む菱形を構成する。

第19号土坑（第79図）

本土坑は、調査区の南西部（Ｆ－３Ｇ）、標高225.5m前後に位置する。本土坑の北には第17号土坑，第18号土坑が、南西には第20号土坑が存在する。

平面形態は、東西に長く中央部がくびれた隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ—87°—Ｅ。上面の規模は2.22m×1.20m、底面は1.88m×0.800mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度77～84cmを測る。底面に９本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は縄文時代の土器片が出土している。

第19号土坑出土遺物（第79図）

１は胴部破片でＲＬ縄文を施す。２は胴部破片で　刻み隆帯を縦位に施しさらに刺切を施す。

第20号土坑（第79図、ＰＬ－13）

本土坑は、調査区の南西部（Ｅ－２・３Ｇ）、標高225.5～226.0mに位置する。

平面形態は、東西に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－54°－Ｗ。上面の規模は2.60m×1.50m、底面は2.04m×0.80mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度61～90cmを測る。底面に４本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代前期の土器片が出土している。

第20号土坑出土遺物（第79図）

１は口唇部に近い部位でやや内湾する口縁部破片でＲＲ縄文を施す。２は外反する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。３・４は胴部破片で３は原体不明。４は０段多条のＲＬ縄文を施す。

第21号土坑（第75図、ＰＬ－13）

本土坑は、調査区の南部（Ｄ・Ｅ－４Ｇ）、標高224.0m前後に位置する。周辺には、第22号土坑および第23号土坑が存在する。

平面形態は、東西に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－55°－Ｗ。上面の規模は2.02m×1.10m、底面は1.78m×0.88mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度56～84cmを測る。底面に４本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第22号土坑（第75図、ＰＬ－13）

本土坑は、調査区の南部（Ｄ－４Ｇ）、標高223.5m前後に位置する。

平面形態は、東西に長い楕円形を呈し、主軸方向はＮ－27°－Ｗ。上面の規模は2.18m×1.40m、底面は1.68m×0.98mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度80～98cmを測る。底面に４本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第23号土坑（第75図、ＰＬ－13）

本土坑は、調査区の南部（Ｄ－４Ｇ）、標高223.5m前後に位置する。

平面形態は、東西に長い楕円形を呈し、主軸方向はＮ－66°－Ｗ。上面の規模は2.35m×1.32m、底面は2.46m×0.98mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度82～92cmを測る。底面に３本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第24号土坑（第75図）

本土坑は、調査区の南部（Ｆ・Ｇ－５Ｇ）、標高225.5m前後に位置する。

平面形態は、南北に長い楕円形を呈し、主軸方向はＮ－13°－Ｗ。上面の規模は2.42m×1.66m、底面は2.15m×0.76mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度98～124cmを測る。底面に５本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第25号土坑（第75図、ＰＬ—14）

本土坑は、調査区の南部（Ｆ－５Ｇ）、標高225.0m前後に位置する。

平面形態は、東西に長い楕円形を呈し、主軸方向はＮ—87°—Ｗ。上面の規模は2.22m×1.25m、底面は1.66m×0.78mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度70～82cmを測る。底面に５本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第26号土坑（第75図、ＰＬ—14）

本土坑は、調査区の南部（Ｆ・Ｇ－６Ｇ）、標高225.0m前後に位置する。

平面形態は、南北に長い隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－４°—Ｗ。上面の規模は2.40m×1.52m、底面は2.48m×1.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度96～120cmを測る。底面に２本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代の土器片が出土している。

第26号土坑出土遺物（第75図）

１は集合沈線を施し、瘤状の貼付を有する口縁部破片。２は無文の胴部破片。

第27号土坑（第75図、ＰＬ—14）

本土坑は、調査区の西端部（Ｋ－２Ｇ）、標高228.0m前後に位置する。

平面形態は、やや歪な円形を呈し、主軸方向はＮ—44°—Ｅ。上面の規模は径2.50m、底面は径1.75mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度18～68cmを測る。

遺物は、縄文時代前期の土器片が出土している。

第27号土坑出土遺物（第75図）

１は外反する口縁部破片。２～５は胴部破片で、２・３は結節縄文を、４はＲＬ縄文を施す。

第28号土坑（第75図、ＰＬ—14）

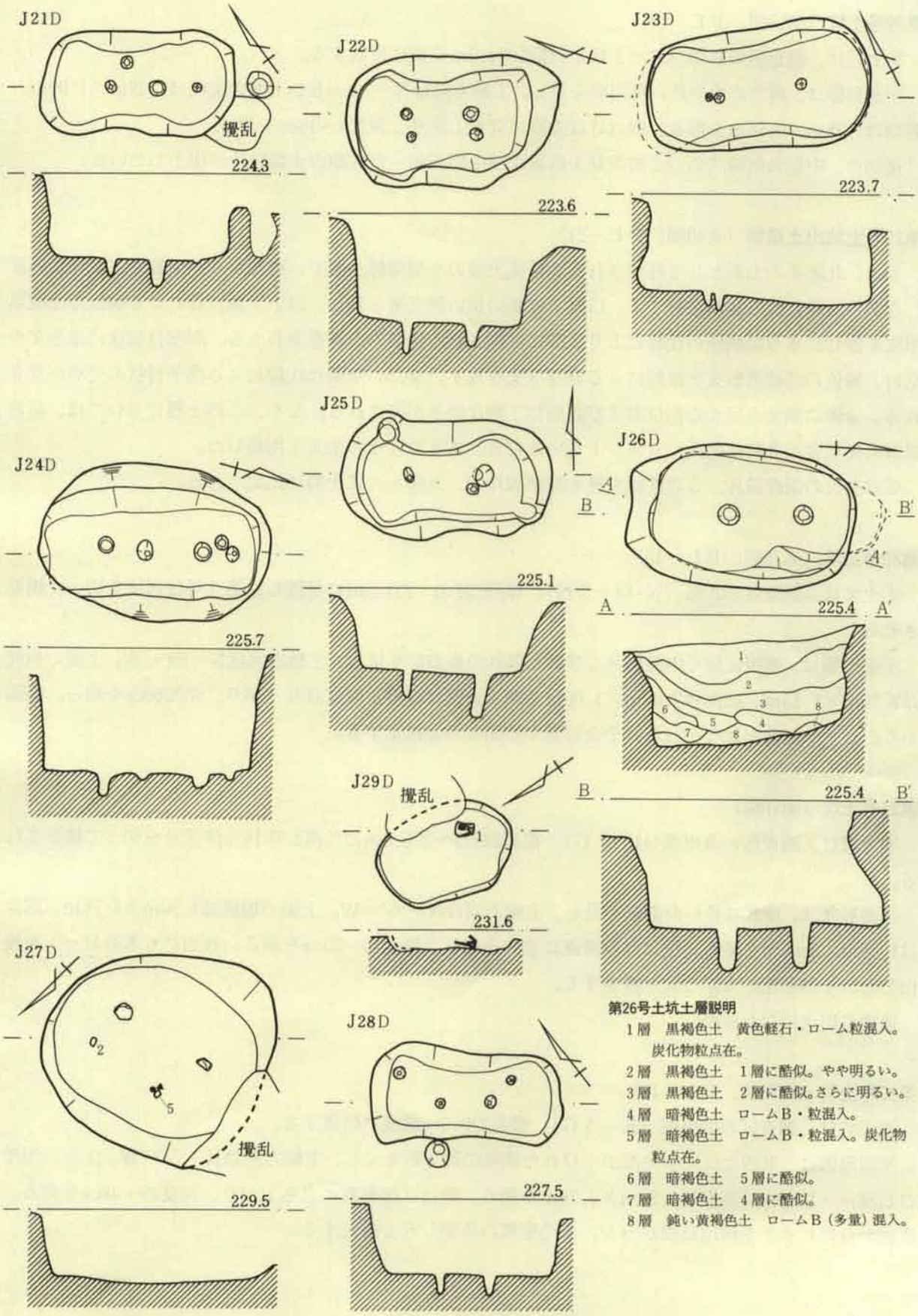
本土坑は、調査区の中央南西よりの（Ｈ・Ｉ－３・４Ｇ）、標高227.5m前後に位置する。

平面形態は、南北に長く中央部のくびれた隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ—52°—Ｗ。上面の規模は2.00m×1.00m、底面は1.70m×0.72mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度56～74cmを測る。底面に４本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代前期の土器が出土している。

第28号土坑出土遺物（第80図）

１は口唇部の扁平な口縁部片。２は条痕文土器。３～６はいずれも胴部破片で、３は０段多条のＲＬ縄文を、４・５は０段多条ＬＲを、６は結節縄文をそれぞれ施す。



第26号土坑土層説明

1層　黒褐色土　黄色軽石・ローム粒混入。炭化物粒点在。
2層　黒褐色土　1層に酷似。やや明るい。
3層　黒褐色土　2層に酷似。さらに明るい。
4層　暗褐色土　ロームB・粒混入。
5層　暗褐色土　ロームB・粒混入。炭化物粒点在。
6層　暗褐色土　5層に酷似。
7層　暗褐色土　4層に酷似。
8層　鈍い黄褐色土　ロームB（多量）混入。

第75図　第21～29号土坑平・断面図

第29号土坑（第75図、ＰＬ－14）

本土坑は、調査区の北部（Ｐ－５Ｇ）、標高231.5m前後に位置する。

平面形態は、南北にやや長い楕円形を呈し、主軸方向はＮ－34°－Ｅ。上面の規模は1.48m×1.00m、底面は1.38m×0.86mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度9～18cmを測る。

遺物は、中期の新崎式期の小型深鉢土器および中期五領ヶ台式期の土器破片が出土している。

第29号土坑出土遺物（第80図、ＰＬ－21）

１は、北陸系の土器として理解される新崎式土器の小型深鉢土器で、底部からやや膨らみ気味に外反しながら口縁に至る器形を有する。口唇下に幅の狭い無文帯を有し、以下半截竹管による横位の連続爪形文を施し、さらに横位の沈線により３段に区画される無文の口縁部を有する。胴部は瘤状の渦巻文を貼付、横位の連続爪形文と沈線による渦巻き文を施す。また、空間は沈線による格子目状の充填が見られる。全体に無文を呈する部位および底面は丁寧な磨きが施される。なを、この土器については、新潟県教育委員会の寺崎祐助氏にコメントをいただき、まとめにその全文を掲載した。

２は無文の胴部破片。３は沈線を施す胴部破片で、五領ヶ台式土器に比定される。

第30号土坑（第76図、ＰＬ－15）

本土坑は、調査区の北部（Ｎ・Ｏ－５Ｇ）、標高231.0～231.5mに位置し、第３号住居址を切って構築される。

平面形態は、東西に長く中央部がくびれた隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－69°－Ｗ。上面の規模は2.70m×1.15m、底面は2.00m×1.00mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度60cmを測る。底面からのピットを検出はなかった。その形態から陥し穴と推定する。

第31号土坑（第76図）

本土坑は、調査区の南東部（Ｈ－７Ｇ）、標高225.5～226.0mに位置し第16号住居址を切って構築される。

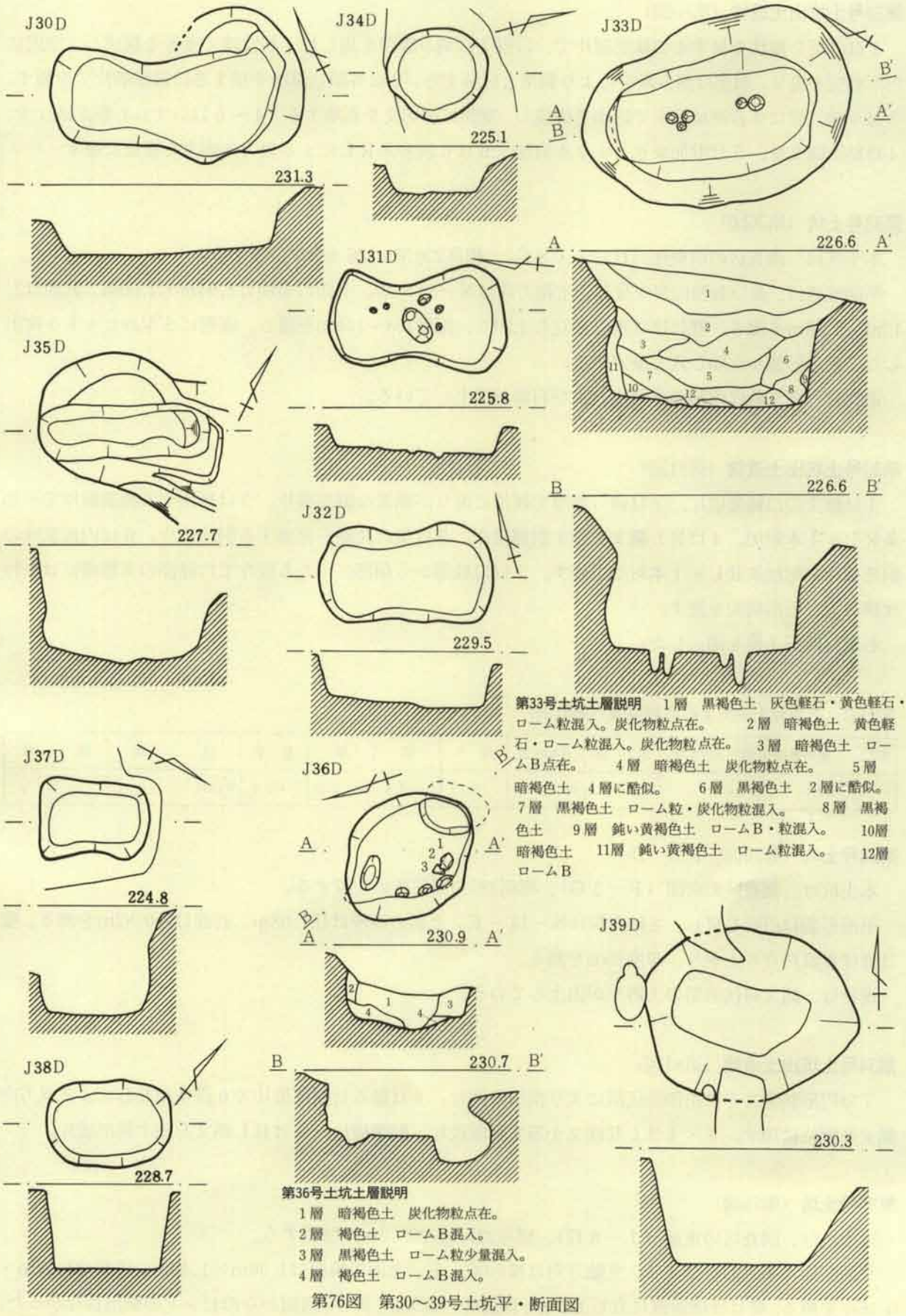
平面形態は、南北に長い分銅形を呈し、主軸方向はＮ－６°－Ｗ。上面の規模は1.90m×1.16m、底面は1.68m×0.95mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度19～23cmを測る。底面に６本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第32号土坑（第76図、ＰＬ－15）

本土坑は、調査区の中央部（Ｋ－５Ｇ）、標高229.5m前後に位置する。

平面形態は、東西に長く中央部がくびれた隅丸の長方形を呈し、主軸方向はＮ－73°－Ｗ。上面の規模は1.86m×1.06m、底面は1.62m×0.78mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度29～48cmを測る。底面からのピットを検出はなかった。その形態から陥し穴と推定する。



第33号土坑土層説明　1層　黒褐色土　灰色軽石・黄色軽石・ローム粒混入。炭化物粒点在。　2層　暗褐色土　黄色軽石・ローム粒混入。炭化物粒点在。　3層　暗褐色土　ロームB点在。　4層　暗褐色土　炭化物粒点在。　5層　暗褐色土　4層に酷似。　6層　黒褐色土　2層に酷似。　7層　黒褐色土　ローム粒・炭化物粒混入。　8層　黒褐色土　9層　鈍い黄褐色土　ロームB・粒混入。　10層　暗褐色土　11層　鈍い黄褐色土　ローム粒混入。　12層　ロームB

第36号土坑土層説明

1層　暗褐色土　炭化物粒点在。
2層　褐色土　ロームB混入。
3層　黒褐色土　ローム粒少量混入。
4層　褐色土　ロームB混入。

第76図　第30～39号土坑平・断面図

第32号土坑出土遺物（第80図）

1は外反し波状を呈する口縁部破片で、口唇下に刻み隆帯を施し梯子状沈線で菱形を構成し。空間に円形刺突を施す。頸部は刻み隆帯により胴部と区画する。2は外傾し波状を呈する口縁部破片でを施す。3は半截竹管による連続刺突で区画を構成し、空間に刺切文を充塡する。4～6はいずれも胴部破片で、4は結節縄文を、5は附加条ＲＬ＋2本附加、6は0段多条ＲＬによる異方向縄文を縦位に施す。

第33号土坑（第76図）

本土坑は、調査区の南東部（Ｈ－７・８Ｇ）、標高226.0～226.5mに位置する。

平面形態は、長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－43°－Ｗ。上面の規模は2.94m×2.00m、底面は2.12m×0.88mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度108～144cmを測る。底面に5本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物は、縄文時代前期の土器片および石器が出土している。

第33号土坑出土遺物（第81図）

1は無文の口縁部破片。2は薄い器厚で縦位に削りが顕著な胴部破片。3は外反する頸部破片で附加条ＲＬ＋1本附加。4はＲＬ縄文を施す胴部破片。5は集合沈線を充塡する胴部破片。6は内湾気味の胴部破片で附加条ＲＬ＋1本附加を施す。7は口縁部から頸部にいたる破片で口縁部の文様帯には平行沈線および円形刺突を施す。

石器は磨石1点を図示した。

第39表　第33号土坑出土石器観察表（第81図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
8	J33D 8	覆土	磨石	完	12.5	7.0	3.5	479.0	安山岩	

第34号土坑（第76図、ＰＬ－15）

本土坑は、調査区の南部（Ｆ－５Ｇ）、標高225.0M前後に位置する。

平面形態は円形を呈し、主軸方向はＮ－14°－Ｅ。上面の規模は径1.08m、底面は径0.82mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度30cmを測る。

遺物は、縄文時代前期の土器片が出土している。

第34号土坑出土遺物（第81図）

1は円形刺突文を撚糸側面圧痕により楕円に囲む。2は膨らむ胴部破片で0段多条ＲＬによる異方向縄文を縦位に施す。3・4はＬＲ縄文を施す胴部破片。胴部破片。5はＲＬ縄文を施す胴部破片。

第35号土坑（第76図）

本土坑は、調査区の東部（Ｊ－８Ｇ）、標高227.5～228.0mに位置する。

平面形態は不定形を呈する。主軸方向はＮ－66°－Ｅ。上面の規模は1.96m×1.40m、底面は1.62m×0.26mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度60～129cmを測る。底面からのピットの検出はなかった。

遺物は、縄文時代前期の土器が出土している。

第35号土坑出土遺物（第81図）

図示した資料はいずれも胴部破片で、１はＲＬ縄文を、２・３は結節縄文を施す。

第36号土坑（第76図、ＰＬ－15）

本土坑は、調査区の東部（Ｍ－６Ｇ）、標高230.5～231.0mに位置する。

平面形態は、南北にやや長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－24°－Ｗ。上面の規模は1.60m×1.30m、底面は1.82m×0.96mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度27～53cmを測る。

遺物は、縄文時代の土器片が出土している。

第36号土坑出土遺物（第81図）

１は寸胴気味で円筒状の胴部を呈する深鉢土器。胎土に片岩を含み無文である。２はボタン状及び貝殻状の貼付文を施し集合沈線を充填する破片。３は口縁部破片で爪による連続刺突を口唇下に施す。

第37号土坑（第76図）

本土坑は、調査区の南東部（Ｆ・Ｇ－７Ｇ）、標高224.5m前後に位置する。

平面形態は、南北にやや長い長方形を呈し、主軸方向はＮ－32°－Ｗ。上面の規模は1.30m×0.90m、底面は0.96m×0.52mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度106cmを測る。

遺物の出土はなかった。

第38号土坑（第76図、ＰＬ－15）

本土坑は、調査区の東部（Ｋ－８Ｇ）、標高229.0Nm前後に位置し、第26号住居址と重複し、住居址より古い。

平面形態は、東西に長い長楕円形を呈し、主軸方向はＮ－56°－Ｅ。上面の規模は1.35m×0.92m、底面は1.14m×0.65mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度80～88cmを測る。

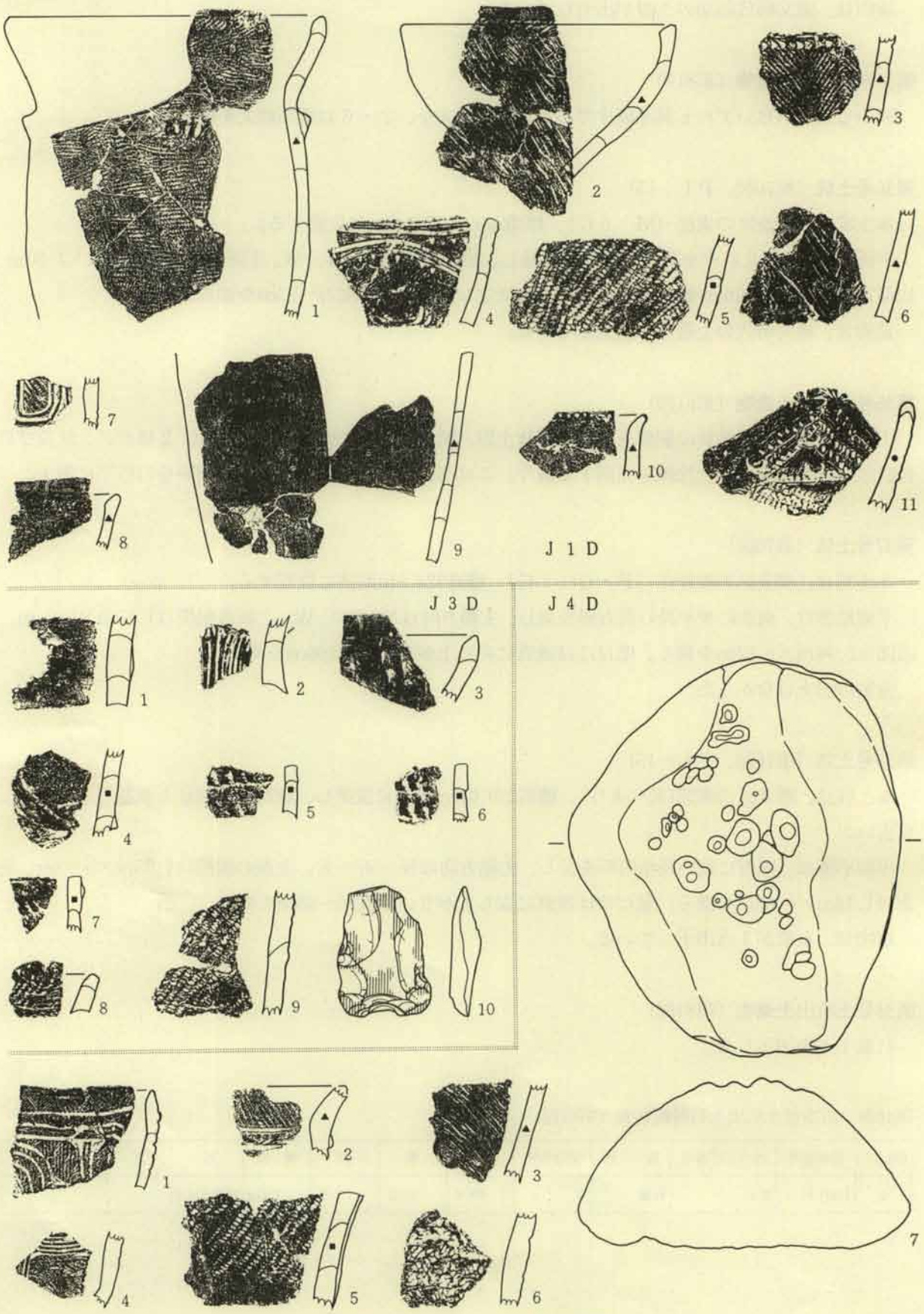
遺物は、石皿が１点出土している。

第38号土坑出土遺物（第81図）

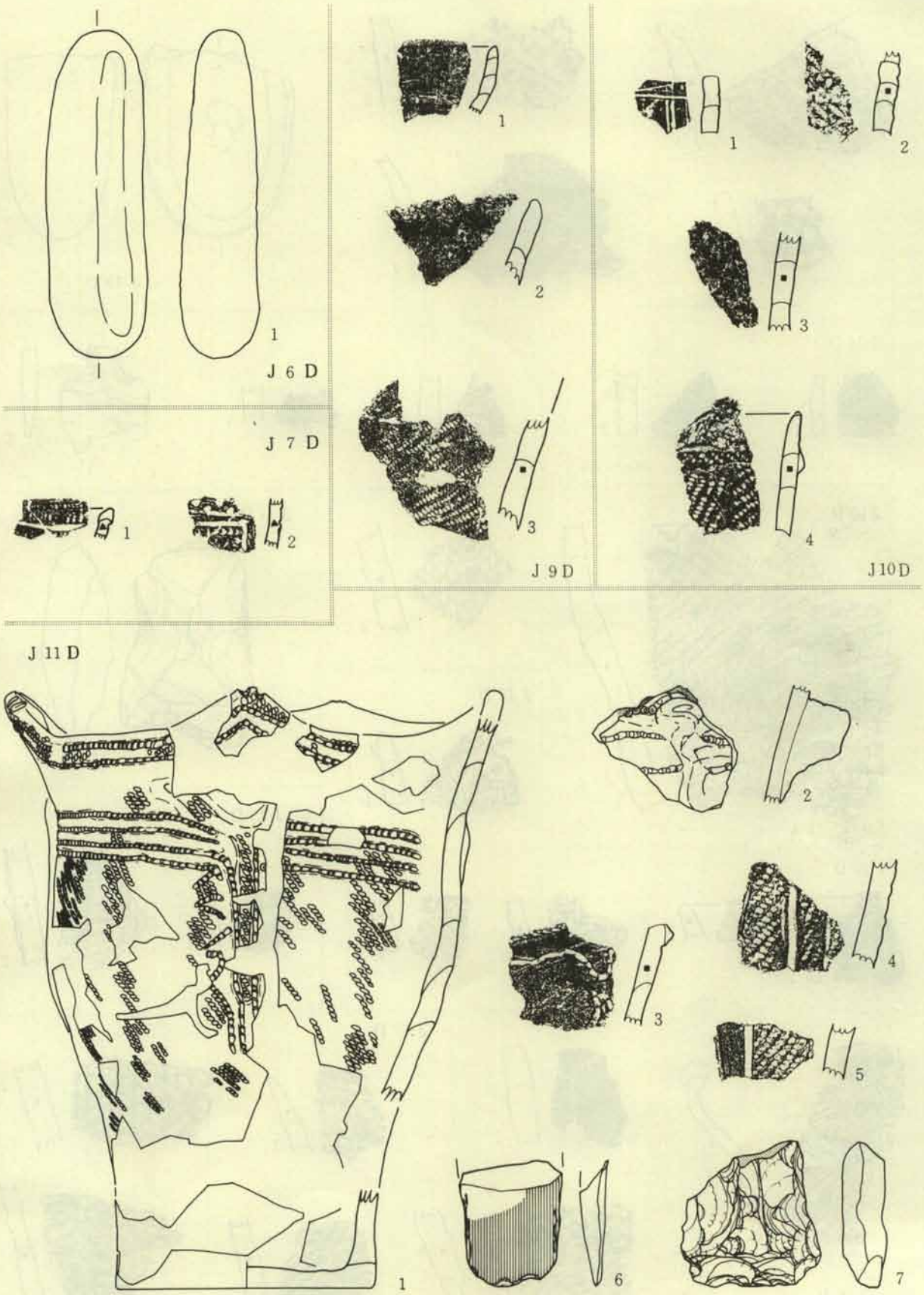
石皿１点を図示した。

第40表　第38号土坑出土石器観察表（第81図）

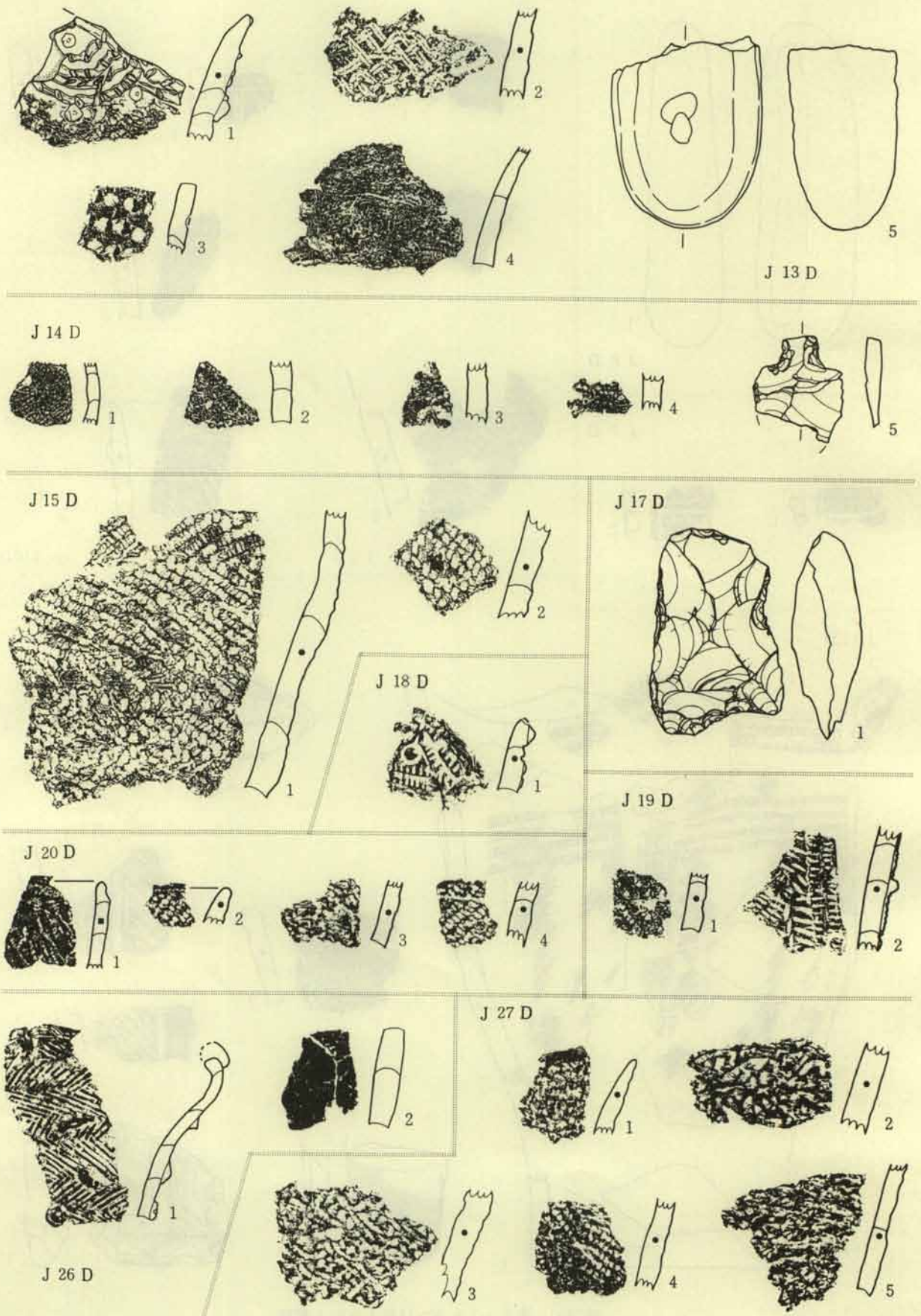
挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
1	J38D 1	覆土	石皿	完	29.8	21.2	7.9	7.5kg	輝石安山岩	



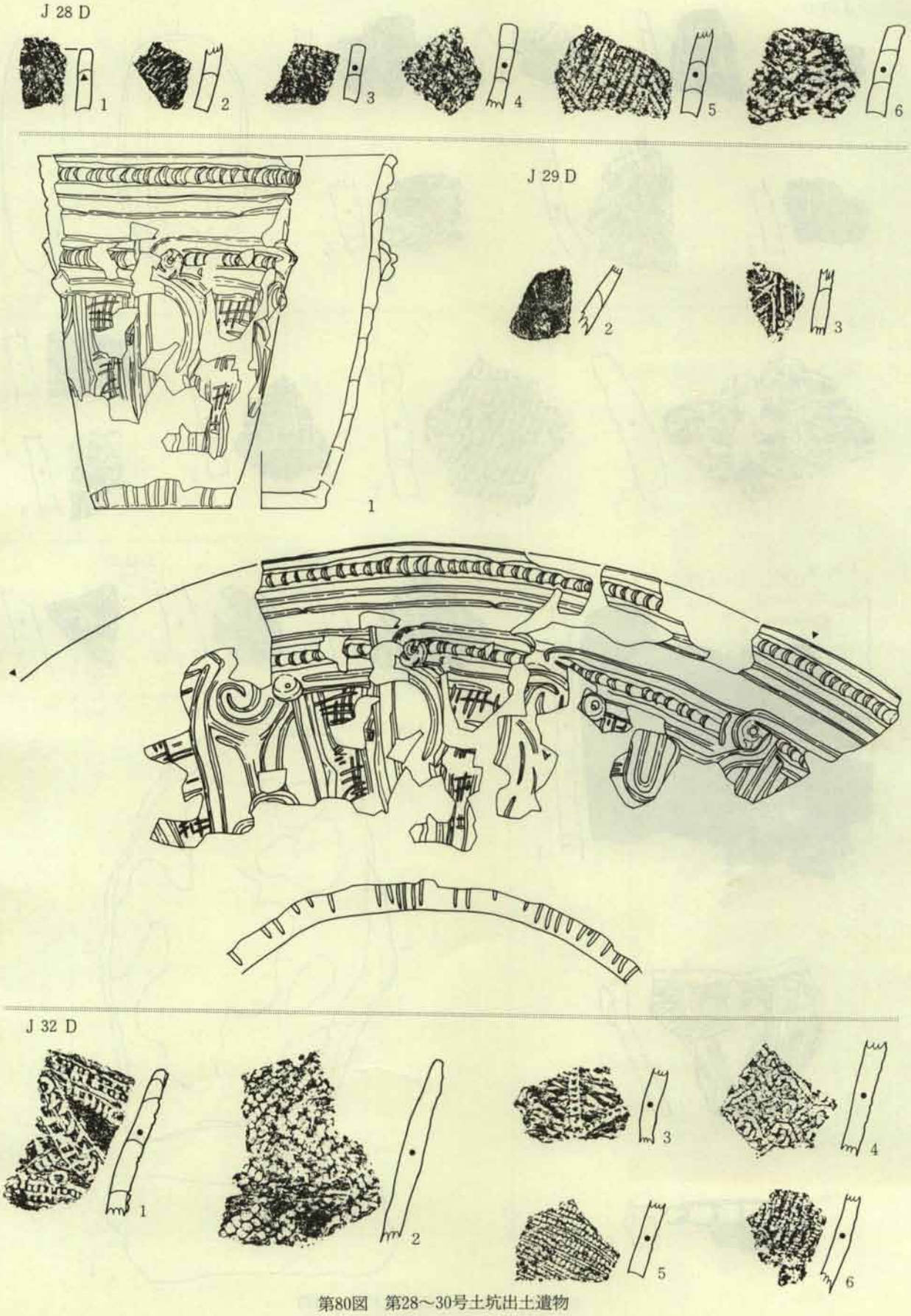
第77図　第1・3・4号土坑出土遺物



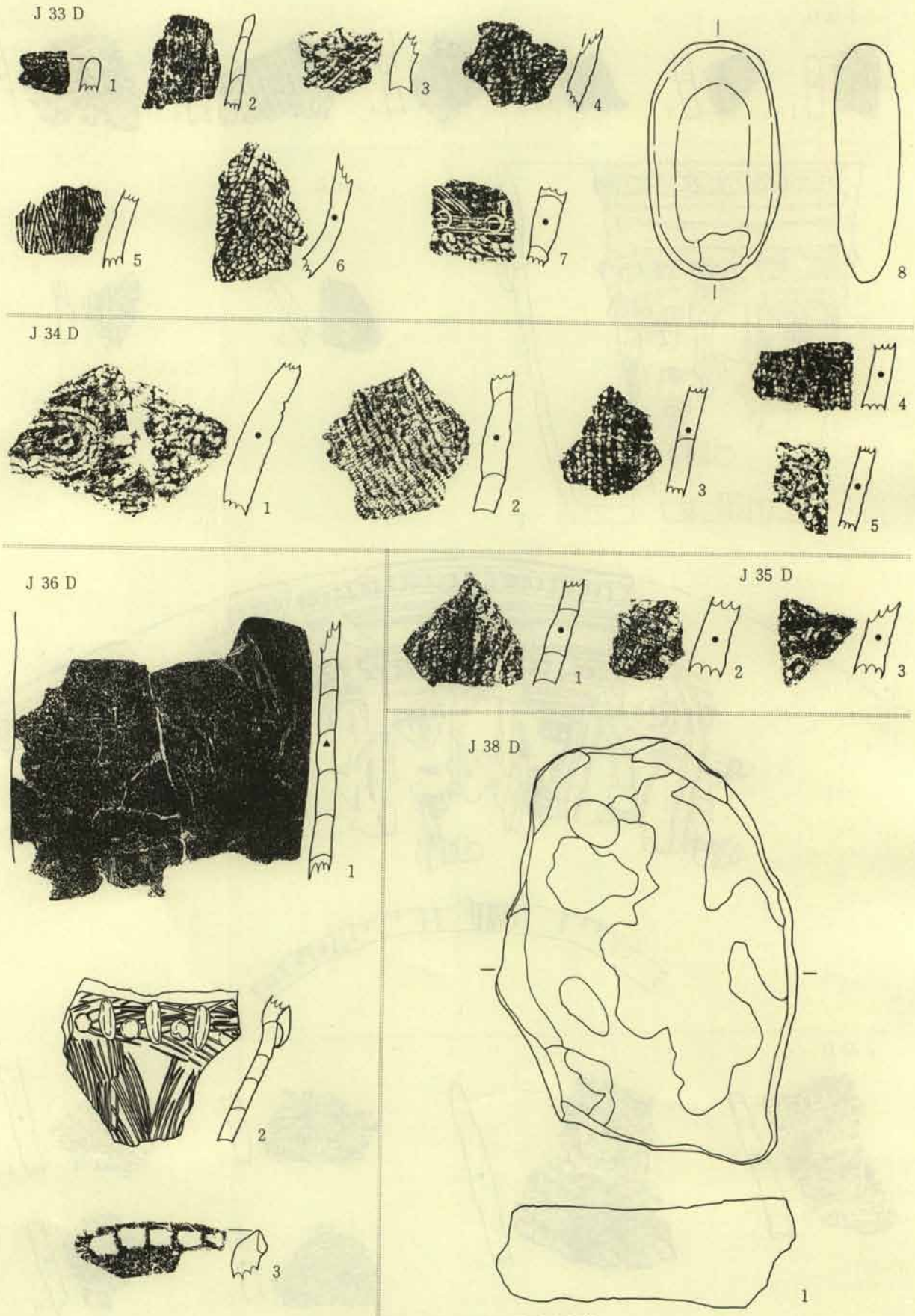
第78図　第6・7・9～11号土坑出土遺物



第79図　第13～15・17～20・26・27号土坑出土遺物



第80図　第28～30号土坑出土遺物



第81図　第33～36・38号土坑出土遺物

第39号土坑（第76図）

本土坑は、調査区の東部（N－7G）、標高230.5m前後に位置する。第7号住居址と重複し、住居址より新しい。また、地震によるものと思われる地割れにより切られる。

平面形態は、東西に長い長楕円形を呈し、主軸方向はN－82°－W。上面の規模は2.37m×1.88m、底面は1.42m×0.78mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度60～72cmを測る。底面からのピットの検出はなかった。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

は1.68m×0.95mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深度19～23cmを測る。底面に6本のピットを検出した。その形態から陥し穴と推定する。

遺物の出土はなかった。

第1号集石遺構（第82図）

本遺構は、調査区の東部（M－7G）、標高231.5m前後に位置し、第7号住居址の南西部と一部重複する。また、本遺構の北西には第8号住居址が位置する。

構成する石は、23個確認された。掘り込みは若干窪みが確認できたが、本遺構構築の際のものかは定かではない。

第2号集石遺構（第82図）

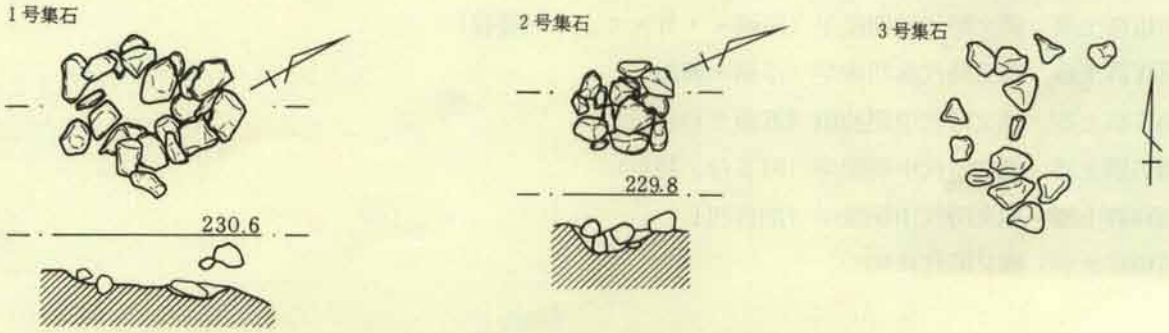
本遺構は、調査区の東部（L－7G）、標高229.5～230.0mに位置し、第22号住居址の北辺と一部重複する。

構成する石は、14個確認された。掘り込みは円形の土坑が確認できた。

第3号集石遺構（第82図）

本遺構は、調査区の東部（K－7G）、標高229.5～230.0mに位置する。第23号住居址の覆土中で確認され、住居址との切り合いは確認できなかった。あるいは第23号住居址に帰属する遺物の可能性もある。

構成する石は、13個確認された。



第82図　集石遺構平・断面図

第４節　遺構外出土縄文時代遺物

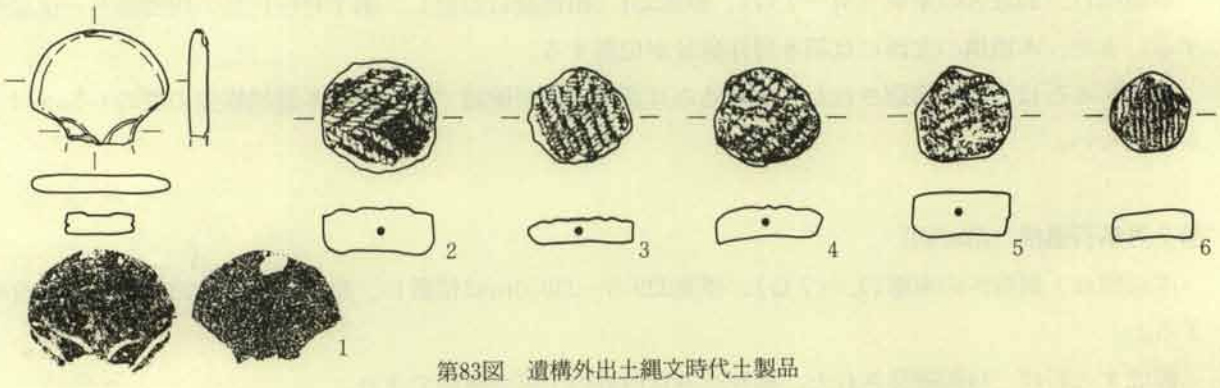
縄文時代土製品（第83図）

縄文時代の土製品として、分銅型の土製品１点。土製円盤５点を図示した。

分銅型の土製品は、約半分程度の残存と思われ、中央抉れ部に沈線および段を有する。

第41表　遺構外出土縄文時代土製品一覧（第83図）

挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置
1	遺構外１	Ｏ－２Ｇ	4	遺構外５	表土
2	遺構外２	Ｋ－６Ｇ	5	遺構外４	Ｌ－７Ｇ
3	遺構外３	Ｌ－６Ｇ	6	遺構外６	表土



第83図　遺構外出土縄文時代土製品

縄文土器（第84～95図）

遺構外からは縄文時代早期から後期にかけての土器が検出された。その主体は集落の中心となる前期初頭から前半である。

出土土器を分類すると以下の通りである。

第Ⅰ群土器　縄文時代早期土器

第Ⅱ群土器　縄文時代前期初頭から前半

第Ⅲ群土器　縄文時代前期後半（諸磯ａ・ｂ・ｃ、十三菩提）

第Ⅳ群土器　縄文時代前期後半（浮島・興津）

第Ⅴ群土器　縄文時代中期初頭（五領ケ台）

第Ⅵ群土器　縄文時代中期前半（阿玉台、勝坂）

第Ⅶ群土器　縄文時代中期後半（加曽利Ｅ）

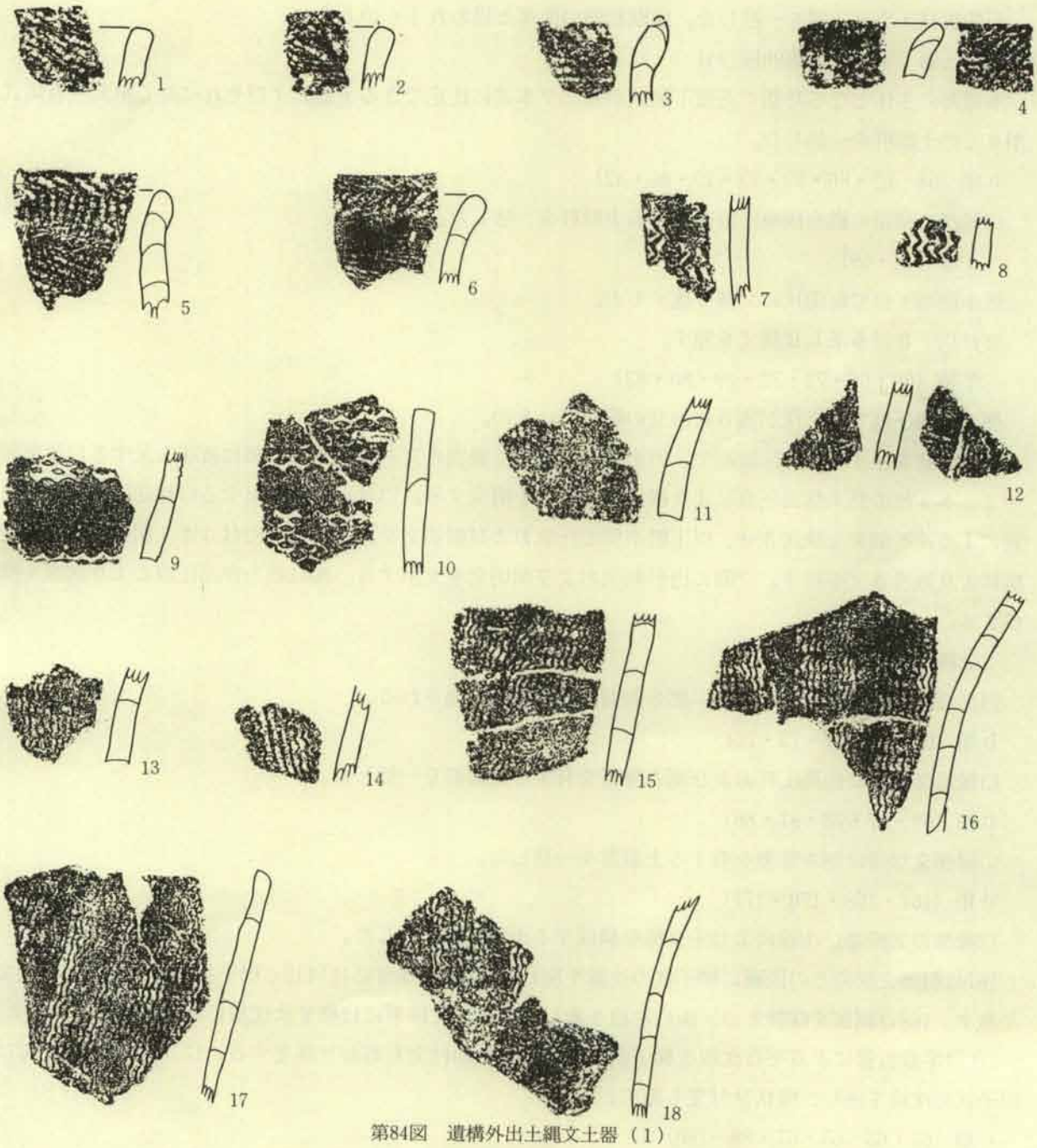
第Ⅷ群土器　縄文時代後期

第Ⅰ群土器（第84図１～18、第85図19～57）

ａ類（第84図１～６）

縄文が施される土器で早期の所産と考えられるものを一括した。

１は角頭状の口唇部を有する口縁部破片でＬＲ縄文を施す。２はやや角頭気味の口唇を有する口縁部破片でＲＬ縄文を施す。３はＬＲ縄文を施す口縁部破片。４は表裏に縄文を施す口縁部破片で、ＲＬ縄文を施す。５はＲＬおよびＬＲ縄文を施す口縁部破片。６はＲＬ縄文を施す口縁部破片。



第84図　遺構外出土縄文土器（１）

b類（第84図7～18）

押型文土器を一括した。

7・8はやや大きめな山形文を縦位に施す。

9・10は楕円文を横位に施す。

11～18は7・8に比して細かい山形文を縦位に施す。胎土には細かい砂粒を多く含む。

c類（第85図19～52）

条痕文土器を一括した。

d類（第85図53～57図）

貝殻腹縁圧痕文土器を一括した。前期初頭の所産と思われるものも含む。

第II群土器（第86図～第90図194）

本遺跡の主体となる時期で花積下層式から二ツ木式に比定できる土器およびそれに続く黒浜・有尾式期までの土器群を一括した。

a類（58～62・66・72・73・79・80・82）

口縁部文様帯に撚糸側面圧痕を有する土器群を一括した。

1種（58・59）

撚糸側面圧痕で鋸歯状に文様を施すもの。

58は以下0段多条LR縄文を施す。

2種（60・66・72・73・79・80・82）

撚糸側面圧痕で主文様が施され施文の幅が広いもの。

60は波状を呈する口縁部破片で、円形刺突文を抱く渦巻き文を構成する。66は波状を呈する口縁部破片で2本1組の撚糸側面圧痕により横長の菱形文を構成する。73は平口縁を呈する口縁部破片で半截竹管による連続刺突を横送させ、以下撚糸側面圧痕および刺切文を施す。79・82は3本1組の撚糸側面圧痕により渦巻き文を描き、空間に円形刺突および刺切文を充塡する。80は撚糸側面圧痕により区画を構成する。

3種（62）

円形の隆帯の貼付が認められ、撚糸側面圧痕は横位に施される。

b類（68・70・71・75・76）

口縁部文様帯に側面圧痕および刻み隆帯を有する土器群を一括した。

c類（69・77・78・81・86）

口縁部文様帯に刻み隆帯を有する土器群を一括した。

d類（167・168・170・171）

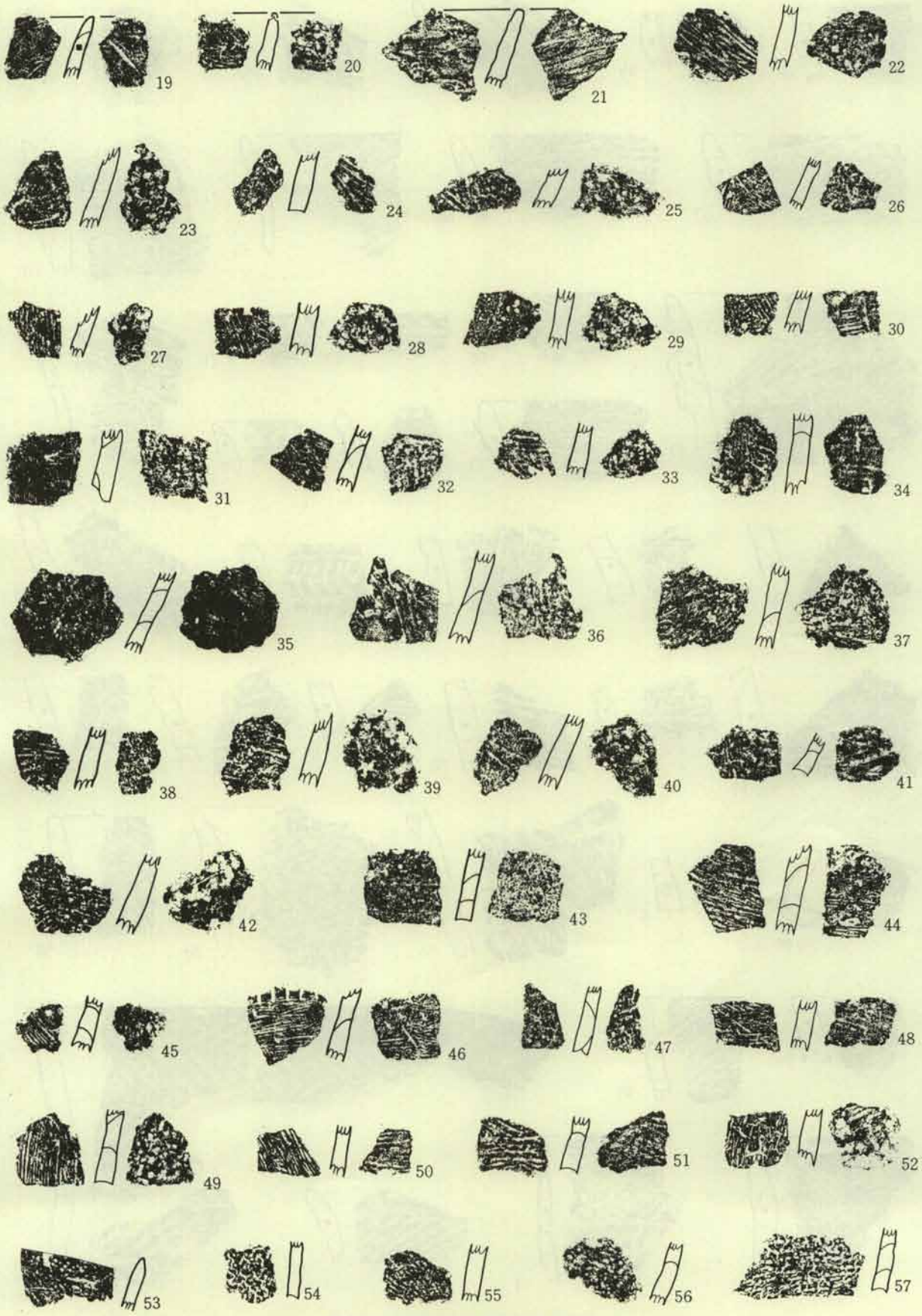
口縁部の文様帯に沈線により主文様を構成する土器群を一括した。

167は胴部文様帯との区画に梯子状の沈線を施し、口縁部文様帯には同じく梯子状沈線による鋸歯状文を施す。168は胴部文様帯との区画に沈線を施し、口縁部文様帯には梯子状沈線による鋸歯状文を施す。

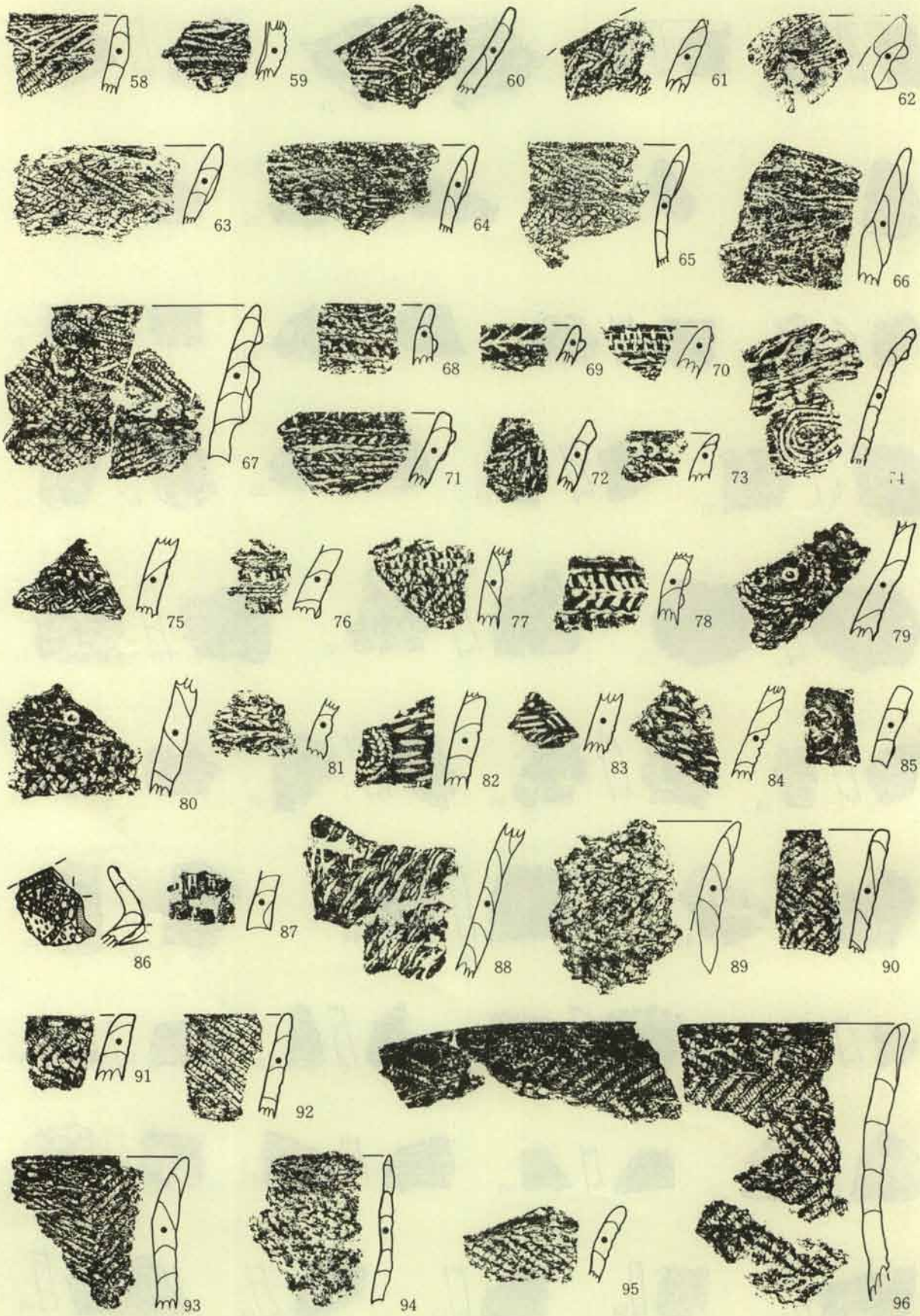
170は半截竹管による平行沈線を梯子状に施し、瘤状貼付文もあわせ施文する。171は胴部との区画に梯子状の沈線を施し、瘤状貼付文も施す。

e類（61・63～65・67・89～166）

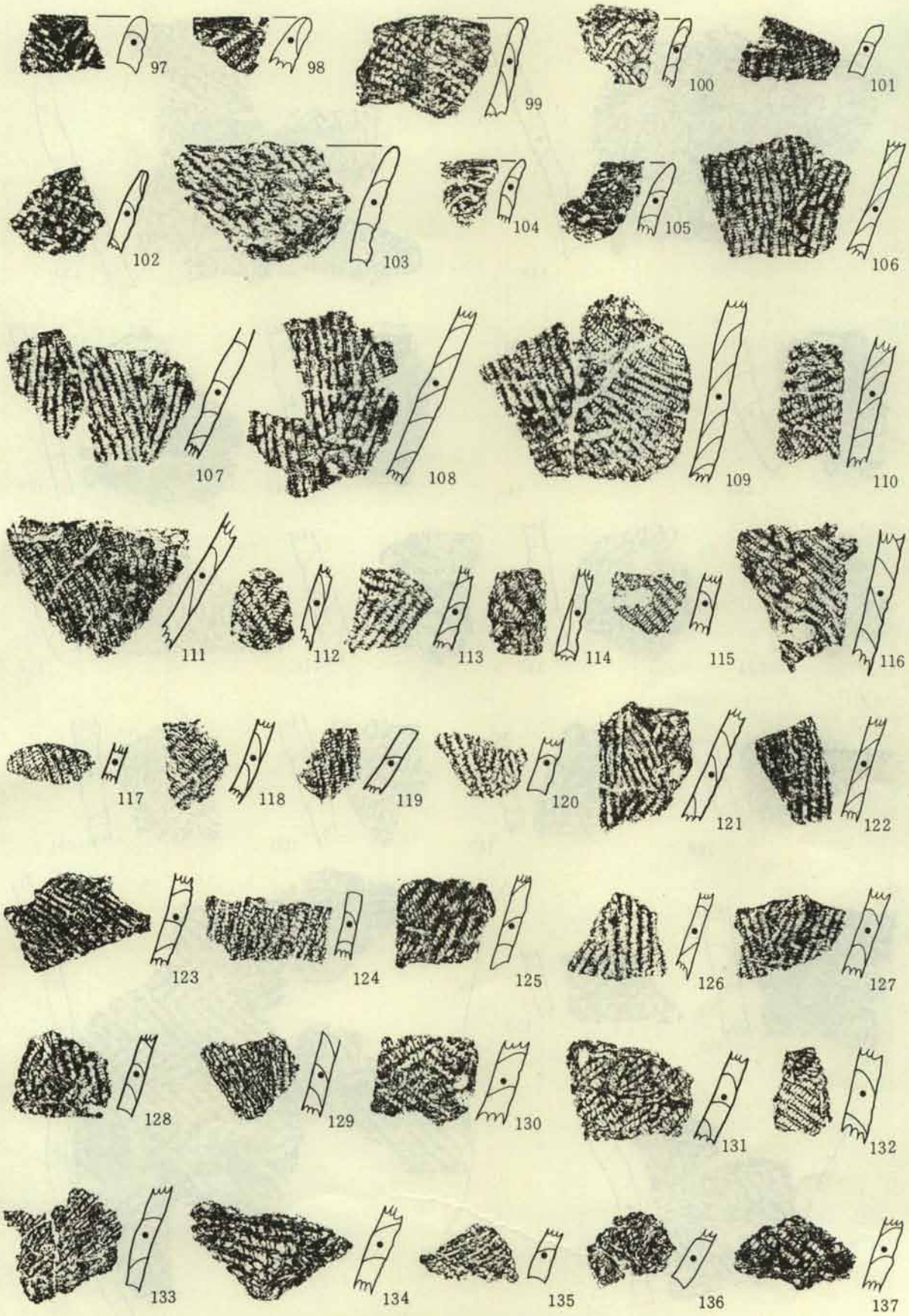
縄文施文の土器群を一括した。



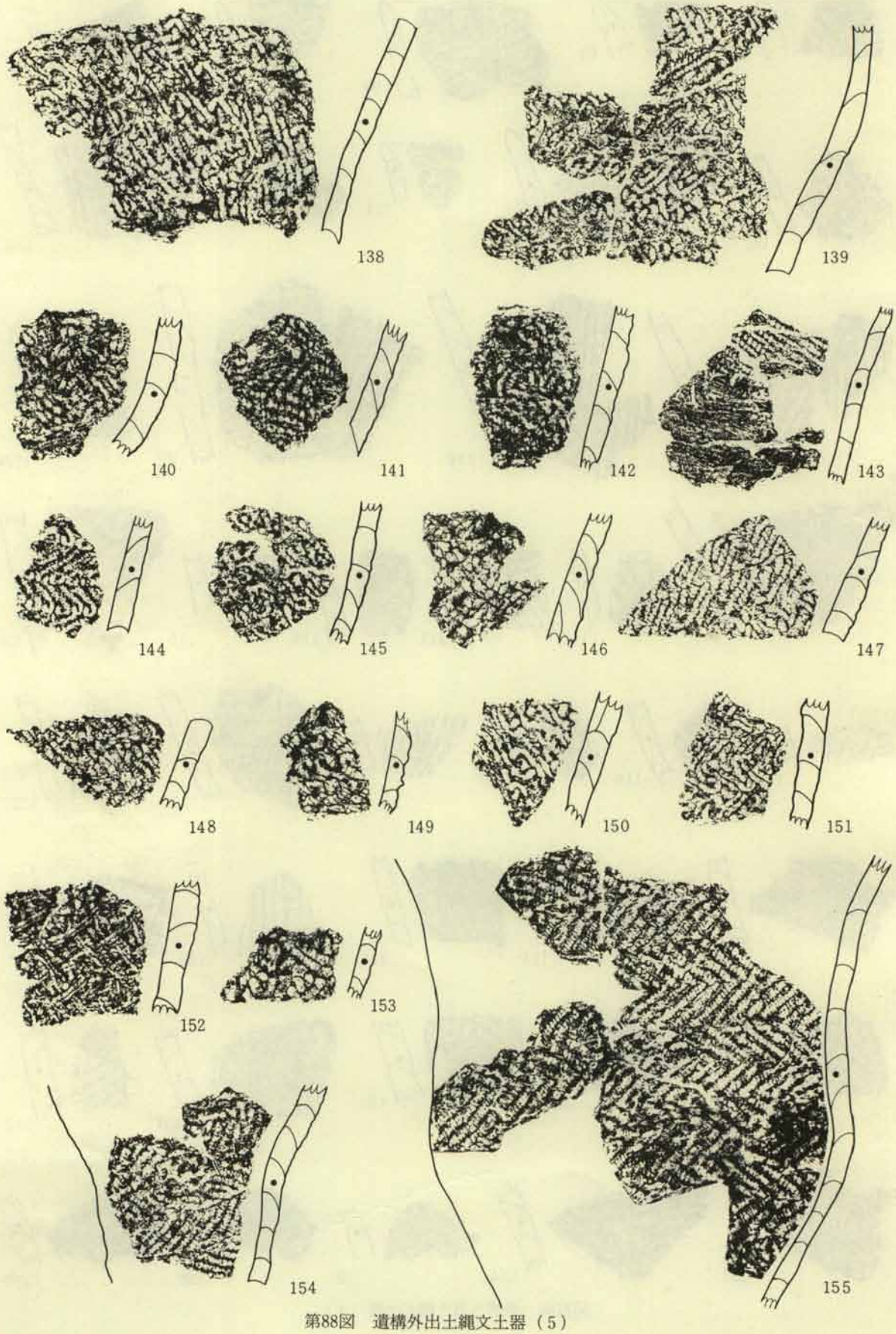
第85図　遺構外出土縄文土器（2）



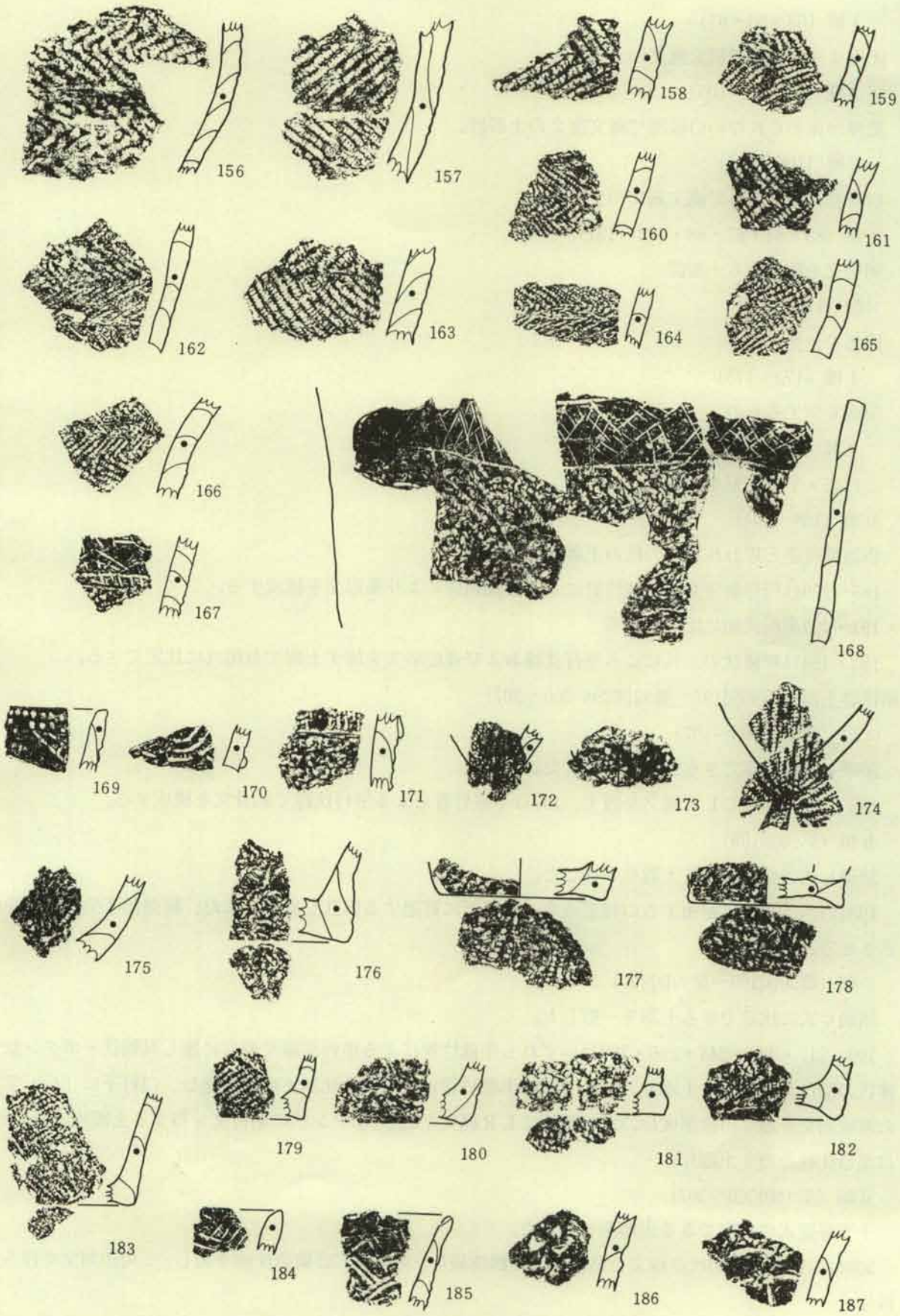
第86図　遺構外出土縄文土器（3）



第87図　遺構外出土縄文土器（4）



第88図　遺構外出土縄文土器（5）



第89図　遺構外出土縄文土器（6）

1種（63～65・67）

肥厚する口縁部で縄文施文の土器群。

2種（61・89～105）

肥厚が認められない口縁部で縄文施文の土器群。

3種（106～166）

口縁部、底部以外で縄文施文の土器群。

f類（83・84・87・88・184～187）

刺切文を施文する土器群

g類（172～182）

底部を一括した。

1種（172～175）

尖底を呈するもの。

2種（176～182）

上げ底・平底を呈するもの。

h類（188～194）

当該期所産と思われるその他の土器群。

188～190は円形刺突文と半截竹管による連続刺突により菱形文を構成する。

191・192黒浜式期に比定できる

193・194は櫛歯状の工具による平行沈線および連続刺突を施す土器で有尾式に比定できる。

第Ⅲ群土器（第90図195～第92図298 300～307）

a類（第90図195～197）

諸磯a式に比定できる土器を一括した。

195・196はともにＬＲ縄文を施す。197は半截竹管による平行沈線で肋骨文を構成する。

b類（第90図198）

諸磯b式に比定できる土器を一括した。

198は「く」の字に屈曲する口縁部破片。口唇下に貫通する円孔を施す。また、屈曲部下位に沈線を横送させる。

c類（第90図199～第92図298）

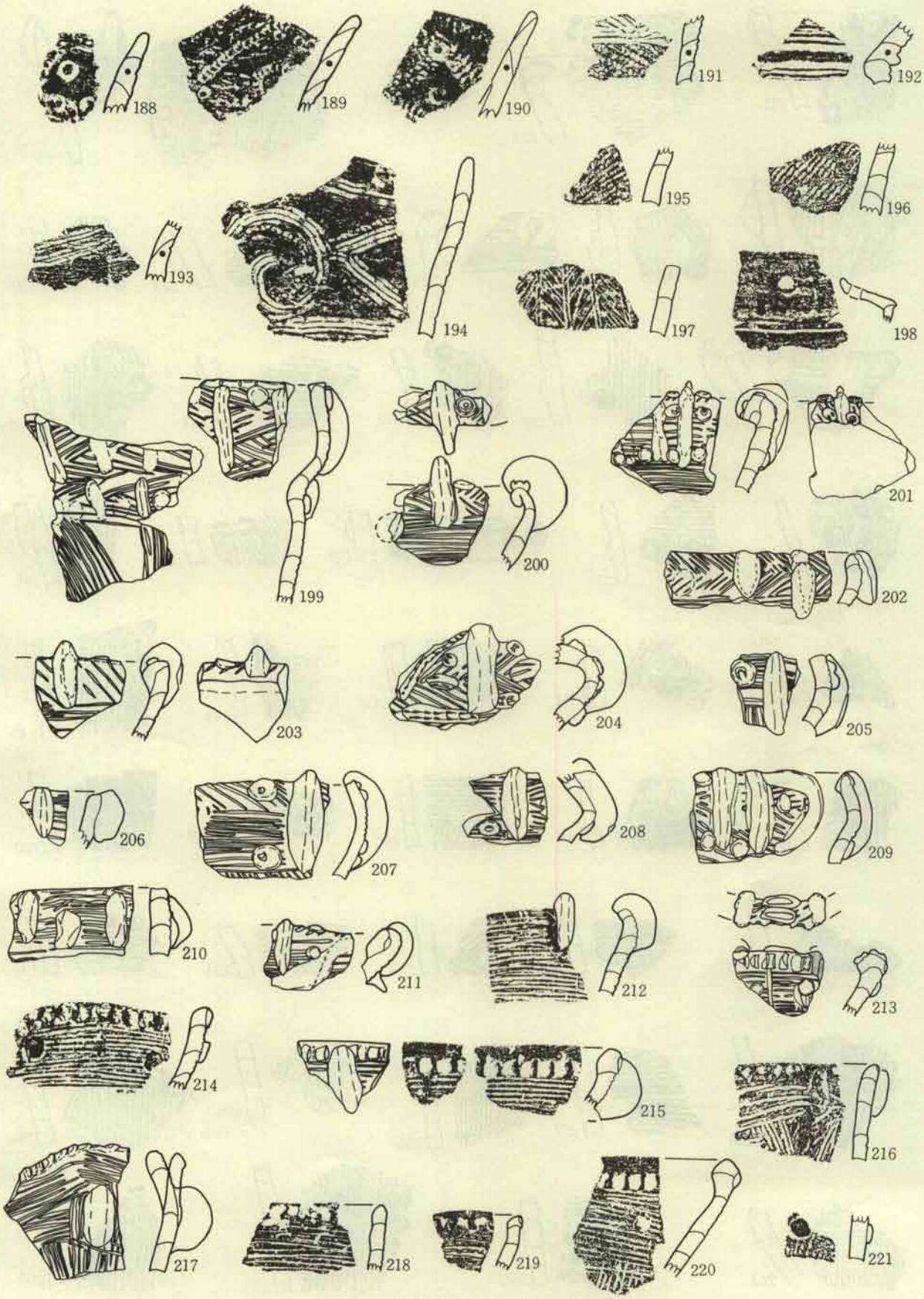
諸磯c式に比定できる土器を一括した。

199～217・222～244・296・298はいずれも半截竹管による集合沈線を地文に施し貝殻状・ボタン状・棒状の貼付文を有する土器片。218～220は半截竹管による集合沈線を地文に施し、口唇下に「C」字状の連続刺突を施す口縁部破片。221は地紋にＬＲ縄文を施し、ボタン状の貼付文を有する土器片。245～295は集合沈線を施す土器片。

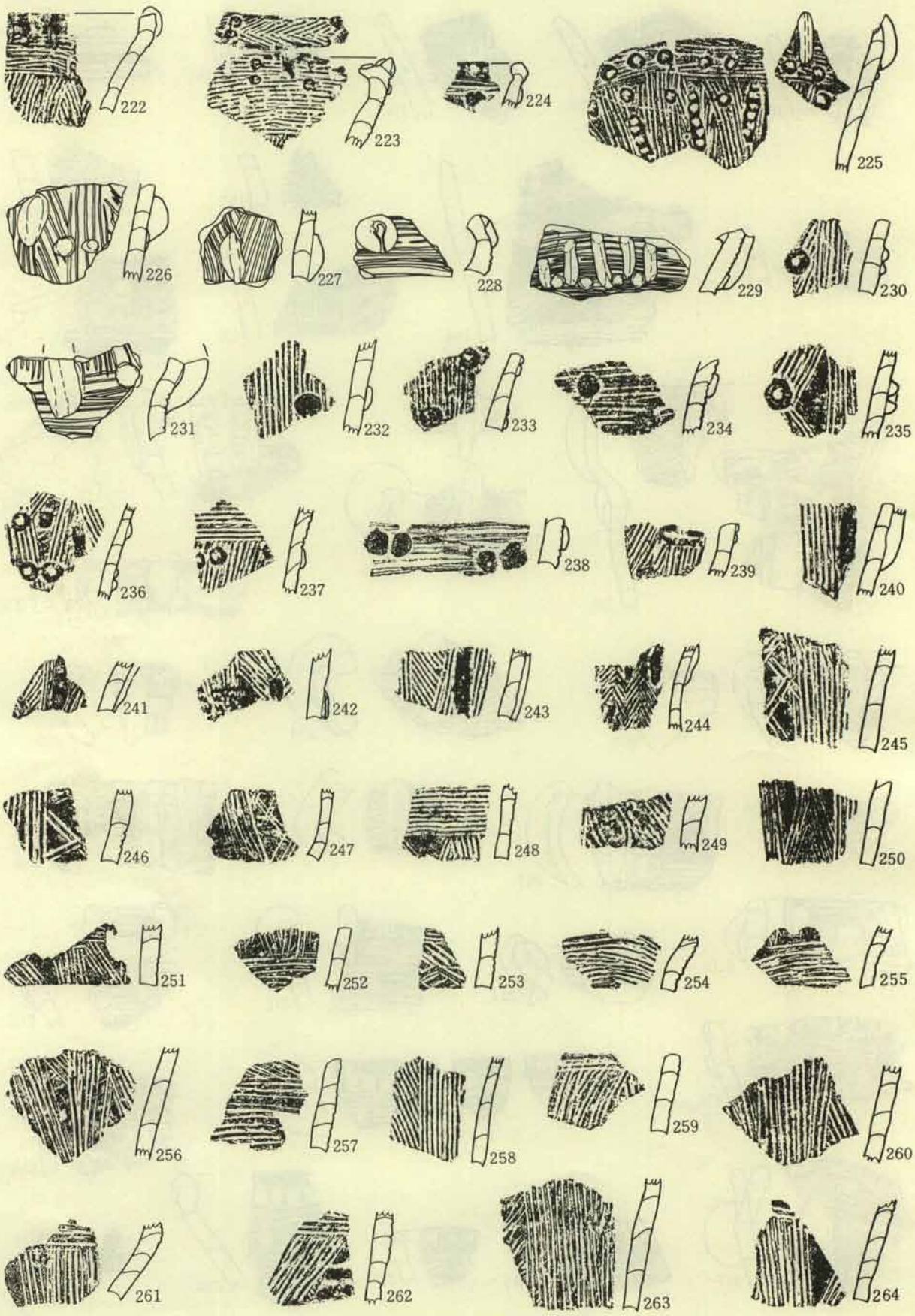
d類（第92図300～307）

十三菩提式に比定できる土器を一括した。

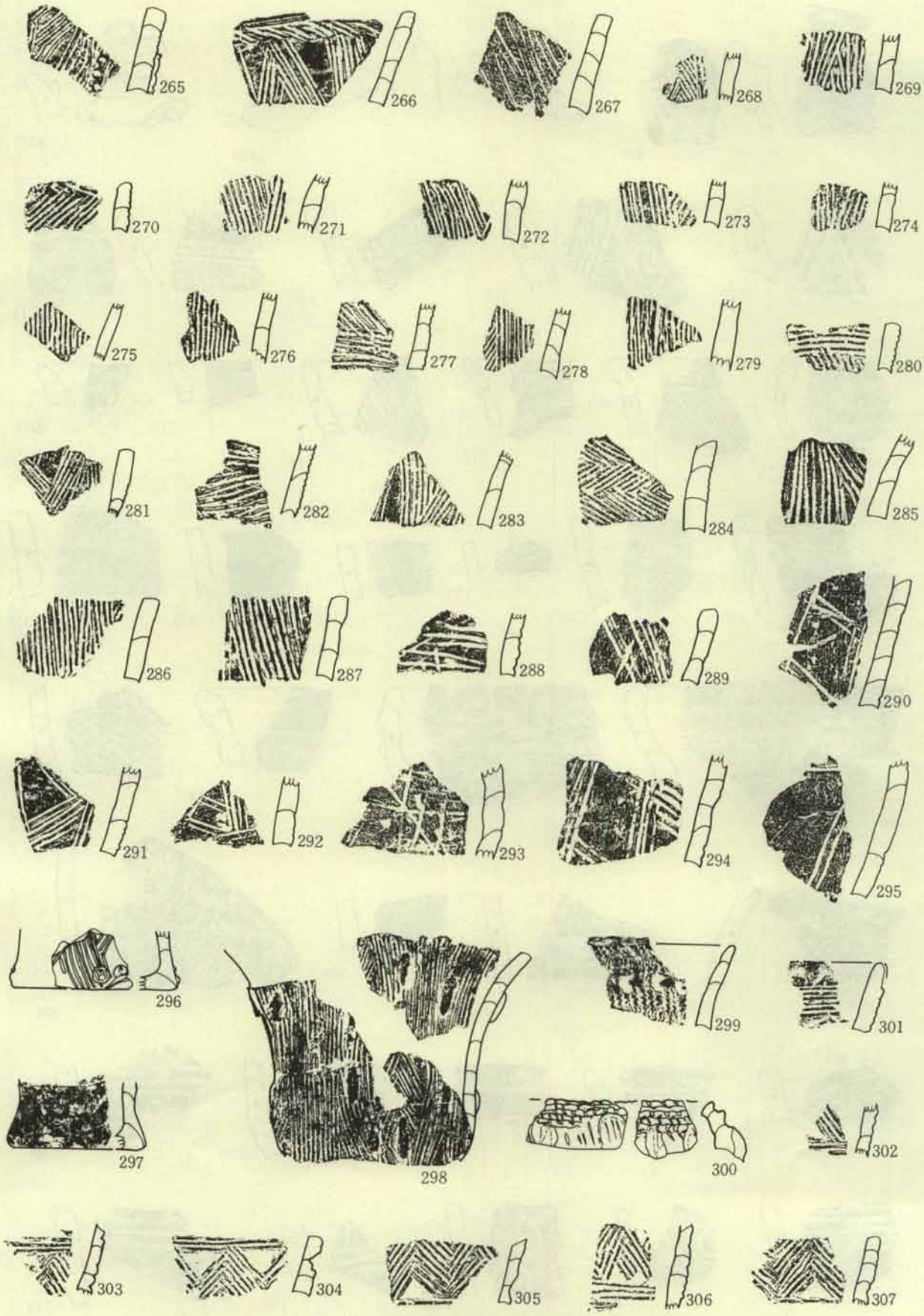
300は口唇下に結節状浮線文を貼付する口縁部破片。301～307は集合沈線を施し、三角印刻文を伴う土器片。



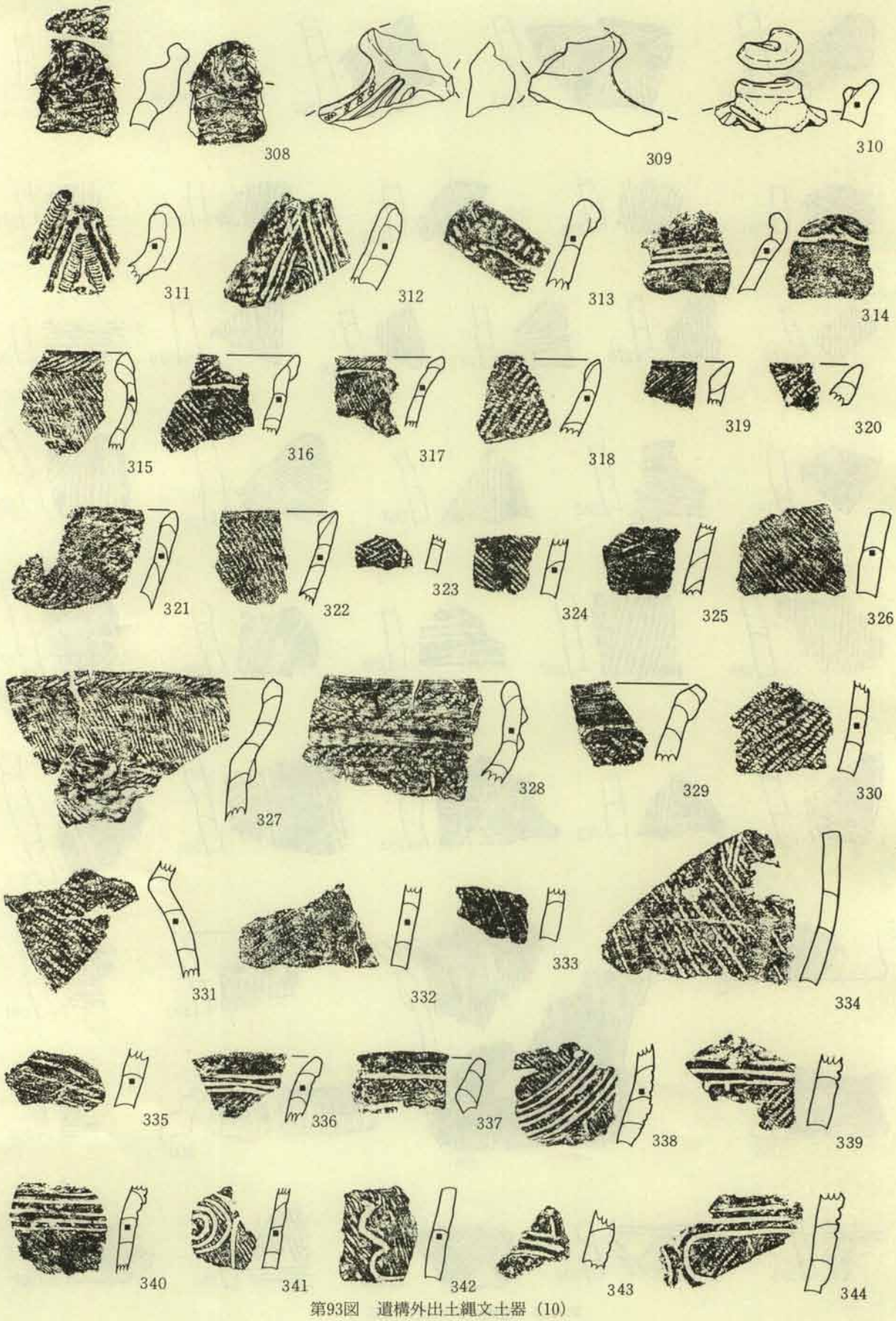
第90図　遺構外出土縄文土器（7）



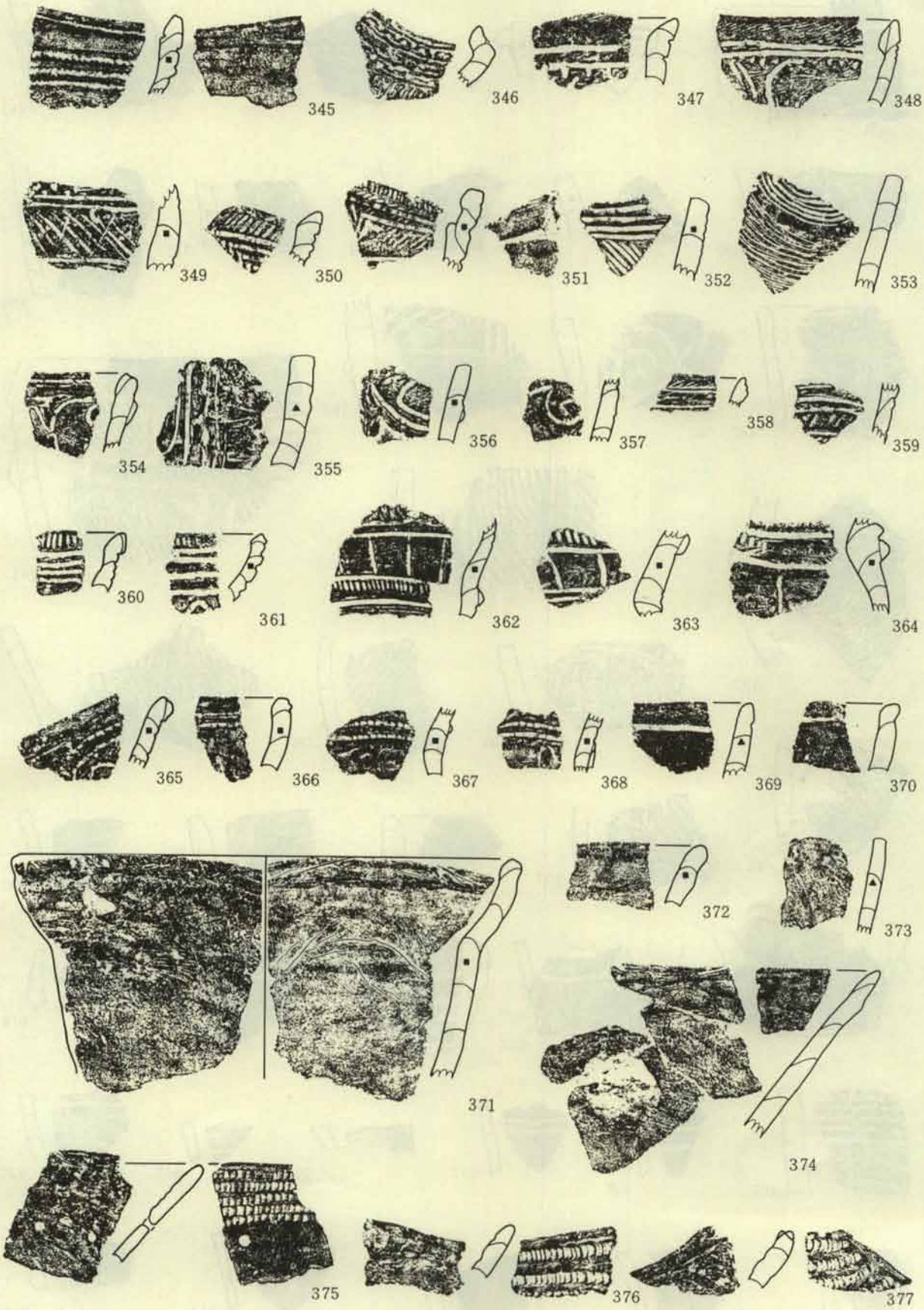
第91図　遺構外出土縄文土器（8）



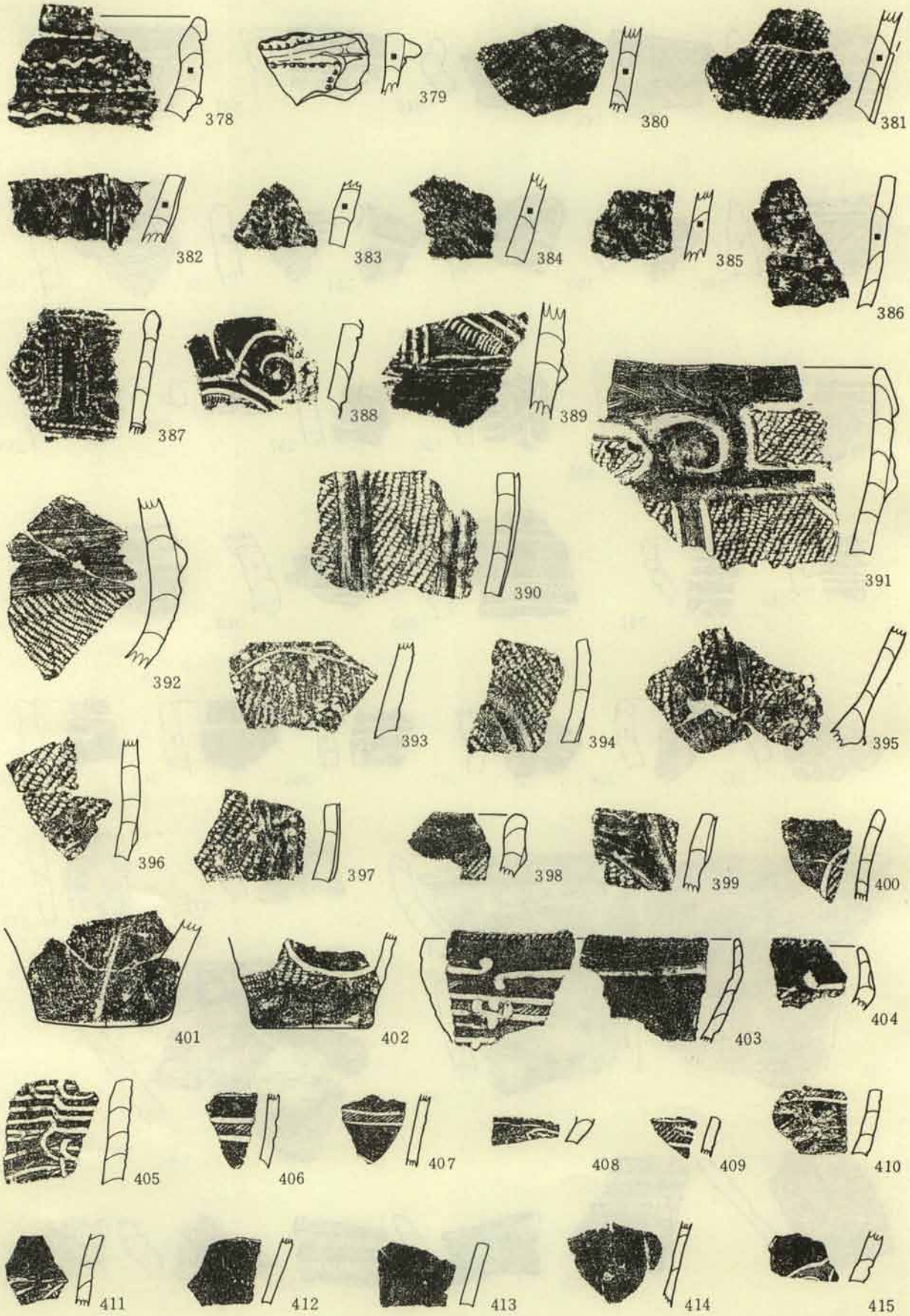
第92図　遺構外出土縄文土器（9）



第93図　遺構外出土縄文土器（10）



第94図　遺構外出土縄文土器（11）



第95図　遺構外出土縄文土器（12）

第Ⅳ群土器（第92図299）

第Ⅲ群土器に平行し貝殻腹縁文を施す土器を本群に当てた。

299は外反する口縁部破片で貝殻腹縁文を縦位に充填し、半截竹管による刺突を施す。

第Ⅴ群土器（第93図308～第94図377）

五領ケ台式に比定できる土器を一括した。

308～310はいずれも把手。311～314は波状を呈する口縁部破片。315～322・327～329は平口縁の破片でいずれも地文に縄文を施す。323～326・330～335は縄文を地文に施す胴部破片。336～344・348は縄文を地文に沈線を施す土器片。345・365～368は連続角押文を施す土器片。352・353は沈線を充填する土器片。360・361は口唇部に刻みを施し以下沈線を施す口縁部破片。369・370は口唇下に沈線を横走させる口縁部破片。371は頸部で「く」の字状に屈曲する無文の深鉢土器。372は無文の口縁部破片。373は無文の胴部破片。374～377はいずれも浅鉢土器で375～377は内面の口唇下に数条の連続爪形文を施す。

第Ⅵ群土器（第95図378～389）

ａ類（第95図378～386）

阿玉台式に比定できる土器を一括した。

378・379は連続角押文を施す土器片。380～386は胴部破片。いずれも量の多少があるものの雲母片を胎土に含む。

ｂ類（第95図387～389）

勝坂系に比定できる土器を一括した。

387は直立気味に外傾する口縁部破片で連続角押文による方形および渦巻文を構成する。389は沈線により三角形の区画を構成し、連続爪形文を施す。

第Ⅶ群土器（第95図390～402）

加曽利Ｅ式に比定できる土器を一括した。

390は沈線を垂下させＲＬ縄文を施す胴部破片。391は口縁部破片で、隆帯による渦巻文と楕円もしくは方形の区画を配し区画内をＲＬ縄文で充填する。胴部は沈線を垂下させ区画を構成し、縄文を充填する。392は隆帯を横送させ以下ＲＬ縄文を充填する。393は沈線による楕円区画を構成しＲＬ縄文をを充填。394は微隆帯により渦巻き文を構成し、空間にＲＬ縄文を充填する。395は底部付近の破片で垂下する微隆帯とＲＬ縄文の充填が認められる。396～402はいずれも微隆帯もしくは沈線と縄文を充填する土器群。

第Ⅷ群土器（第95図403～415）

加曽利Ｂ式および後期に比定できる土器を一括した。

第42表　遺構外出土縄文土器一覧（第84～95図）

挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置
1	遺構外402	O－4 G	31	遺構外373	I－6 G	61	遺構外350	表土	91	遺構外308	L－7 G
2	遺構外403	O－4 G	32	遺構外370	C－4 G	62	遺構外250	J－6 G	92	遺構外307	L－7 G
3	J23H40	J23H覆土	33	遺構外382	L－6 G	63	遺構外245	J－6 G	93	遺構外347	表土
4	遺構外367	M－7 G	34	遺構外387	L－7 G	64	遺構外248	J－6 G	94	遺構外284	L－6 G
5	J23H39	J23H覆土	35	遺構外391	M－5 G	65	遺構外249	J－6 G	95	遺構外246	J－6 G
6	J25H4	J25H覆土	36	遺構外386	L－7 G	66	遺構外280	L－6 G	96	遺構外360	L－7 G
7	遺構外41	4 墳周辺	37	遺構外377	L－6 G	67	遺構外279	L－6 G	97	遺構外285	L－6 G
8	J23H38	J23H覆土	38	遺構外372	I－6 G	68	遺構外282	L－6 G	98	遺構外305	L－7 G
9	J23H37	J23H覆土	39	遺構外394	Q－3 G	69	遺構外311	L－7 G	99	遺構外227	I－6 G
10	遺構外42	L－6 G	40	遺構外399	表土	70	遺構外281	L－6 G	100	遺構外228	I－6 G
11	遺構外43	L－7 G	41	遺構外378	L－6 G	71	遺構外336	M－6 G	101	遺構外349	表土
12	J21H21	J21H覆土	42	遺構外398	表土	72	遺構外314	L－7 G	102	遺構外310	L－7 G
13	J21H20	J21H覆土	43	遺構外371	I－5・6G	73	遺構外247	J－6 G	103	遺構外226	I－6 G
14	遺構外44	L－6 G	44	遺構外376	L－6 G	74	遺構外283	L－6 G	104	遺構外243	J－6 G
15	J13H21	J13H覆土	45	遺構外400	表土	75	遺構外353	表土	105	遺構外252	J－6 G
16	J21H18	J21H覆土	46	遺構外368	3墳主体部周辺	76	遺構外230	I－6 G	106	遺構外298	L－6 G
17	J21H17	J21H覆土	47	遺構外374	I－6 G	77	遺構外354	表土	107	遺構外301	L－6 G
18	J21H19	J21H覆土、L－6 G	48	遺構外375	J－6 G	78	遺構外287	L－6 G	108	遺構外299	L－6 G
19	遺構外381	L－6 G	49	遺構外395	表土	79	遺構外316	L－7 G	109	遺構外319	L－7 G
20	遺構外384	L－6 G	50	遺構外397	表土	80	遺構外321	L－7 G	110	遺構外291	L－6 G
21	遺構外369	廃社周辺	51	遺構外396	表土	81	遺構外253	J－6 G	111	遺構外324	L－7 G
22	遺構外390	M－7 G	52	遺構外401	表土	82	遺構外329	L－7 G	112	遺構外273	K－7 G
23	遺構外392	O－2 G	53	遺構外362	L－6 G	83	遺構外352	表土	113	遺構外264	J－6 G
24	遺構外385	L－6 G	54	遺構外363	L－6 G	84	遺構外340	M－6 G	114	遺構外330	L－7 G
25	遺構外379	L－6 G	55	遺構外364	L－6 G	85	遺構外317	L－7 G	115	遺構外255	J－6 G
26	遺構外380	L－6 G	56	遺構外365	L－6 G	86	遺構外361	L－6 G	116	遺構外322	L－7 G
27	遺構外388	M－3 G	57	遺構外366	L－7 G	87	遺構外254	J－6 G	117	遺構外256	J－6 G
28	遺構外383	L－6 G	58	遺構外277	L－6 G	88	遺構外315	L－7 G	118	遺構外258	J－6 G
29	遺構外393	O－2 G	59	遺構外339	M－6 G	89	遺構外289	L－6 G	119	遺構外257	J－6 G
30	遺構外389	M－7 G	60	遺構外306	L－7 G	90	遺構外320	L－7 G	120	遺構外233	I－6 G

挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置
121	遺構外325	L－7G	151	遺構外260	J－6G	181	遺構外269	J－6G	211	遺構外97	M－5G
122	遺構外296	L－6G	152	遺構外342	M－6G	182	遺構外334	L－7G	212	遺構外118	O－2G
123	遺構外357	表土	153	遺構外326	L－7G	183	遺構外244	I－6G	213	遺構外61	2墳掘り方
124	遺構外238	I－6G	154	遺構外294	L－6G	184	遺構外278	L－6G	214	遺構外117	O－2G
125	遺構外343	M－6G	155	遺構外359	L－7G	185	遺構外337	M－6G	215	遺構外88	L－7G
126	遺構外232	I－6G	156	遺構外318	L－7G	186	遺構外351	表土	216	遺構外50	H－7G
127	遺構外231	I－6G	157	遺構外323	L－7G	187	遺構外338	M－6G	217	遺構外133	表土
128	遺構外303	L－6G	158	遺構外327	L－7G	188	遺構外313	L－7G	218	遺構外105	M－6G
129	遺構外240	I－6G	159	遺構外266	J－6G	189	遺構外309	L－7G	219	遺構外74	J－3G
130	遺構外241	I－6G	160	遺構外267	J－6G	190	遺構外346	表土	220	遺構外82	L－6G
131	遺構外259	J－6G	161	遺構外328	L－7G	191	遺構外8	表土	221	遺構外47	M－6G
132	遺構外274	L－5G	162	遺構外237	I－5G	192	遺構外151	地割れ中	222	遺構外143	表土
133	遺構外239	I－6G	163	遺構外290	L－6G	193	遺構外7	4墳主体部周辺	223	遺構外142	表土
134	遺構外341	M－6G	164	遺構外235	I－6G	194	遺構外413	表土	224	遺構外62	廃社周辺
135	遺構外236	I－6G	165	遺構外242	I－6G	195	遺構外154	N－6G	225	遺構外60	L－4・5G
136	遺構外276	L－5G	166	遺構外295	L－6G	196	遺構外46	L－5G	226	遺構外94	M－3G
137	遺構外345	廃社周辺	167	遺構外286	L－6G	197	遺構外150	M－6G	227	遺構外108	M－6G
138	遺構外292	L－6G	168	遺構外288	L－6G	198	遺構外149	表土	228	遺構外48	2墳主体部周辺
139	遺構外268	J－6G	169	遺構外348	表土	199	遺構外102	M－6G	229	遺構外148	廃社周辺
140	遺構外332	L－7G	170	遺構外344	廃社周辺	200	遺構外89	L－6G	230	遺構外72	I－6G
141	遺構外331	L－7G	171	遺構外355	表土	201	遺構外147	表土	231	遺構外137	表土
142	遺構外356	表土	172	遺構外297	L－6G	202	遺構外49	L－5G	232	遺構外80	L－6G
143	遺構外263	J－6G	173	遺構外304	L－6G	203	遺構外145	表土	233	遺構外139	表土
144	遺構外265	J－6G	174	遺構外270	J－6G	204	遺構外115	N－6G	234	遺構外104	M－6G
145	遺構外275	L－4G	175	遺構外300	L－6G	205	遺構外107	M－6G	235	遺構外135	表土
146	遺構外293	L－6G	176	遺構外272	J－7G	206	遺構外51	H－7G	236	遺構外140	表土
147	遺構外261	J－6G	177	遺構外333	L－7G	207	遺構外134	表土	237	遺構外138	表土
148	遺構外234	I－6G	178	遺構外358	表土	208	遺構外87	L－6G	238	遺構外64	廃社周辺
149	遺構外302	L－6G	179	遺構外271	J－6G	209	遺構外136	表土	239	遺構外85	L－6G
150	遺構外262	J－6G	180	遺構外335	L－7G	210	遺構外130	地割れ	240	遺構外121	O－2G

挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置
241	遺構外67	I－5G	271	遺構外73	I－6G	301	遺構外152	M－5G	331	遺構外176	M－5G
242	遺構外122	O－2G	272	遺構外111	N－5G	302	遺構外14	M－6G	332	遺構外221	表土
243	遺構外120	O－2G	273	遺構外68	I－5G	303	遺構外11	M－5G	333	遺構外157	石祠周辺
244	遺構外126	O－6G	274	遺構外55	2墳主体部周辺	304	遺構外12	M－6G	334	遺構外216	表土
245	遺構外114	N－6G	275	遺構外58	廃社周辺	305	遺構外10	I－8G	335	遺構外193	M－6G12
246	遺構外109	M－6G	276	遺構外113	N－5G	306	遺構外9	石祠周辺	336	遺構外196	N－6G
247	遺構外100	M－5G	277	遺構外54	2墳主体部	307	遺構外13	M－6G	337	遺構外199	Q－3G
248	遺構外99	M－5G	278	遺構外81	L－6G	308	遺構外185	M－6G	338	遺構外189	M－6G
249	遺構外129	1墳(Q－6G)	279	遺構外112	N－5G	309	遺構外224	表土	339	遺構外187	M－6G
250	遺構外103	M－6G	280	遺構外92	L－7G	310	遺構外177	M－6G13	340	遺構外190	M－6G
251	遺構外86	L－6G	281	遺構外93	L－7G	311	遺構外209	Q－5G	341	遺構外200	Q－3G
252	遺構外128	1墳(Q－6G)	282	遺構外84	L－6G	312	遺構外212	廃社周辺	342	遺構外211	R－5G
253	遺構外66	廃社周辺	283	遺構外56	H－7G	313	遺構外208	Q－5G	343	遺構外171	M－5G
254	遺構外52	2墳主体部周辺	284	遺構外78	L－5G	314	遺構外197	N－6G	344	遺構外188	M－6G
255	遺構外53	2墳主体部周辺	285	遺構外83	L－6G	315	遺構外155	1墳主体部周辺	345	遺構外206	1墳(Q－6G)
256	遺構外131	地割れ中	286	遺構外141	表土	316	遺構外160	C－4G	346	遺構外181	M－6G
257	遺構外146	表土	287	遺構外125	O－6G	317	遺構外213	廃社周辺	347	遺構外184	M－6G
258	遺構外116	O－2G	288	遺構外91	L－7G	318	遺構外195	N－6G	348	遺構外179	M－6G
259	遺構外77	L－2G	289	遺構外70	廃社周辺	319	遺構外182	M－6G	349	遺構外158	地割れ
260	遺構外90	L－7G	290	遺構外69	廃社周辺	320	遺構外183	M－6G	350	遺構外166	L－6G
261	遺構外79	L－6G	291	遺構外144	表土	321	遺構外169	M－5G	351	遺構外219	表土
262	遺構外132	地割れ中	292	遺構外95	M－4G	322	遺構外178	M－6G	352	遺構外174	M－5G
263	遺構外124	O－6G	293	遺構外57	廃社周辺	323	遺構外162	I－5・6G	353	遺構外203	Q－3G
264	遺構外75	J－5G	294	遺構外65	廃社周辺	324	遺構外164	J－5G	354	遺構外204	1墳(Q－6G)
265	遺構外119	O－2G	295	遺構外59	廃社周辺	325	遺構外161	I－5G	355	遺構外191	M－6G
266	遺構外127	1墳(Q－6G)	296	遺構外96	M－5G	326	遺構外215	廃社周辺	356	遺構外214	廃社周辺
267	遺構外98	M－6G	297	遺構外123	O－2G	327	遺構外168	L－7G	357	遺構外205	1墳(Q－6G)
268	遺構外76	J－5G	298	遺構外63	H－7G	328	遺構外194	M－6G6	358	遺構外175	M－5G
269	遺構外101	M－5G	299	遺構外225	表土	329	遺構外172	M－5G	359	遺構外167	L－6G
270	遺構外106	M－6G	300	遺構外110	M－6G	330	遺構外173	M－5G	360	遺構外180	M－6G

挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置
361	遺構外192	M－6G	375	遺構外170	M－5G	389	遺構外416	表土	403	遺構外15	4墳周辺
362	遺構外159	廃社周辺	376	遺構外223	表土	390	遺構外32	古墓周辺	404	遺構外16	4墳周辺
363	遺構外201	N－6G	377	遺構外222	表土	391	遺構外39	N－5G	405	遺構外22	I－2G
364	遺構外218	表土	378	遺構外410	表土	392	遺構外31	4墳周辺	406	遺構外18	4墳周辺
365	遺構外210	R－4G	379	遺構外409	Q－4G	393	遺構外29	3墳主体部周辺	407	遺構外19	M－5G
366	遺構外207	Q－6G	380	遺構外404	1墳(Q－6G)	394	遺構外33	古墓周辺	408	遺構外27	L－4G
367	遺構外156	石祠周辺	381	遺構外405	2墳主体部周辺	395	遺構外36	古墓周辺	409	遺構外26	L－5G
368	遺構外198	N－6G	382	遺構外407	M－6G	396	遺構外35	古墓周辺	410	遺構外24	地割れ中
369	遺構外163	J－3G	383	遺構外408	N－6G	397	遺構外34	古墓周辺	411	遺構外23	I－5G
370	遺構外165	J－6G	384	遺構外406	M－6G	398	遺構外28	3墳主体部周辺	412	遺構外17	4墳周辺
371	遺構外186	M－6G5	385	遺構外412	R－4G	399	遺構外38	I－2G	413	遺構外21	表土
372	遺構外217	表土	386	遺構外411	表土	400	遺構外30	古墓周辺	414	遺構外25	地割れ中
373	遺構外220	表土	387	遺構外414	L－6G	401	遺構外37	古墓周辺	415	遺構外20	M－6G
374	遺構外202	M－6G	388	遺構外415	R－5G	402	遺構外40	表土			

縄文時代石器（第96～101図）

縄文時代の遺構外出土石器は、定形石器のみを図示した。

石鏃は25点図示した。1は凹基有茎、2～4は凸基無茎、5・6は平基無茎、7～25は凹基無茎と圧倒的に凹基無茎のものが多い。

石錐は2点図示した。ともにやや大きめな剝片の鋭角部位に調整を施し錐部を作出している。

石匙は6点図示した。28は小型で横長の石匙。29～31・33は横型の石匙。32は縦型の石匙。

34はピエス・エスキーユ。

35・36は玦状耳飾り。37は楕円形の垂飾。

38・39はともに砥石で、39は有溝の砥石である。

40～47・53はスクレーパー、48～52・54は箆状石器である。

55・56は鈍角な剝離面を持つ礫器。

57～78は打製石斧。

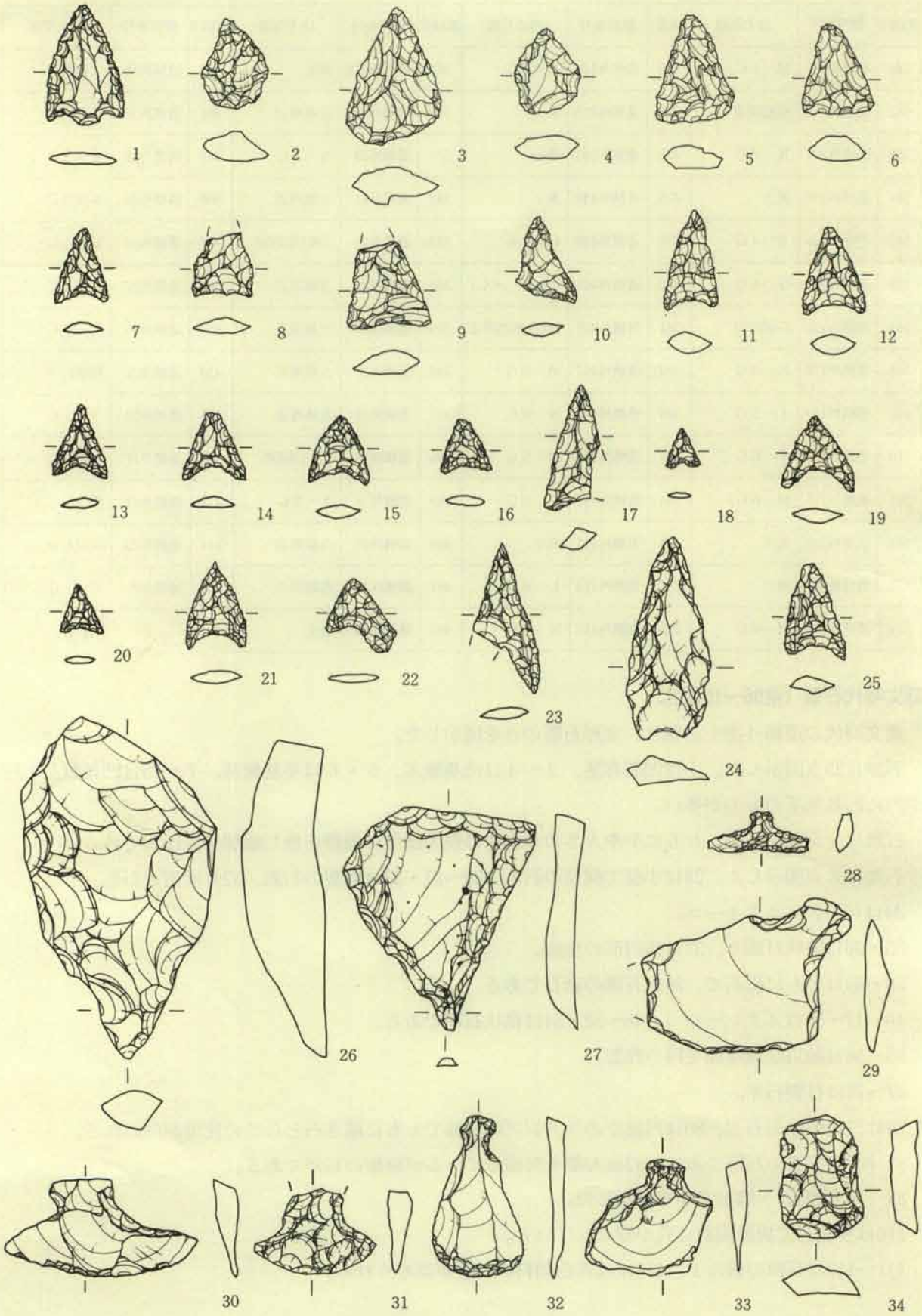
79は三角錐形の石器、80は円錐型のスタンプ型石器でともに敲き石としての使用が伺われる。

81は尖頭器型の石器である。82は刃部を欠損しているが磨製の石斧である。

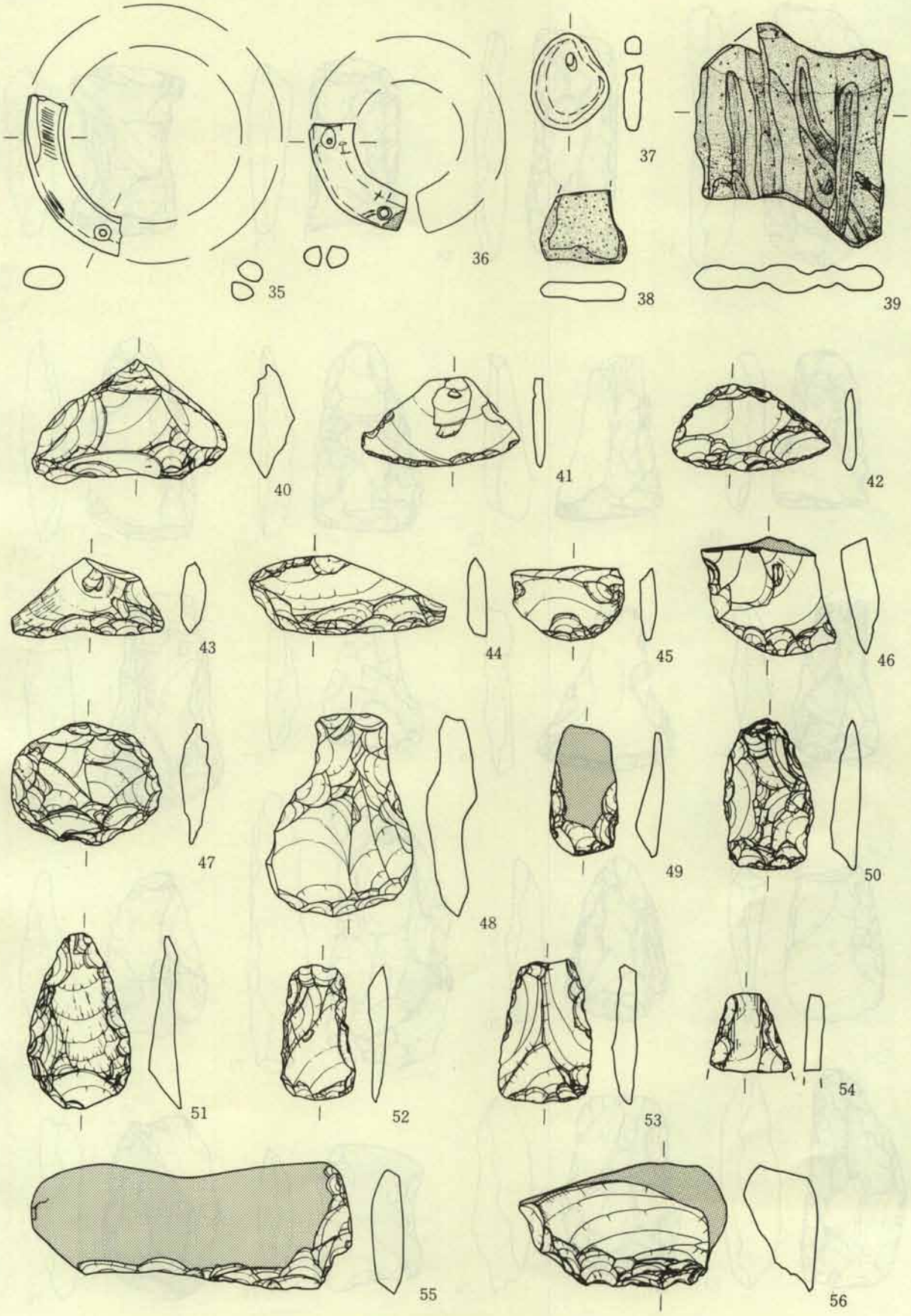
83～109は凹石・磨石の類を図示した。

110は多孔石で表裏両面に孔が穿たれている。

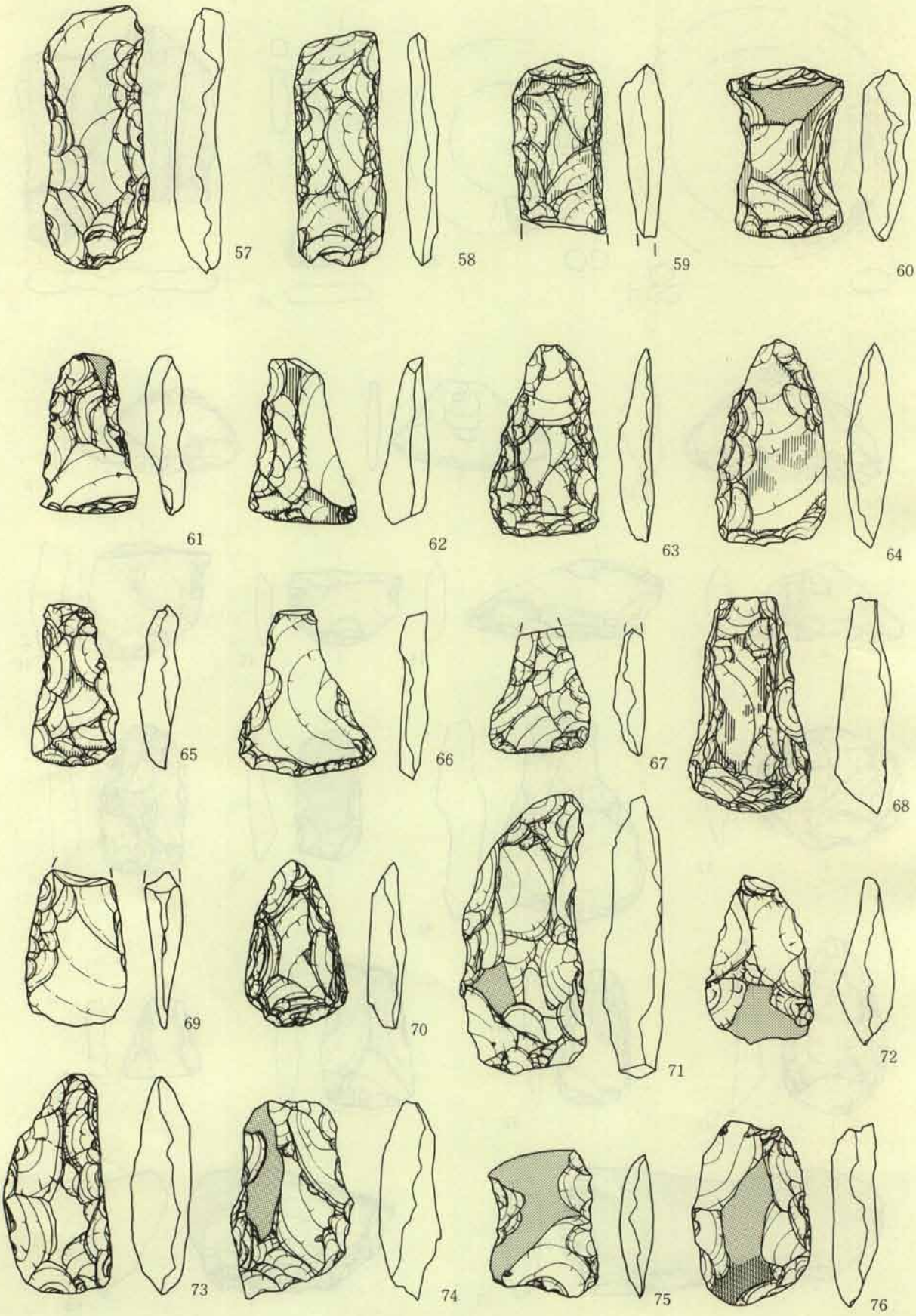
111～113は石皿の破片で、113には赤色顔料の付着が認められる。



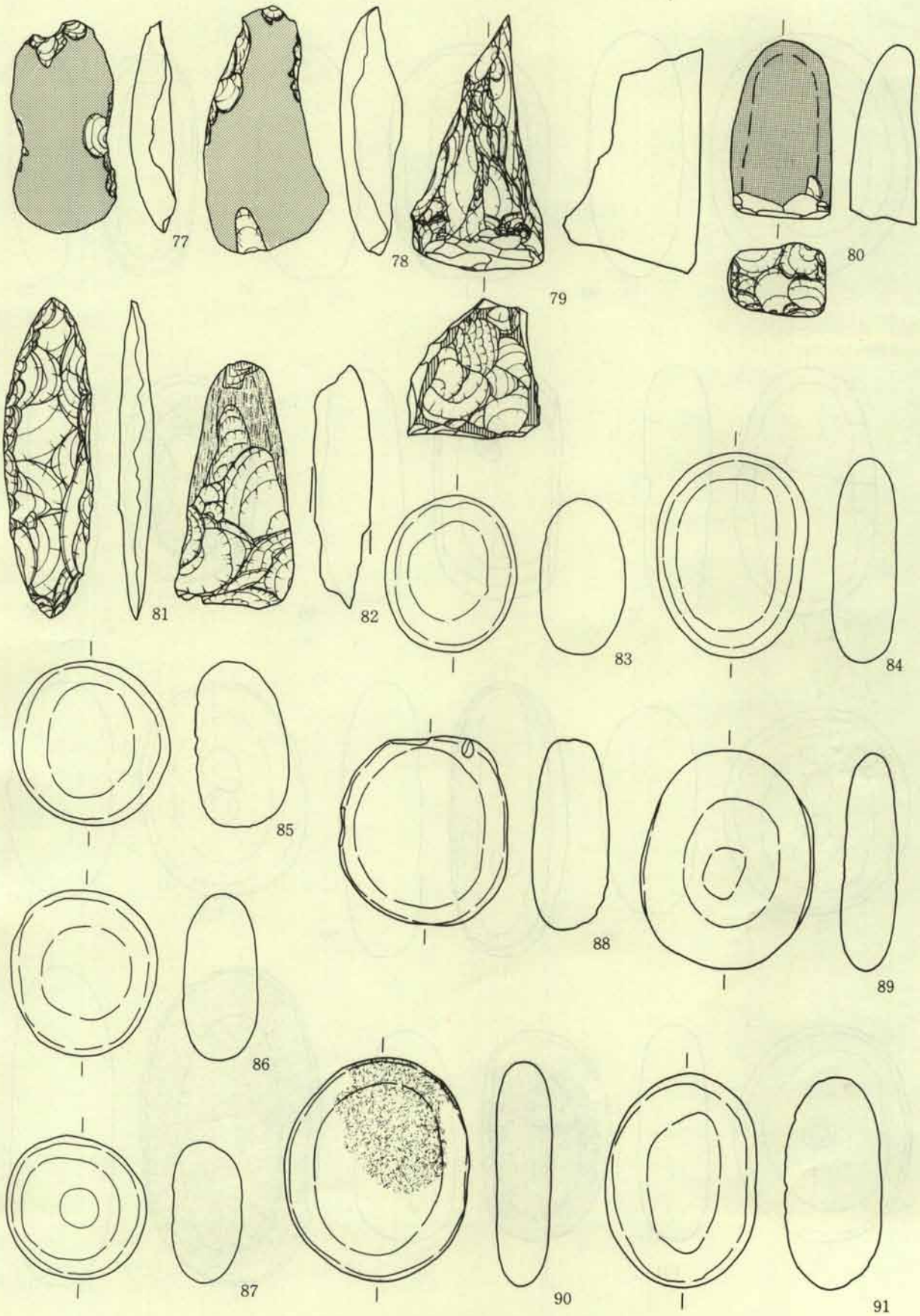
第96図　遺構外出土縄文時代石器（1）



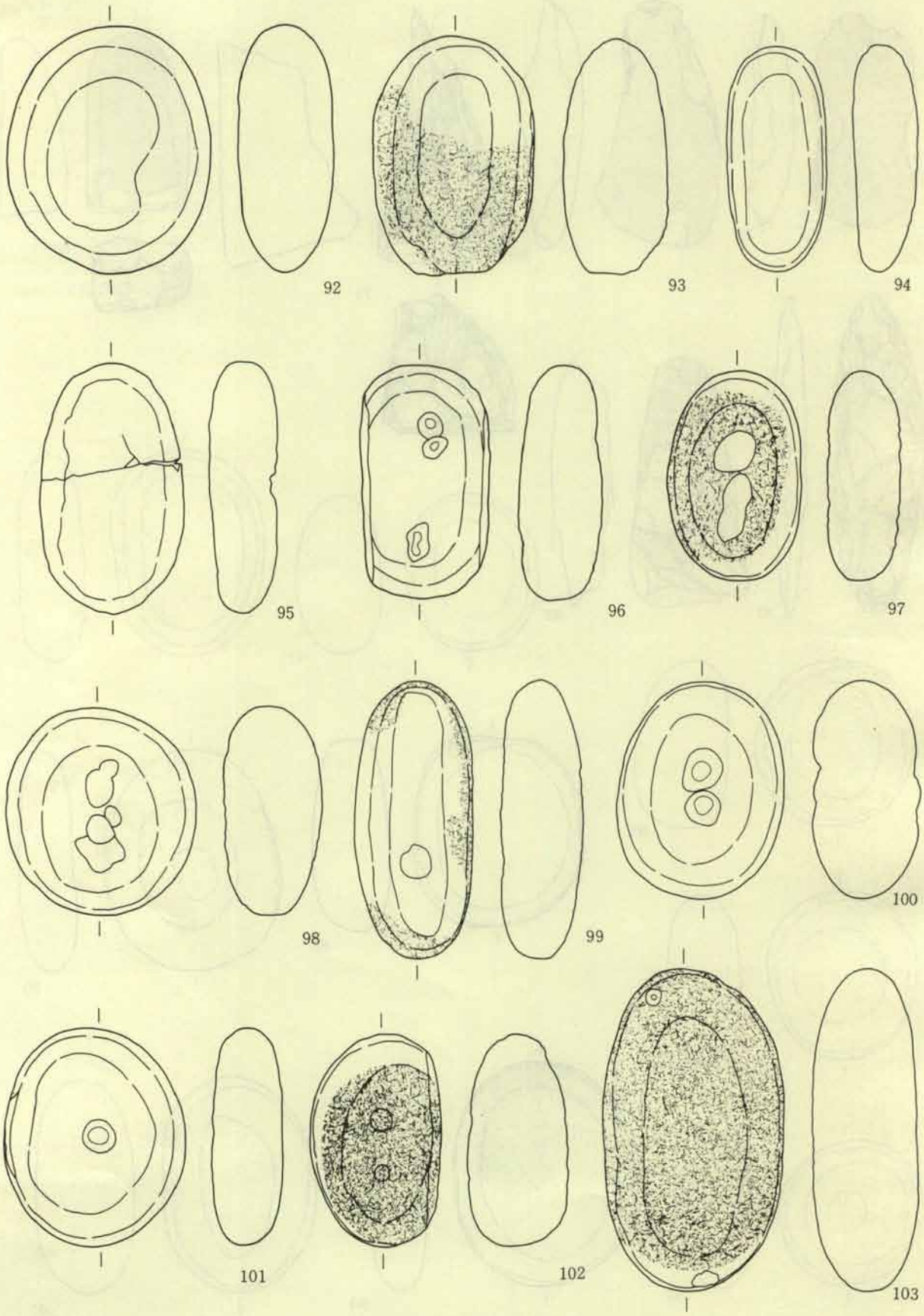
第97図　遺構外出土縄文時代石器（2）



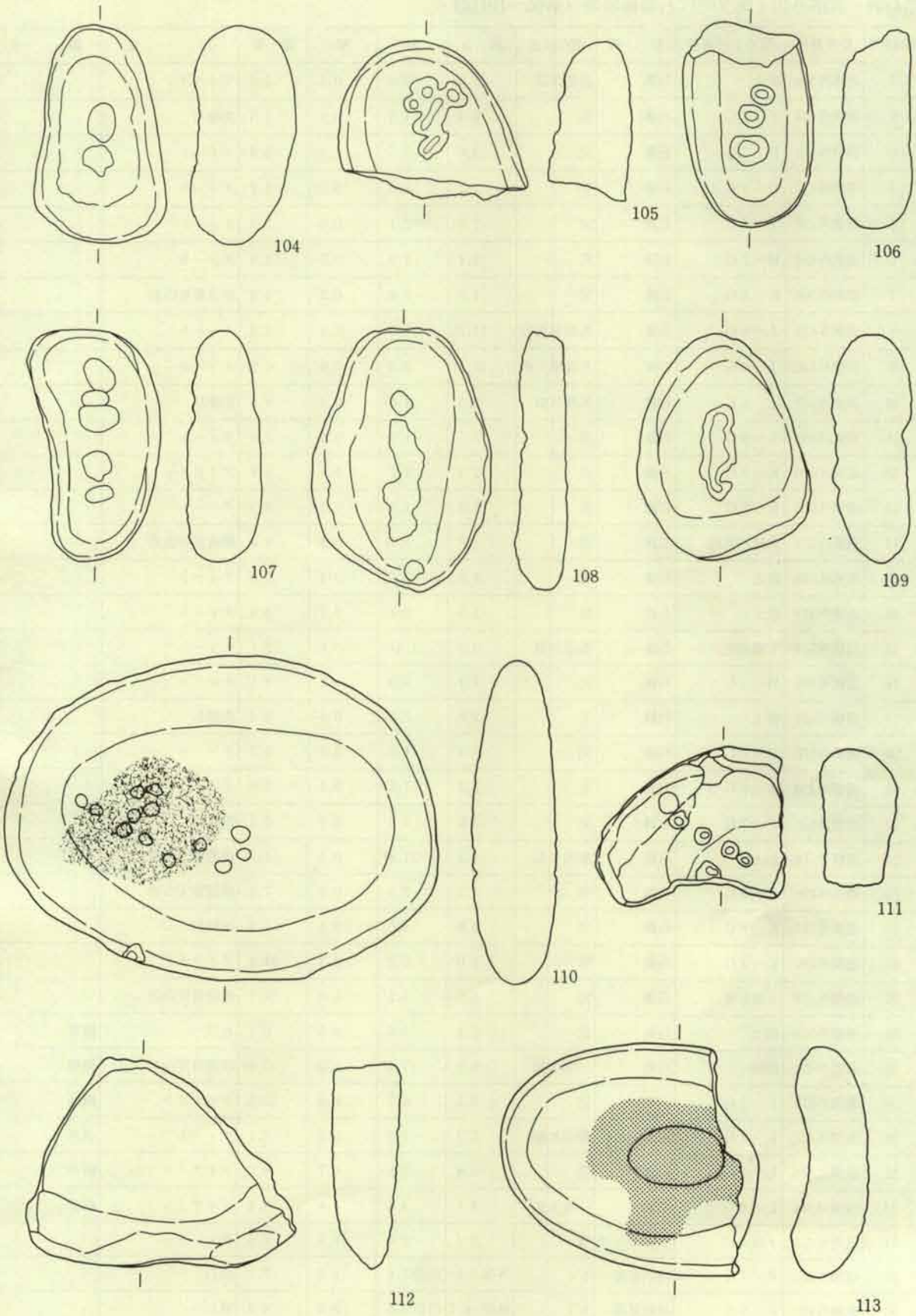
第98図　遺構外出土縄文時代石器（3）



第99図　遺構外出土縄文時代石器（4）



第100図　遺構外出土縄文時代石器（5）



第101図　遺構外出土縄文時代石器（6）

第43表　遺構外出土縄文時代石器観察表（第96～101図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　　質	備　　考
1	遺構外522	表土	石鏃	基部欠損	(3.2)	2.0	0.3	2.6	デイサイト	
2	遺構外431	F－7G	石鏃	完	2.4	1.8	0.8	2.5	黒曜石	
3	遺構外432	H－7G	石鏃	完	3.6	2.5	1.0	6.9	チャート	
4	遺構外433	H－7G	石鏃	完	2.2	1.8	0.7	2.7	チャート	
5	遺構外436	J－6G	石鏃	完	2.9	2.1	0.6	3.4	チャート	
6	遺構外434	H－7G	石鏃	完	2.4	1.9	0.7	2.8	チャート	
7	遺構外509	K－6G	石鏃	完	1.9	1.4	0.3	0.6	緻密質安山岩	
8	遺構外435	J－6G	石鏃	先端部欠損	(1.7)	1.6	0.4	1.2	チャート	
9	遺構外440	J－6G	石鏃	先端部欠損	(2.3)	2.3	0.6	2.9	チャート	
10	遺構外437	J－6G	石鏃	基部欠損	2.3	(1.6)	0.4	0.8	黒曜石	
11	遺構外439	J－6G	石鏃	完	2.7	1.5	0.6	1.5	チャート	
12	遺構外510	K－8G	石鏃	完	2.3	1.7	0.5	1.7	デイサイト	
13	遺構外513	L－7G	石鏃	完	2.0	1.5	0.3	0.5	チャート	
14	遺構外523	東側地割れ	石鏃	完	1.8	1.7	0.3	0.6	緻密質安山岩	
15	遺構外520	表土	石鏃	完	1.8	1.6	0.4	0.8	チャート	
16	遺構外517	表土	石鏃	完	1.5	1.4	0.3	0.4	チャート	
17	遺構外524	4墳周辺	石鏃	基部欠損	3.3	(1.4)	0.6	2.1	チャート	
18	遺構外515	M－5G	石鏃	完	1.1	0.9	0.2	0.1	チャート	
19	遺構外521	表土	石鏃	完	2.0	2.0	0.4	0.8	黒曜石	
20	遺構外516	N－6G	石鏃	完	1.3	1.2	0.2	0.2	チャート	
21	遺構外438	J－6G	石鏃	完	2.3	1.6	0.3	1.0	チャート	
22	遺構外430	F－7G	石鏃	完	2.0	1.9	0.2	0.6	黒曜石	
23	遺構外518	表土	石鏃	基部欠損	4.1	(1.8)	0.3	1.7	緻密質安山岩	
24	遺構外420	J－5G	石鏃	完	5.3	2.3	0.8	7.9	緻密質安山岩	
25	遺構外511	K－8G	石鏃	完	2.6	1.6	0.5	1.5	流紋岩	
26	遺構外457	K－7G	石錐	完	9.0	5.2	2.3	94.0	デイサイト	
27	遺構外456	3墳前庭	石錐	完	5.9	5.1	1.0	27.2	緻密質安山岩	
28	遺構外519	表土	石匙	完	1.1	2.6	0.5	0.7	石英	横型
29	遺構外454	炭窯	石匙	一部欠損	5.5	(7.4)	1.0	35.6	緻密質安山岩	横型
30	遺構外512	L－7G	石匙	完	3.5	6.7	0.9	12.6	デイサイト	横型
31	遺構外421	K－7G	石匙	基部欠損	2.3	3.2	0.7	3.1	チャート	横型
32	遺構外514	L－7G	石匙	完	5.8	3.3	0.7	9.3	デイサイト	縦型
33	遺構外484	L－6G	石匙	一部欠損	4.1	4.6	0.8	10.4	デイサイト	横型
34	遺構外422	4墳周辺	ピエス・エスキーユ	完	3.3	2.3	0.8	7.5	チャート	
35	遺構外424	F－7G	玦状耳飾	1/4	外径5.1	内径2.8	0.5	7.2	滑石	
36	遺構外423	K－6G	玦状耳飾	1/3	外径 6.7	内径4.6	0.6	4.9	滑石	
37	遺構外425	M－7G	垂飾	完	5.0	4.1	0.8	27.4	輝石安山岩	

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
38	遺構外451	K－6G	砥石	半分	(3.9)	4.6	1.0	24.6	砂岩	
39	遺構外450	J－6G	有溝砥石	ほぼ完形	11.6	10.5	1.5	159.0	砂岩	
40	遺構外508	I－6G	スクレーパー	完	6.6	10.2	2.3	146.0	緻密質安山岩	
41	遺構外445	I－5G	スクレーパー	完	4.7	8.3	0.7	29.4	デイサイト	
42	遺構外443	H－7G	スクレーパー	完	4.5	8.3	0.8	29.8	デイサイト	
43	遺構外446	I－7G	スクレーパー	完	4.2	8.1	1.3	41.0	デイサイト	
44	遺構外448	I－4G	スクレーパー	完	4.2	10.3	1.1	52.0	デイサイト	
45	遺構外447	I－5G	スクレーパー	完	4.0	6.0	0.9	25.6	デイサイト	
46	遺構外444	I－3G	スクレーパー	完	6.2	7.2	2.0	74.5	デイサイト	
47	遺構外462	L－7G	スクレーパー	完	6.4	8.0	1.7	85.5	緻密質安山岩	
48	遺構外455	J－5G	箆状石器	完	7.2	5.2	1.8	56.5	デイサイト	
49	遺構外441	I－8G	箆状石器	完	6.8	3.6	1.4	37.0	緻密質安山岩	
50	遺構外460	K－5G	箆状石器	完	7.9	4.8	1.7	66.0	緻密質安山岩	
51	遺構外461	K－7G	箆状石器	完	9.2	5.5	1.8	82.0	デイサイト	
52	遺構外442	I－6G	箆状石器	完	7.2	3.8	1.1	33.0	デイサイト	
53	遺構外463	表土	スクレーパー	完	7.6	5.0	1.3	57.0	緻密質安山岩	
54	遺構外464	表土	箆状石器	基部のみ	(4.2)	4.3	1.0	19.8	デイサイト	
55	遺構外459	N－6G	礫器	完	6.9	16.8	1.8	333.0	凝灰質砂岩	
56	遺構外458	M－6G20	礫器	完	6.7	11.8	3.9	328.0	安山岩質凝灰岩	
57	遺構外504	表土	打製石斧	完	13.6	5.6	2.6	256.0	デイサイト	
58	遺構外489	4墳周辺	打製石斧	完	12.1	4.6	1.8	124.0	緻密質安山岩	
59	遺構外497	表土	打製石斧	刃部欠損	(9.0)	5.1	2.3	113.0	輝石安山岩	
60	遺構外491	炭窯	打製石斧	完	8.9	6.0	2.7	160.0	緻密質安山岩	
61	遺構外501	K－6G	打製石斧	完	8.3	5.1	2.1	80.5	安山岩質凝灰岩	
62	遺構外495	K－6G	打製石斧	完	8.6	5.6	2.7	98.5	緻密質安山岩	
63	遺構外488	J－5G	打製石斧	完	10.0	5.7	2.0	118.0	緻密質安山岩	
64	遺構外496	L－6G	打製石斧	完	10.7	5.8	2.4	180.0	緻密質安山岩	
65	遺構外503	表土	打製石斧	完	8.5	4.6	2.2	71.5	凝灰質砂岩	
66	遺構外493	L－6G	打製石斧	完	8.8	7.3	1.6	84.5	安山岩質凝灰岩	
67	遺構外502	L－6G	打製石斧	基部欠損	(6.6)	5.3	1.8	61.5	安山岩質凝灰岩	
68	遺構外498	J－4G	打製石斧	完	11.1	6.3	2.8	200.0	安山岩質凝灰岩	
69	遺構外500	表土	打製石斧	基部欠損	(8.1)	5.3	2.1	83.0	ホルンフェルス	
70	遺構外487	J－6G	打製石斧	完	8.7	5.5	2.0	96.5	緻密質安山岩	
71	遺構外499	K－5G	打製石斧	完	14.6	6.9	3.2	348.0	デイサイト	
72	遺構外494	N－6G	打製石斧	完	8.8	5.6	3.0	120.0	デイサイト	
73	遺構外505	表土	打製石斧	完	11.5	5.7	3.2	214.0	凝灰質砂岩	
74	遺構外506	表土	打製石斧	完	10.4	6.5	3.3	226.0	緻密質安山岩	
75	遺構外486	I－6G	打製石斧	完	7.8	5.8	1.7	85.5	安山岩質凝灰岩	

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	遺存状態	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
76	遺構外507	R－5G	打製石斧	完	9.8	6.2	2.4	154.0	デイサイト	
77	遺構外490	1墳主体部	打製石斧	完	11.0	5.6	2.3	167.0	緻密質安山岩	
78	遺構外492	R－4G	打製石斧	完	12.9	6.5	3.3	236.0	緻密質安山岩	
79	遺構外453	J－5G	三角錐型石器	完	13.3	7.0	7.3	555.0	デイサイト	
80	遺構外452	K－6G	スタンプ型石器	完	9.2	5.4	3.8	284.0	安山岩質凝灰岩	
81	遺構外485	表土	尖頭器型石器	完	11.3	3.7	1.2	47.6	安山岩質凝灰岩	
82	遺構外449	表土	磨製石斧	刃部欠損	(12.9)	(6.2)	3.1	323.0	変はんれい岩	
83	遺構外467	L－6G	磨石	完	8.2	7.0	4.5	323.0	輝石安山岩	
84	遺構外473	表土	磨石	完	10.7	8.0	3.5	423.0	輝石安山岩	
85	遺構外471	K－7G	磨石	完	8.6	8.3	4.9	455.0	閃緑岩	
86	遺構外479	L－6G	磨石	完	8.6	7.7	3.8	319.0	輝石安山岩	
87	遺構外477	M－6G	磨石	完	7.4	7.4	3.6	283.0	輝石安山岩	
88	遺構外531	1溝	磨石	完	10.0	8.8	4.1	473.0	輝石安山岩	
89	遺構外529	K－7G	凹石	完	11.4	9.1	3.0	449.0	輝石安山岩	
90	遺構外525	K－5G	磨石	完	11.8	9.6	3.1	472.0	輝石安山岩	炭化物付着
91	遺構外526	J－6G	磨石	完	11.4	8.0	5.2	610.0	輝石安山岩	
92	遺構外528	H－6G	凹石	完	12.8	10.6	5.0	982.0	輝石安山岩	
93	遺構外532	K－7G	磨石	完	12.3	8.3	5.5	720.0	輝石安山岩	炭化物付着
94	遺構外476	L－6G	磨石	完	11.7	5.2	3.3	290.0	閃緑岩	
95	遺構外481	J－6G	磨石	完	12.9	7.5	3.6	438.0	輝石安山岩	
96	遺構外530	K－7G	凹石	完	12.1	6.8	4.4	465.0	輝石安山岩	
97	遺構外527	K－5G	凹石	完	10.8	7.0	3.8	406.0	輝石安山岩	炭化物付着
98	遺構外482	J－6G	凹石	完	10.7	9.9	5.2	630.0	輝石安山岩	
99	遺構外472	L－6G	凹石	完	14.5	6.2	4.3	508.0	輝石安山岩	炭化物付着
100	遺構外478	R－5G	磨石	完	11.2	8.6	5.6	654.0	輝石安山岩	
101	遺構外466	K－7G	凹石	完	11.4	9.4	3.7	600.0	閃緑岩	
102	遺構外469	N－4G	凹石	完	11.0	6.2	5.3	541.0	輝石安山岩	炭化物付着
103	遺構外474	Q－5G	磨石	完	16.7	9.4	5.5	1278.0	輝石安山岩	炭化物付着
104	遺構外468	M－8G	凹石	完	11.2	6.9	5.3	512.0	閃緑岩	
105	遺構外470	M－6G	凹石	半分	(8.1)	9.8	4.3	326.0	輝石安山岩	
106	遺構外475	表土	凹石	3/4	(10.6)	6.8	3.8	396.0	閃緑岩	
107	遺構外480	J－6G	凹石	完	11.9	7.0	3.9	416.0	輝石安山岩	
108	遺構外483	J－5G	凹石	完	13.5	9.2	2.7	349.0	輝石安山岩	
109	遺構外465	L－7G	凹石	完	11.6	9.0	4.3	418.0	輝石安山岩	
110	遺構外536	K－5G、表土	多孔石	完	22.4	29.7	5.9	5327.0	輝石安山岩	炭化物付着
111	遺構外533	N－4G	石皿	一部	(11.1)	(13.1)	5.5	846	輝石安山岩	
112	遺構外534	D－3G	石皿	一部	(14.4)	(18.6)	4.7	1513.0	多孔質安山岩	
113	遺構外535	L－7G	石皿	2/3	(17.7)	16.0	5.4	1399.0	輝石安山岩	赤色顔料付着

第VI章　古墳時代の遺構と遺物

本遺跡において、古墳時代の遺構は古墳が4基確認・調査されている。いずれも昭和10年実施され同13年3月に刊行された『上毛古墳綜覧』に未登載の古墳である。古墳の名称としては、新屋敷漏1号墳から漏4号墳とそれぞれ命名する。

新屋敷漏1号墳（第102・103図、ＰＬ－16）

本古墳は調査区の北東部（Ｑ－５・６Ｇ）に位置する。南北に長い舌状台地の鞍部の傾斜変換点に近い平坦部に立地する。標高は232.0～232.5mを測る。調査前墳丘は確認できず、表土除去の際円礫が多数散在したことから古墳の存在が予想された。調査は、散在する円礫を丁寧に除去し主体部の確認に至った。当初からその保存状態が良くないことが窺われた。また、覆土中を含め周辺からの遺物の出土はなかった。

主体部は、南に開口する横穴式石室で、玄室と羨道に区分される。天井石はすでに失われていた。石室の形状は羽子板状を呈する両袖型石室で開口方位Ｎ－６′－Ｅである。玄室床面は、やや堅緻であったが遺物等の出土の皆無とも相まって構築時に石等の被覆があったかは不明である。羨門に閉塞が施されていた。閉塞は自然石を小口に積み上げていた。羨道部においても床面の状況は玄室と同様で構築時の状況は把握できなかった。

石室の掘り方は歪んだ長楕円形を呈し、長軸長7.92m、短軸長3.90mを測る。石室石組の裏込めは、人頭大程度の円礫を寄せ掛け詰め込むとともに目潰し砂利を詰めて被覆を行っている。

石室各部の計測値は、石室全長3.82m・玄室長1.98m・玄室奥幅1.08m・玄室前幅0.92m・羨道長1.84m・羨道幅0.44mを測る。

前庭部は、明確でないものの主体部主軸方向に対し直交する長軸方向を有する楕円形の掘り込み有する。

新屋敷漏2号墳（第103図、ＰＬ－16）

本古墳は調査区のほぼ中央（Ｋ・Ｌ－６Ｇ）に位置する。墳丘は確認できず、天井石をはじめ奥壁・側壁と思われる石も確認できないところから、古墳である明確な根拠を欠くが、確認された石敷きをもって玄室内と推定する。主軸方向はＮ－39°－Ｅである。

遺構に伴う掘り方も確認できなかった。

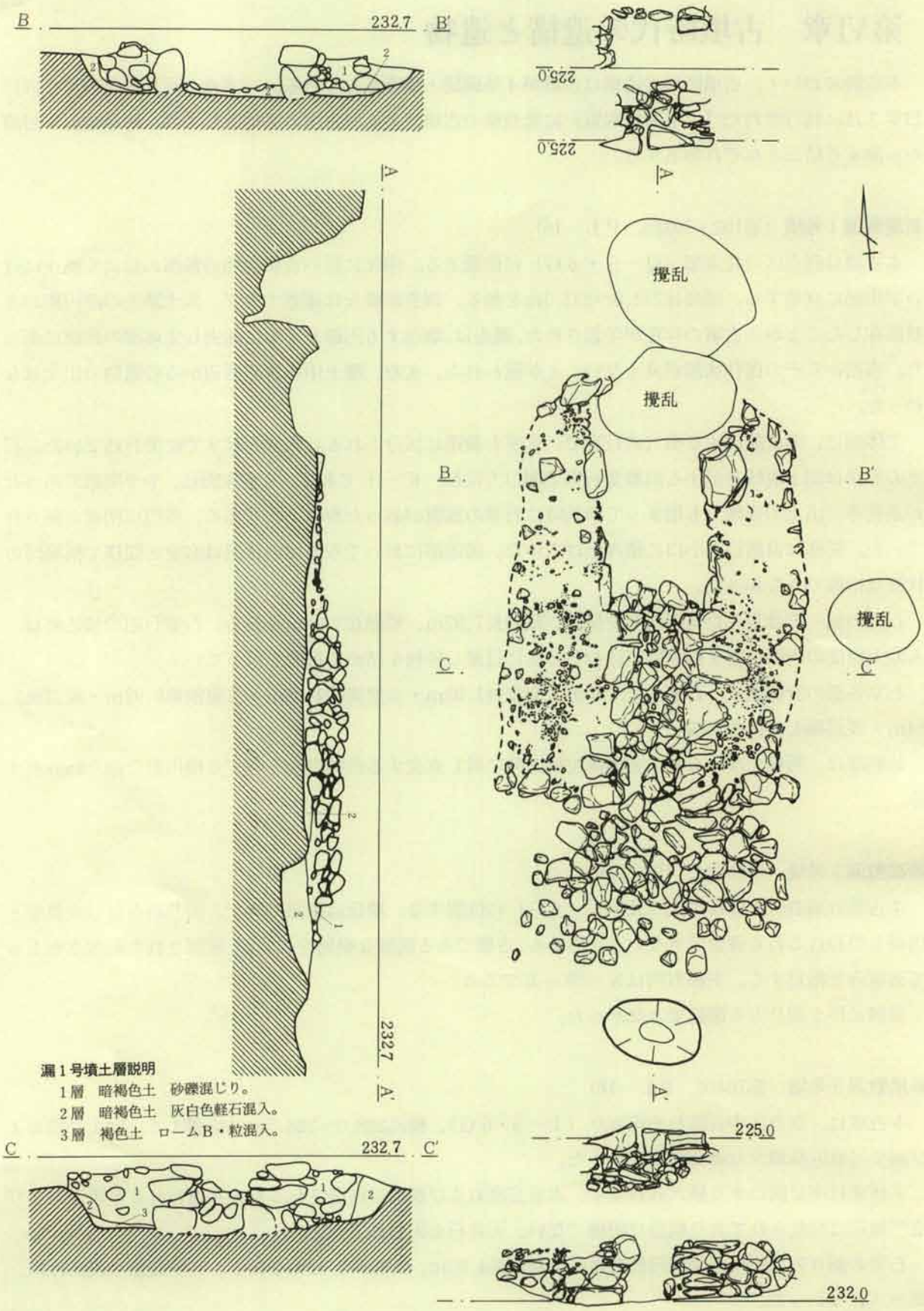
新屋敷漏3号墳（第104図、ＰＬ－16）

本古墳は、調査区中央部やや南寄り（Ｉ－５・６Ｇ）、標高228.0～228.5mに位置する。漏1号墳および漏2号墳同様墳丘は確認できなかった。

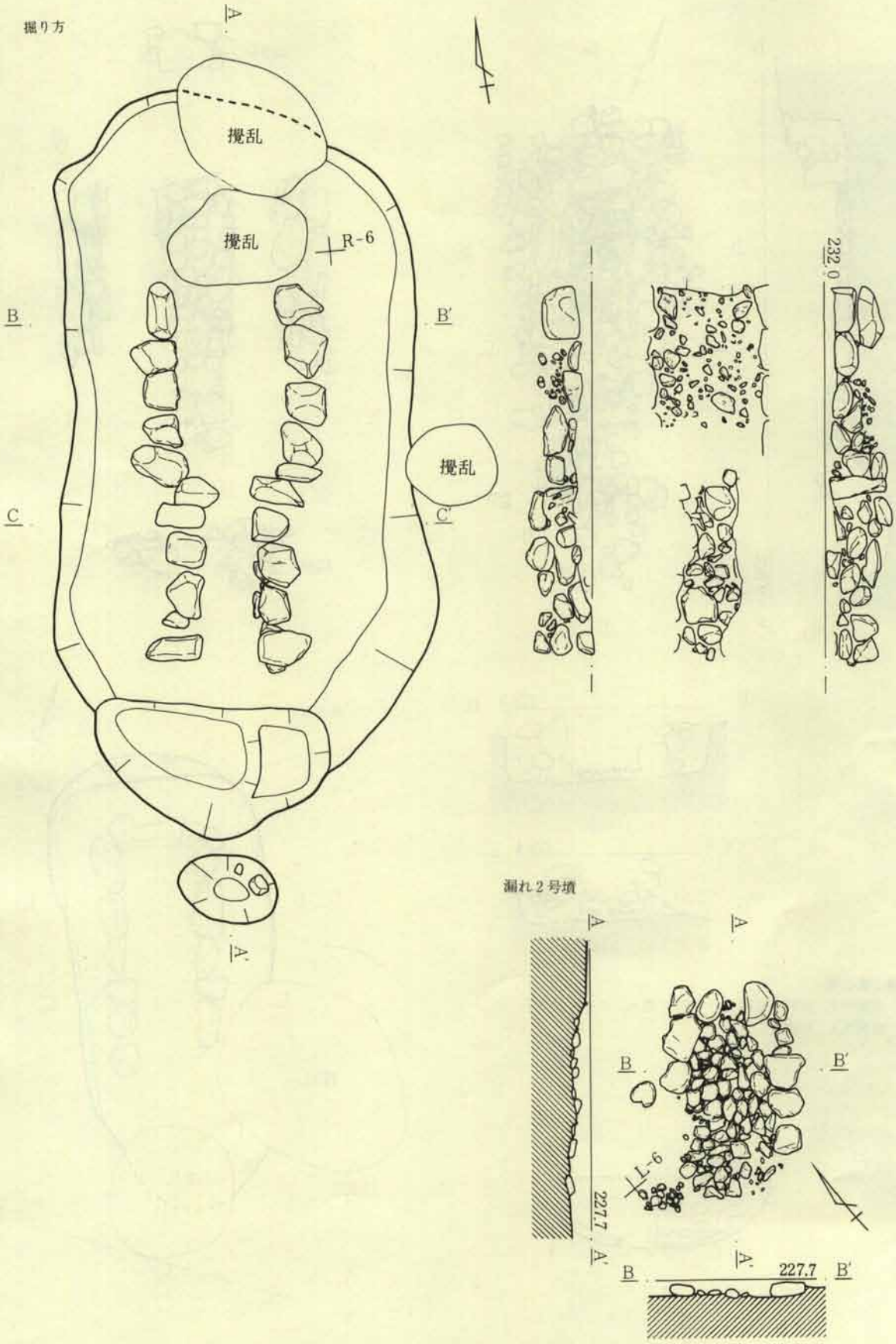
主体部は南に開口する横穴式石室で、本来玄室および羨道に区別されるものと思われるが羨道および玄門周辺は撹乱されており構造は明確でない。天井石も失われていた。

石室の掘り方は歪んだ長楕円形を呈し、長軸長4.60m、短軸長2.12mを測る。石室石組に裏込めは、認められなかった。

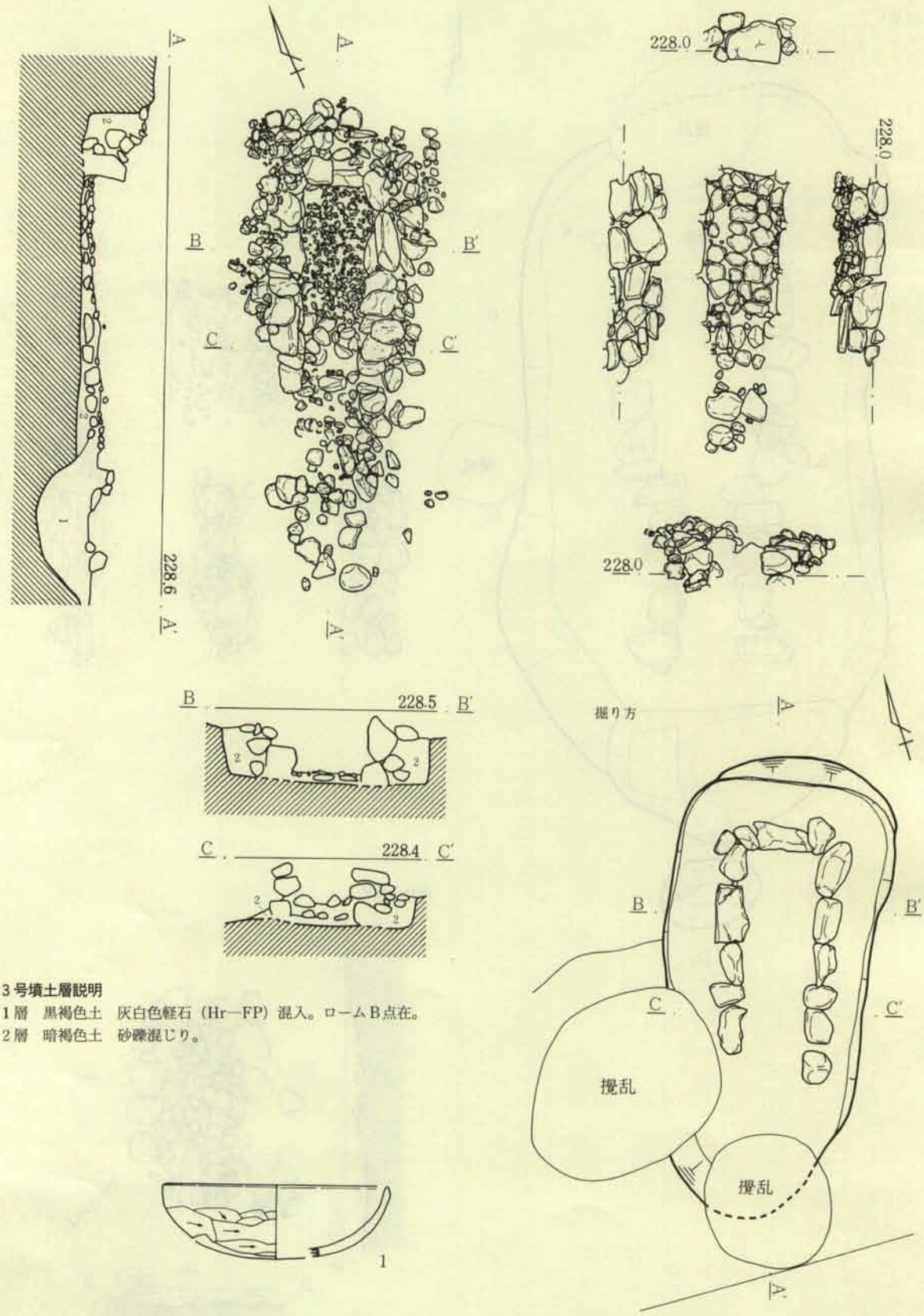
石室各部の計測値は、玄室奥幅が0.60mを測ることが判るのみでその他の詳細は不明であった。



第102図　漏1号墳平・断面図（1）



第103図　漏 1号墳平・断面図（2）、漏 2号墳平・断面図



漏3号墳土層説明

1層　黒褐色土　灰白色軽石（Hr—FP）混入。ロームB点在。
2層　暗褐色土　砂礫混じり。

第104図　漏3号墳平・断面図および出土遺物

出土遺物は、撹乱された羨道部周辺で土師器の杯破片が出土している。

遺構の構築時期は、前述の土師器の杯から７世紀の後半期を想定しておく。

新屋敷漏４号墳（第105・106図、ＰＬ―17）

本古墳は調査区の南西部（Ｂ・Ｃ―２・３Ｇ）、224.0～225.5mに位置する。南北に長い舌状台地の鞍部の傾斜変換点に近い平坦部に立地する。調査前墳丘は確認できず、表土除去の際円礫が多数散在したことから古墳の存在が予想された。調査は、散在する円礫を丁寧に除去し主体部の確認に至った。当初からその保存状態が良くないことが窺われた。

主体部は、南に開口する横穴式石室で、玄室と羨道に区分される。天井石はすでに失われていた。石室の形状は羽子板状を呈する両袖型石室で開口方位Ｎ－５°－Ｅである。玄室床面は、やや堅緻であったが遺物等の出土の皆無とも相まって構築時に石等の被覆があったかは不明である。羨門に閉塞が施されていた。閉塞は自然石を小口に積み上げていた。羨道部においても床面の状況は玄室と同様で構築時の状況は把握できなかった。

石室の掘り方は歪んだ長楕円形を呈し、長軸長5.44m、短軸長3.78mを測る。石室石組の裏込めは、人頭大程度の円礫を寄せ掛け詰め込むとともに目潰し砂利を詰めて被覆を行っている。

石室各部の計測値は、石室全長3.58m・玄室長1.84m・玄室奥幅1.04m・玄室前幅1.08m・羨道長1.74m・羨道幅0.82mを測る。

前庭部は、明確でないものの主体部主軸方向に対し直交するやや歪な楕円形の掘り込みを有する。

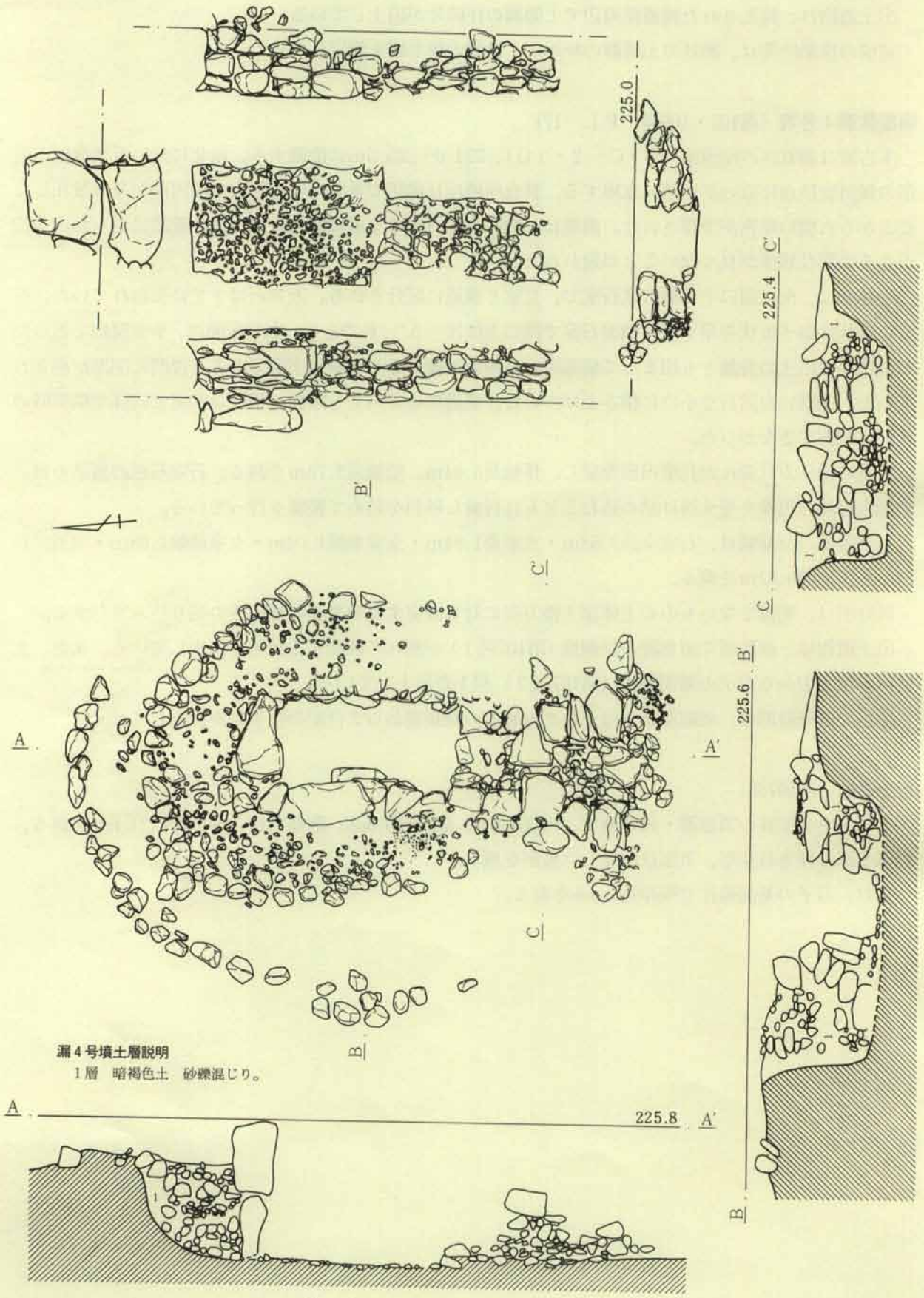
出土遺物は、前庭部で須恵器の長頸壺（第107図１）が割れて散乱する状態で出土している。また、玄室内の埋土中から刀子の基部破片（第107図２）が１点出土している。

遺構の構築時期は、前庭部から出土した須恵器の長頸壷から７世紀の後半期を想定しておく。

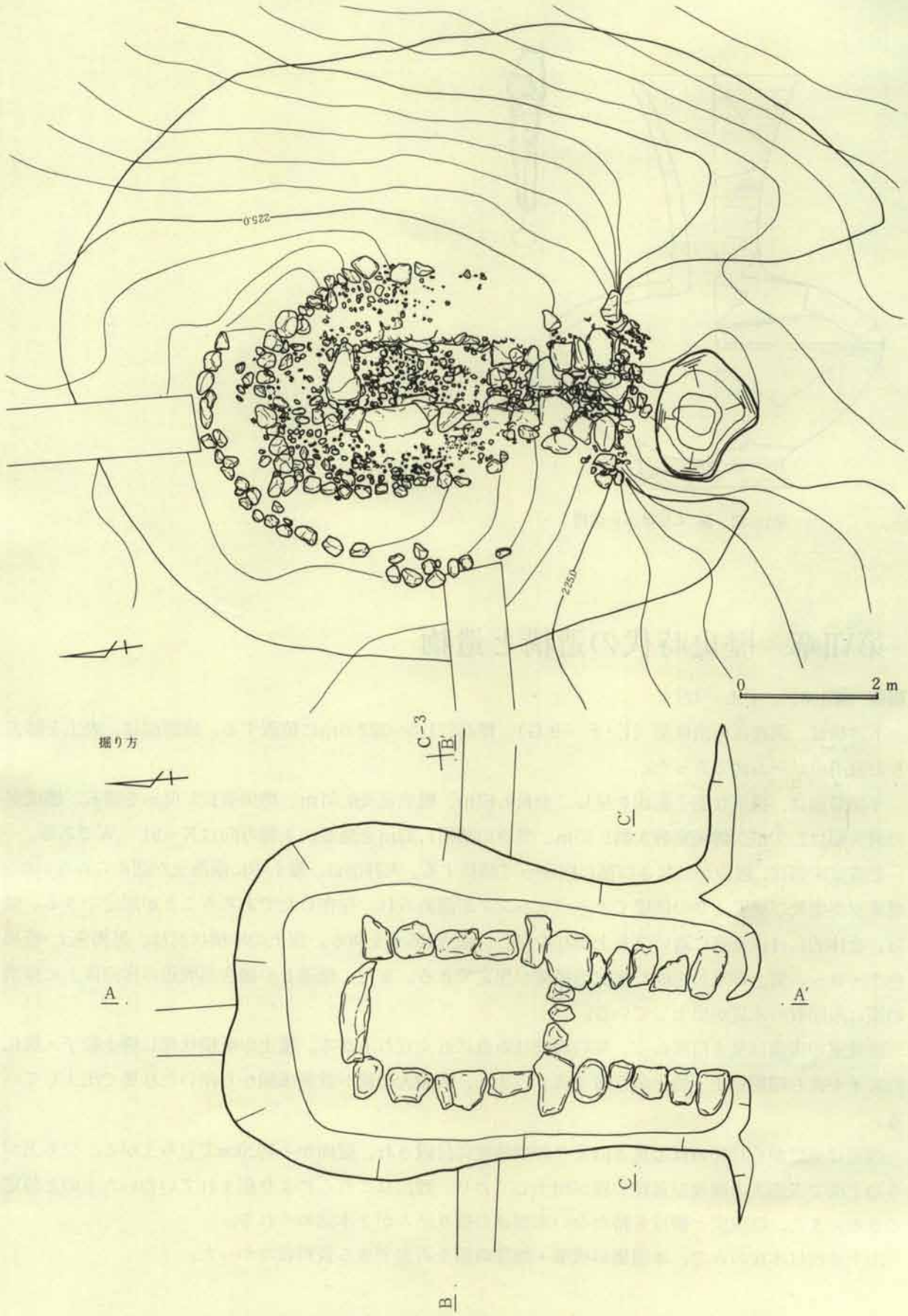
出土遺物（第107図）

１は、やや軟質の須恵器・長頸壷で、口径8.8cm、頸部径5.8cm、胴部径17.9cm、器高21.8cmを測る。胴部上部は掻き目整形、下部は回転ヘラ整形を施す。

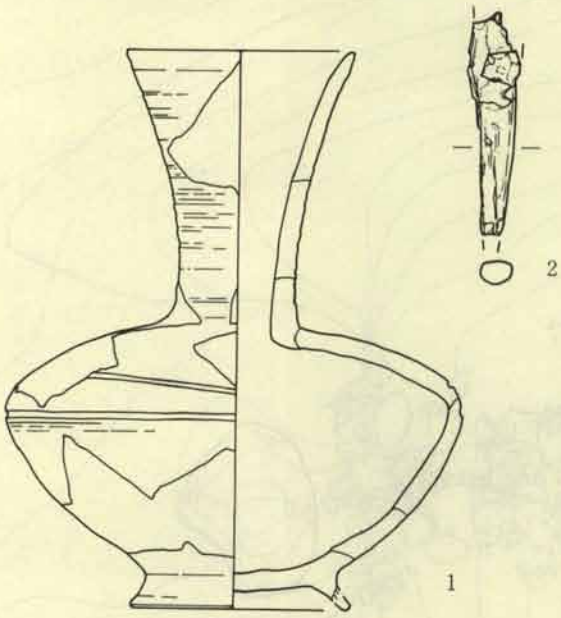
２は、刀子の基部破片で残存長5.8cmを測る。



第105図　漏 4号墳平・断面図（1）



第106図　漏 4 号墳平・断面図（2）



第107図　漏 4号墳出土遺物

第Ⅶ章　歴史時代の遺構と遺物

炭窯（第108図、ＰＬ—17）

本遺構は、調査区の南東部（Ｅ・Ｆ－９Ｇ）、標高221.0～222.5mに位置する。確認面は、表土を除去した直下のローム面であった。

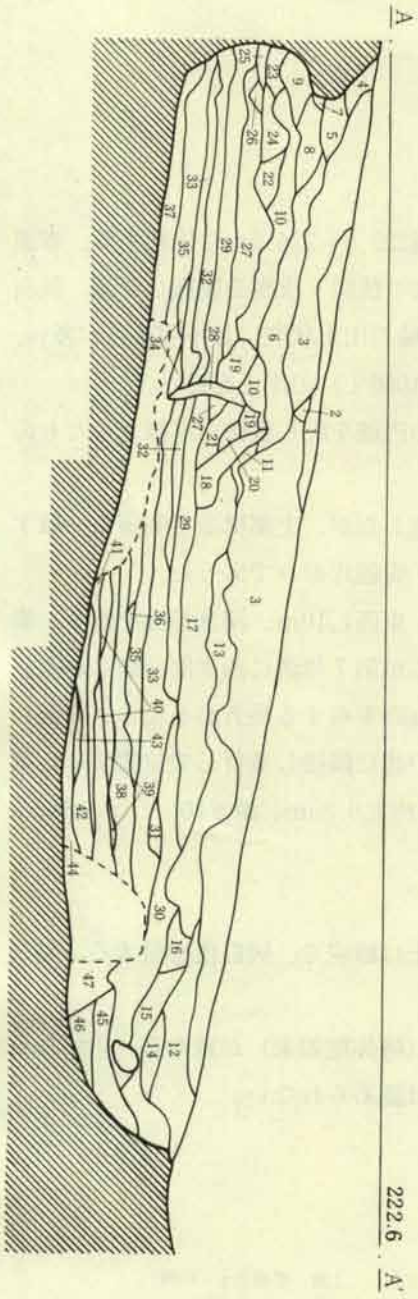
平面形態は、扁平な羽子板状を呈し、全長9.62m、燃成室長6.51m、燃焼室長3.61mを測る。燃成室の最大幅は2.50m、燃焼室最大幅1.95m、焚き口部幅1.33mを測る。主軸方向はＮ—51°—Ｗである。

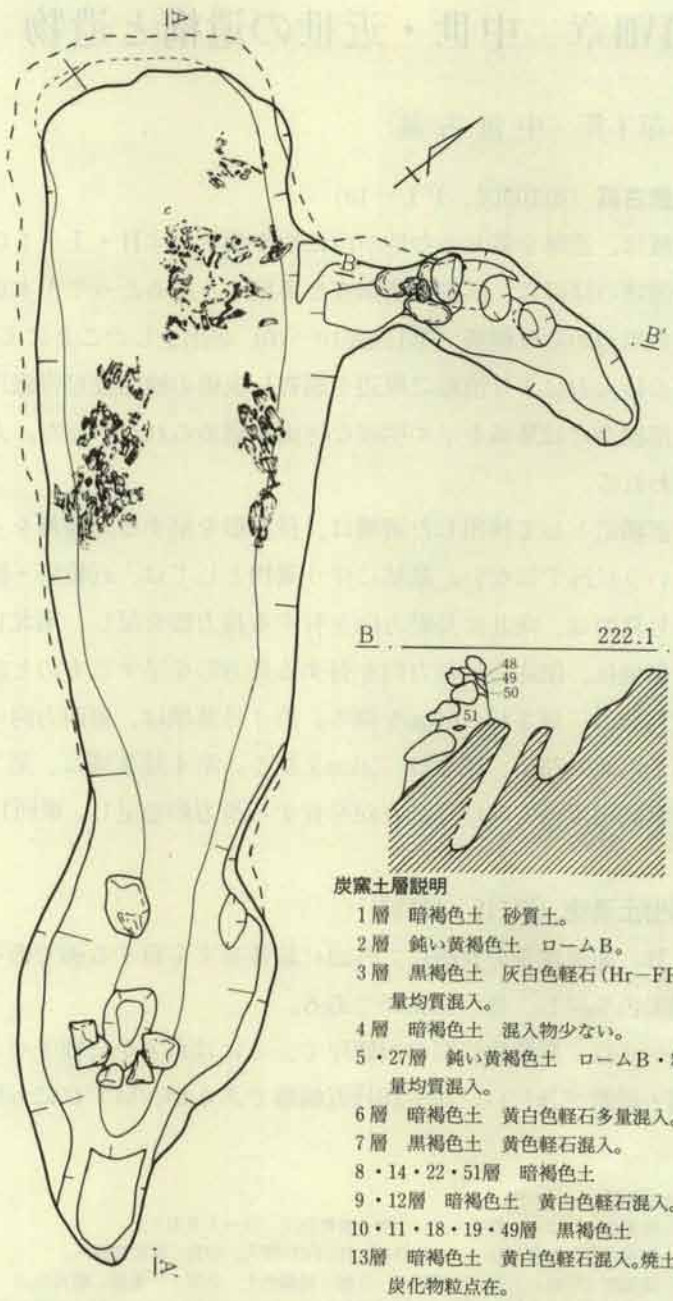
燃成室床面は、緩やかに焚き口部に向かって傾斜する。天井部は、覆土中に崩落土が認められないが、燃成室奥壁及び奥壁よりの側壁でオーバーハングが認められ、存在したであろうことが想定できる。壁は、全体的にほぼ垂直に近い立ち上がりを呈し、壁高105cmを測る。覆土の堆積状況は、黒褐色土・暗褐色土・ローム質土が互層を成し数次の操業が想定できる。また、煙道との接合部周辺の床面直上に操業の際に未回収の木炭が出土している。

燃焼室の床面は焚き口部から、左右両壁は垂直に近く立ち上がる。覆土の堆積状況は焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土・焼土が互層を成す。また、人頭大の礫が数個床面から浮いた状態で出土している。

煙道は奥壁から1.50mほど焚き口よりの東側壁に付設され、壁面から約20cmで立ち上がる。立ち上がりの上面で人頭大の礫及び鉱滓の塊が出土しており、煙出はこれらにより組まれていたいたものと想定できる。また、燃成室と接点を持たない未貫通の掘り込みが２本認められる。

出土遺物は木炭のみで、本遺構の構築・操業時期を否定できる資料はなかった。





炭窯土層説明

1層　暗褐色土　砂質土。
2層　鈍い黄褐色土　ロームB。
3層　黒褐色土　灰白色軽石(Hr−FP)多量均質混入。
4層　暗褐色土　混入物少ない。
5・27層　鈍い黄褐色土　ロームB・粒多量均質混入。
6層　暗褐色土　黄白色軽石多量混入。
7層　黒褐色土　黄色軽石混入。
8・14・22・51層　暗褐色土
9・12層　暗褐色土　黄白色軽石混入。
10・11・18・19・49層　黒褐色土
13層　暗褐色土　黄白色軽石混入。焼土粒。炭化物粒点在。
15層　暗褐色土　炭化物粒・焼土粒・ローム粒混入。
16・31層　焼土層。
17層　暗褐色土　均質ローム質土。
20層　暗褐色土
21層　黒褐色土　灰混入。
23層　黒褐色土　ローム粒混入。
24・39層　暗褐色土　ローム粒混入。
25層　暗褐色土　ローム粒点在。
26層　黄褐色土　ロームB混入。
28層　撹乱層。
29層　黒褐色土　灰多量・炭化物混入。
30層　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒混入。ロームB・粒点在。
32層　鈍い黄褐色土　ロームB・焼土粒混入。
33層　黒褐色土　炭化物・焼土粒・ロームB・粒混入。
34層　暗褐色土　炭化物粒点在。
35層　黄褐色土　焼土粒混入。
36層　暗褐色土　灰・炭化物粒混入。
37層　黒褐色土　大型炭化物多量混入。
38・40層　暗褐色土　灰・炭化物粒・焼土粒混入。
41・43層　暗褐色土　炭化物粒混入。
42層　暗褐色土　炭化物粒・焼土粒混入。
44層　鈍い黄褐色土　ローム粒混入。
45・46層　暗褐色土　ロームB混入。
47層　暗褐色土　ロームB・炭化物混入。
48・50層　灰白色土

第108図　炭窯平・断面図

第Ⅷ章　中世・近世の遺構と遺物

第1節　中世古墓

新屋敷古墓（第109図、ＰＬ－18）

墓域は、遺跡を載せる台地が西にやや張り出すＨ・Ｉ－１Ｇの標高225.0～226.5mに位置する。本遺構の確認の経緯は、試掘確認調査を実施するにあたって土木重機により伐採・抜根を実施した際、該当地域の周辺から五輪塔（第111図10～16）が出土したことによる。五輪の出土状況には不明な点が多い。

その後人力により慎重に周辺を調査し板碑の検出及び青磁片（第110図１）の出土を見た。

上部構造には墓域を示す明確な区画は認められなかった。人頭大の円礫を配し板碑を墓標としたものと思われる。

下部構造として検出した遺構は、長方形を呈する土葬墓を４基確認したが、上部構造と明確に一致するという状況ではない。墓域に伴う遺物としては、五輪塔・板碑片・青磁片のみであった。

第１号墓壙は、南北に長軸方向を有する長方形を呈し、南北1.52m、東西1.10m、深さ95cmを測る。第２号墓壙は、南北の長軸方向を有する長方形を呈するものと思われるが第７号溝に西半部を切られる。南北1.32m、深さ47～61cmを測る。第３号墓壙は、東西方向に長軸方向を有する長方形を呈し、東西1.56m、南北0.76m、深さ27～50cmを測る。第４号墓壙は、第３号墓の北に隣接し並行して位置する。第３号墓同様東西方向に長軸方向を有する長方形を呈し、東西1.36m、南北0.80m、深さ40～71cmを測る。

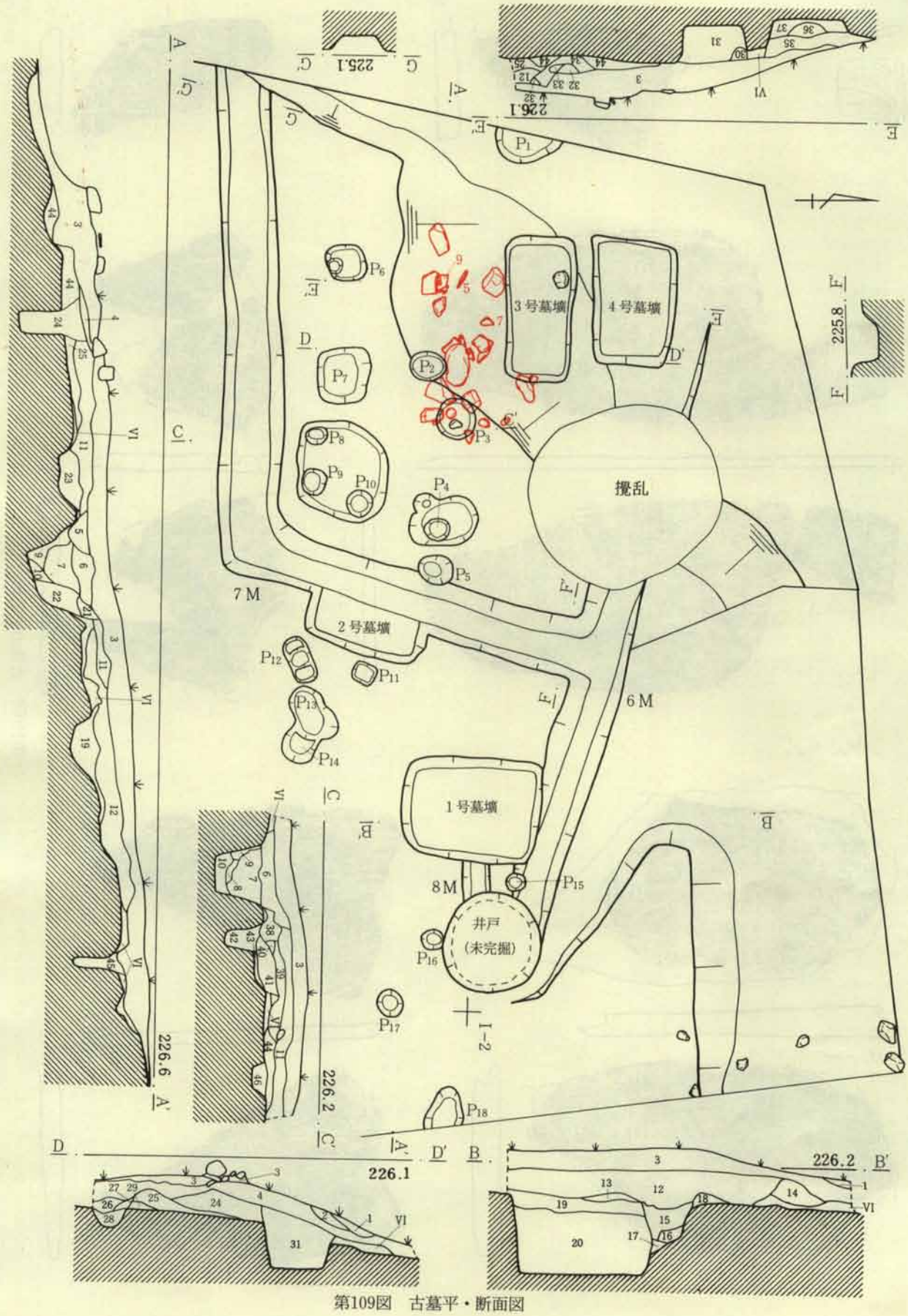
古墓出土遺物（第110・111図）

１は、龍泉窯系の青磁片で外面に鎬連弁文を有する碗である。胎土は緻密で、灰白色を呈する。釉は明緑灰色を呈し、発色は良好である。

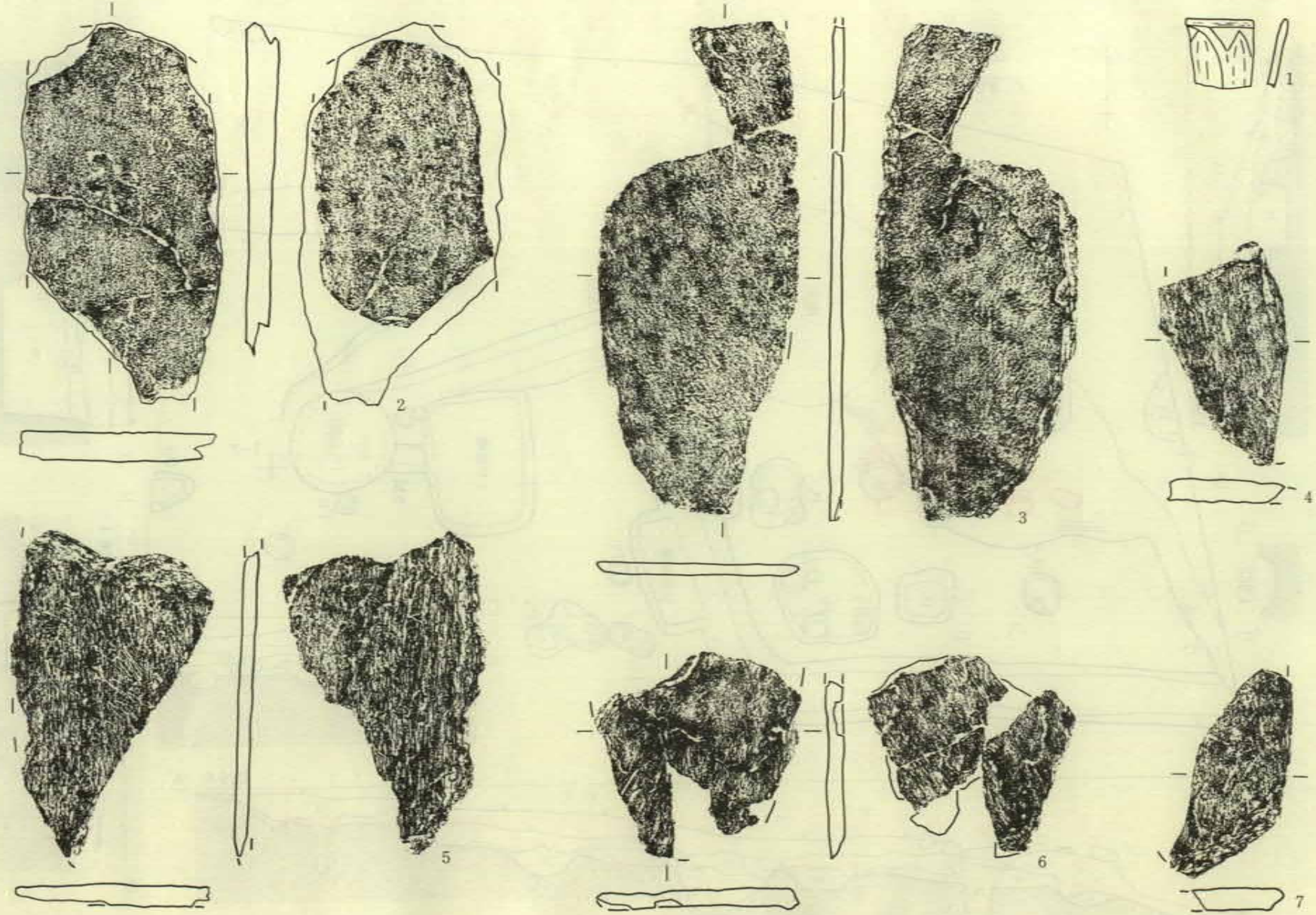
２～９は、緑色片岩製の板碑片で、２にはわずかに種子キリーク（阿弥陀如来）が読める。いずれも磨滅・剝離が著しい。10～16は五輪塔であるが、いずれにも刻字等は認められない。

古墓土層説明

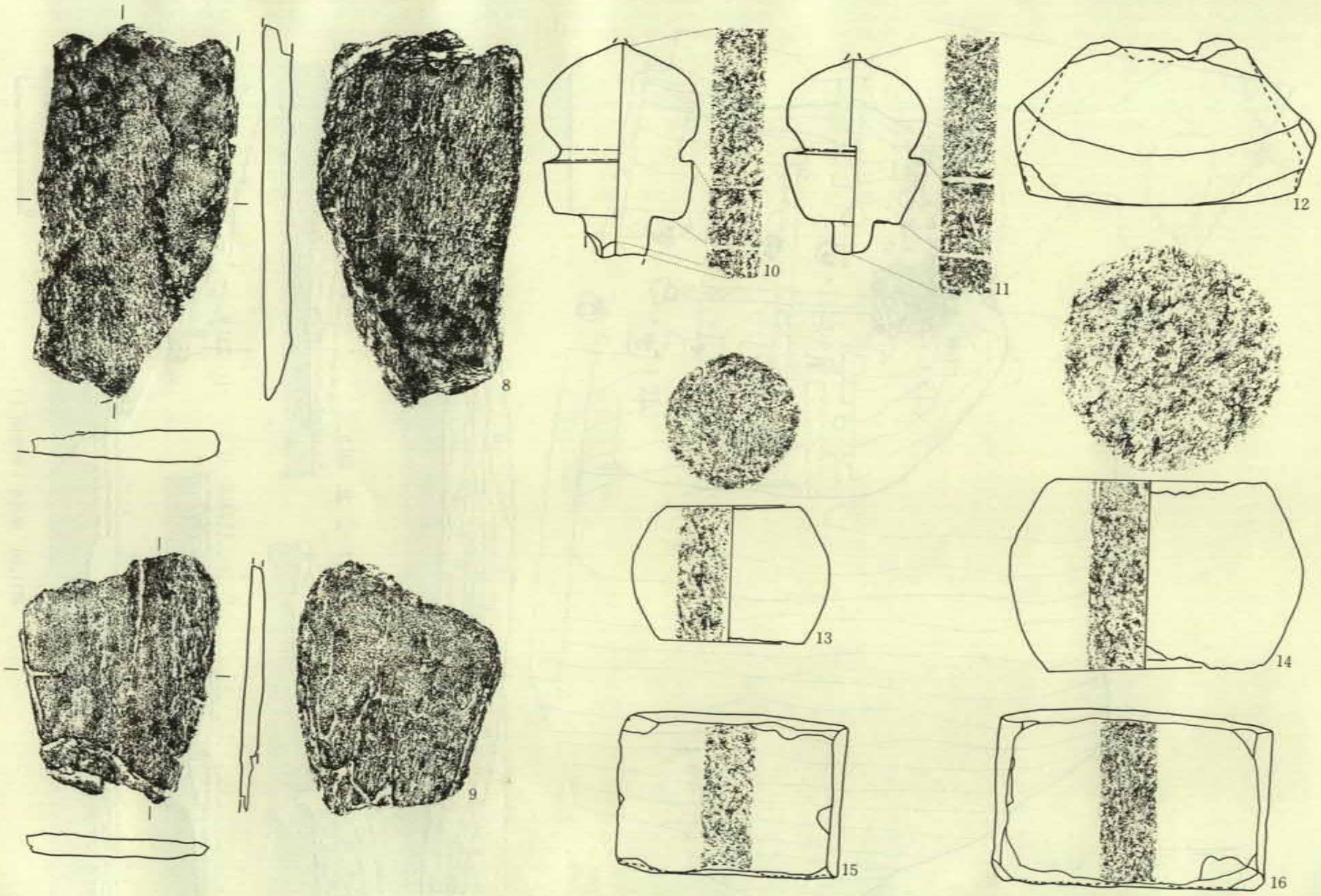
１層　暗褐色土　ローム粒混入。　２層　暗褐色土　ロームＢ混入。
３層　黒褐色土　黄色軽石・灰白色軽石（Hr-Fp）混入。砂質。炭化物混入。
４層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。　５層　暗褐色土　砂質。　６層　暗褐色土　ローム粒点在。　７層　黒褐色土　砂質。
８層　黒褐色土　非常に砂質。　９層　暗褐色土　ローム粒混入。　10層　暗褐色土　砂質。
11層　暗褐色土　ロームＢ・粒、炭化物混入。　12層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。　13層　灰褐色土　粘質土。
14層　暗褐色土　ローム粒混入（均質）。炭化物粒点在。　15層　暗褐色土　ロームＢ点在。　16層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。
17層　暗褐色土　ロームＢ混入。　18層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。
19層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。18層に酷似。18層より均質で明るい。　20層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入（多量・均質）。
21層　暗褐色土　均質土。　22層　鈍い黄褐色土　ロームＢ混入（多量）。
23層　暗褐色土　11層に酷似。11層より均質で、ローム粒多量混入。
24層　暗褐色土　ローム粒混入。　25層　暗褐色土　ローム粒混入（均質）。　26層　黒褐色土　砂質。
27層　暗褐色土　ロームＢ混入。　28層　暗褐色土　ローム粒混入（均質）。砂質。　29層　暗褐色土　ローム粒混入。
30層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。　31層　黒褐色土　ローム粒混入。　32層　黒褐色土　焼土粒混入。　33層　焼土Ｂ・粒
34層　暗褐色土　焼土粒点在。　35層　黒褐色土　ロームＢ・粒点在。砂質。　36層　黒褐色土　ロームＢ・粒混入。
37層　黒褐色土　灰白色軽石（Hr-Fp）・ローム粒混入。　38層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。
39層　暗褐色土　ロームＢ・粒混入。　40層　暗褐色土　ローム粒混入（多量）。　41層　暗褐色土　ローム質土
42層　黒褐色土　ロームＢ・粒混入。　43層　暗褐色土　ローム粒混入。　44層　黒褐色土　ローム粒混入（均質）。
45層　鈍い黄褐色土　ローム粒混入。　46層　暗褐色土　ローム粒点在



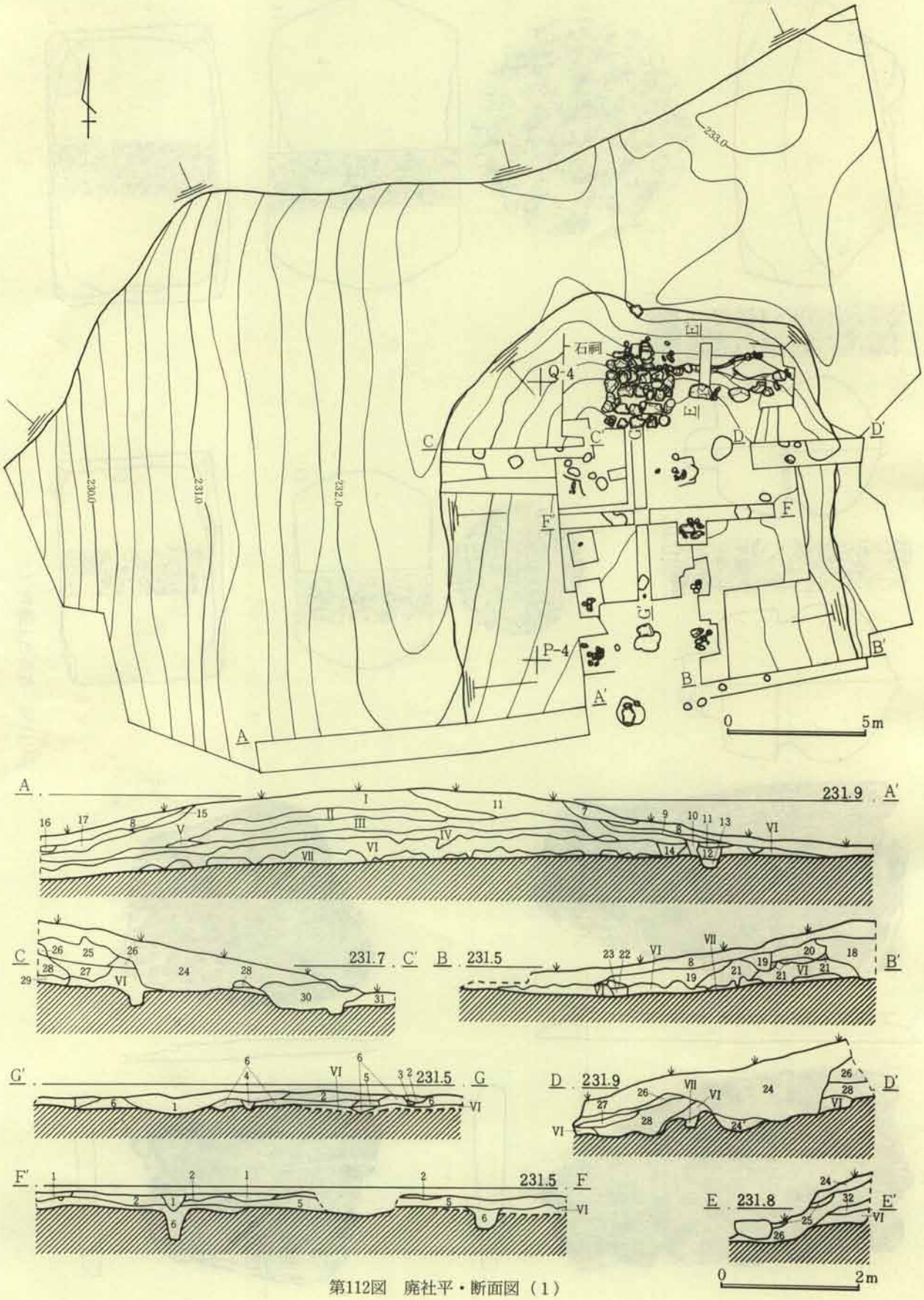
第109図　古墓平・断面図



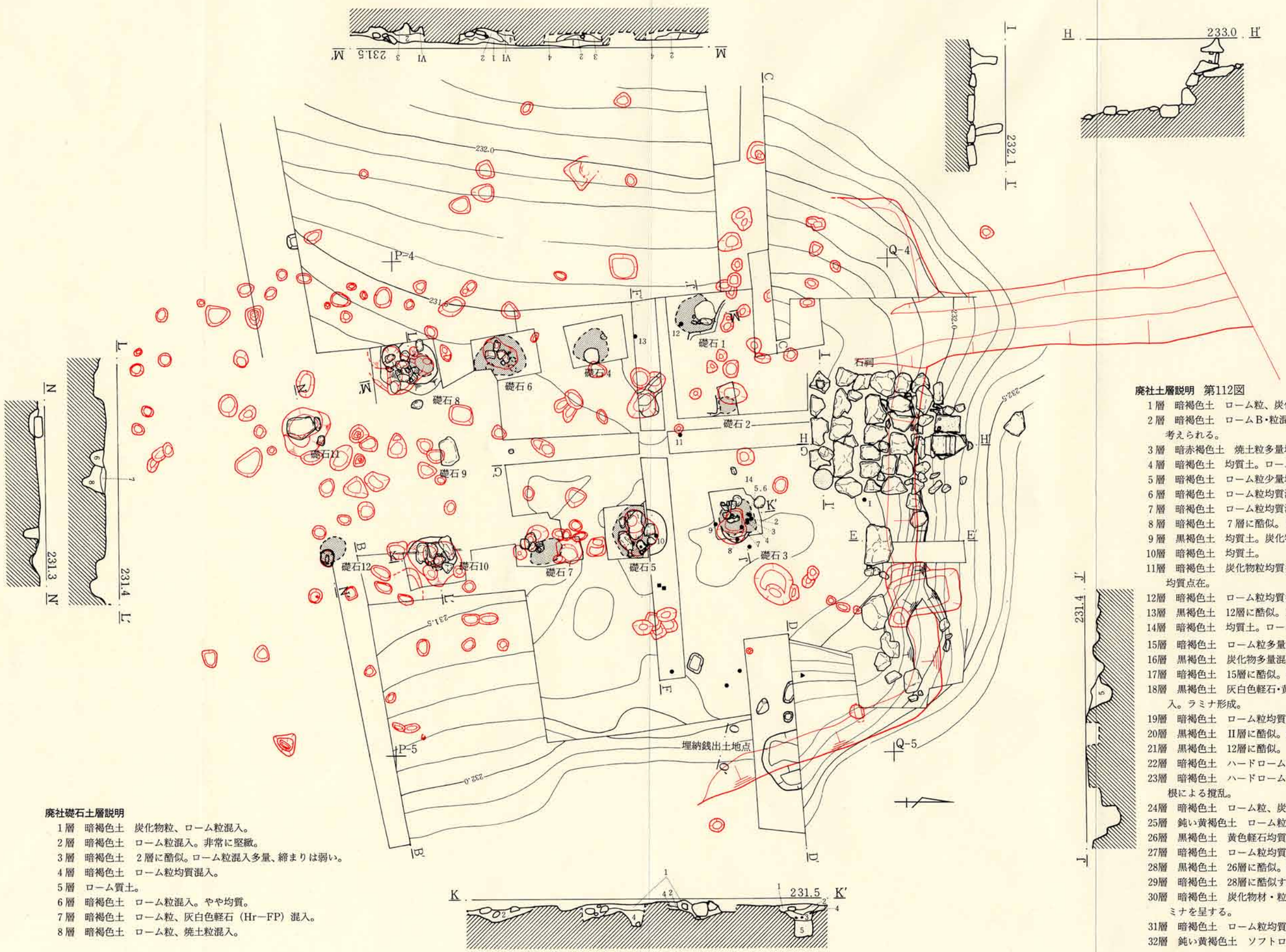
第110図　古墓出土遺物（1）



第111図　古墓出土遺物（2）



第112図　廃社平・断面図（1）



廃社礎石土層説明

1層　暗褐色土　炭化物粒、ローム粒混入。
2層　暗褐色土　ローム粒混入。非常に堅緻。
3層　暗褐色土　2層に酷似。ローム粒混入多量、締まりは弱い。
4層　暗褐色土　ローム粒均質混入。
5層　ローム質土。
6層　暗褐色土　ローム粒混入。やや均質。
7層　暗褐色土　ローム粒、灰白色軽石（Hr—FP）混入。
8層　暗褐色土　ローム粒、焼土粒混入。

第113図　廃社平・断面図（2）

廃社土層説明　第112図

1層　暗褐色土　ローム粒、炭化物粒混入。
2層　暗褐色土　ロームB・粒混入（多量）。礎石設置の造成土と考えられる。
3層　暗赤褐色土　焼土粒多量均質混入。
4層　暗褐色土　均質土。ローム粒均質混入。
5層　暗褐色土　ローム粒少量均質混入。
6層　暗褐色土　ローム粒均質混入。造成土と考えられる。
7層　暗褐色土　ローム粒均質混入。
8層　暗褐色土　7層に酷似。7層より均質。
9層　黒褐色土　均質土。炭化物粒混入。
10層　暗褐色土　均質土。
11層　暗褐色土　炭化物粒均質多量混入。灰白色軽石（Hr—FP）均質点在。
12層　暗褐色土　ローム粒均質多量混入。炭化物粒均質点在。
13層　黒褐色土　12層に酷似。12層より暗く不均質。
14層　暗褐色土　均質土。ローム粒多量混入。
15層　暗褐色土　ローム粒多量混入。
16層　黒褐色土　炭化物多量混入。
17層　暗褐色土　15層に酷似。15層より均質。
18層　黒褐色土　灰白色軽石・黄色軽石混入（均質）。ローム粒混入。ラミナ形成。
19層　暗褐色土　ローム粒均質混入。ロームB・炭化物粒点在。
20層　黒褐色土　II層に酷似。細粒土。
21層　黒褐色土　12層に酷似。
22層　暗褐色土　ハードロームB多量混入。木根による撹乱。
23層　暗褐色土　ハードロームB多量混入。22層より明るい。木根による撹乱。
24層　暗褐色土　ローム粒、炭化物粒均質混入。
25層　鈍い黄褐色土　ローム粒多量均質混入。
26層　黒褐色土　黄色軽石均質混入。
27層　暗褐色土　ローム粒均質混入。
28層　黒褐色土　26層に酷似。軽石がなく、均質。
29層　暗褐色土　28層に酷似する土壌にロームB・粒を混入する。
30層　暗褐色土　炭化物材・粒、ロームB・粒混入。炭化物はラミナを呈する。
31層　暗褐色土　ローム粒均質混入。
32層　鈍い黄褐色土　ソフトローム質土。

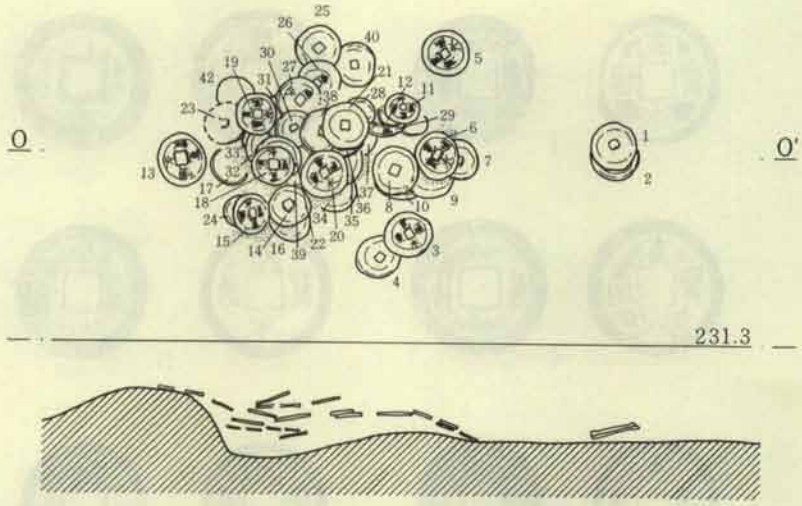
第2節　廃　　社

廃社(第112・113図、ＰＬ－19)

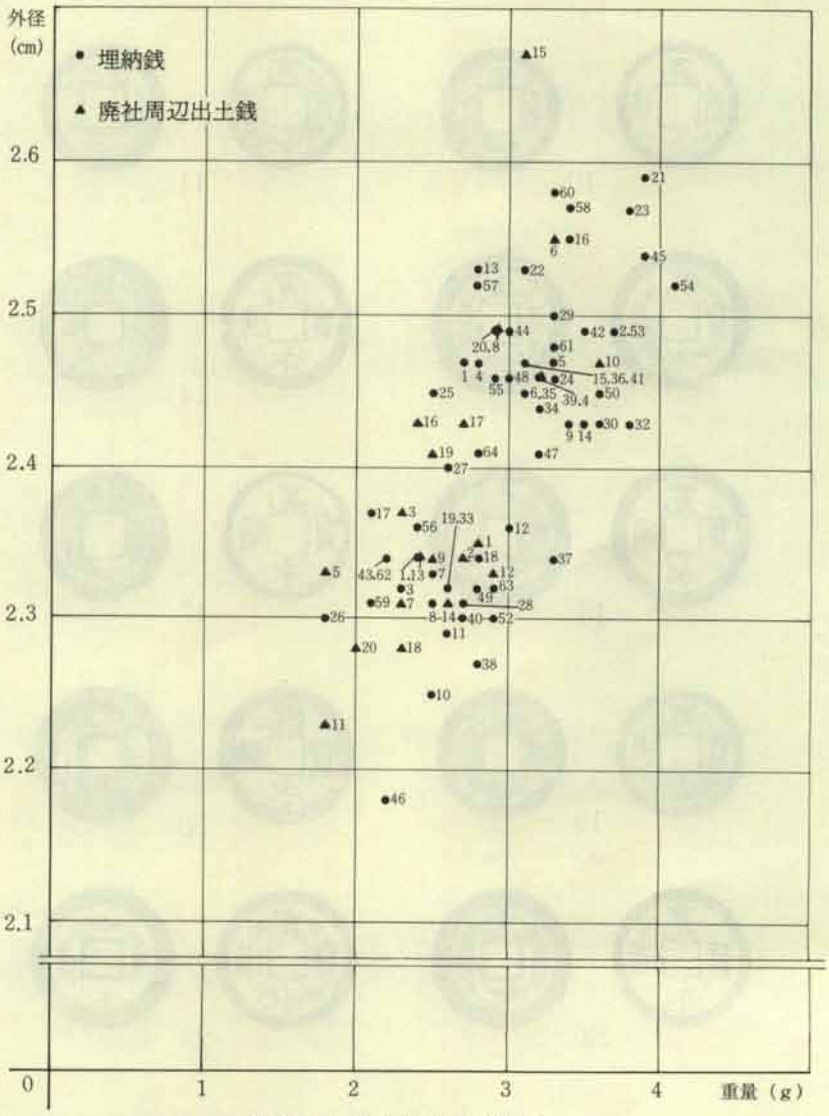
調査区の北部（Ｏ～Ｑ－３～５Ｇ）に位置する。試掘・確認調査の際、石の祠を確認したため、重機による確認を避け人力により周辺を精査・検出作業を実施した。確認された遺構は、石の祠・礎石建物で、ほかに寛永通寶を集中的に出土した。

遺構の占地する地域は、台地の鞍部で南を開放し「コ」の字状の平面形態を呈する削平面を造成する。この造成によって北・東・西の３方と削平面との比高差は0.8～1.0mを測る。この削平面のほぼ中央に南北に主軸を持ち礎石を有する建物跡が検出した。また、当初確認した石の祠は削平面の北奥中央やや西寄りに位置する。

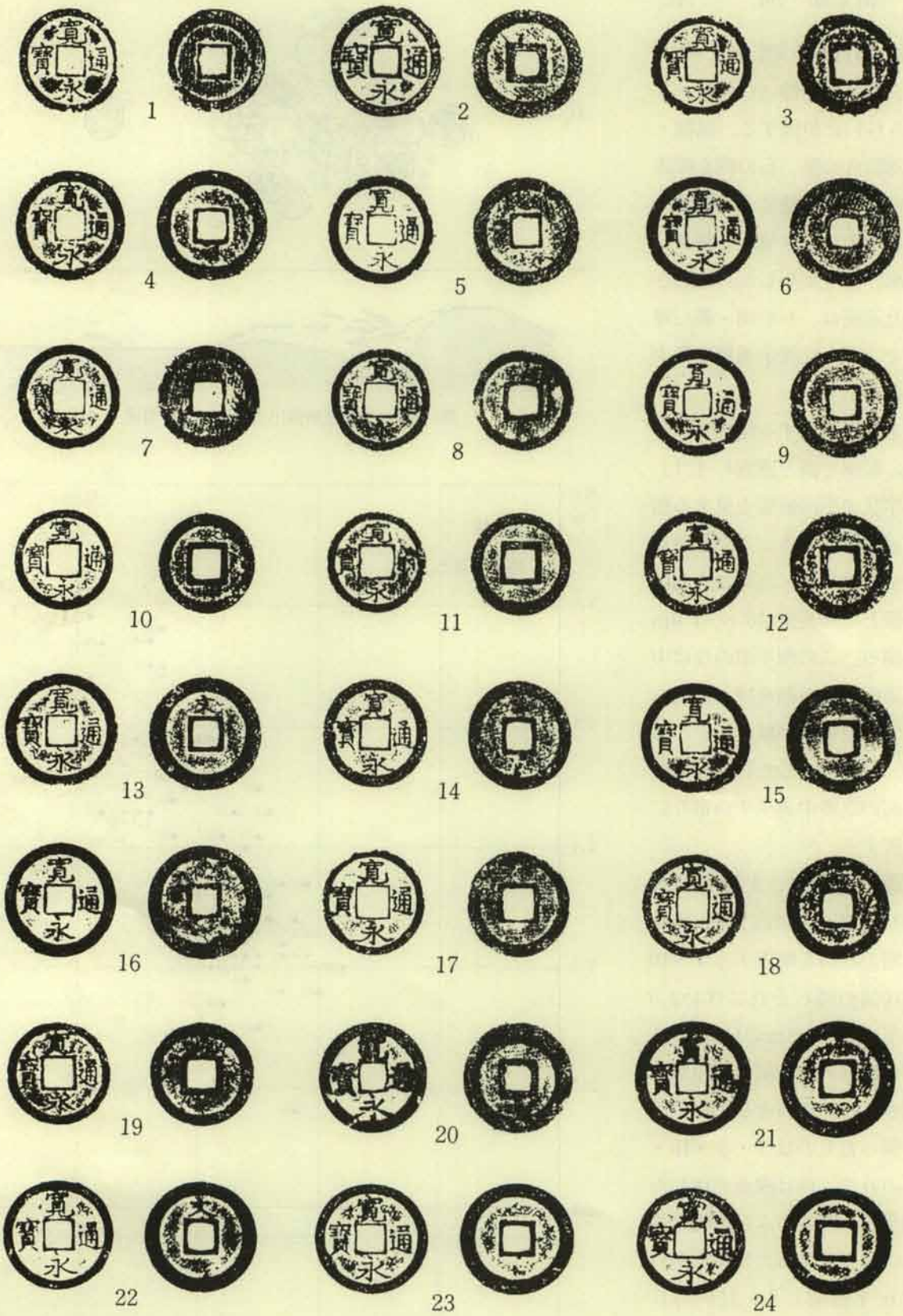
礎石建物は、主軸方向Ｎ－11°－Ｗで、東西２間、南北３間の建物を構成する１～10の10個の礎石それに伴い2.5m南に間隔2.5mの11・12の２個の礎石の計12個の礎石が確認された。礎石として原位置を保ったものは５・９・10・11のみで、他は礫を充塡した地業状の窪みおよび建物の重量によってできた堅緻面から存在を確認した。柱間は1.8～2.2mであった。北東隅の礎石３の周辺からは寛永通寶



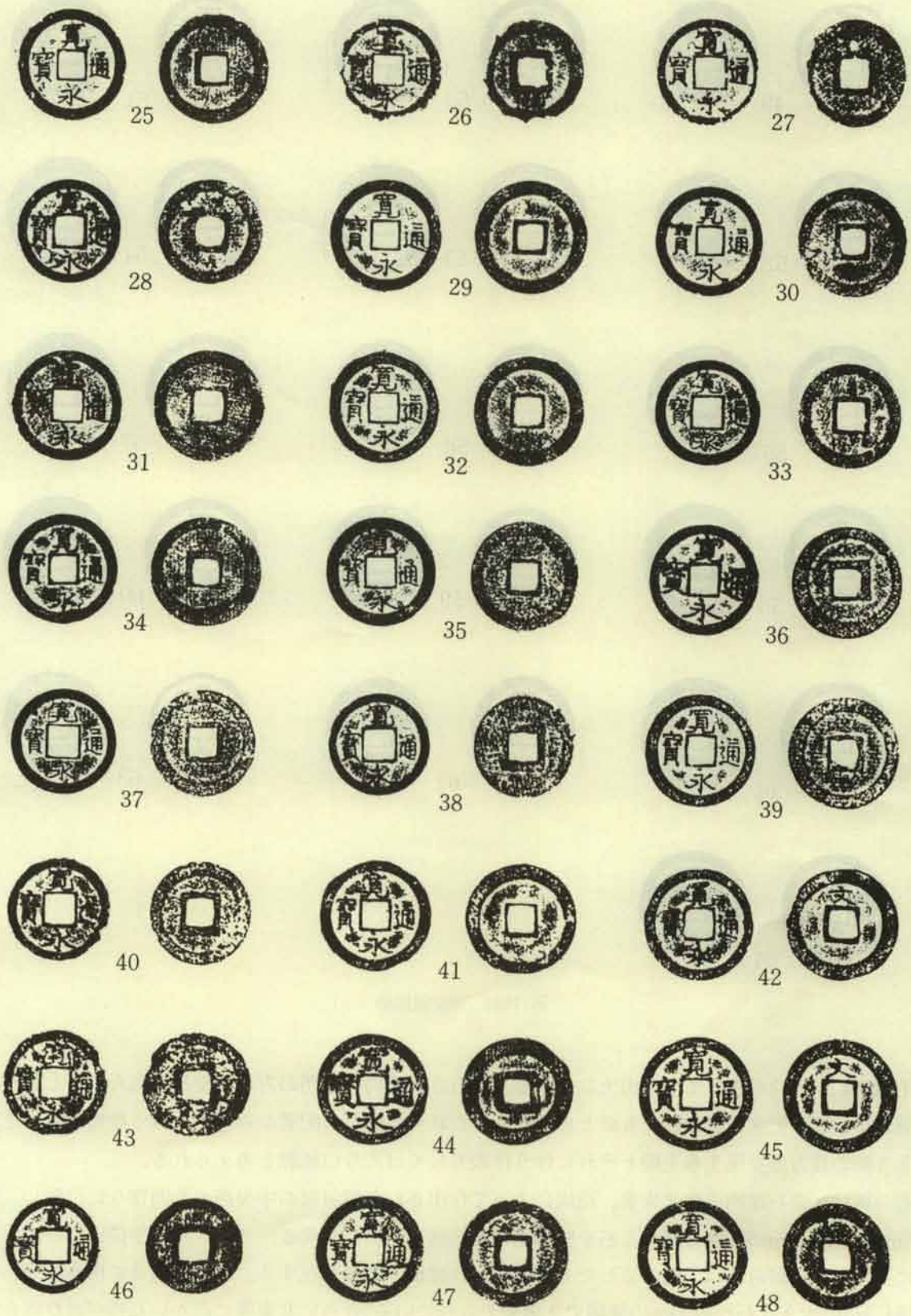
第114図　廃社埋納銭出土状況平・断面図



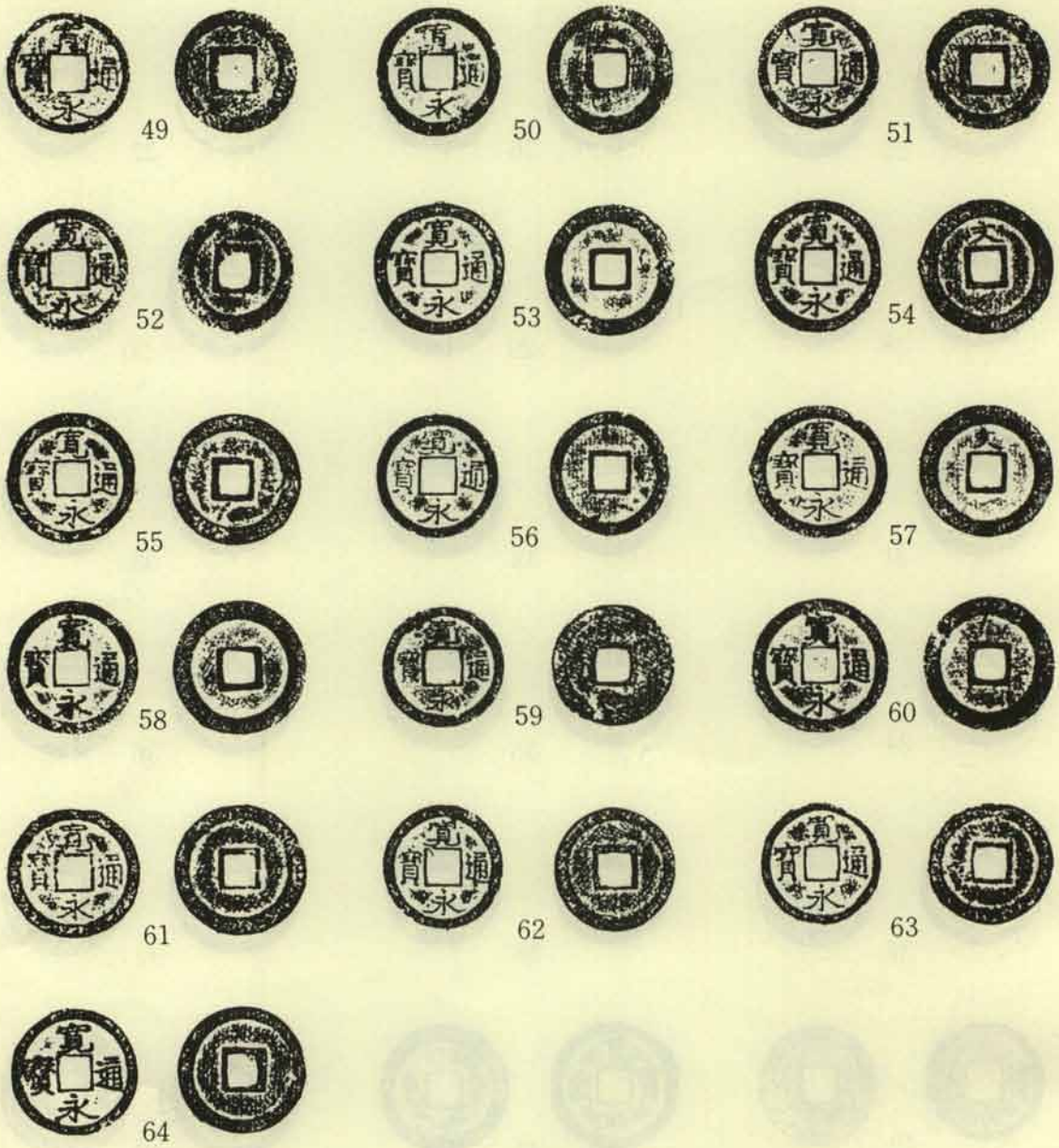
第115図　出土銭法量相関図



第116図　埋納銭拓影（1）



第117図　埋納銭拓影（2）



第118図　埋納銭拓影（3）

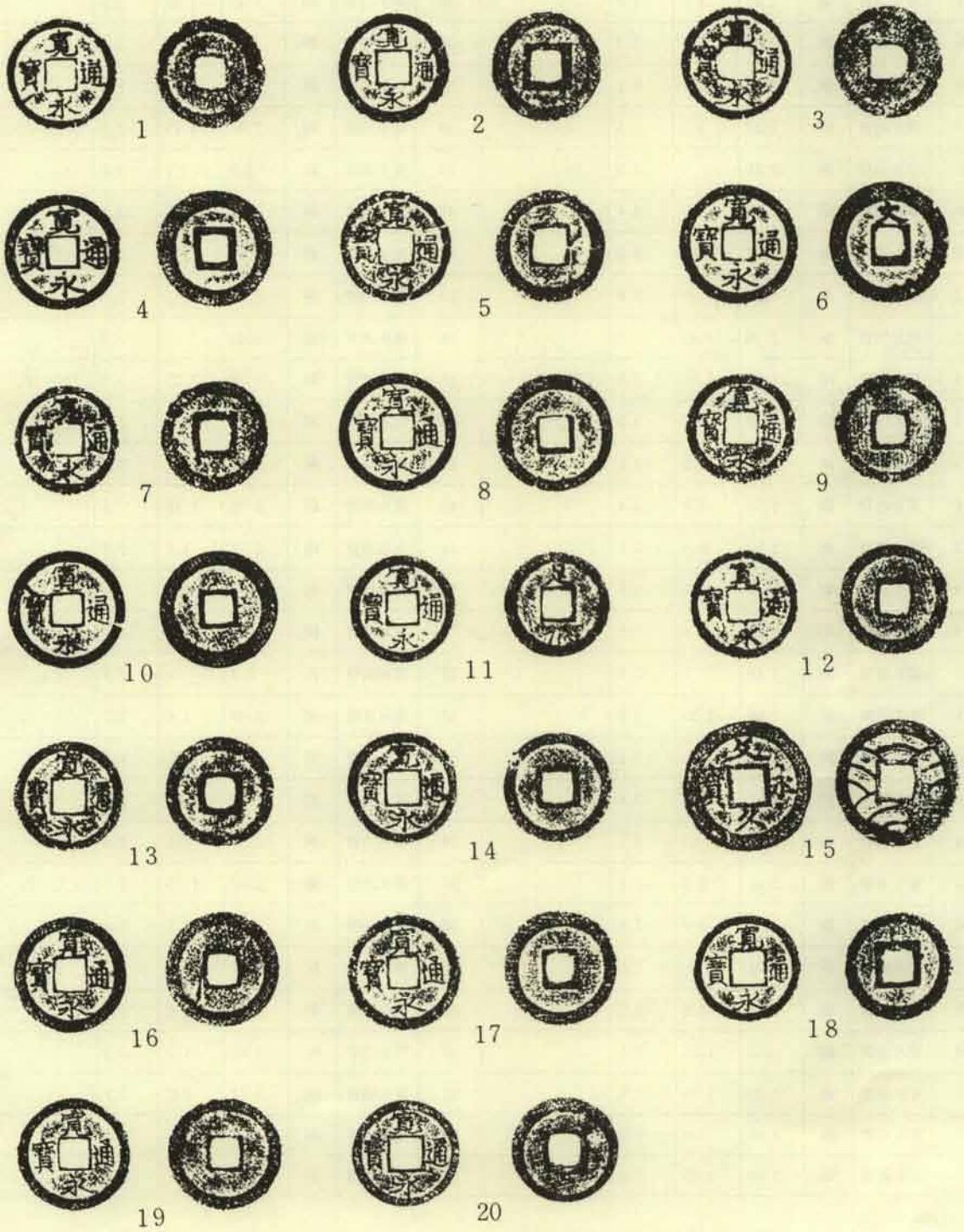
（第119図２～９）がまとまって出土している。礎石３は建物の鬼門の方角の礎石に当たることから社殿構築時における祈念に使われたものと思われる。これらの礎石の配置から想定される建物は東西２間、南北３間の長方形を呈する主殿とそれに伴う拝殿もしくは入り口施設と考えられる。

石の祠は、礎石建物の北北東奥、造成によって作出された傾斜面の中央部やや西寄りに位置し、東西3.6m・南北2.0mの範囲に扁平な石を敷き詰めた区画を前面に有する。この区画の手前に立石が左右両端に存在する。祠自体は、組み直したものと思われ屋根が２個存在する。この石敷きの区画の東には長軸長1.8mの大きな石が約50cmの間隔で２個据えられている。さらに北東隅に向かい石列が並び何らかの施設が存在したことを伺わせる。

礎石３の東南東4.56mの削平造成面からは寛永通寶が65枚（第116～118図、拓本のとれなかった鉄銭

1枚を含む）出土している。出土状況は、明確な掘り込み等埋設のための施設は認められないが、繊維状の遺物がこれらの銭貨の間に認められることから、紙片に包んであった可能性がある。

廃社周辺からの出土遺物は、銭貨のほかは陶磁器片瓦片・不明鉄製品がある。（図示は銭貨以外は省略した。）



第119図　廃社周辺出土銭拓影

第44表　埋納銭観察表

挿図番号	銭貨銘	材質	外径(cm)	厚(mm)	重量(g)	備　　考	挿図番号	銭貨銘	材質	外径(cm)	厚(mm)	重量(g)	備　　考
1	寛永通寶	銅	2.23	1.15	2.4		33	寛永通寶	銅	2.32	1	2.6	
2	寛永通寶	銅	2.49	1.2	3.7		34	寛永通寶	銅	2.44	1.1	3.2	
3	寛永通寶	銅	2.32	1.1	2.3		35	寛永通寶	銅	2.45	1.1	3.1	
4	寛永通寶	銅	2.47	1.2	2.8		36	寛永通寶	銅	2.47	1.05	3.1	
5	寛永通寶	銅	2.47	1.3	3.3		37	寛永通寶	銅	2.34	1.2	3.3	
6	寛永通寶	銅	2.45	1.2	3.1		38	寛永通寶	銅	2.27	1.2	2.8	
7	寛永通寶	銅	2.33	1.1	2.5		39	寛永通寶	銅	2.46	1.15	3.2	
8	寛永通寶	銅	2.31	1	2.5		40	寛永通寶	銅	2.3	1.1	2.7	
9	寛永通寶	銅	2.43	1.3	3.4		41	寛永通寶	銅	2.47	1.25	3.1	
10	寛永通寶	銅	2.25	1.05	2.5		42	寛永通寶	銅	2.49	1.3	3.5	「文」字
11	寛永通寶	銅	2.29	1.15	2.6		43	寛永通寶	銅	2.34	1.1	2.2	
12	寛永通寶	銅	2.36	1.15	3		44	寛永通寶	銅	2.49	1	3	
13	寛永通寶	銅	2.53	1.25	2.8	「文」字	45	寛永通寶	銅	2.54	1.25	3.9	「文」字
14	寛永通寶	銅	2.43	1.2	3.5		46	寛永通寶	銅	2.18	1.1	2.2	
15	寛永通寶	銅	2.47	1.2	3.1		47	寛永通寶	銅	2.41	1.2	3.2	
16	寛永通寶	銅	2.55	1.1	3.4		48	寛永通寶	銅	2.46	1.15	3	
17	寛永通寶	銅	2.37	0.9	2.1		49	寛永通寶	銅	2.32	1.2	2.8	
18	寛永通寶	銅	2.34	1.05	2.8		50	寛永通寶	銅	2.45	1.3	3.6	
19	寛永通寶	銅	2.32	1	2.6		51	寛永通寶	銅	2.31	1	2.7	
20	寛永通寶	銅	2.49	1	2.9		52	寛永通寶	銅	2.3	1	2.9	
21	寛永通寶	銅	2.59	1.35	3.9		53	寛永通寶	銅	2.49	1.4	3.7	
22	寛永通寶	銅	2.53	1.05	3.1	「文」字	54	寛永通寶	銅	2.52	1.25	4.1	「文」字
23	寛永通寶	銅	2.57	1.2	3.8		55	寛永通寶	銅	2.46	1.25	2.9	
24	寛永通寶	銅	2.46	1.15	3.3		56	寛永通寶	銅	2.36	1	2.4	
25	寛永通寶	銅	2.45	1.2	2.5		57	寛永通寶	銅	2.52	1.15	2.8	「文」字
26	寛永通寶	銅	2.3	0.9	1.8		58	寛永通寶	銅	2.57	1.1	3.4	
27	寛永通寶	銅	2.4	1.05	2.6		59	寛永通寶	銅	2.31	1.2	2.1	
28	寛永通寶	銅	2.31	1.1	2.7		60	寛永通寶	銅	2.58	1.05	3.3	
29	寛永通寶	銅	2.5	1.15	3.3		61	寛永通寶	銅	2.48	1.2	3.3	
30	寛永通寶	銅	2.43	1.25	3.6		62	寛永通寶	銅	2.34	0.9	2.2	
31	寛永通寶	銅	2.47	0.9	2.7		63	寛永通寶	銅	2.32	1.25	2.32	
32	寛永通寶	銅	2.43	1.25	3.8		64	寛永通寶	銅	2.41	1	2.8	

第45表　廃社周辺出土銭観察表

挿図番号	銭貨銘	材質	外径(cm)	厚(mm)	重量(g)	備　　考	挿図番号	銭貨銘	材質	外径(cm)	厚(mm)	重量(g)	備　　考
1	寛永通寶	銅	2.35	1.05	2.8		11	寛永通寶	銅	2.23	0.85	1.8	「足」字
2	寛永通寶	銅	2.34	1.1	2.7		12	寛永通寶	銅	2.33	1.2	2.9	
3	寛永通寶	銅	2.37	1.1	2.3		13	寛永通寶	銅	2.34	0.95	2.4	
4	寛永通寶	銅	2.46	1.15	3.2		14	寛永通寶	銅	2.31	1.05	2.6	
5	寛永通寶	銅	2.33	0.85	1.8		15	文久永寶	銅	2.67	0.95	3.1	四波　真字宝
6	寛永通寶	銅	2.55	1.2	3.3	「文」字	16	寛永通寶	銅	2.43	0.9	2.4	
7	寛永通寶	銅	2.31	1	2.3		17	寛永通寶	銅	2.43	1.05	2.7	
8	寛永通寶	銅	2.49	1.1	2.9		18	寛永通寶	銅	2.28	1.05	2.3	
9	寛永通寶	銅	2.34	1	2.5		19	寛永通寶	銅	2.41	1.1	2.5	
10	寛永通寶	銅	2.47	1.3	3.6		20	寛永通寶	銅	2.28	0.7	2	

第3節　近世土坑

近世の所産と思われる土坑はH・I・J－1～3Gに集中して24基検出している。

第4節　溝状遺構

第1号溝（第113図）

調査区の最北部（Q－3・4G）に位置する。廃社の造成に伴うコの字状の掘り込みから北に走向する。幅0.60～0.80m、深さ11～68cm、確認長4.05mを測る。覆土の上部から、近世末から明治期にかけての陶磁器片およびガラス器片が廃棄された状態でまとまって出土している。

第2号溝

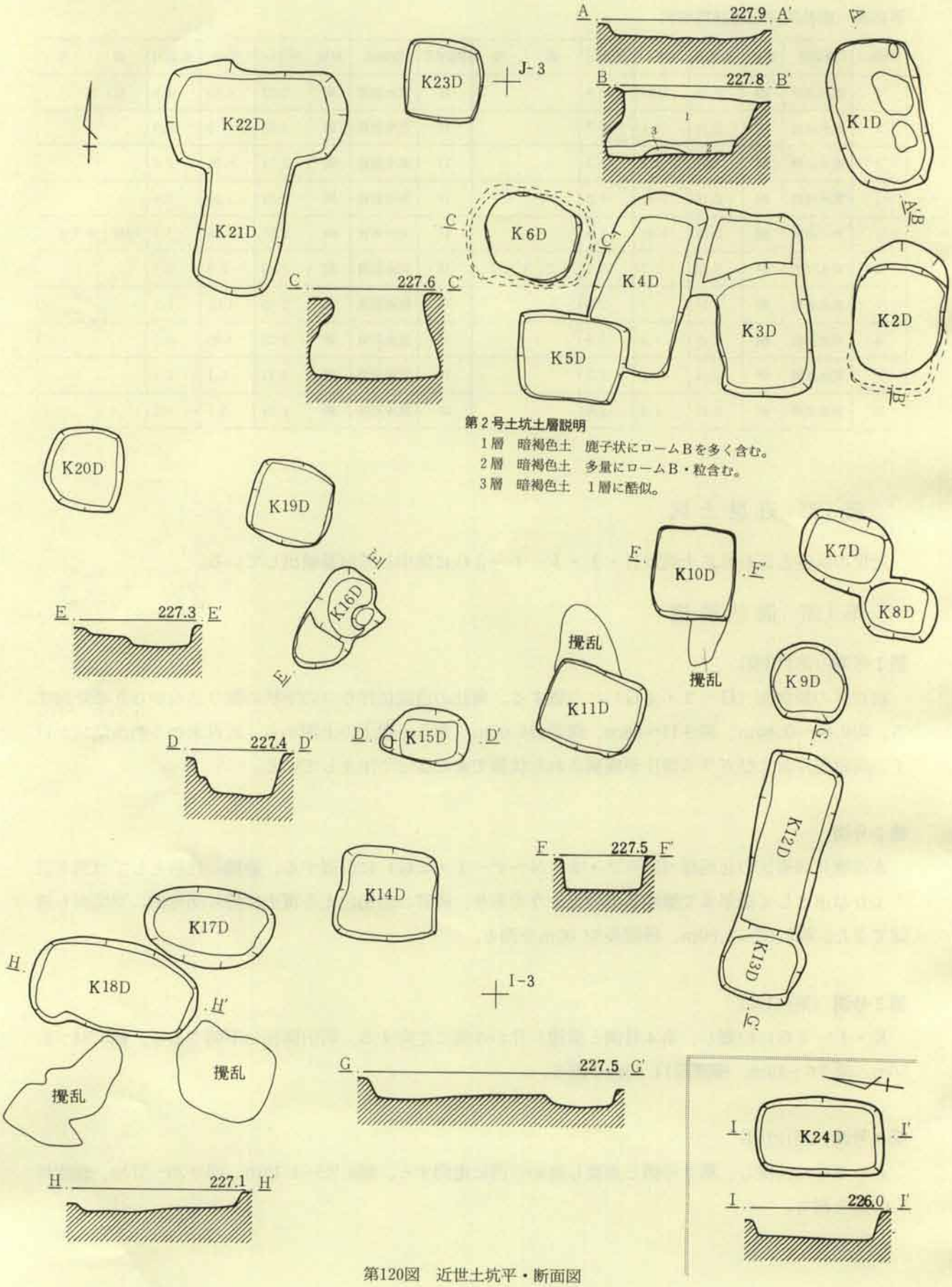
本遺構は調査区の北西部（M－2・3，N～P－1・2G）に位置する。遺構の性格としては溝と言うよりは道として近年まで機能していたようであり、砂質の暗褐色土を覆土に持ち部分的に堅緻面も確認できた。幅2.00～2.80m、確認長32.00mを測る。

第3号溝（第121図）

K・L－2Gに位置し、第4号溝と重複し北から南に走向する。新旧関係は不明である。幅0.84～1.50m、深さ6～40cm、確認長14.50mを測る。

第4号溝（第121図）

L－2Gに位置し、第3号溝と重複し東から西に走向する。幅0.92～1.12m、深さ30～57cm、確認長7.60mを測る。



第120図 近世土坑平・断面図

第５号溝（第121図）

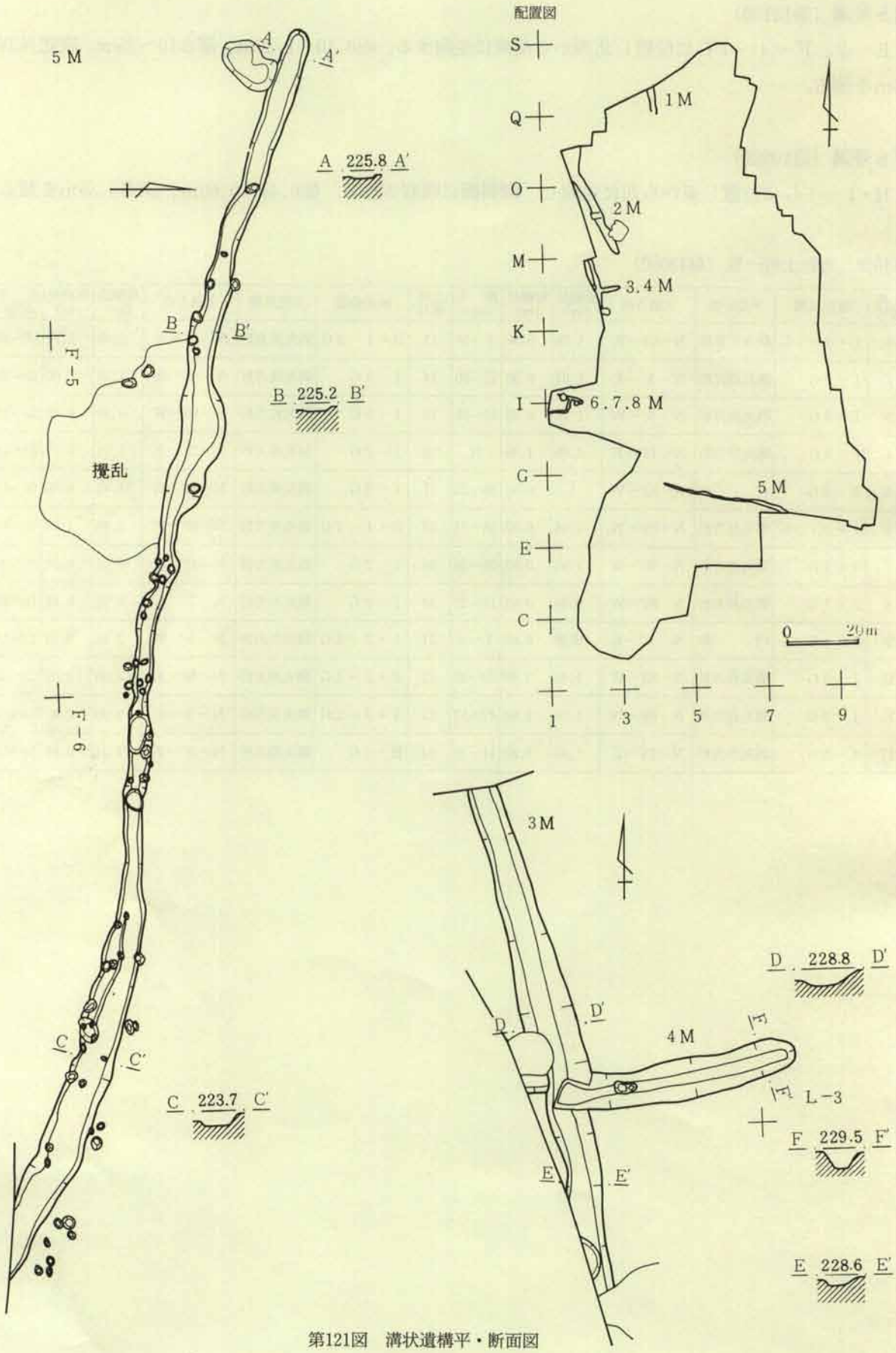
Ｅ－７、Ｆ－４～７Ｇに位置し北西から南東に走向する。幅0.40～1.20m、深さ10～35cm、確認長35.70mを測る。

第６号溝（第109図）

Ｈ・Ｉ－１Ｇに位置し東から西に走向し、傾斜面に吸収される。幅0.48～0.60m、深さ0.36mを測る。

第46表　近世土坑一覧（第120図）

土坑番号	検出位置	平面形態	主軸方向	長軸長(m)	短軸長(m)	深さ(cm)	土坑番号	検出位置	平面形態	主軸方向	長軸長(m)	短軸長(m)	深さ(cm)
1	Ｉ・Ｊ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－15°－Ｗ	1.70	0.98	8～10	13	Ｈ・Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－13°－Ｅ	0.90	0.78	18～23
2	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－５°－Ｅ	1.03	0.90	83～90	14	Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－86°－Ｗ	1.10	1.00	21～28
3	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－５°－Ｗ	1.98	0.96	51～56	15	Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－90°－Ｗ	0.98	0.58	35～45
4	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－14°－Ｅ	2.00	1.06	24	16	Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－38°－Ｅ	1.21	0.75	10～16
5	Ｉ－３Ｇ	台　　形	Ｎ－82°－Ｗ	1.2	0.94	25～33	17	Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－81°－Ｗ	1.40	0.88	３～17
6	Ｉ－２・３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－83°－Ｗ	1.46	0.97	58～73	18	Ｈ・Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－80°－Ｗ	1.85	1.03	８～17
7	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－70°－Ｗ	1.05	0.82	32～36	19	Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－17°－Ｅ	0.92	0.90	22～31
8	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－82°－Ｗ	0.96	0.65	17～22	20	Ｉ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－７°－Ｅ	0.93	0.86	18～26
9	Ｉ－３Ｇ	円　　形	Ｎ－０°－Ｅ	直径	0.85	３～４	21	Ｉ・Ｊ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－５°－Ｗ	2.46	0.92	17～19
10	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－83°－Ｗ	1.01	0.90	33～40	22	Ｉ・Ｊ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－88°－Ｅ	2.00	1.02	22～33
11	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－68°－Ｗ	1.06	0.92	47～52	23	Ｉ・Ｊ－２Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－５°－Ｅ	0.90	0.87	20～27
12	Ｉ－３Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－13°－Ｅ	1.95	0.85	11～20	24	Ｈ－１Ｇ	隅丸長方形	Ｎ－８°－Ｅ	1.41	0.88	18～31



第121図　溝状遺構平・断面図

第７号溝（第109図）

Ｈ・Ｉ－１Ｇに位置する。第６号溝から分かれて南南西に走向し、角度を持ち屈曲し西に走向する。幅0.60m、深さ0.18～0.54mを測る。

第８号溝（第109図）

Ｈ－１Ｇに位置し、西に走向するが、井戸と重複し、１号墓壙内で吸収される浅い溝。幅0.30m、深さ0.05m程度を測る。

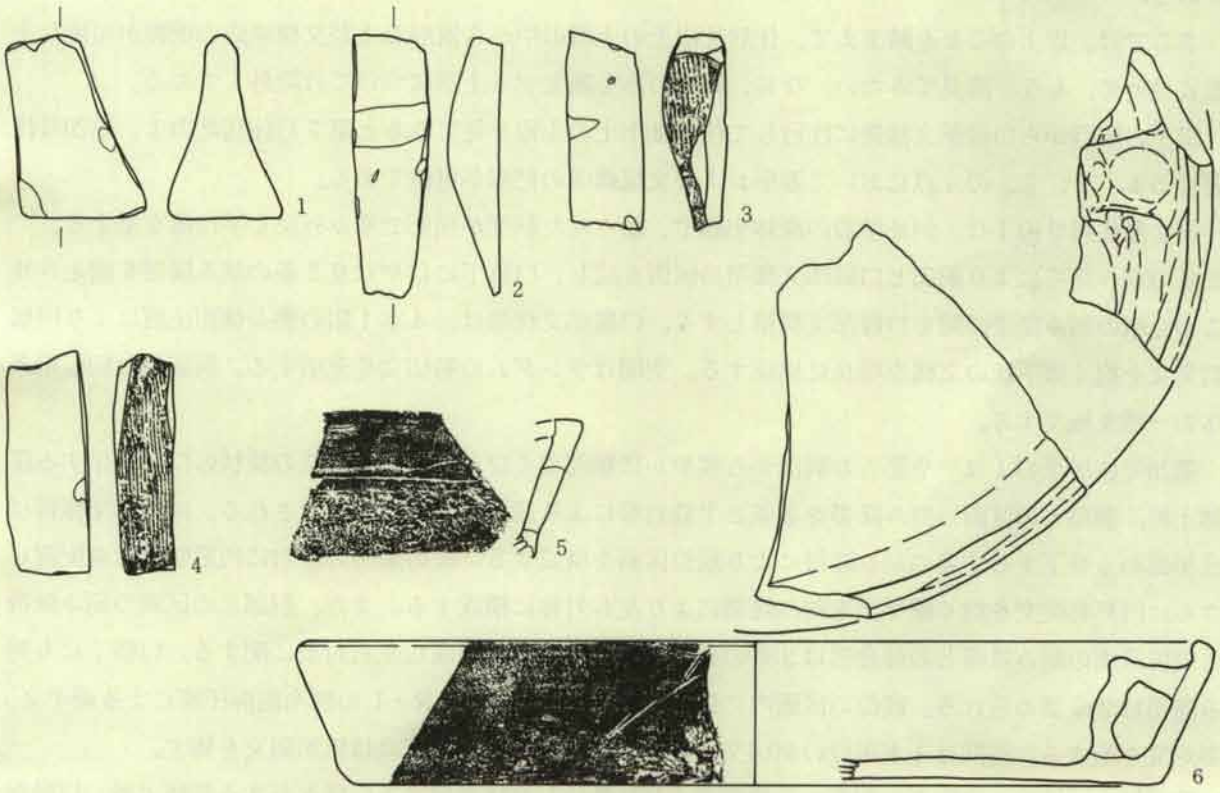
第５節　中世・近世出土遺物

本遺跡で出土した中世・近世所産の遺物は、調査区の北部の廃社周辺に集中する。特に廃社から北へ伸びる第１号溝からは、明らかに投棄したと思われる状態で、近世末から明治期にかけての陶磁器およびガラス器がまとまって出土している。

中世・近世の所産と思われる遺構外の遺物のうち、砥石４点、内耳の焙烙２点を図示した。

砥石は、４点出土している。３・４は鋸引痕を残す。

５は器高5.4cmを測る内耳の焙烙。６は推定口径35.4cm、器高5.7cm、底径31.8cmを測る内耳の焙烙。



第122図　遺構外出土中・近世遺物

第47表　遺構外出土中・近世遺物観察表（第122図）

挿図番号	整理番号	取り上げ番号	器　種	長　さ	幅	厚	重　量	石　質	備　考
1	遺構外427	古墓周辺	砥石	7.7	3.1	2.5	145	流紋岩	
2	遺構外426	廃社周辺	砥石	10.3	3.0	2.0	91.5	流紋岩	
3	遺構外429	表土	砥石	7.2	5.4	4.5	80.5	流紋岩	鋸引痕あり
4	遺構外428	1溝	砥石	8.7	2.3	2.5	119.0	凝灰岩	鋸引痕あり
挿図番号	整理番号	出土位置	挿図番号	整理番号	出土位置				
5	遺構外419	古墓周辺	6	遺構外418	1墳(Q−6G)				

第IX章　調査のまとめ

第１節　縄文時代前期初頭から前葉の土器について

本遺跡において、縄文時代の遺物の主体となる時期は、前期初頭花積下層式期〜二ツ木式期にかけてのものである。本文中の遺構外出土縄文土器の分類において第II群土器としたものがほぼこれに当たる。しかしこの分類は、遺構外出土という資料の性格上から器形および文様構成等の把握においてはやや難がある。

ここでは、以上のことを踏まえて、住居址出土の土器の中から器形および文様構成の把握が可能な土器について、もう一度見てみたい。なお、縄文のみを施文する土器については除外しておく。

以上の観点から口縁部文様帯に注目して住居址出土の土器を見てみると第７号住居址の１、第20号住居址の１、２、３、の４点において器形および文様構成の把握が可能である。

第７号住居址の１は、炉址埋設の深鉢土器で、膨らんだ胴部が頚部で窄み外反し平口縁を呈する。２条の刻み隆帯により胴部と口縁部文様帯の区画を成し、口唇下にはやはり２条の刻み隆帯を横走させこの２組の刻み隆帯の間を口縁部文様帯とする。口縁部文様帯は、４本１組の撚糸側面圧痕により円形刺突文を抱く蕨手状の文様を横長に構成する。空間はランダムの刺切文を充塡する。胴部には回転絡条体の一種を施文する。

第20号住居址の１はやや膨らむ胴部から緩やかに頚部でくびれ外反し４単位の波状の口縁を呈する深鉢土器。胴部との区画は刻み隆帯を３条と半截竹管による連続刺突文により成される。口縁部文様帯は波頂部から垂下する４条の刻み隆帯により縦位区画を構成する。この隆帯の左右に円形刺突文を配置しさらに円形刺突文を抱く蕨手文を刻み隆帯により左右対称に構成する。また、胴部との区画の刻み隆帯と縦位区画の刻み隆帯との接合部は３条の刻み隆帯で三角形を構成し左右対象に配する。口唇下にも刻み隆帯は２条認められる。縦位の区画内には円形刺突文を抱くＬ・Ｒ・Ｌの撚糸側面圧痕による蕨手文、菱形文を配する。空間は４本単位の刺切文を格子状に充塡する。胴部には結節縄文を施す。

第20号住居址の２は膨らむ胴部から頚部でくびれ外反し波状を呈する口縁を有する深鉢土器。口縁部と胴部の区画は半截竹管による刻み隆帯を２条施すことにより成す。この刻み隆帯に施された刻みは鋭角に刺突される。口縁部文様帯は、円形刺突文を抱くＲ・Ｌによる撚糸側面圧痕を蕨手状に施し、空間にはやや乱れた矢羽状の刺切文を充塡する。胴部以下は閉端環付のＲＬとＬＲを多段に施し羽状を構成

する。

第20号住居址の3は胴部から外反しながら口縁に向かって開き平口縁を呈する深鉢土器。口唇下には刻み隆帯を2条横走させ、胴部との区画には2条の刻み隆帯を施す。口縁部文様帯は刺切文を矢羽状に充填する。胴部には結節縄文を施す。

これらの土器を谷藤氏の「二ッ木式土器」(1988『群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）の分類によって整理すると、いずれの土器も刻み隆帯によって文様帯の区画がなされ、文様帯が重帯化せず、刻み隆帯、撚糸側面圧痕、円形刺突、刺切文から主文様が構成されるところから二ッ木Ⅰ式に比定する1類aに分類される。

以上のことから、完形土器およびそれに近い土器を見る限り本遺跡の中心となる時期は、二ッ木Ⅰ式期になるものと思われる。

また、縄文施文の土器に0段多条の異方向縄文を施す土器や尖底の土器も認められるところから遺跡は前期初頭から営まれ二ッ木Ⅰ式器に盛興期を迎えたものと思われる。

第2節　縄文時代中期初頭の土器及び新崎式土器について

本遺跡において、北陸系の土器として理解されている「新崎式土器」の出土をみた。本県において当該期の北陸系の土器としては、勢多郡赤城村の見立大久保遺跡において出土していることが知られる。実測図および写真によると寸胴気味の胴部を呈する深鉢土器で、口縁部に無文帯を有する。胴部は隆帯で瘤状の渦巻き文を貼付し、半截竹管による半隆起状の渦巻き文および垂下文を施す。本遺跡出土の「新崎式土器」と大きく異なる点は、文様空白部に施される格子目文の充填がないことである。

本遺跡において出土している中期前葉の土器としては、本文中で第Ⅴ群土器として報告した五領ケ台式の土器がある。第Ⅴ群土器を出土する遺構は、第1号土坑・第11号土坑（流れ込みと思われる）と少ないものの、調査区の北部を中心にかなりの量の遺物が出土している。「新崎式土器」を出土した第29号土坑からも五領ケ台式土器の小破片が出土しており、明確な共伴関係としては認められないものの、これらの土器と共伴する可能性を指摘しておきたい。

なお、本土器に対するコメントを新潟県教育委員会の寺崎祐助氏から頂戴した。併せて、本遺跡における「新崎式土器」の理解の参考とされたい。

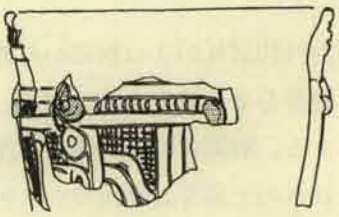
横沢新屋敷遺跡出土の新崎式土器に対するコメント　　寺崎祐助

この土器は、新潟県においては北陸系の土器とされ、「新崎式土器」として理解されている。特徴としては、新崎式の深鉢の中では小型の部類に属すること、口縁部下位に無文帯を持つことおよび胴部文様帯における瘤状渦巻文の貼付や文様空白部分への格子目文の充填があげられる。また、縄文技法では半載竹管を多用し、胎土では凝灰岩と考えられる灰褐色の軟質な礫を多数含むという特徴も有する。

この土器と類似する土器は、新潟県中越地方の長岡市周辺や北魚沼郡周辺といった地域でしばしば認められることから、おそらく新潟県のこのような地域から群馬県の当遺跡へともたらされた可能性が高い。時期的には中期前葉②期（新潟県教育委員会ほか1996）に比定され、新潟県では三島郡三島町千石原第Ⅰ群土器（中村・竹田・小林1973）や西蒲原郡巻町大沢遺跡Ⅲb期（前山1990）の一部に、北陸地方では新崎式第Ⅱ段階（加藤1995）にそれぞれ並行するものと考えられる。

この土器が当遺跡で　どのような土器と伴出したかや出土した中期前葉の土器にはどのようなものが

あるかは大変興味のある所である。また、群馬県内においてこのような土器が地元のどのような土器と伴出し、どの地域に分布するのかの解明は、土器編年の対比だけではなく土器の動きひいては人の動きをも暗示させる重要な問題である。このような事例が群馬県内において更に増加することが望まれる。なお、第123図の土器は、新潟県北魚沼郡堀之内町に所在する清水上遺跡（新潟県教育委員会ほか1996）から出土したもので、当遺跡出土の新崎式土器に器形・文様構成・施文技法が類似する。



第123図　清水上遺跡出土土器(1/5)
((新潟県教育委員会ほか1996)原図)

引用文献

加藤三千雄1995　「北陸における中期前葉の土器群について」『第8回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

中村孝三郎・竹田祐司・小林達雄1973　『千石原』長岡科学博物館考古研究室調査報告書第11冊　長岡市立科学博物館

新潟県教育委員会ほか1996　『清水上遺跡II』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集

前山精明1990　『大沢遺跡』巻町教育委員会

第3節　古墳について

本遺跡において、今回確認調査された古墳は、いずれも『上毛古墳綜覧』に未登録の古墳である。遺跡を載せる台地には、漏4号墳のさらに南南西約50mの位置に宅地造成により主体部の南の大半を失った古墳が存在する。

遺跡の西沖積低地を隔てた対岸の台地上には横沢古墳群の一支群としての大塚地区があり古くからその存在が知られ、『上毛古墳綜覧』には4基記載されている。

従来周知されていた大塚地区に匹敵する古墳群が、ここ新屋敷地区に存在したことで、横沢古墳群を構成する支群の一つとして本地区が加えられることとなった。

第4節　中世古墓について

大胡町における中世古墓の調査は、茂木古墓・日光道東古墓に続き3例目である。

茂木古墓は、昭和32年4月に群馬大学史学研究室により発掘調査された。台地の裾部をならし切石により長方形の区画を造成し、区画内は扁平な川原石を敷きつめている。また、墓標として板碑を配する。埋葬形態は、骨壷（常滑焼）に納骨するほか、直葬と思われる出土状況も窺える。

日光道東古墓は、平成5年1月から3月にかけて、大胡町教育委員会により実施された日光道東遺跡（大字河原浜字日光道東）の発掘調査において検出された。台地に縁辺に近い地区に位置し墓域として明確な区画をなさない。検出遺構は敷石を伴い骨蔵器として推定される瓦質の擂鉢を出土した1号墓。墓標として五輪塔の地輪を伴い楕円形を呈する墓坑に土葬された2号墓。軽石製の柩型骨蔵器を検出した3号墓。3個の礫を据える隅丸長方形を呈する土坑を埋葬施設と推定する4号墓。以上4基の埋葬施設のほか5ヶ所の焼骨の集中が認められた。

新屋敷古墓は、日光道東古墓と同様に台地の縁辺に占地し墓域としての明確な区画を有さない。埋葬形態としては4基のいずれもが土坑墓として把握できる。五輪塔の出土状況が明確でないものの、明ら

かに墓標として墓域に伴うものと思われ、板碑の出土状況等から墓標としては二つの形態が存在したことが認められる。

墓地造成の時期を比定するための資料として、五輪塔・板碑・青磁片があるが、明確にはその時期を把握しかねる。

第5節　廃社について

『大胡町誌』によると、大字横沢地内に存在した神社は村社赤城神社、無格社八幡宮、無格社雷電神社があり、明治42年に大胡神社に合祀されたことが判る。地元古老の話によると往時社が存在し、その後火事により焼失したとのことであり、神社の名前のついては『赤城神社』の額が存在したとのことであった。調査知見からは、火事による消失の証拠は得られなかったが、『大胡町誌』にある村社赤城神社が今回調査した廃社に当たるものと思われる。地元古老の年齢から推測するところ、故老の生年は明らかに合祀以後となり、合祀以後も火事による焼失まで社が存在していたものと思われる。

第X章　あ　と　が　き

最後に、本報告書を刊行するにあたり、良好な食材を与えられながら、うまく料理ができなかった料理人のような気持ちでいる。料理できたのであればまだしも、素材の持ち味さえも損ね、食することさえできないものを作ってしまった感がある。これも、ひとえに報告者の力量不足がもたらすもので、慚愧の念に耐えない。

本報告書作成にあたり、多大なご助言をいただいた各位には、伏して寛恕を請うとともに今後の反省材料としたい。

抄　　録

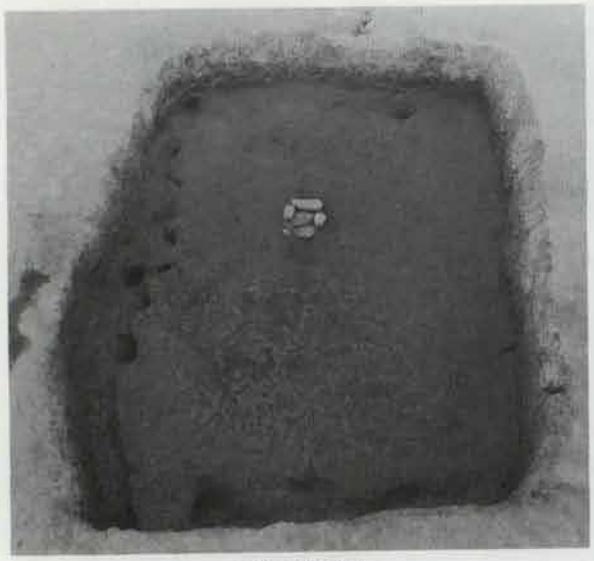
フリガナ	ヨコザワアラヤシキイセキ
書　　名	横沢新屋敷遺跡
副 書 名	「県営担い手育成ほ場整備事業大胡西北部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第2集
編著者名	藤坂和延・寺崎祐助
編集機関	大胡町教育委員会　／　〒371-02 群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行年月日	西暦1997年3月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 東経	調査 期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ヨコザワ 横沢 アラヤシキイセキ 新屋敷遺跡	セタグンオオゴマチ 勢多郡大胡町 オオアザヨコザワアザアラヤシキ 大字横沢字新屋敷	10304		36°25′44″ 139°8′29″	199309 ～ 199401	8,560m²	ほ場整備事業

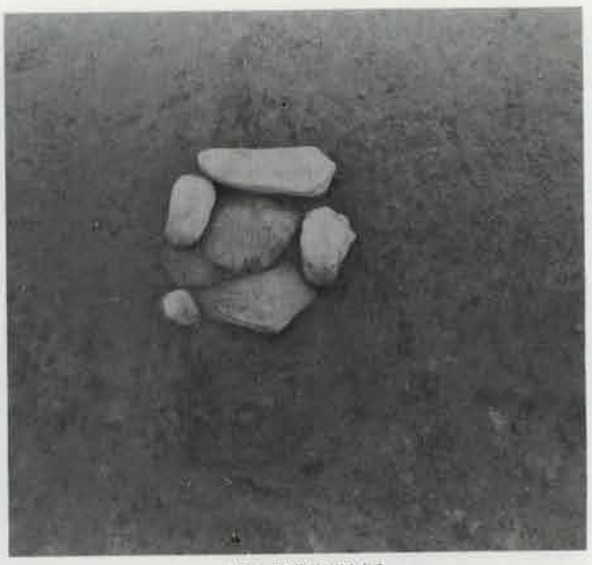
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
横沢新屋敷遺跡	集落	縄文時代	住居址	26軒	縄文土器・石器	縄文時代前期初頭花積下層式から二ツ木式の良好な資料。 北陸系の土器新崎式土器の出土。
			土坑	39基	縄文土器・石器	
			集石遺構	3基		
	墳墓	古墳時代	竪穴式古墳	4基	須恵器・土師器・刀子	
	生産	歴史時代	炭窯	1基	木炭	
	墳墓	中世	土葬墓	4基	青磁片・板碑・五輪塔	
	神社	近世	神社跡		銭貨・瓦片・陶磁器片	
			土坑・溝			

写 真 図 版

遺 跡 全 景



第1号住居址



第1号住居址炉

第2号住居址

第2号住居址炉

第3号住居址

第3号住居址炉

第 4 号住居址

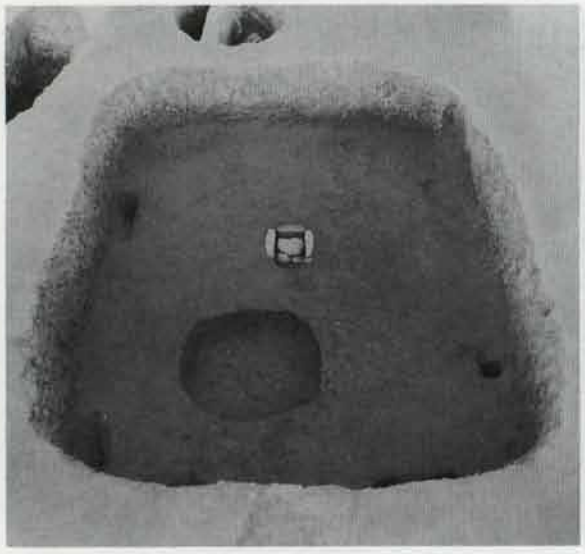
第 4 号住居址炉

第 4 号住居址遺物出土状態

第 5 号住居址

第 5 号住居址遺物出土状態

第 5 号住居址炉



第 6 号住居址

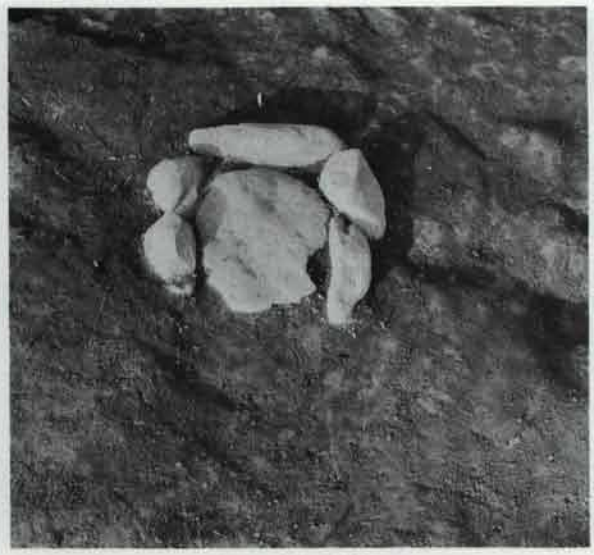
第 6 号住居址炉

第 6 号住居址遺物出土状態

第 7 号住居址

第 7 号住居址炉

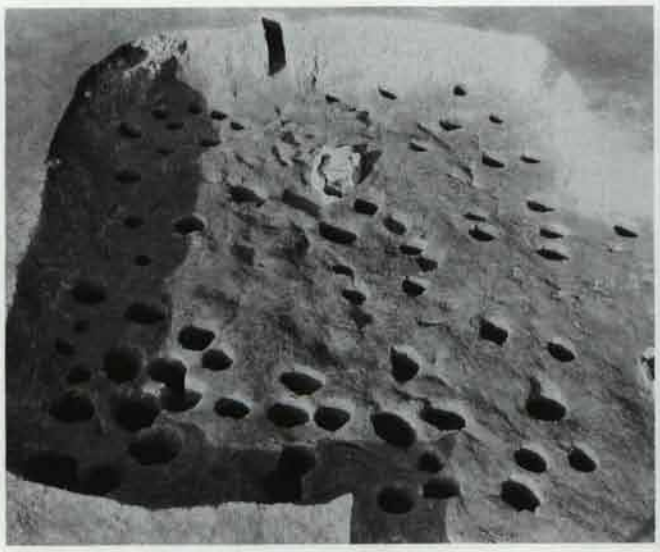
第 8 号住居址



第 8 号住居址炉

第 9 号住居址

第 9 号住居址炉



第10号住居址

第10号住居址炉

第11号住居址

第11号住居址炉

第12号住居址

第12号住居址炉

第13号住居址

第13号住居址炉

第14号住居址

第14号住居址炉

第15号住居址

第15号住居址炉

第16号住居址

第17号住居址

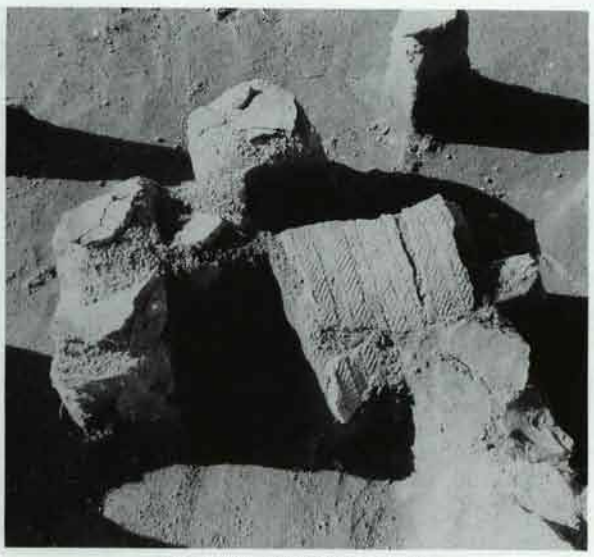
第17号住居址炉

第18号住居址

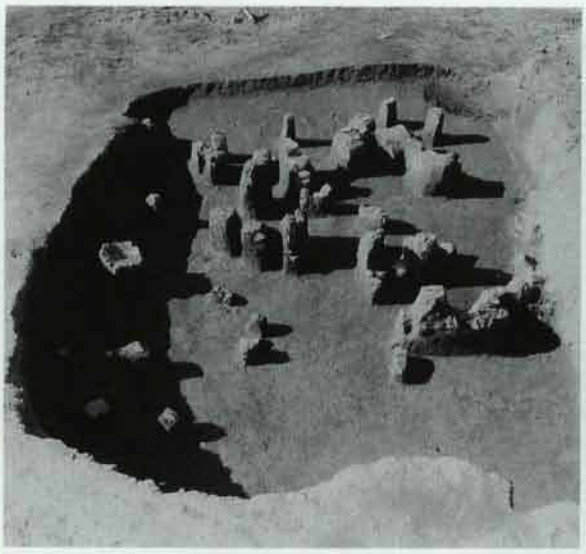
第19号住居址

第20号住居址

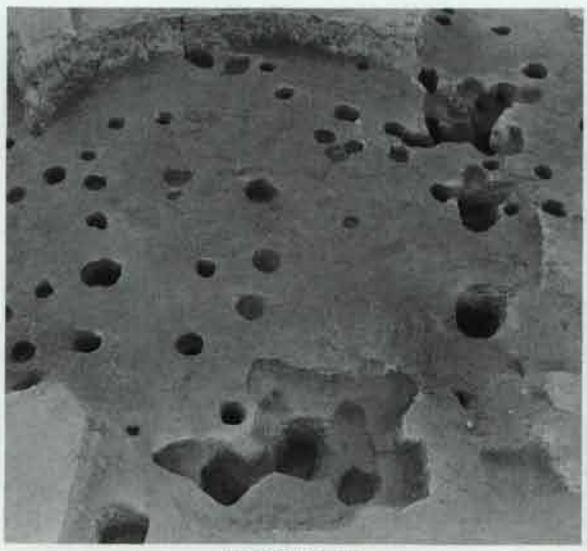
第20号住居址炉



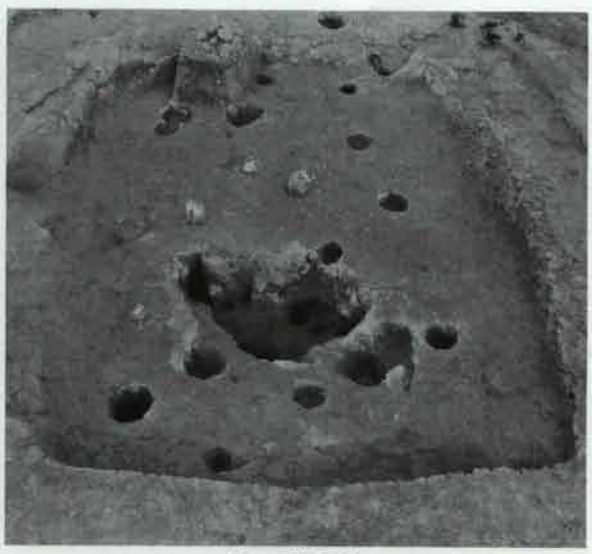
第20号住居址遺物出土状態



第20号住居址遺物出土状態



第21号住居址



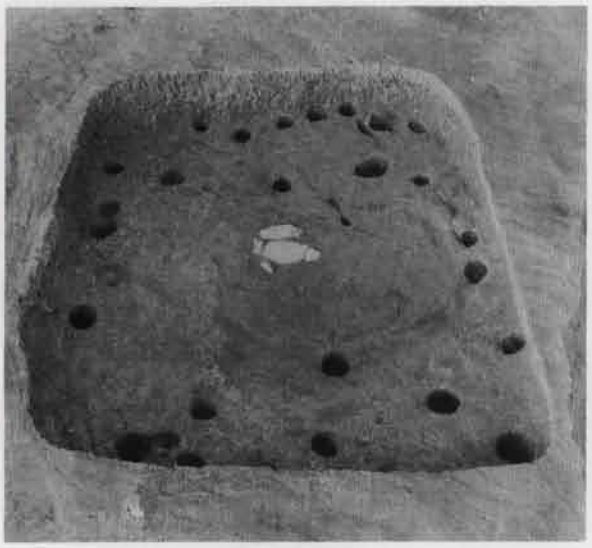
第22号住居址

第23号住居址

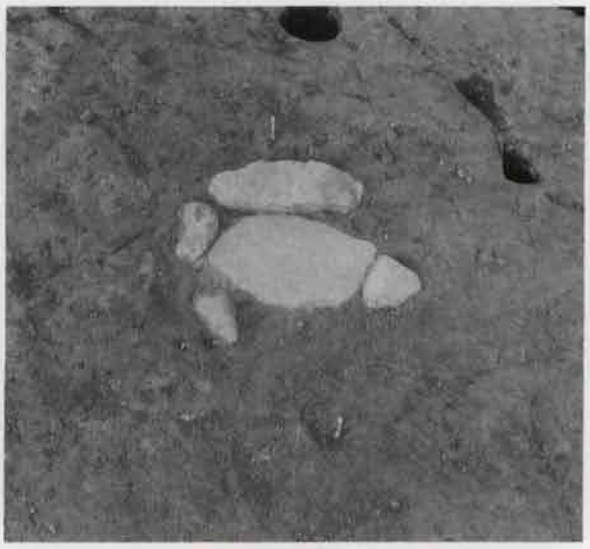
第24号住居址遺物出土状態

第24号住居址

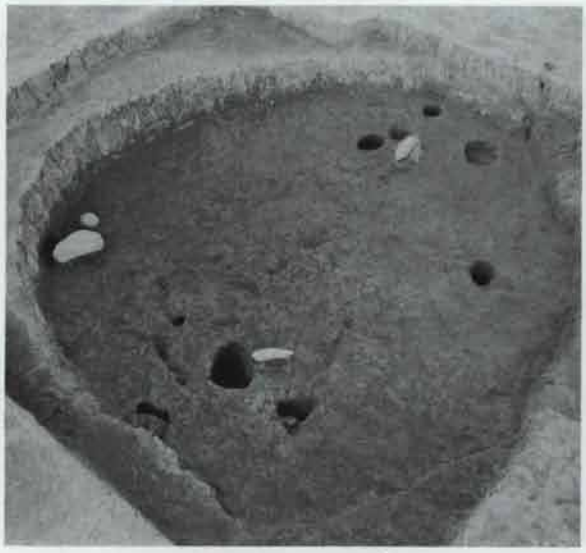
第25号住居址



第26号住居址



第26号住居址炉



第1号竪穴遺構

第3号竪穴遺構

第1号土坑

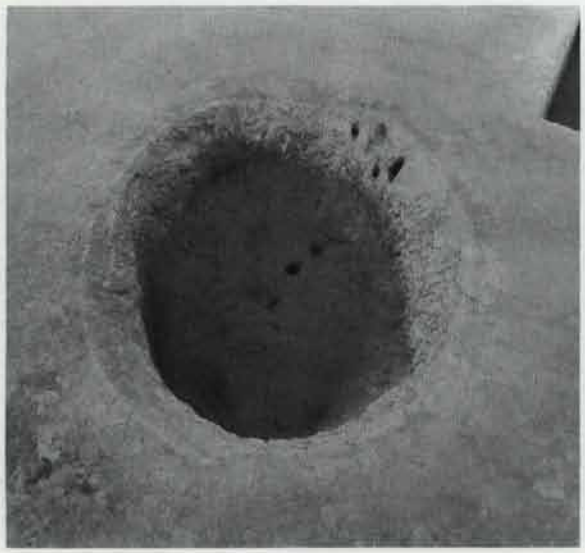
第2号土坑

第3号土坑

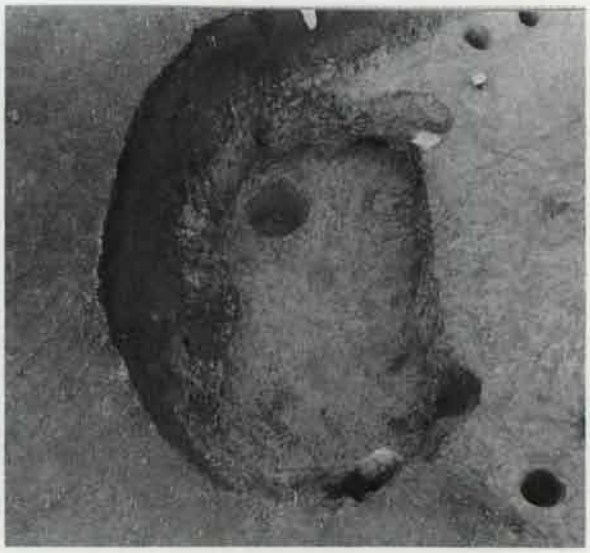
第4号土坑

第11号土坑

第11号土坑遺物出土状態



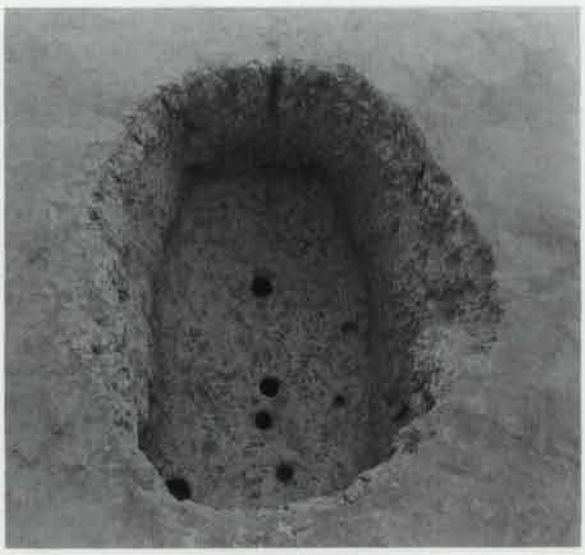
第13号土坑



第14号土坑

第15号土坑

第16号土坑



第17号土坑

第18号土坑

第20号土坑

第21号土坑

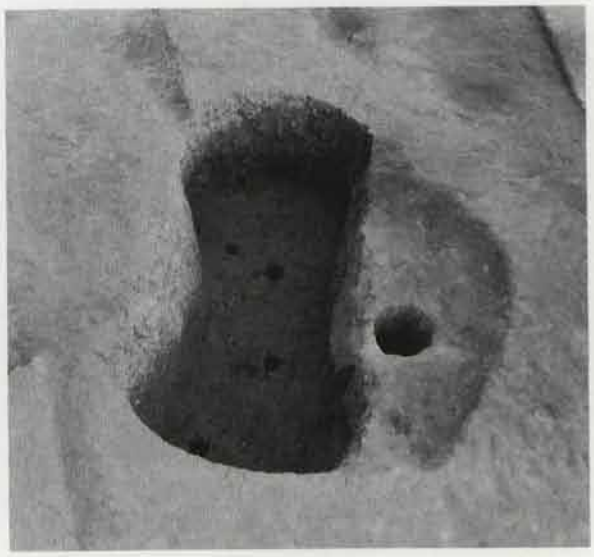
第22号土坑

第23号土坑

第25号土坑

第26号土坑

第27号土坑



第28号土坑

第29号土坑

第29号土坑遺物出土状態

第30号土坑

第32号土坑

第34号土坑

第36号土坑

第38号土坑

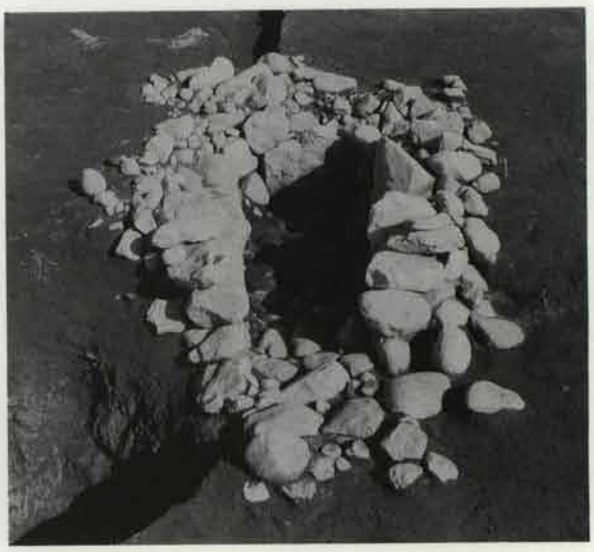
作業風景（測量）

漏1号墳

漏1号墳掘り方

漏1号墳前面

漏2号墳

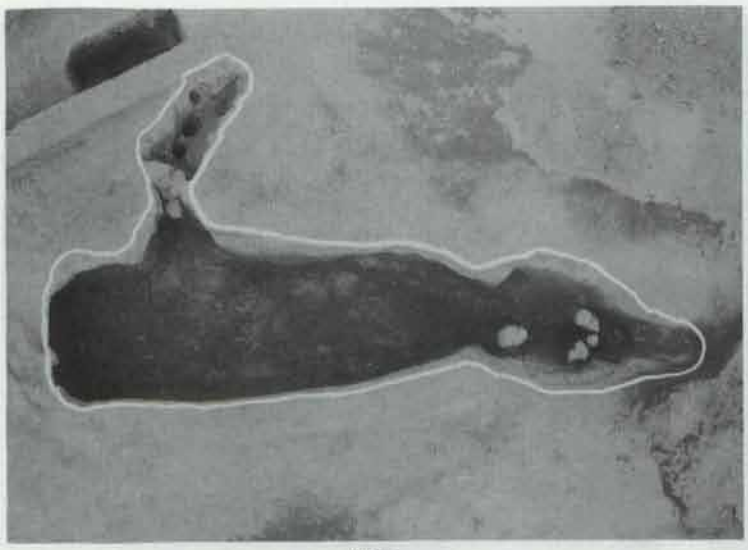


漏3号墳

漏 4 号墳

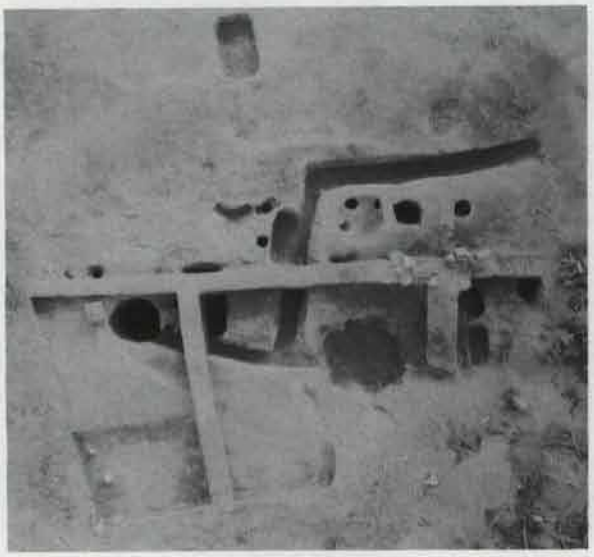
漏 4 号墳掘り方

漏 4 号墳前面



炭窯

炭窯煙道



古墓全景

古墓遺物出土状況

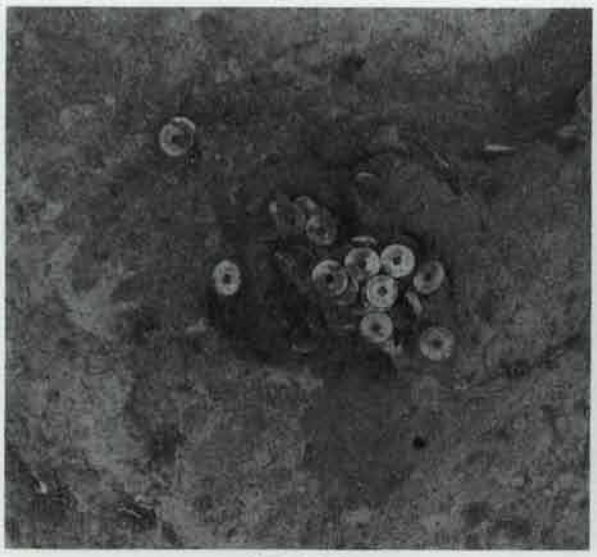
古墓遺物出土状況

古墓遺物出土状況

古墓掘り方

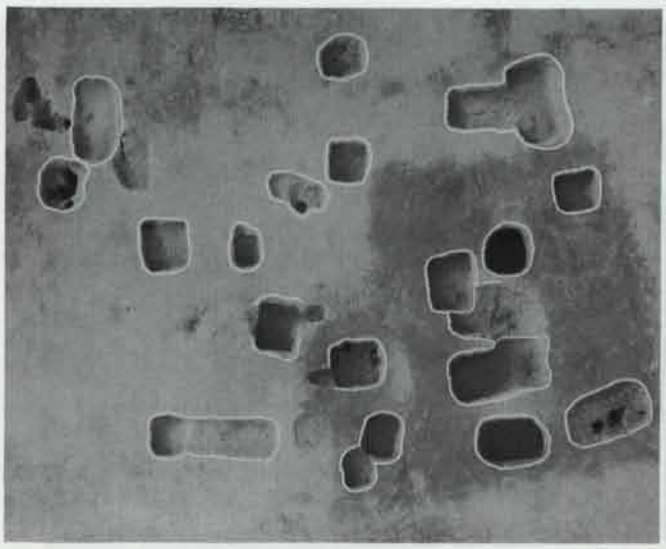
廃社礎石状況

廃社石祠



埋納銭出土状況

地割れ

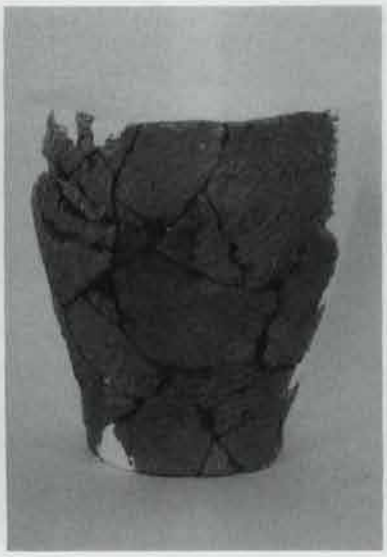


近世土坑群

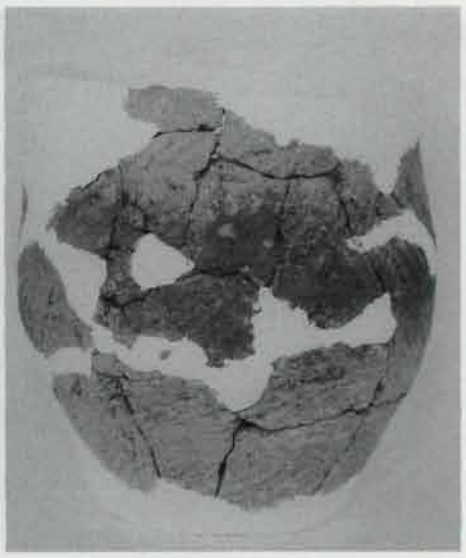
作業風景

第 4 号住居址 1

第 4 号住居址 8



第 5 号住居址 1



第10号住居址 1

第12号住居址 1

第13号住居址 1

第19号住居址 1

第20号住居址 1

第20号住居址25

第20号住居址 3

第20号住居址41

第23号住居址 1

第11号土坑 1

第29号土坑 1

第29号土坑 1

大胡町
文化財
蔵書
印

大胡西北部遺跡群発掘調査報告書第２集

横沢新屋敷遺跡

平成９年３月20日

編　　集　　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　　行　　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

〒371-02　群馬県勢多郡大胡町堀越1,115

☎027（283）1111

印刷製本　　朝日印刷工業株式会社

©1997　　Printed in Japan